女學世界



第八巻第十四號

博文館發行



美顔水と花の顔

多年の經驗と最新の學理により精製せる化粧用美顔水は畏くも、九重の雲深き貴顕を始め顕門名家の貴婦人令嬢紳士淑女の方々に召され今や最新流行の化粧水として其名世界に嘖嘖たり

常に之を愛用すれば、色白くきめを細かにし艶美しく、又化粧下に用ふれば巧妙なる作用にて白粉濃く薄く意のまゝにのび、亦あれ性の方には最もよく、美しき姿は玉を欺き花を羞しむ

●本品御購求の節は化粧用美顔水と御指名を乞ふ

▲東京市内は勿論日本全國各地到る所の有名なる小間物店にて販賣す

御祝着用呉服物

七五三御祝着用光琳式明治模様の友禪帯地類を始め當年新流行の縞着尺物澤山に準備仕居候間多少に拘はらず御用命の程奉願上候。外に

歐米新流行洋服地

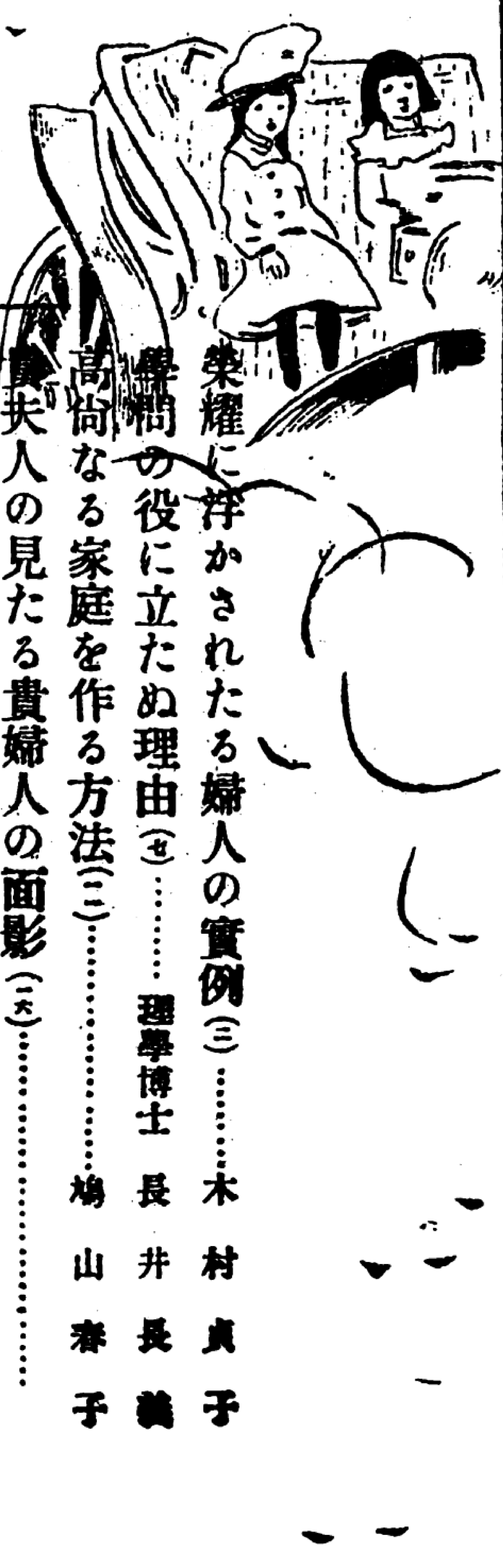
歐米新流行雜貨類

何れも新荷到着仕候間何卒御立寄御遊覧被下度奉希上候

東京日本橋

三越呉服店

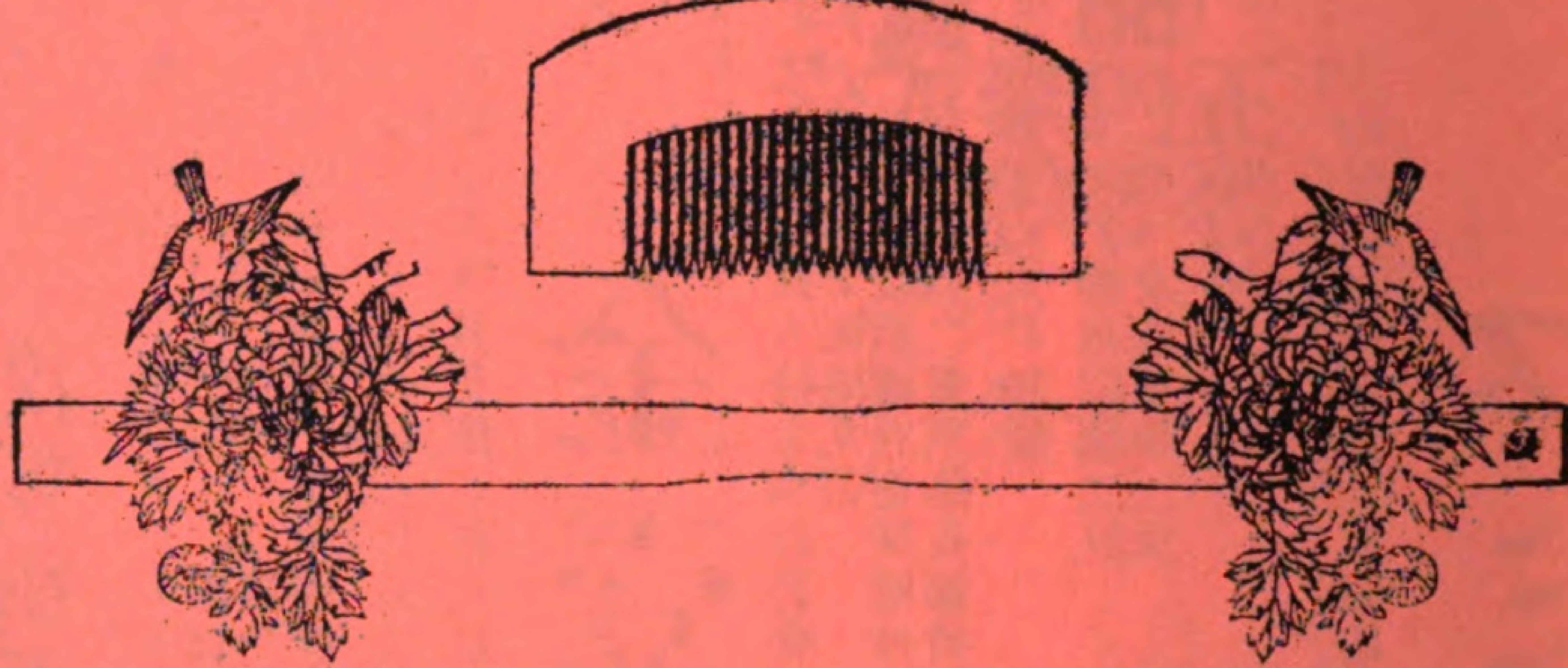
（振替貯金口座三百番）



女學世界第八巻

第拾四號目次





御儀式用櫛笄

例年御婚禮用の品は五葉の松も白粉を含む霜降る月に御注文繁く本年も其時期に相向ひ候得ば御人柄よき御裝の品々意匠をこらし早梅ならぬ花の配り大方整ひ候間何卒御用向被仰付度奉願上候

○四方張製兩花付　一組の價　十五圓　十八圓　二十圓

○本鼈甲製兩花付幷に御丸髷ざし品々出來仕居候

大西白牡丹

東京京橋南傳馬町
振替口座九二九三

美術工藝品競技會

來る十一月二十日迄弊店三階に開催仕候競技會は東京を始め各縣名工の妙技になりたる品類を蒐め昨今悉皆取揃ひ御觀覽の好時期に御座候間何卒美術工藝奬勵の思召を以て賑々敷御光來の程伏而奉願上候

陳列品目　○貴金屬製作品（東京及各縣）刺繡（京都）　蒔繪（東京其他）
○牙角介甲彫刻（東京）　陶磁器七寶（東京、名古屋及各縣）

スミス洗粉御愛用の御方はどなたにも出來る最も面白き娯[illegible]

此洗粉は英國ケンブリッチ大學教授醫學博士エー、チ、スミス氏の配劑にして世界最高の美身料として[illegible]良なると其香氣の佳絶なるは遠く他品の及ざる所にして發賣以來日尙淺きにも拘りませず格別の御高評[illegible]顧を蒙り他品を凌駕するの盛況を得ましたのは一に本品々質の佳良なる特徴あるとは申ながら是れ皆衆位[illegible]引立によりました結果に外ならぬのです附ましては其御禮として今回誰樣にても出來る家庭の御樂みとして[illegible]白き左記の大懸賞を催し終日徒然の御慰みに供する事としましたから左の問題に御答へ下さい

金壹千圓の大懸賞

(賞品)

壹等	婦人持金側時計金鎖附	一人	（五拾圓宛 二人）	價格壹百圓
	金泥織丸帶	一人		
貳等	紋縮緬別染長襦袢	一人	（卅五圓宛 二人）	同七拾圓
	羽二重別染長襦袢	一人		
參等	大島紬絣		（廿五圓宛 二人）	同五拾圓
四等	御召縮緬二反	二人	（拾五圓宛 五人）	同七拾五圓
	友仙縮緬三反	三人		
五等	肩掛		（六圓宛 十人）	同六拾圓
六等	四季袋		（貳圓半宛 十五人）	價格卅七圓半
七等	帶上		（壹圓半宛 五十人）	同七拾五圓
八等	羽織紐		（壹圓宛 百人）	同百圓
九等	ニッケル製旅行用美術洋服掛		（五拾錢宛 二百人）	同百圓
拾等	舶來紙着色美術繪はがき		（拾五錢宛 二千二百廿人）	同參百卅三圓

右の景品は大阪大丸呉服店に陳列してあります

女(いの二)

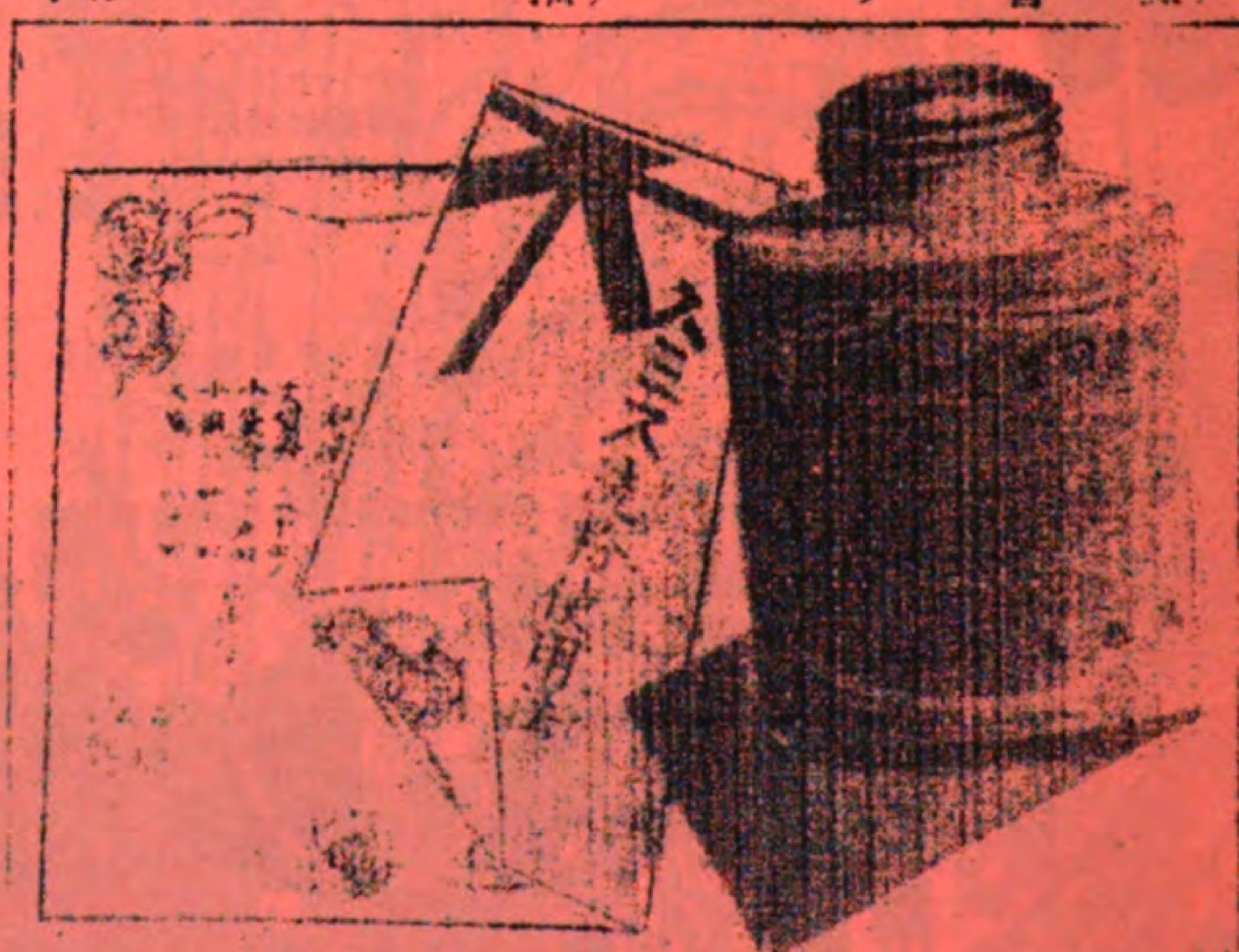
一 平素御愛用のスミス洗粉は何所の店で御求めになりましたか
一 解答の御方は宿所氏名を認め且つ宛名は左の通り御誤りなき樣必ずお認め下さい
大阪市東區道修町心齋橋角スミス洗粉東洋總代理店 三共商會
一 解答用紙は必ず郵便はがきに限ります
一 スミス洗粉は全國到處の化粧品雜貨小間物賣藥店等にあります
一 賞品は正解者中抽籤に當つた方に呈します
一 解答の〆切は十一月三十日
一 抽籤方法は東京大阪有名の新聞社員立會の上執行致ます
一 抽籤場所は大阪市日本電報通信社大阪支局に於て最も公平に抽籤致ます尙當日は各位の御臨場あるも妨げなし
一 當籤者名は十二月十日以後に此廣告掲載の各新聞紙上に發表いたします
一 賞品送達費用は當籤者の負擔であります

問題

(一) 皆樣が常に御愛用になる下圖のスミス洗粉のレノテル(壜の巻紙)に日本の文字が幾つありますか

(二) スミス洗粉使用法中大袋入は何回に使用へばよろしいですか

(三) 此廣告を御覽になりました雜誌は何雜誌ですか



定價

小袋	金八錢
大袋	金拾貳錢
小瓶	金拾八錢
大瓶	金參[illegible]錢

安(いの三)


THE GEM
ゼム
常に「ゼム」を含みて爽快
出では愛づる郊外の菊紅葉
入ては親しむ燈火机上の書
楽しき哉悦しき哉初冬十一月
ゼム定價
七十五粒入十銭
百六十粒入廿銭
四百粒入五十銭
九百粒入一圓
容器入二十銭
主効
◎氣分を爽にす ◎悪疫を豫防す
◎聲を美くす ◎消化を良くす
◎頭痛眩暈 ◎氣欝胸痞
◎食傷水傷 ◎口熱口臭
◎悪醉宿醉 ◎煙草害毒
◎息切渇 ◎時候傷
◎船車醉
日本一手發賣 東京馬喰町二丁目 愛國堂山崎榮三郎
支舗 大阪高麗橋二丁目 山崎兄弟商會
其他賣捌は全國各地賣藥化粧品店にあり
衛生家必携
懐中良藥

女(いの四)

はらから



榊原蕉園筆

●婦人の涙（其原因は男子の罪なり）

近來何處の婦人科醫院にも常に澤山の病婦を見るが其最も多き病狀を聞くに下腹痛み鼻汁の如き白帯下あり腰筋張り顔色蒼白にて白澤なく從前の病歴を問へば始め必ず「せうかち」に罹りたりと云ふ凡そ是迄に局部の煩ひに經驗ある婦人は迚も一筋繩の治療で全治せぬ事と心得べきなり其病名か子宮病血の道などに云ふ程でも皆な病毒の爲めなれば現に永引きて治らぬが第一の證據である故に本病毒及梅毒・淋病・僂麻質斯等を根治するには必ず唯一丸に限るなり尚其病理、原因、病狀等を精密に調査し最も親切に調劑したる唯一丸の如きは世上未だ其類例なし而も其主藥は現世唯一の驅毒藥なれば實に面白き程効力あり

●根治完能唯一丸藥價三日分四十錢●七日分八十錢
●十四日分一圓五十錢●三十日分三圓（内地遞送無料）
●本病患者の爲に其病理養生及治療法親切に詳述せる冊子無代施本送料三錢要す

發行所 東京市本郷區湯島天神表門中坂上 藥劑師 **中西莊吉**（振替貯金口座千五百番）

は歐米各國にて造化の妙工を奪ふの奇效ありとの寳賛好評を博したる秘密藥を當館主が醫科大學醫院在職中深奥なる學理と老練なる技術とを以て專門的に多年苦心研究の後其有効成分を檢明し之に最近の發見



に係る生毛に關する新說を參考し最新藥を配合したる世界無比の學理的最新藥なれば其効能の非凡確實なる事世間に有觸れたる技術と學理に暗き輩が山師的に無責任の廣告を爲して販賣する瞞着品の比に非らず左れば普通に醫師の處方する芫菁丁幾、レゾルチン、サリシール酸昇汞等の在來の生毛劑や粗惡の賣藥にて效なきて落膽せず是非本劑を試みよ頭髮、はへぎは、まゆげ、ひげ陰毛等の薄を適くしあるべき所に毛なきを生じ禿頭病其他の病氣にて脫毛するを防止し拔毛の再生を早めヤケド、デキモノ、ハツボー、キリキズ跡の禿に生毛せしむる事請合藥價送料共一劑八十錢二劑一圓三十錢郵劵代用二割增の事

●●●●●●●●●●●●●●●
取次所ナキ地方ハ直接本舖へ注文アレ

三河國碧海郡刈谷町益世館藥局主
醫科大學卒業藥劑士
本舖 從七位勳六等 **中島龜之丞鑑製**

●●大取次左ノ通リ●●大取次附近ノ各藥店ニアリ●●

東京市
本郷六丁目赤門前 瓜生藥局
麹町區紀尾井町三 齋藤藥局
日本橋檜物町十八 龜田藥局
京橋區八官町八 野田藥局
神田淡路町二の四 森田藥局
芝田町四の一二 加藤支店
芝愛宕下町一ノ二 岩本藥局
赤坂田町四の一 竹内藥局
同青山北町五 西井藥局
本所吉岡町廿五 小島藥局
四ッ谷大傳馬町二 永野藥局
高松市片原町 新[illegible]藥局
堺市大寺南門東入 一色藥局
京都市上京區寺町通り石藥師角
京都市下京區五條通り富小路行當り

大阪市平野町二 丹平商會
丸龜市本町 櫻井藥局
名古屋京町三丁目 飯田藤七
同 同 同 荒川長太郎
同 鐵砲町三丁目 谷田藥局
神戸元町一丁目 西村關吏堂
廣島市橋本町 萬代藥局
神奈川青木七軒町 水崎藥店
仙臺市新傳馬町 櫻井藥局
岡山市橋本町 加藤藥店
弘前市下土手町角 菊地藥店
大津市菱屋町 磯崎藥局
福知 藥局
安江 洋反物店

女（ろの一）

女(ろの二)

ろ

生理學上より見たる

婦人の本分

和装美本
全一册
正價五拾五錢
郵税六錢

▲著者肖像挿入

醫學博士 大澤謙二先生著

婦人論は近時八釜しき問題の一なり而も生物の進化を基點として科學的に婦人の本能を解説したるものは本書を以て嚆矢とす本書を讀まずして婦人問題を口にせんは抑も過なり

此廣告を切抜き本書御注文の方へは弊店特製の明年度「新式懐中日記」と「來年を如何に利用すべきか」と題する十六頁の册子を無代にて進呈すべし

最新刊

東京市日本橋區通一丁目
發行所 大倉書店
●振替貯金二三三八番

婦人の毛髮は如何にして黒く長く且つ光澤を出さしむべきか

最新 毛髮用煉香油 ビューテーオイル

毛髮と椿油

椿油中に毛髮の營養となるべき多くの性分を含有することは嘗て村井弦齋氏が婦人世界に於て説明せられたるがビューテーオイルは即ち椿油中より毛髮の營養となるべき主成分を採り之に適當の香料と油の通有性(ベタツク)を去るべき藥劑を配合したる最も進歩せる煉香油なり

(大壜四十五錢…小壜二十五錢…送料八錢)

● 御注文の節は必ず本誌愛讀者たることを御申添を乞ふ………

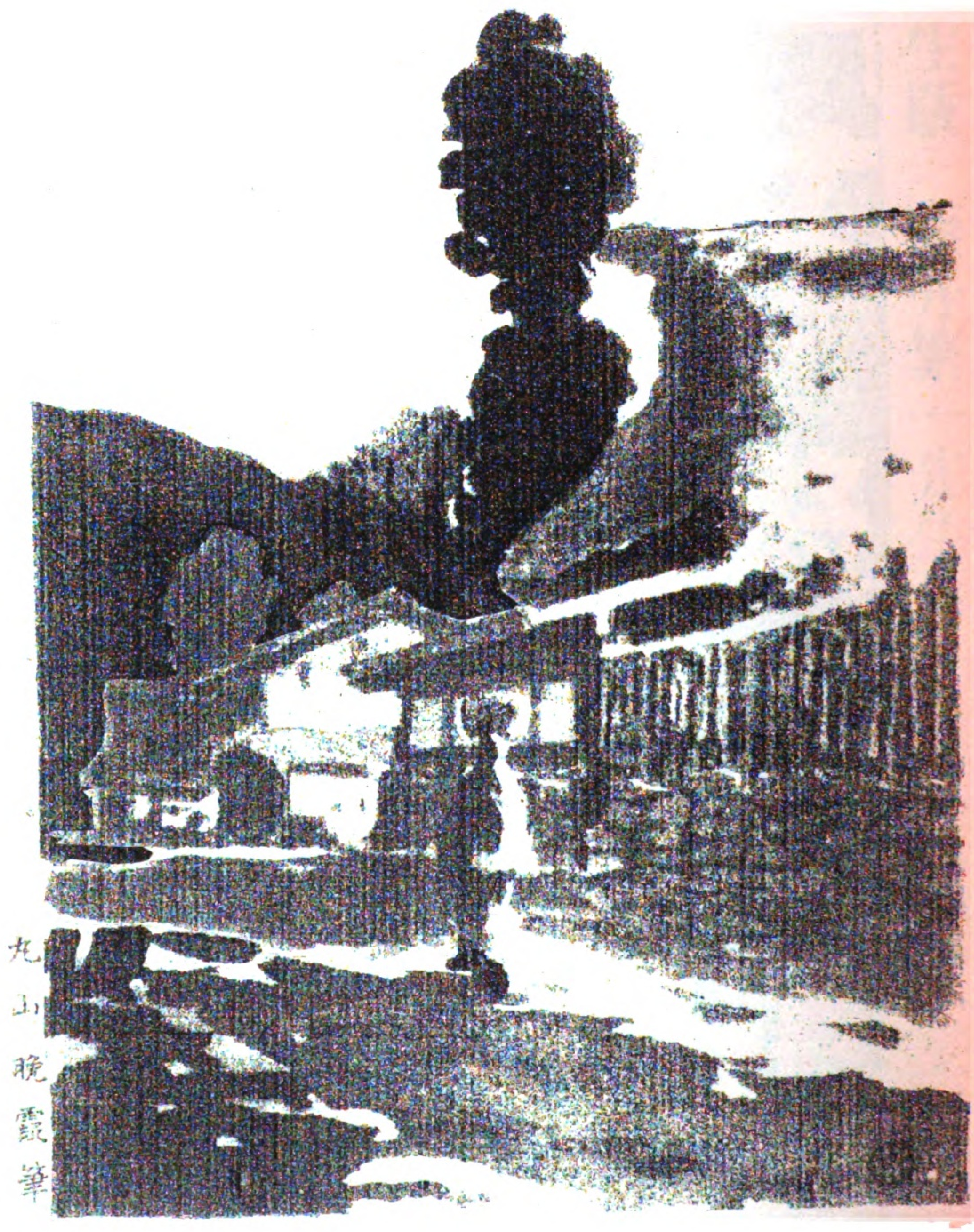
發賣元 東京日本橋區蠣殻町水天宮前象印齒磨本舗

(電話浪花二一九四九……振替口座二一九五〇)

あづま油販賣店 安藤井筒堂



朝氣色



德富蘆花先生跋　藤井繁一先生譯

再版

マックス、オーレル著

「女殿下」

裝釘雅美　全一冊　正價七十錢　郵稅八錢

女性研究家として古今獨步の稱ある佛國文豪マ氏著書中の傑作『ハー、ローヤル、ハイネス、ウーマン』全部の翻譯也

譯文の流麗快暢亦文壇の珍たらん歟。

●●●中央公論　原著者は婦人問題の研究に於て有名な從つてその種の著書が多く世に出でたり。歐米の讀書社會に歡迎されて居るマックス、オーレル氏である。就中此書は原名を Her Royal Hiehness Woman といつて、彼地の批評界に名聲嘖々到る處の家庭に必ず一本は備へられて居るといふ程のものださうな。原著は旣に觀察の深刻と、諧謔の奇警とで推賞されて居るのだから、これを和譯して而かも元との姿を失はざらんとするには不凡な腕では容易な事では無いのだが。今此譯著を繙いて見ると流麗な文章は淸淺の水の頭淺に淵を作り瀨を成して趣を示すが如く、淀むべき處に淀み流るべき處に流れて毫も難の跡はなく、警句の多くも巧に我國の俚諺に譯されて居る丈、有りしまゝの力を備へ譯物の香が十分に取れて居て讀み心地がよい。一篇四十五章「戀する男子」「結婚せんとする男子へ」「夫婦の指揮」「夫の操縱法」等より始めて或は英米佛の細君氣質を評し或は母親氣質、祖母氣質、姑氣質、看護婦氣質等を說き去るものゝ中讀むべき幾多の好文字が散らばつて居る。

●●●●報知新聞評　女性研究家の泰斗たる佛國の文豪マックス、オーレル氏の原著にして歐米に於ける讀書界を風靡したるもの、章を分つ事四十有五先づ久遠女性より說いて情界私書に及ぶ、觀察機警にして深酷、興味津々として諧謔、諷刺的出せる□に深遠なる教訓の意を含めり、中にも戀する男子へ、夫の操縱法、男子の戀と女子の戀、女嫌ひ、嫉妬の研究、蓮葉女と貞淑女等一讀千金の價値あり、戀を解するものと解せざるものとを□はず、否又男女老幼の別なく更に又家庭の禮物として推奬するに憚らず、□米□□に見る處の類と趣を異にし一個眉を顰むべき汚穢の文字なく淸新なる眞面目の研究によつて遺憾なく美はしき女性を□□し得たり。□文流暢、裝釘瀟洒。

前外務大臣伯爵林董閣下序文

マックス、オーレル著、正木照藏先生譯

再版

『ジョンブル』

又名英吉利氣質

全一冊　正價五十五錢　郵稅八錢

高橋五郎先生譯

新刊

『ベーコン論說集』

全一冊　正價一圓廿錢　郵稅十二錢

女(はの一)

發行所　東京神田區雉子町　振替第七九九五番　玄黃社　賣捌各書林

らい病

此のらい病藥は數種の有名なる癩病治療藥を化學的の方法にて分析し其主成分に更に最近の發見に係る治癩新藥を加へ且つ當館主が醫科大學奉職中研究したる成績に考へ配劑したる新藥なれば一度使用して其効驗の確實なることを實驗せらるべし古來癩病は不治の病と稱し今日と雖も之を根治せしむる事は難事なれども其病勢の甚しからざる中に叁圓分を四ケ月服用するか或は病勢甚しく進みたる人にても二藥を六ケ月併用すれば病原菌を脱力死滅せしめ漸次輕快に赴き一生醜貌を免れ得る事は確實なり本劑は安價に不幸なる病者を救護せんとする主趣に基き發賣する者にして無効なる藥品に非常なる高價を貪り大言を吐て其効能の著大なるらしく見せかけ不幸なる病者を陷れんとする瞞着主義の賣藥に非ず

ナノサール　一ケ月分　貳圓
複方ナノサール　一ケ月分　叁圓

●醫師は癩病者を診察せば屆出る規則なれど藥劑師には其規則無ければ決して他へ知れることなし安心服用あれ

本舖　醫科大學卒業藥劑士　從七位勲六等　三河國碧海郡刈谷町益世館藥局主
中島龜之丞鑑製

洋畫講義録

執筆畫伯
三宅克己先生
岡田三郎助先生
大下藤次郎先生
中澤弘光先生
外大家十數名

洋畫講義録は水彩畫を始め其他油繪 木炭畫 ペン畫鉛筆畫肖像畫等すべて一切の洋畫に關する事を詳細に講述す每號美麗なる挿畫數多あり、每月一回發行、一年卒業、會費月卅五錢、詳細規則無料進呈

新學期開始！

繪畫講習録は日本畫の技術と之に關する各種の學科とを平易懇切に教授し如何なる初學者と雖も忽ちにして上達せしむ每號美麗なる繪畫數葉を挿入す、每月二回發行一年卒業會費月卅五錢、詳細規則無料進呈

東京市麻布飯倉四丁目
大日本繪畫講習會

繪畫講習録

執筆畫伯
川端玉章先生
荒木寛畝先生
寺崎廣業先生
梶田半古先生
外大家十數名

見●月經なき女子●病める婦人

△効驚…藥力最強度…効能峻烈…有効無害…

●本劑は專門博士が學理と實驗より發見せられたる物にて其主藥は最新唯一の通經藥にて帝國大學病院及各病院にて專用する最良藥なり二三月の月經閉止月經滯り經不順は一二劑にて必ず流下し四五ケ月又は血塊にても特製或は別製分服用せば安心に忽ち流經す女子十七八歳になり月經なき人は二劑又每月月經困難は三日分にて通經す

藥價一劑六十錢二劑一圓十錢特製二圓廿錢別製分三圓卅錢送料各四錢宛



博士賞賛良藥
改良
女月丸

●肥滿病新藥（米國新輸入）

小供の折美愛と賞せられし人も年頃になりてよりぶと〳〵肉太りたる爲め上圖の如く醜婦となる人少なしとせず本劑はバークデビス會社の模範製劑にて脂肪多き人●ぶと〳〵ふとり●血太り●肉太り●酒太り●水太り●顏赤●にきび●ふき出物多き等輕症一二劑如何程の惡性も四劑分連服せば色は雪白となり軈て美顏窈窕たる美人となる事を保證す乞肥滿性の人は試みよ

諸孃姉の福音
美人となる



やせる藥

藥價　一劑一圓五十錢　二劑二圓九十錢　三劑四圓卅錢　四劑五圓半　送料十錢

發賣元　東京々橋中橋和泉町　振替第壹〇六七七七番
小宮愛生堂

新式寶石入指輪



(1) K18 ダイヤモンド入 甲八十五圓 乙五十圓
(2) K18 ルビーエメラド入 金拾五圓半
(3) K18 ルビー眞珠入 金拾六圓
(4) K18 ダイヤモンド入 金七拾八圓
(4) K18 ルビー入 金拾壹圓
(5) K18 眞珠入 金拾六圓
(6) K18 眞珠入 金拾六圓
(7) K22 眞珠入 金廿壹圓半
(8) K20 白金入 金拾[illegible]

商品目錄出來仕候（送料四錢）

今川橋 松屋呉服店前

東京市神田區鍛冶町

白牡丹中西

電話本局二〇四〇番振替口座一五二一四番



美術
御婚禮道具
ぜんわん
家具
其他

漆器
蒔繪

製造

ぬりもの陳列場設置有之候間御隨意に御縱覽多少ニ不拘御用向並御注文偏に奉希上候敬白

東京市日本橋區室町貳丁目

木屋本店

林九兵衛

電話本局 九百九十六番 千七百十番

電信略名（キ 九）

女(はの三)

造花原料

東京九段坂 吉住商店

電話番町二〇五六番
振替貯金口座六六七九番

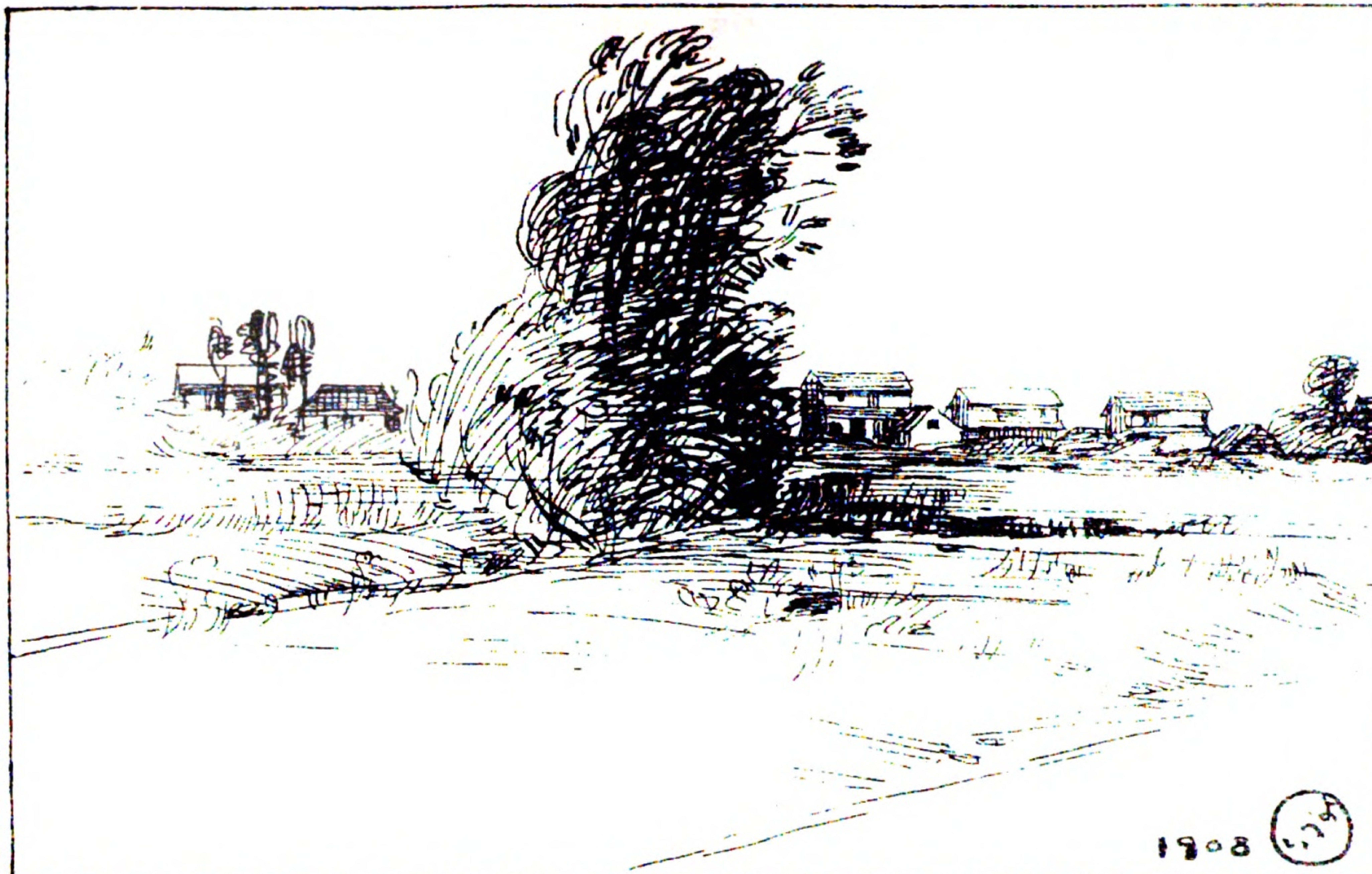
◎造花材料◎造花器具◎造花及半製品◎造花用染料
◎造花用 籠類 ◎摘ミ 細工 材料 ◎造花 裝飾用達

營業科目

御待チ兼ノ營業目錄愈出來

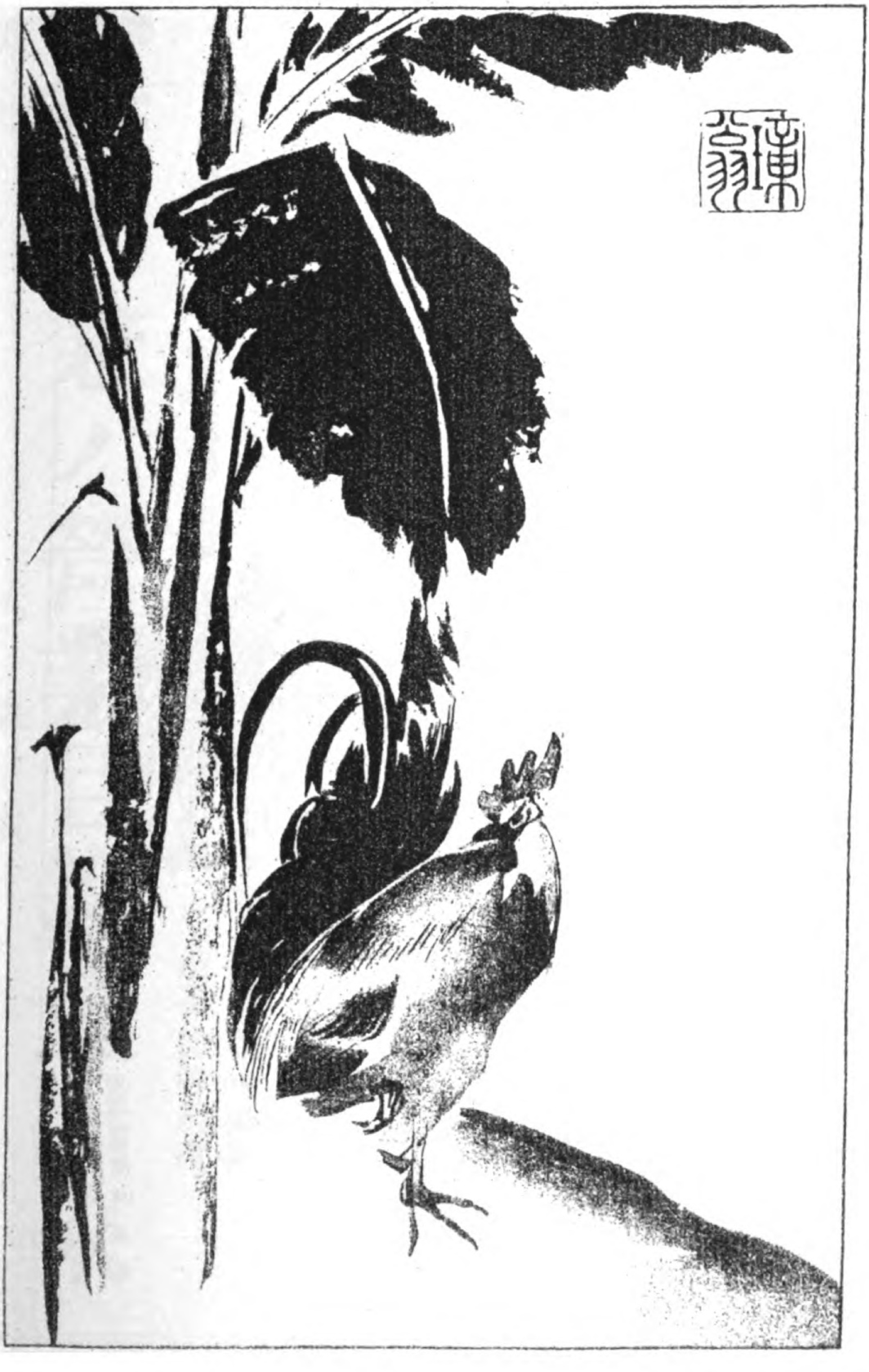
二付御入用ノ方ハ二錢切手封入東京九段坂吉住商店宛申込マルベシ直ニ進呈可仕候

秋晴札



宮崎與平筆

小春



川端玉章筆

十字屋樂器店

西洋横笛
（ハーモニカ）



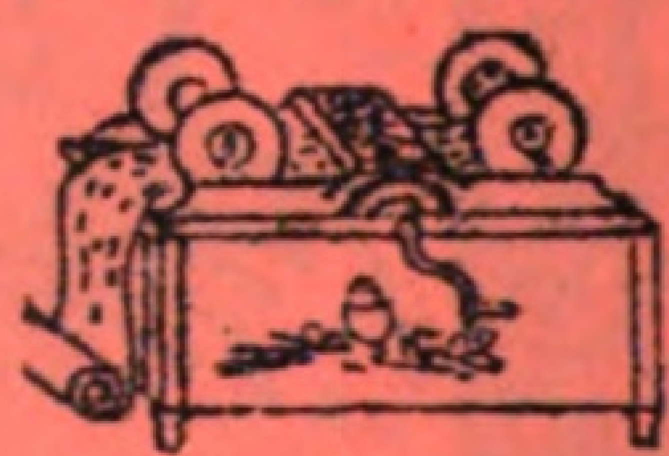
金卅五錢
金四拾五錢
金五拾錢
金六拾錢
金八拾錢
金壹圓
金壹圓廿錢
以上
金参圓迄
各種

和洋バイオリン

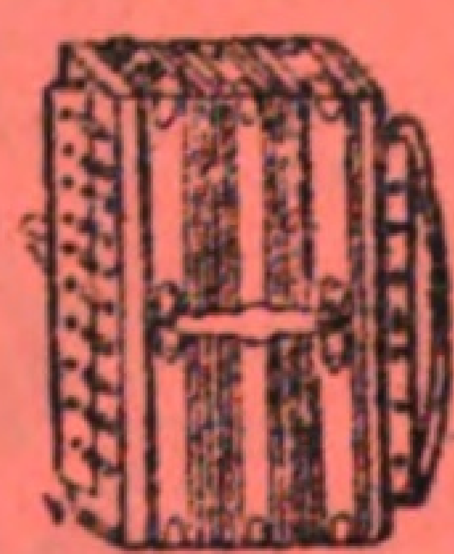


金二圓以上
金二百圓迄
各種

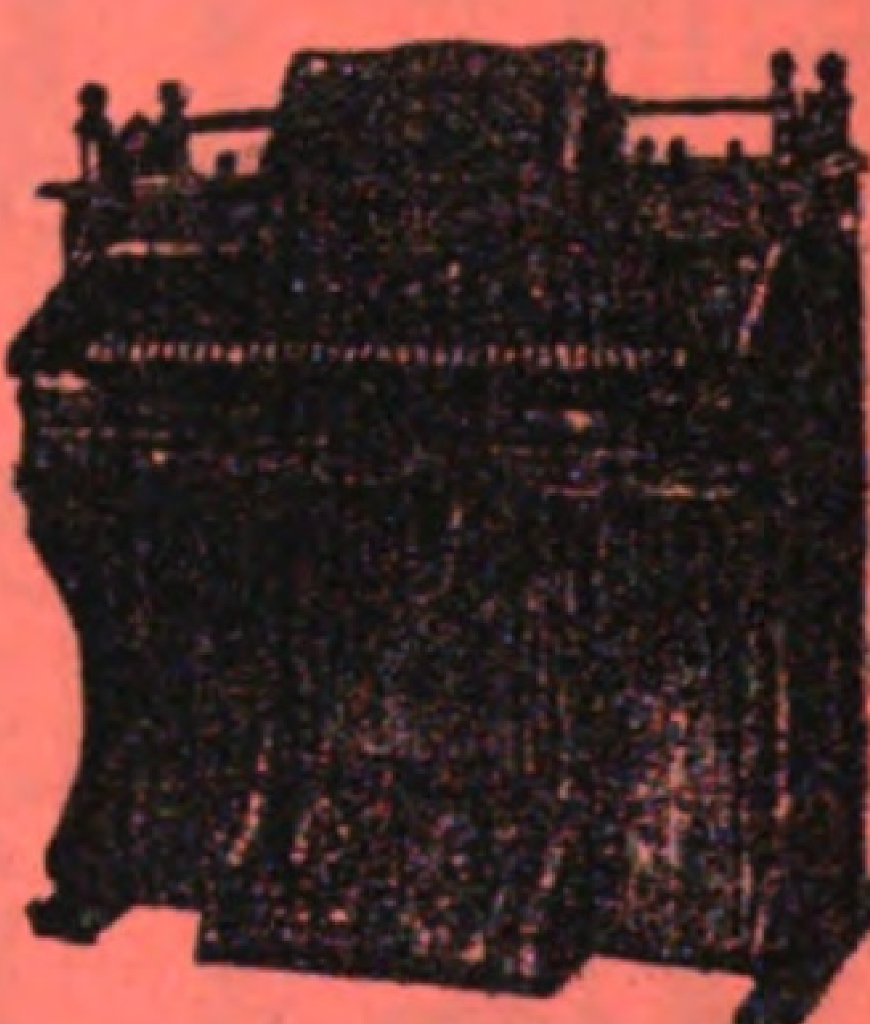
紙腔琴
獨奏
樂師



舶來
手風琴



西川オルガン
日本製造元祖
金拾八圓以上



福島琢郎著
本手六段の調
替手六段の調
定價各金拾錢
郵税各金貳錢

天谷秀著
最新中等唱歌集
定價金五拾五錢
郵税金貳錢

オルガン獨習の友
定價金參拾五錢
郵税金四錢



金參拾貳圓
金四拾圓
金五拾圓
金五拾八圓
金六拾五圓
金八拾五圓
金百拾五圓
金百六拾圓

樂隊用
吹奏樂器



特電新橋一二五九
振替口座七一五八

目録御入用ノ御方ハ郵券二錢御同封ノ上御申越下サレ度候。オルガン、平圓盤蓄音器

東京市京橋區銀座三丁目二番地

（其の一）

樂器ノ月賦販賣及賃貸

メ修法テ調於仕候

◎山葉風琴　金拾八圓以上 金參百五拾圓迄 各種

◎山葉洋琴　金參百參拾圓以上 金壹千參百圓迄 各種

◎鈴木ヴァイオリン　金貳圓以上金貳百廿圓迄　弓 金七拾錢以上　箱 金壹圓五拾錢以上

◎鈴木マンドリン、ピオラ、セロ各種◎舶來洋琴、ヴァイオリン、マンドリン各種◎樂譜別[illegible]樂器[illegible]各種◎手風琴、フラジオレット、ハーモニカ各種◎各種樂器附屬品、和洋音樂書樂譜用紙各種◎郵券貳錢御送附アラバ詳細ナル目錄進呈仕候







文部省檢定濟

山田源一郎先生編

中等教育唱歌集

洋裝美本全一册…定價六拾五錢…郵税金八錢

本書は先に師範、中學、高等女學校等の中等程度各學校音樂科教科用に充つる目的を以て公刊せられ爾來好評嘖々版を重ぬるに當り今回文部省の檢定を經益々間然する處なき近來無比の好唱歌集たり

最新刊書

杉浦千歌子女史著

聲樂教練

洋裝順美本全一册…定價金六拾錢…郵税金八錢

今ヤ我樂界ハ實ニ日進月歩ノ有樣ニシテ之ニ伴フ教材タル良書モ亦タ陸續刊行セラレ蓋シ遺憾ナカラントス然レドモ其根底タルヘキ聲樂ニ對スル發音法並ニ之レ等ノ理論ヲ叙述セル著書ノ乏シキハ一ノ缺點トセザルヲ得ザルナリ現時聲樂家トシテ有名ナル東京音樂學校助教授杉浦千歌子女史夙ニ意ヲ爰ニ留メラルル久シカリシガ今回多年ノ實驗ニ鑑ミ人聲ニ關スル理論及發音法ヲ説キ且ツ其練習ニ適切ナル曲ヲ集メ以テ一卷トセラレシガ師範、中學、高等女學校等ノ教科書トシテ恰當ナルモノナルヲ以テ弊社ハ女史ニ乞ヒ之レヲ上梓シテ世ニ公ニスルノ榮ヲ得タリ一般好樂家ハ以テ好伴侶トセラルベク斯道研究者ハ之ニ據リテ會得セラルルコト尠少ナラザルヲ信ズ

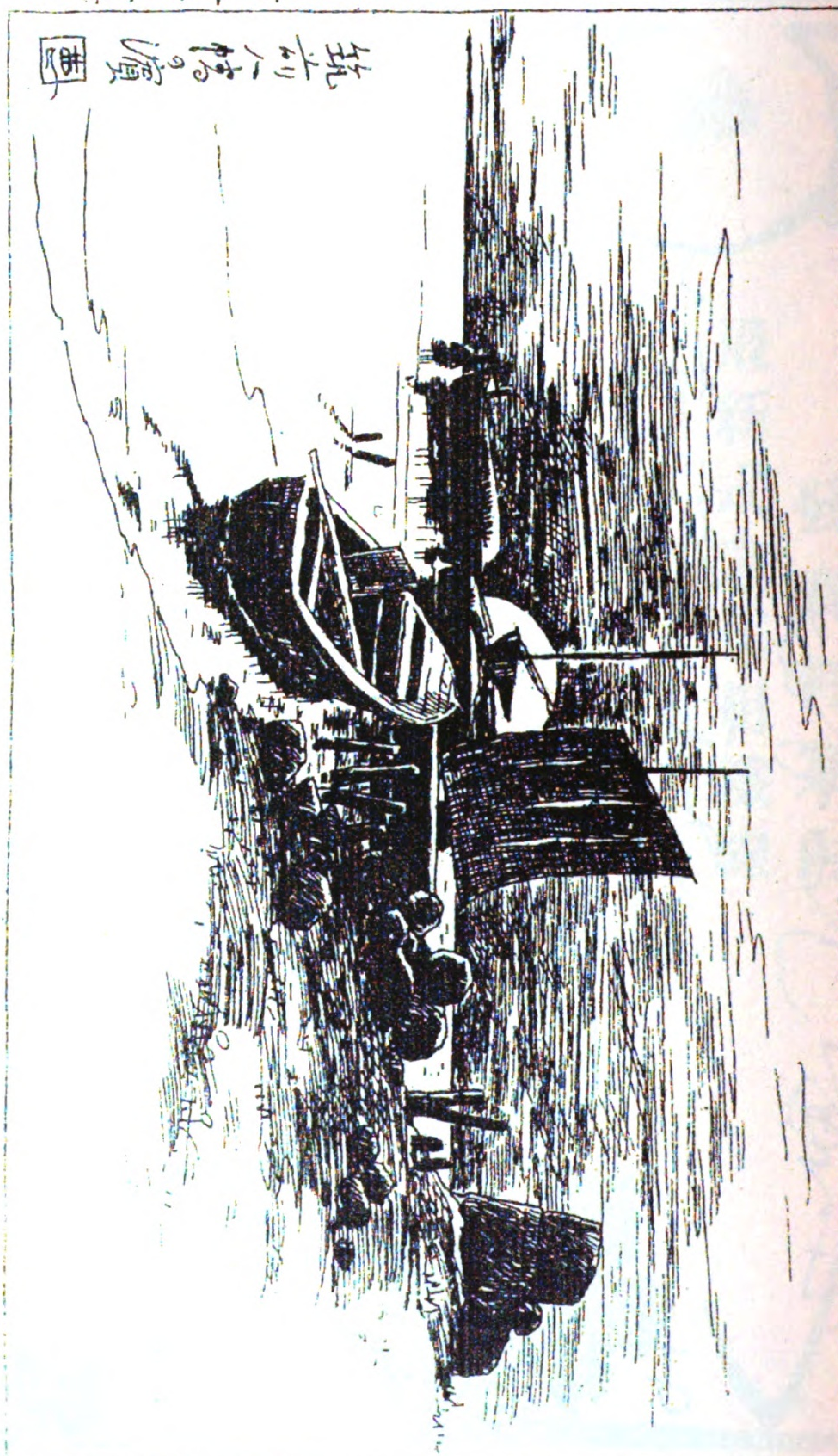
ピアノ、オルガン
調律修繕應需

東京市京橋區　合資會社 **共益商社樂器店**　竹川町十三番地

電話新橋(五二九●四八〇)　振替貯金口座(一五八〇番)

女(にの四)

竹久夢二筆



[illegible]

横川種子


發賣御案內
最新式造花用鐵線
如何に本品の斯用として好適せるかは御試用の上
知り給ふべし郵劵貳錢封入申込み次第直送す
東京市日本橋區横山町壹丁目拾六番地
美術造花材料商
天野卯兵衛
特電話浪花一六四三番
電信略號（アマウ）
振替口座四九七〇番
營業案內御入用なれば郵劵四錢封入御申込みあれ

文（はの一）

女（ほの二）

根治確証

わきが

新治療 ピラヨン薬

必ず全治し決して再發或は他病に變ぜず速に用ひて苦憫を脱せよ

丙價七拾錢乙價壹圓卅錢甲價特製貳圓五拾錢送料拾五錢

本劑を塗擦すれば主成分は皮膚及び肉の組織に吸收せられ其組織にある毒素を探湾驅逐し悪臭を根底より全滅せしむる作用を有する最近發見の特種の新劑にして如何程頑固劇烈の難症も甲價特別製を用ひよ

毛のはへる

毛髪生養液 原名ベクネス

めはへぎわうすき人●まゆ毛●口ひげ●婦人こまあたりのはげ●あるべき所に毛なき人用ひよ毛髪發生す頭などにはげのあるのは見苦しき者也試みられよ●ぬけ毛落毛を止め早く毛をはやしたき人に

有力なる最新液にして

定價壹圓卅錢特別製貳圓送料拾四錢本品は原名をベグネスと稱する現今最賞用せらるゝ

化學製品 防ハンドコロン溶液

色の白くなる

盛に皮膚を漂白するを以て全身次第に白色艶美となる最も必用の品なりし

價A印壹圓B印特製壹圓五拾錢送料十五錢本劑は貴紳淑女粋士間に大高評を博し殊に愛用せらるゝ最新流行の秘方奇劑にして本劑を塗擦すれば十分の力に依り皮膚は次第に新陳代謝をなる男女交際上 主性

月やくさらい

すぐ下る二三ヶ月以上のとまり流經す本劑は効能極て烈強なるも毫も身體に害なくたやすく下る又は血塊には特製を用ひよ速に月經不順より起る子宮血の道を治し古血を一掃す半劑六拾五錢壹劑壹圓貳拾錢特製劑貳圓參拾錢

メソルビン此藥は子宮を痛めず如何ほど長き月經とまりも必ず下る二三月位のは壹劑も用ゆれば

電話下谷二五三五

專賣 東京神田小川町四十番 オリエンタル藥舘

懐姙避姙自由自在

全壹冊 拾五錢 送料貳錢

子なき人は本書を讀みて懐姙の法を知るべく又子が出來て困る人は避姙の法を知るべく實に本書は懐姙避姙を望むが儘に自由ならしむる秘訣書なり郵券代用必一割増

大阪市東區和泉町二丁 泉陽堂



俗にはぎしりにて御困りの方は返信料封入申込なされ不思議に治る根治劑及び養生法等の詳細説明書を進呈す

東京高輪大井町 朝倉

リウマチス全治

秘訣

妾儀多年リウマチス病に罹り百方手を盡すも更に効なく困難の處不思議の神藥の奇効に依り忽ち根治全快し喜悦に堪へず依つて人助のため同病者に事實を告げ救濟せんとす御希望の方は郵券二錢封入申込次第詳細に御通知申上可く候間御遠慮なく申込あれ

東京府下大森停車場東大畑 河奈とめ女

安眠劑

よるねむられぬ人 神經過敏ヒステリー其他如何なる不眠症の人も更に害なく眠られる奇劑を發見す

返信料封入申込あれば説明書を送呈す

東京高輪大井町 岡博士堂製劑部

女(その三)

高貴御料品

純無鉛

大學白粉

新化粧

祝佳辰

山に千段の錦の色、野には黄花の薫床しきを偲ぶ美人の粧は實に二月の花よりも麗はしき!!
今その豊類の美！高雅なる風姿を望ませ給ふ御女性は常に「大學白粉」を御標致の友として愛くしみ給へと勸め參らす!!



片時もお顔面のお化粧になくてならぬ伸びの良い芳香の高き鉛氣の少しもない「大學白粉」は多くの令嬢女學生方の御標致の生命で在ます。
本品は全國有名なる化粧品小間物店に販賣す

女（その四）

大學白粉定價煉大瓶三十五錢
小瓶二十錢水白粉二十五錢

東京 大阪 矢野芳香園

友のむつび



梅香女塾々生、右より前田伯令孃絹子、能勢梅子、前田伯令孃直子、同佳子、

秋の林



米國加州レーキ、タホー附近

髪くせなをし

化粧華クロ髪油



髪のちゞれたる御婦人に御知らせ

如何なるくせ毛も自由に直し常に洗髪の如く毛の。
艶がよく成升常に髪をあらふ世話は入りませぬ

衛生局試験済ですから無害保證

價一瓶金貳拾錢　送料八錢

發賣元　大阪市新町三丁目　福田源二郎
電話西千六百一番
振替口座六〇八六番

代理店
東京市横山町　脇田盛眞堂
東京市通塩町　大和屋小兵衛
東京市神田橋本町　松井號
東京市横山町　森本支店

女(への一)

日本元祖

美術造花

果實蔬菜

通信教授 ◉二ヶ月卒業改良せる新式圖解と實物標本を附け平易なる説明に材料と器械迄添（あれは）遠國に在て老幼男女誰にても造り花◉和洋花かんざし等美麗に出來る規則郵券二錢◉見本十三錢送れば直に送呈す

梨子、林檎、桃、柿、枇杷、柘榴、茄子其他和洋果菜數種實物の如く美麗に出來る普通十五種一週間修業◉見本十五錢案內書は郵券二錢送れば呈す

當所に出教授、直接教授あり何時にても入學を許す。

東京神田美土代町二ノ一（振替貯金貳四四九番青木宛）

日本彩葉會附屬

美術造花傳習所

加盟會員募集

圖書新報紙上新刊圖書の紹介細評希望の各位は當部宛壹部御寄贈願候

◉**當俱樂部**は毎月貳回帝國圖書新報を發行論其他趣味ある記事を登載して會員には無料配布す

◉**會員**は當俱樂部刊行の圖書は勿論一般書肆の圖書雜誌類をも極めて廉價に購求し得るの特權を有す

會員は僅か金**六拾錢**にて申込次第送呈◉會則往復はがき

紳士淑女諸君を始め苟も時代思潮に後れざらんを欲する文明國の民衆は卒先加盟せらるゝの義務あり

東京京橋木挽町二ノ六 **帝國圖書俱樂部**

振替口座壹六九五三番

大町桂月先生序　大月久子編

閨秀文範

○美本全一冊四十錢　郵税六錢

女子の特性を發揮せる、古今閨秀諸名家の美文、しかもあらゆる種類を集めて百花爛發の觀を呈す、眞に無比の文範たり。

東京市日本橋

文祿堂
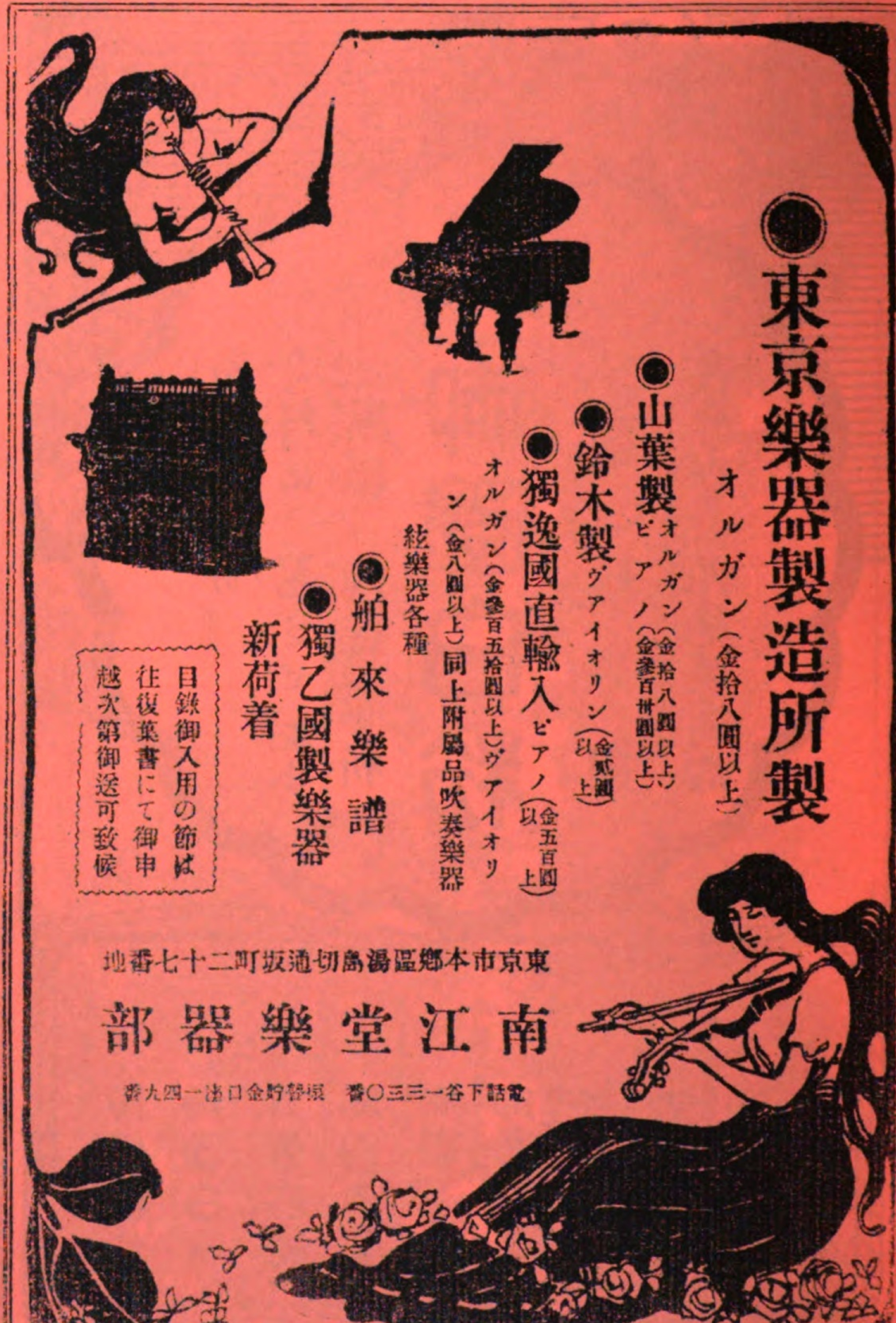
振替口座六六八二

瀟湘女史新著　安田靭彥氏畫

女子新書翰

○美本全一冊四十錢　郵税六錢

虛禮を極めた在來の繁文式を打破ましして眞情の流露を力めた小說以上に面白い用文章なのよきっとビックリなさるわ。


◉東京樂器製造所製
オルガン（金拾八圓以上）
◉山葉製オルガン（金拾八圓以上）ピアノ（金參百卅圓以上）
◉鈴木製ヴァイオリン（金貳圓以上）
◉獨逸國直輸入ピアノ（金五百圓以上）オルガン（金參百五拾圓以上）ヴァイオリン（金八圓以上）同上附屬品吹奏樂器絃樂器各種
◉舶來樂譜
◉獨乙國製樂器新荷着
目錄御入用の節は往復葉書にて御申越次第御送可致候
東京市本郷區湯島切通坂町二十七番地
南江堂樂器部
電話下谷一三三〇番　振替貯金口座一四一九番


御料
畏き邊りの
御料に召させ給ふ
高貴御化粧料
御園白粉
東京芝 胡蝶園
製造本舗
發賣元
東京日本橋區橘町四丁目
丸見屋商店
ねり製 御園白粉
水製 御園白粉
こな製 御園白粉
洋風化粧クレーム 御園の蕾
高等化粧水 御園とき水
御顔ふきこうち香粉 御園なでしこ
濃厚化粧水 御園四季の花
高等洋水油 御園香油
高等洋香水 御園香水
高等はみがき 御園歯磨

（への四）

佳賓の歡迎會



（澁澤邸に於ける米國實業家）

米國の舞姫





記事參照

全紙悉く活文字にて滿さる眞に是れ婦人雜誌界の女皇

記事親切

婦人世界

材料豐富

十一月一日刊　毎月一回　二卷

拾三號

一冊金拾五錢

郵税一錢五厘　六冊郵税共九十錢　十二冊同一圓七十五錢

▲外人に嫁した日本婦人の實例……村井弦齋

▲初産の當時父の日記……厩城子

▲小兒は如何なる玩具を長く持つか……岸邊幼稚園主

▲寄宿の瓦斯使用實驗……嘉悅孝子

▲姙婦と産婆……醫學博士 榊順次郎

▲意地惡き姑に事へて十年貞節を守りし嫁の實例……山脇高等女學校長 山脇房子

▲娘を嫁にやりし時言ひ聞かせたる教訓八ヶ條……海軍機關大佐夫人 武田貢子

▲三年間シヤムにて皇后女學校に教へた時の苦心……學習院女學部教授 安井哲子

▲日本女子大學校生徒と他校の生徒と如何に違ふか……日本女子大學校長 成瀨仁藏

▲小說家より女優となりて初めて舞臺に上りし時の所感……佐藤露英

▲奥村晴翠の山水畫と上村松園の美人畫

▲日本服は何處に隱袋を附くべきか

▲手輕な西洋料理……弦齋夫人

▲雁に關する古今の文藝

▲有益なる我が家の實驗

▲野津大將と時事新報の美人逸話

▲母の急病に四里の夜道を駈けつけし發明家の夫人苦心……仁科遼平夫人 終子

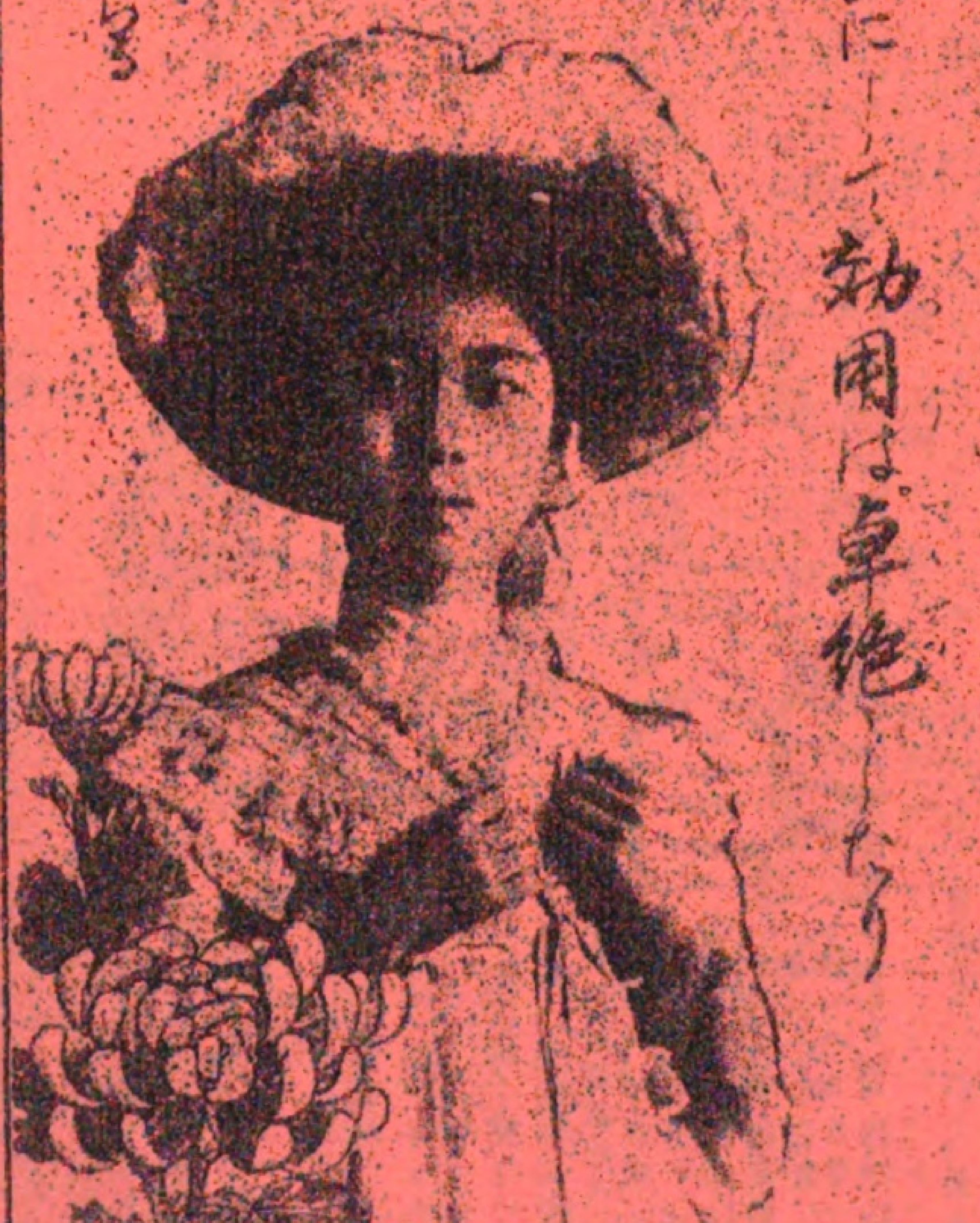
東京京橋南紺屋町十二　實業之日本社　（郵便振替貯金口座參貳六番）（電話新橋八七四番）　賣捌 全國書店

女（その三）



かりそめのすさみ





(メ)5の(一)

世界無比

最新發明藥

あざ

入墨は廿日　ほくろ　そばかす、なまず　いぼは拾日　目に必ず美麗に除去す

保險附 新發明藥にして患部の大小輕重を問はず容易に根治し假令顏面たりとも毫も痕跡を殘さず無痛にて除去し得らるゝことを確證す故にこれを用ゆべき患ひある人は速に用ひて美質を完うせよ來簡者へ感謝狀及び除去したるあざ、ほくろ、そばかす、いぼ等の實物は山の如き全治者の天然の美質を示すべし實に世界唯一の新藥也但し本劑はあざ、入墨、ほくろを除去するものと又一はそばかす、なまず、いぼを除去するものとに區別し二種とす故に注文者は各自除去せんと望む所の病名及患部の模樣を詳細明記して申込あれ左すれば其症に適應する藥を發附すべし價は各一劑分壹圓拾錢參劑半分參圓拾錢六劑分五圓拾錢拾貳劑分拾圓拾錢づゝにて郵券代用貳割增し（患部の面積大なる人は大劑を求むるを徳用とす）著金即刻小包郵送す

●白色 特效 ペーアス石鹼

此石鹼は世界第一等の良品にして化粧品の大王たることは何も泰西の事情に通ずる者の熟知する所なれば今更喋々贅辯を要せず唯だ單に其主たる特效の一二を掲げん、皮膚を潤澤軟密にし色を白くし、粗糙質を滑する佳質にして使用後五時間は芳香纏綿として身體に附著し離るは普主の實驗保證する所なり、乞ふ昨今世上に續々顯出し誇大の廣告を以て世人を誑著する內國製の粗惡品と玉石混同視すること勿れ（舶來輸入の五萬個は既に賣切れ品切中の處今回拾萬個着荷せり）

壹個代價送料共八拾五錢▲三個函入同上貳圓參拾錢

わきが 腋臭

根治確證 新發見藥

醫學博士某氏の實驗有効を確證せし如何程の頑固難症の腋臭にても誓て根治し決して再發或は他病に變ずる憂なき世界的發見の妙藥なり速に試み苦惱を脫せよ價は輕症根治分六拾錢重症根治分壹圓貳拾錢頑固劇烈の腋臭根治分貳圓卅錢著金即刻送藥す郵券代用必ず二割增の事

●世界唯一 痳病消渇の根治確證新藥

りんめつ 痳滅

痳滅は最も進步したる最新の痳病消渇根治療藥なり、本劑はありふれたる普通の賣藥と異なり殺菌學上効力頗る峻烈なる一新藥を主劑とし是を內服して痳病消渇の病原たる「ゴノコッケン」を忽ち滅殺する處方に基き製劑せし新藥にて付輕症は壹劑重症は特別製分にて必ず誓て根底より根治するを確證す但し彼の衛生式洗滌劑の如き迂遠無効有害の姑息藥と異なり奏効確實峻烈なるだけそれだけ藥價不廉なり用藥者豫め之を諒せよ藥價壹劑分貳圓拾錢特別製貳圓拾錢郵券代用貳割增しの事

梅毒根治新劑

本劑（藥名トクトル）は幾多の研究實驗を重ね多年苦辛鍛鍊の結果成功したる最新最良の藥物なれば現世紀に於ては、梅毒根治の唯一特効新藥也故に黴毒及梅毒に罹病して續發する諸症（即ちばいどく、ひゑ、かさ、しつ、かんそうよこね、ようばい、そう、たいどく、吉瘡、ろいれき、骨がらみ、べんどく、ふしぶしの痛み等）ならば如何に誓って根治するを確證す從來なる頑固難症も特別製分にて醫療實藥等百方手を盡し全治の効なく困難せる患者は速に本劑を試服し其病毒を根底より驅逐斷絕し天賦の生命健康を保全せよ藥價壹劑分壹圓拾錢貳劑分參圓九拾錢特別製分參圓六拾錢著金次第送藥す郵便切手代用貳割增の事

●奏効確證 美容新劑 やせる藥

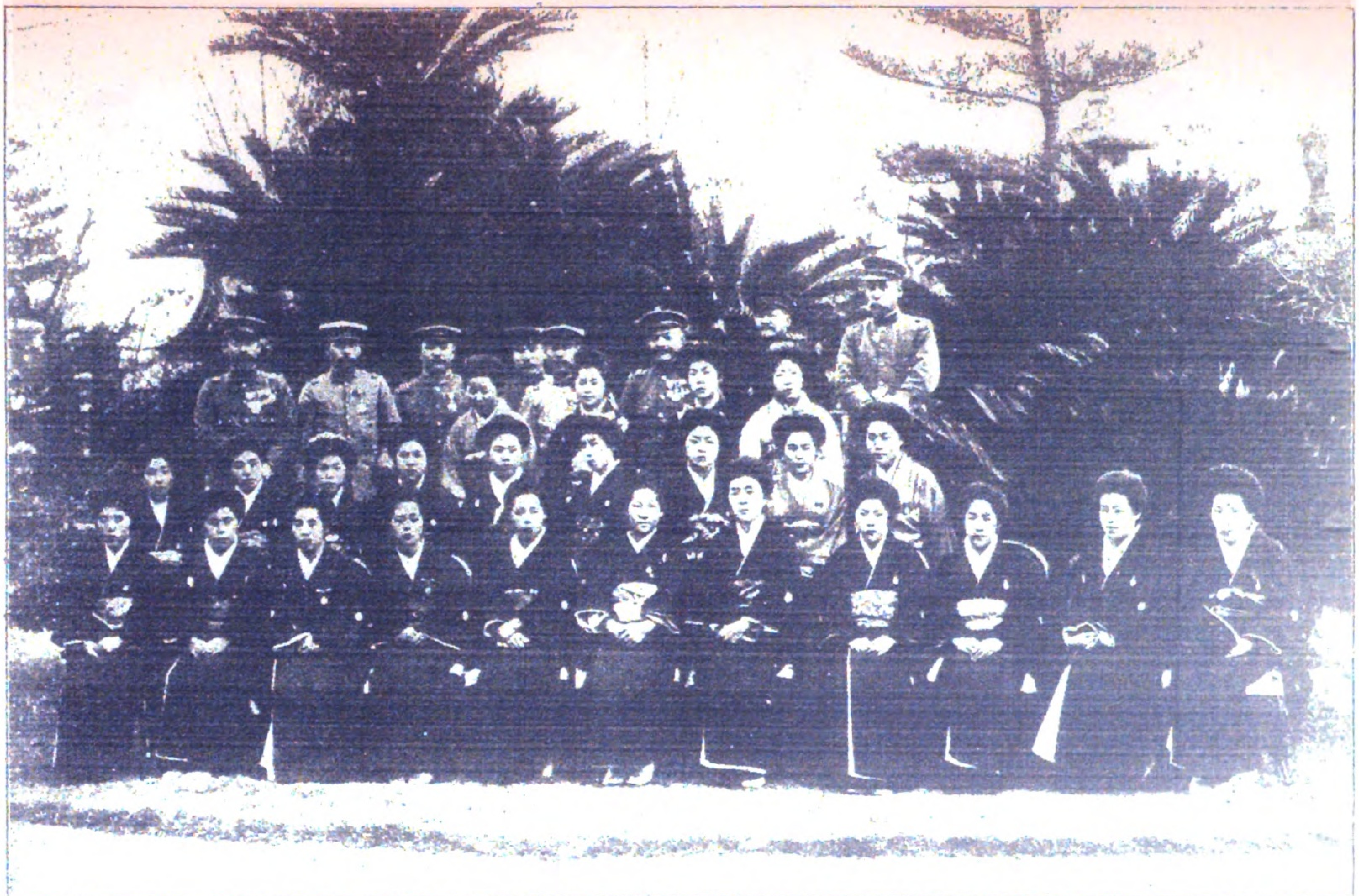
本劑（藥名ヨードチリン錠）は學理實驗に徵したる現世紀唯一の發明劑にて血ぶとり。脂ぶとり。あぶらぶとり。顏赤くほてり。のぼせ症。卒中症等患て肥滿質多血質脂肪過多質の人用ゆれば無害にして著しく脂量を減じ脂肪を適度に脫し美容健康を保ち程よくやせる特効藥なり故に彼の見苦しくふとりたるを苦にする諸君は速に本劑を用ひ其驚くべき偉大なる奇効を知られよ

藥價壹劑分價送料共壹圓廿錢貳劑分六圓廿錢特別製分九圓拾錢著金即刻送藥す

以上六種 專賣元 東京市神田五軒町拾九番地 日新館藥房

女（ちの二）

丸龜將校婦人會



(りの一)

新輸入 美容料 肉體 色白新劑

本劑は近時佛國パリス貴紳淑女の間に最新流行の發明藥にして如何程色黑き男女にても特別製貳劑を用ゆれば忽ち肉體純白色に變化し艶美の容貌となる特效を覺ゆ眞に奇効顯著の確證新劑價は並製金壹圓貳拾錢特別製金壹圓八拾錢

飲んで色白くなる特効新藥 サーサパリラ

英國ロンドン「バーゴイン」製清血劑にして頑强なる皮膚病、猛惡の「サーサパリラ」は峻烈なる慢性梅毒、痳毒リウマチス等の病毒及び男女體内の惡血毒血惡液を體外に排泄し血液を清淨にし且つ精神を爽快にし根本的に肉色を純白艶美ならしむる奇効顯著の内服水劑なり(注意)從來種々の外用塗布的化粧水及誇大廣告の洗粉白粉等を用ひ其無効に歎じつゝある各位は速に此「サーサパリラ」を試みよ奏効頗る迅速確實なり(今回英國より輸入し當館にて一手專賣致候)色白新劑と「サーサパリラ」と内外双方併用せば奏効頗る迅速確實なり

價壹劑貳圓七拾錢參劑七圓五拾錢五劑拾貳圓也

聲惡しき人又は聲の出ぬ方は

●美き聲の出る新藥

▲藥名……ウエーヌス

▲聲美くしくして…淑女は窈窕たり▲聲麗しくして…男子は威嚴あり▲聲は人格を高尚ならしむる要素なり…謠曲家、演説家、音樂家、藝人は聲音即ち其人の生命なり。發聲藥は古來世に甚だ多し然れども其確効あるものは恐らくは疑はし。獨り此「ウエーヌス」の發明者は十有餘年間發聲生理の原理を研究し初めて確實に美聲を發する方法を自得せり。「ウエーヌス」は實に無上の發聲藥として千古未曾有世界唯一の靈劑なり。特別製分を服すれば直に充分なる美聲を發すること確證す。

價送料共壹劑分壹圓拾五錢特別製參圓拾五錢

血塊流下 通經劑

する特効あり本劑參劑分を用ゆれば二三ヶ月間滯りたる月經にても下キレーに流下す又特別製分を用れば半年以上の月經閉止及び血塊にても必ず立處ろに流經す且つ月經不通月經不順より起る子宮病血の道を全治し多年滯りの古血及惡血毒血を一掃することを確證す但し本劑は其奏効極めて確實顯著なるも毫も衛生無害なり婦人諸君安心して試藥あれ價は壹劑分七拾錢貳劑分壹圓廿錢參劑分壹圓七拾錢特別製分貳圓參拾錢(注意)大盛を羨み本劑及び以上各藥の類似僞藥續はる用藥者は深く注意ありて「專賣元日新館藥房」の名義に注目し購求あらんことを乞ふ

本劑は胃腸を強めず子宮を害せず如何程長き月經閉止も必ず忽ち快通流



●奏効確實 美容新劑 ふとる藥

生來やせ過ぎて醜容の人。肺結核質。腺病質、萎黄病、貧血症。生殖器能衰弱症。熱性諸病の衰弱者は本劑を用ゆれば速に肥肉美容強健の身體となり程よくふとる偉大なる特效あることを確證す

壹劑分價送料共參圓廿錢貳劑分六圓廿錢特別製分九圓拾錢着金即刻發藥す

●毛の必ず生る確證藥

本劑は米國醫學博士の發明に依り學理實驗に徵したる世界無比の毛髮速生藥なり、即ち男女共腫物の痕、はつぽうはげの痕、やけどの痕、頭髮及はゑぎわの薄き人、陰部に毛なき人、まゆげ口ひげの薄き人、其他總て毛のあるべき所に毛のなき人等本劑大瓶一個を用ゆれば忽ち毛髮蒼着と發生する特効あること確證す本劑は從來ありふれたる種々雜多の毛はゑ藥とは其効勿論同日に語るべきものにあらず眞に天地月鼈の大差あるに付幸に玉瓦混同視することなかれ

藥價特別製大瓶貳圓卅錢▲中瓶壹圓廿錢

以上六藥 專賣元 東京市神田五軒町十九番地 日新館藥房

女(りの二)

女りの三

レックス



實用浮石鹼

英國 ボヅソン、エンドシンプソン會社 特製品

千九百〇八年八月最新輸入品

會社の自慢本品特點

香氣の高きは
本品特點なり

價格の低きは
本品の特點なり

實用に適するは
本品の特點なり

上流界に好評を博すは
會社の自慢とする所也

論より證據實地御使用を乞ふ

東洋輸入元 東京 ヱスレー

賣捌所は全國到る處の信用アル
舶來小間物店及ビ化粧品店ニ有

謹告

四十年間 墺國宮内省御用

リスリン入 石鹼



此リスリン石鹼は芳香の馥郁たる色を白く皮膚を滑かならしむるの特徴を有する特に墺國醫學博士イー、イーボール氏の證明を得たり

一千九百〇五年

日本一手販賣 墺國タジク會社

東京日本橋區橋町二丁目

舶來化粧品輸出入商 竹間商店

●販賣所市内は信用ある藥店小間物化粧品店に有之候

「タジク」の名なきものは僞物なり御注意を乞ふ

GOTTLIEB TAUSSIG
Soap Maker and Perfumer to the Imp. and Roy. Cot.
VIENNA-AUSTRIA.

〔りの四〕

裁縫のおけいこ



女子共立會和服部

本品は
全國有數の同種類中其の質最も佳良にして又實用に適せるが故に世人の賛辭と需用益々多大なり

本品を以て
赤毛を染むる時は優に半ケ年以上を保つと云ふ奏効證狀日日到着

使用法
手輕にして實用と安全とを兼備す



博文館雜誌廣告料値上げ豫告

廣告料を屢々改正變更致し候は廣告者に不安の念を懷かしめ感情を損じ廣告紙面發展の上に影響する處尠からずとは弊館も豫知する所に御座候へども何分共弊館雜誌發行部數の增進は號を追て甚しく就中三四種の雜誌は現在の料金にては其實費を償ひ難き有樣に御座候へば此値上げ斷行の爲め廣告紙面の縮少候樣の事有之候ても致し方なきものと覺悟仕り斷然從來の廣告料金に改正を加へ値上げを施し明治四十二年一月號分より決行仕るべき筈に御座候其改正定價表は本月中旬迄に各御得意方のお手許迄差送り可申候間來る一月號よりは右改正定價表により塲面等級割引等從來の取次人若くば直接御引合の上倍舊の御愛顧賜はり度希望仕候

東京日本橋區本町三丁目

博文館廣告係

女(ぬの二)

本郷座當月狂言●合本拾四版出來

田口掬汀氏の二大作

口繪 前編……渡部審也氏畫
後編……結城素明氏畫

小說 怪光

大冊總クロース製裝釘堅牢最美本
定價前後各冊金八十五錢送費各八錢

是れ深刻なる社會現象を寫せる大作也新思想に感化せられたる人間の痛切なる絶叫を諸君に傳ふる小說なり。

諸君若し新舊思想の衝突が今後の社會に如何なる變化を來すべきかを知らんと欲せば此作に描かれたる人物の聲に聞かれよ、作中に於ける多數の人物は諸君の疑惑を解くべく暗示する處あらん。

是れ藝術の篩を透したる時代の血と涙なり。

口繪……鏑木清方氏畫

小說 女夫波

紙數四百五十頁總クロース箱入美本
定價一圓廿錢送費拾二錢

東京朝日新聞記者評して曰く

作意極めて清新に文辭最も艶麗、而して讀者に精神上の慰安を與ふるは予の涙を垂れて著者に感謝せんとする處なり、『女夫波』の一篇は實に明治文壇の傑作にして予は此作を讀み少なからぬ感動を得たると共に淫猥の作多き今の小說界に此傑作の出でたるを愉快とするもの也。

發賣 東京神田 上田屋 同區 東京堂 京橋 梁江堂 大阪 杉本 大阪 吉岡

女（その三）


於内外博覧會名誉大賞及金銀牌受領
元和二年創業
ヒゲタ印醬油
HIGETA SHOYU
THE CELEBRATED JAPANESE SAUCE
TRADE MARK
Patronised by the Imperial Household Awarded First Class and Gold Medals and Grand Prize at the various International Exhibitions held at home and abroad
The Oldest Establishment of its kind in Japan. Founded in 1616 by the ancestors of the present proprietor
G. TANAKA
Ohoshi, Chiba-ken, JAPAN
宮内省御用達
銚子
田中玄蕃醸造
千葉縣
ヒゲタ印醬油


東京
横山町
天野勝五郎

女(ねの四)

むつまじきまとゐ



◎毛髪を美くする最新劑◎

如何なるチヾレ毛、白毛、赤毛も必ず一劑で美人となる

如何程お化粧が美く出來ても髪の毛が悪くては遂にお化粧の目的は遂し得られません殊に近頃は髪の毛の黒きを尊ぶ日本人に不向きな香油を毎度見受けますが是れは一面から見ますると國粋破壊と云つてよい位で實に嘆はしき次第です

玆に於て當研究所は先きに其の弊を思ひ多年の實驗と經驗とを重ね調製した物が『高砂白毛染』で……此液は白毛赤毛を染むるは勿論ドンナちゞれ毛も一劑で必ず美しくなります處で發賣日尚ほ淺きにも不拘化粧品界の重要品として頗る高評を博して居ります

該品は在來品の如く御使用後手拭等を冠る不便はなく極めて輕便なる液體で衛生に關しては特に警視廳の無害證明を有します

◎有効禮狀日に増し多大なり

ちゞれ毛直し 白毛赤毛染 高砂

（定價）大壜四十錢　小壜二十錢　郵送料大小共一個ニ付　四錢

本舖　東京市神田區橋本町三丁目四番地
東京化學化粧品研究所
（電話浪花千百五十二番）

女學世界割引券　切取り線

女(ろのこ)

宮内省御藏版

書道の珍書豫約出版

原本　帝室御物

行成卿書　倭漢朗詠集

本書の原本は本朝書道三蹟の一たる藤原行成卿の眞筆に係り古來嘖々として喧稱せらるゝ名帖にして帝室の御物中にても頗る貴重なるもの也、行成卿の書道に於けるや實に始めて和樣を大成せし一人にして、その水莖の跡の優にやさしく氣品高雅なる趣は古今多く其比を見ざる所にして、誠に日本書の妙詣極致なり、されば畏くも帝室にてはこたび之を内親王殿下がたの習字の御手本に用ゐさせたまはむが爲めに若干部を印刷に附せらるゝこととなり弊院特に之を謹進するの光榮を荷へり、仍りて別に數百部を增刷して世間の學者、歌人、乃至好古書家及び書道研究家に頒ち又殊に習字に志す者の爲めに無二の手本たらしめむが爲め特に御許可を得て茲に本書の豫約出版を爲さんとす、大方の淑女令孃がた、その色紙短册乃至消息の書風に一層の美を添へられんが爲めに必ず本書の一部を机上に備へらるべし

●**書册の大さ**＝縱凡一尺、橫凡六寸◎**紙數**＝二百二十四頁◎**製本種類**＝上製、並製の二種とし、**上製**は最上和紙に印刷し純子の表紙を附して大和綴とせるもの全一册、**並製**は西洋紙上質に印刷し假綴とせるもの十册に分て發行す

●**定價**＝上製全一册＝金拾五圓◎並製全拾册＝金拾貳圓五拾錢、但し各册分賣なれば一册金壹圓參拾五錢宛

●**特別減價**＝本月中に御申込の分は左の特別減價を爲す◎上製＝申込と同時に前金御拂込は金拾貳圓五拾錢、各册引換拂は金拾參圓五拾錢（外に東京市外は荷造遞送料金四拾五錢）◎**並製**＝御申込と同時に全部前金拂込は金拾圓、各册引換拂なるときは壹册金壹圓貳拾錢宛（外に荷造遞送料各册金貳拾錢宛）

●**發行期**＝本年十一月二十日發行し御申込順により發送す◎**申込期限**十月三十日迄

發行所　東京市京橋區新肴町十三番地　**審美書院**（電話長新橋三〇五五番）

◎本誌購讀諸君に限り特に十一月十五日迄前記の特別減價にて貴需に應ず

女學部新設

實用女學講義錄發行

▲本會は中學講義錄の發行に從ふこと既に五年通信敎授に於ける甚深の經驗を基礎となし今回更に女學部を新設して『實用女學講義錄』を發行せり。

▲講習期一ヶ年半、此間に於いて高等女學校程度の學課は勿論、本邦家庭の事情に照らし女子必須の諸家目を講說し圓滿なる主婦を作る事を目的とす

▲講義錄は每月二回發行とし講師は敎育に經驗深き斯道專門の名家のみ也講述極めて平易、總ふり假名の談話體なれば何人も解し難き憂なかる可し

▲每月女學雜誌『姬百合』を發行して會員に限り每號無料進呈す『姬百合』は現代知名の女子敎育家及び專門大家の訓話學說創作及び會員の投稿を掲ぐ

▲會長尾崎行雄親しく本部を監せらる。組織整頓し取扱最も懇切也。且つ會費極めて低廉、都會一ヶ月の遊學費を以て優に全學科を修了する事を得べし

◉**新學期開始**＝至急入會者に限り入會金全免すべし◉

見本つき規則 無料進呈

大日本國民中學會女學部

東京駿河臺　電話本局三千〇四番　振替口座四千二百番

女(ろの四)

十一月（霜月）

行事――三日天長節、觀兵式執行。四日駿河淺間神社大祭。六日靖國神社大祭。十五日七五三の祝。三歳の男兒、五歳の男兒、七歳の女兒の祝として、各々新衣を調へ、産土神に詣で、親戚の家々を廻り、其夜知友を招きて饗宴を張る。二十三日新嘗祭。

季節――「立冬」、「小雪」、朔風漸く來り寒氣頓に加りて冬景色を呈し、晴夜結霜を見る。

家事――此月大概冬着に移り替る。煙草盆など廢して火鉢を出す。小春日和の好天氣を卜して秋季の大掃除をなすべし。日の中に洗濯物、夜なべに布團の綿入などをなし、襯衣、ズボン、足袋等の繕ろひに油斷あるべからず。

食品――當月の眞味は魚類にては、比目魚、沙魚、はも、むつ、伊勢ゑび、章魚。野菜類にては、芋、ほうれん艸、八ツがしら。果物にては、樽柿、蜜柑、林檎等なり。

遊樂――紅葉と菊は此月に入りて益々其美を加ふ。紅葉は王子瀧の川、品川海晏寺、京都嵐山。菊は團子坂、其他各園にあり。又此月酉の日には淺草鷲神社に市立あり。

日曜――一日、八日、十五日、二十二日、二十九日、天長節(三日)、新嘗祭(二十三日)。





榮耀に浮かされたる婦人の實例

梅香女塾主　木村貞子

聖上の御軫念

つひ此頃伺つた話ですが、先頃のこと、聖上が高崎正風さんを召して、いろ／＼御下問遊ばす內、近來の女子敎育の風に及び、女學生の傾向を聽召して、平生から御心を痛めて被居せられた事とお思ひ合はせ遊ばされたと見えまして、どうも其の樣な風になつて來てはとハラ／＼と御落涙遊ばされたさうで御座います。高崎さんも坐ろに御感動申し上げて、何とも申し上げやうを知らなかつたといふ事です。

何うも近來若い婦人の調子が一般に上ずつてゐるやうに思はれます。ふわ／＼と餘り世間の風潮に浮かされてばかり居つて、自分の腹の底に一つ確乎とした見識を持つて居る婦人が少ないやうです。例へば電車で乘合になつても、或は路で摺れ違つて見ても、一見して顏に何處か恁う締つた處があつて、これは確乎した娘さんであらうと思はれるのがありますし、又いかにも白粉は綺麗について、服裝は美くしく出來て居つても、さて何うも沈着の足りない、ふわ／＼と上ずつた調子の婦人があります。つまりは心に確乎した一物があると無いとで、それが恐ろしい程顯然と外に現はれて來るのです。何うしても外部の體裁や物質的の榮耀にばかり心が浮かれて、眞正に婦德を養はうといふ婦人は砂の中の金剛石よりも少なう御座います。然も其の勢が滔々として日に月に進んでゐるのでは無いでせうか。聖上の御心勞遊ばされたのも或は其處では御座いますまいか。

忘れ物を山に積む氣風

私の以前華族女學校に居ました頃の事でございますが、學校からは始終服裝を質素に〳〵と申し付け、又生徒の家庭でも注意はするのでございますが、それでも身分が身分ですから、不覺他から見ては隨分華美な榮耀な服裝と思はれるやうになるのでございました。そして何うも依賴心が多くて、自分の事を自分で始末しない癖が付いてゐて仕方がございません。殊に小學部の方の生徒などは忘れ物をすること夥しいものでございました。

　それも鉛筆やナイフ位のやさしい物ばかりでありません。立派な羽織や被布などをずん〳〵置いて行つて了ひます。名前でも書いてあるのは直ぐ返してやれますが、その他は始末しておいて申し出るのを待つて居ります。處が決して申し出でません。貴女のではありませんかと訊きましても、『否』と言つてゐて決して取りません。とう〳〵其れなりになつて了ふので、總ひには綺麗な羽織や被布を堆山のやうに積んでおく事になります。忘れたとか、自分のだとかいふ事の分るのが厭さに、決して自分のだと言はないのです。

これ一つでもお姫様氣質の一般が分るでは御座いませんか。

斯ういふ風で愈々上ずつた調子になつて來ては、幾千華族方にしても隨分困つたもの。まして華族方でもなくて、かういふ虛榮心だけは負けずに持つてゐるとなつては何うで御座いませう。いろ〳〵な過失は皆恁ういふ心根から起つて來るのです。

　私が諸家のお姫様をお預り申して、そして平民生活をなさせ申して居りますのも、全く恁ういふ風潮の現今には、恁ういふ塾も一つ位極めて必要と信ずるからで御座います。

若い時に恁ういふ生活をして華美やかな事を避けて置きますと、それが後の運を蓄はへる所以でございませう。

今の内から運を使ひ損らして了はずに、運を貯めてお

置きなさい〳〵と始終申してをるのでございます。

赤裸になつたらば

ひとり華族方には限りません。困らない樣な家庭のお孃さん方となると皆同じことで御座います。これも學校でのお話ですが、私が嘗て『貴女方はいゝ氣になつて被居しやいますが、其麼立派なお召を召して、何でも華美やかにして被居しやれるのは、悉皆御兩親や代々のお蔭で御座います。一つも貴女方のお力ではありますまい。もし縱てを取り去つて貴女方を赤裸に致して、日本橋の眞中邊りへ投り出されたら何うなさいます。一朝大地震でもあつて親兄等にも離れてお了ひになつたらば、何うしてまあ生きて行かうと思召すか、試しに言つて御覽なさい』と申しました。答はいろ〳〵でしたがまあ『親戚の處へ行きます』位が大多數です。赤裸になつたら親戚の處へ行くでは頼もしくない譯ぢやありませんか。

けれど中には『私は然うなつたら方々の慈善家に廻つて子守に置いて戴きます』などゝいふのがありました。これ等は平生から私の申す「歸つてゐる」方のお孃さんでした。あまりペラ〳〵と喋舌もせず、愼みがあつて端然としてゐる方でした。

先日も以前の教へ子で、今は嫁いで被居しやる婦人が見えまして、

『私は學校にゐた頃の、先生から毎日きのふは家で何を爲さいました？何を爲さいました？と始終仰在つて戴いたのを、あれだけは眞正に有難かつた

と泌々喜んでをるので御座います。あのお蔭で、家で毎日何かしら仕事を爲付けて居りましたから、嫁してからも苦しい思ひがなく、實に樂しく暮して居ります。久しく御無沙汰致しましたが、けふは御近所まで參りましたから、大急ぎながら其のお禮を申し上げたいばかりに伺ひました』と申すのです。尤も此の方のは家庭からして歸つた良い家庭で御座いましたが、私も思

はず嬉しくて泣きました。

驚き入つたる養女

これは私の知己の家に起つた事ですが、まあ是等こそ現代の病弊の代表でも御座いませう。

その家で或看護婦を養女に致したのです。老人夫婦の病氣の時大層よく看護してくれたといふので、遂に然ういふ事になりました。處が老夫人が歿し、それから若夫婦が半年ばかりの間に續いて亡くなりまして、後は御老人とその養女ばかりになつたのです。

さあ然うなると養女が家事一切を致す事になりました處が、それは滅茶々々とも何とも申し樣がありません。全然「家」といふ考はなくて、たゞ華美贅澤の仕放題。日々のお肴にしましても、氣に入つたものは價格も知らずに澤山買入れて、そして餘れば皆どん／＼惜氣もなく棄てゝ了ひます。不經濟にも何にも、すべて此の筆法です。

そして御老人を全然抛げ遣りにして、殆ど關ひ付けません。その癖當人は日風呂日化粧、何時でも綺麗におしまひが出來て、そして物言ひや應對振にかけては、それは美事なもので、寸分のぬかりもなく、實に手際なものと感心する程です。それでゐて御老人には關ひません。ちと如何なお話ですが、御老人の湯卷を三月もその儘に放つておいて代へて上げないのです。これ一つで最う一切お分りになりませう。つまり御老人の世話をする人は無いのです。

その内にこの婦人が少し病みまして、轉地などして居りましたが、やがて郷里へ歸ると云つて、それでもお友達の看護婦を一人後へ頼んでおいて、その儘國へ歸つて了ひました。

どれも／＼極端揃ひ

さて後へ頼まれた看護婦が又女中と一緒に宛然飯事をして居ります。お化粧は綺麗にして、そして一日ぶらぶらして、詰らない事をキヤッ／＼と笑つて喋舌つて居るばかりで、家の事は抛げ遣り次第……

御老人が私の處へ來て毎時こぼして被居しやいます。お氣の毒で堪りませんから、稀には出て參つて世話を燒いてやります。此の夏中のことで、大變暑い日でしたが夕景に伺つて見ました。最う大抵なお宅では行水でもお使ひになつて、清爽して被居しやる時刻ですのに、其麼風も見えませんから『行水はお使ひなさいましたか』とお尋ね申すと御老人が『イ、エ、寐がけに水でゞも拭きませう』と仰在るのです。この暑さで全然汗になつて被居しやいませうに、それをお流しにならないで何麼にお心持が惡いで御座いませう。見ると看護婦や女中は最うお湯に行つて來て、綺麗にして居るので御座います。幾干他人だと申しても、御老人に行水の湯一つ沸かして上げないで、それで氣が濟んでゐるとはまあ何うい ふ心持で御座いませう。

折によつては參つた序に、お座敷の一つも掃いて上げようとして、敷いてある薄縁を一寸剝ぐつて見ると堪りません。幾月以來の埃が眞黒になつて居るのです。戸棚を一寸明けると臭くて胸が惡くなりさう。臺所には殘飯を瓶へ打開けたまゝで堆くなつて居ります。何のお座敷へ行つても隅に埃の積つてゐない處はありません。庭は草茫々として生え次第にしてあります。つくづく御老人がお氣の毒で涙が溢れました。

けれど例の御婦人たちは一向平氣と見えまして、相變らず自分ばかり綺麗にして氣儘な事をして居ります。個人主義にも此處まで思ひ切つて成れるものかと、私は呆れて居るので御座います。けれども此の樣な人の行末が果して何麼者で御座いませうか。運命の神の處置振りを見てゐたいやうな心地がします。





學問の役に立たぬ理由

理學博士　長井長義

女子敎育といふことも、大分盛んになつて來ましたが、それにしても其の敎育を實際に役に立てる方法をとらないのは、實に遺憾に堪えぬことであります。一體學校で學んだ學問知識といふものは、實際の生活にあらはれて初めて其の効を奏する譯でありますから、學問をした人の生活は、その學識同樣に變つて來なければならない筈であります。然るに現今高等敎育を受けた女子を見るに、何うも學識の割合に以前と變る所がないやうです。否却つて敎育を受けない人よりも劣るといふやうな場合があります。これは何ういふ譯でありませうか。それは學校で敎へる知識が實際生活に關聯を缺いて居る點にもよるのでありませうが、一つには學んだ處を思ふまゝ實際に行ひ得るといふ自由が與へられて居ない事も確に大なる原因であらうと思ふのであります。

敎育を受けた女子の不幸

何うも若い婦人に對する束縛や干渉が甚しくて、一切自由の行動を許されないといふ有樣でありますから、折角學校で數年の間螢雪の功を積んで修め得た知識も、卒業の曉それを十分使用して、自由に實現するといふことが出來ないのであります。この事は確に敎育の主意と矛盾して居るばかりではなく、敎育を受けた女子の爲めにも却つて不幸を招く原因となるのであります。寧ろ敎育を受けない前ならば、從來の慣習上婦人の境遇はかく／＼のものと思ふて、束縛にも干渉にもさまで苦痛を感せずに服從して往かれるのでせ

うが、文明の教育を受けて自分といふものを自覺し、並びに彼の歐米婦人が東洋の婦人とは全く違つた地位を社會に占めて居つて、家庭のためには勿論、社會のためにも自由に貢獻して居ることなどを知つた今日の婦人にとつては、非常に苦痛を感ずることゝなるのです。其の結果として、女子の教育が却つて家庭や社會に害を及ぼしたといふ例は、實際少くない事であります。そのやうな場合に、人は常に罪を教育に歸して、果ては女子教育の不必要をも稱ふるに至るのですが、それは甚だ考の足りない御話といはねばなりませぬ。
私の考では、もつと婦人に自由を與へたならば、教育の効果を充分に收むる事が出來るだらうと思ふのであります。

干渉が過ぎる

若い婦人にあまり自由を與へれば、道を誤る恐れがあるから、縱令十分の教育を與へた後と雖、なほ父兄の意志を履行せしめるのが安全だといふ考は、一應尤もな事でありませうが、それは餘りに杞憂に過ぎた仕方であらうと思ひます。既に高等女學校並びにそれ以上の教育を修め得たものに於ては、自ら事を判斷して自分をまもるといふ考が十分あるべき筈であります。それが立派に學校教育を終へた後、その平生の所作までも父兄の注意を要するといふやうでは、第一學校教育の價値といふものがなくなる譯ではありませんか、勿論學校で學んだ知識を實際に行つて見るに當つては初めは失敗も過失もあるでありませう。然し其の過失失敗を再びしないやうに改め直して行く位の智能は、學校で充分修得して居る筈であり、また德性を鍛錬して益々强固にする位の學力も出來て居る筈であります。高等の教育を受け、齡も已に丁年に達して居るものに對し、尚過失のあらんことを恐れて手をとり導いてやるやうでは、もし不幸にして其の手を失つた曉には、それこそ忽ち墮落をするといふことになるでありませう。
父兄には何處までも子女を監督注意する責任あり、

又一方には其の顧問ともなつて立たなければならぬことは、勿論必要でありますけれど、何もかも傍から干渉して其の行を强ひるとか、束縛するといふことは誠に以てよくないことであります。それ故私は教育者や父兄に向つて常に申すのであります。我々が彼れ此れ若い者に干渉するのはよくありません。さう何處までも心配したとて、我々は當然若い者よりも先きに死ぬのでありますから、所詮は仕方がないではありませんか、それよりも寧ろ我々の存命中に若い者に自由の行動を試みさせて、之れを注意觀察し、もし必要の塲合があつたら顧問ともなり忠告をもして、其の効果を見、安堵して永眠する方がよいではありませんかと。

父母自ら模範となれ

近頃女學生の墮落などいふ事も、やかましく申す樣でありますけれど、其の墮落は何も女ばかりに限つた罪ではありますまい。女が一人で墮落することの出來ないのは、申す迄もなき事であります。それにもともと墮落をするやうな人は、男女に拘はらず、いかに高尙な學問をしても、如何に嚴重な取り締りをせられても到底駄目であることは、誠に遺憾千萬ながら事實であります。この不幸を救治することは即ち父兄並びに教育者の努めなければならぬ處でありますが、要するに品行の事は家庭の責任で、幼少からの躾といふ事が最も關係するのであります。家庭に於て父兄が自ら進んで良風を示し、以て强固なる精神を涵養してありさへすれば、何の心配もないのであります。

然るに青年男女の墮落をやかましくいつて居る世の父兄は何うでありませうか。隨分如何はしい事を其の子女の前で憚りなく話したり、又は宴會の席に下賤の婦女を呼んで戯れたりして恥ぢざる人が多いやうであります。子女が父兄の風を見習ふのは天性でありますのに、それを父兄自らは如何はしい行をして居つて、子女にのみやかましく申しましても、之れを聽くものの少いのは當然だらうと思はれます。それで私は世の父兄に向つて、青年男女の取り締りを云々すると同時

に、自ら省みて模範を示すやうにつとめむことを希ふものであります。

子供をあてにするな

一體日本の親は餘りに我儘であります。其の子女に教育を與ふるに就いても、根本から間違つた考をもつて居りはしますまいか、何うも子供に教育を施すのは、後日自分がその世話を受けるためであるといふ考をして居る人が多いやうでありますが、現今高等の教育を受けたものが、社會に出て充分活きを示すことの出來ないのは一つはこの系累に煩はさるゝといふことが大なる原因をなして居るのであります。「御子息はもう立派に學校を御卒業なされたから、貴方は遊んで居られて結構だ」とか、「私には係る子供がなくて困る」とかいふ事は、普通の挨拶になりて居るのでありますが、これは甚だ間違つた考ではありますまいか。親が子供に教育を與へるのは、もとより當然の義務ではありませんか、決して夫れに依つて自分の安樂を得んためではありません。有爲有力なる人物をつくつて、國家社會の利福を増進するためといふ事にあるのです。然らば旣に相當の教育を終り、丁年以上に達したものに對しては、最早かれこれと干渉などをすべきでないことは勿論、其の厄介にならぬやう、其獨立自營の妨げとならぬやうにつとめて、其の全力を社會國家に盡さしむるやうにするのが親のつとめでありませう。

要するに私の希望する處は、父兄が其の子女に學校教育を施すならば、卒業後はもう夫れに干渉をしたり、厄介をかけたりしないで、成るべく自由を與へ、其の修め得た學識技能を十分實際生活に應用し、以て社會の一員として立派な貢獻をなさしむるといふやうにしてほしいのであります。併しこれと同時に婦人自らも奮起せられんことを望まざるを得ません。從來の他人の指導にのみ依るといふ卑屈な習慣を去つて、自ら責任を負ふて事に當るといふ勇氣を出し、立派に獨立自營の道を講せられむことを切望する次第であります。



高尚なる家庭を作る方法

鳩山春子

△花嫁に同情すべき點

家庭の空氣は是非とも淸らかで無ければなりませんが、世間を見まするとなか〳〵其樣は參りませんで一家の主婦が、一家の平和、幸福を圖りましても、姑に檢束を受けるとか、或は主人の方で内を外なる振舞を致すとかして、自ら圓滿を缺いて居る人が隨分少なくありません。之れは何うしても一家族の者が、即ち主人も主婦も一致協力して之を直す事に意を注がねばなりません。先づ家庭の平和は何から破れるかと申しますと、多くは姑嫁の同居に原因して居ます。それと云ふのは今日女學校出の人は、數年寄宿舍生活の狹き一室内丈けの事を處理するに慣れて居たものが、遽に大きな家に嫁して姑の指圖を受けて萬事を取り捌く事になるのですから、何うしても衝突は免れません。それ故私は、姑と嫁の別居を取るのであります。斯う申すと、或は生意氣だとか、又は日本の家といふ觀念と違ふからいかぬとかいふ人もありませう。然しながら個人の特性を發達進歩せしむるには、何うしても別居でなければなりませぬ。例令永久の別居でなくとも、或一定の時期の一時の別居が必要でありませう。いろ〳〵の事情の下に別居が出來なかつたならば、一家の構の中でも別れて居るのがよいと思ひます。

△嫁も姑も働く主義

或は別居は至極宜いとしたところで、貧乏な者は困るぢやないかと言はれるでありませう。成程これは面倒かも知れません。然し親は親、子は子と各〻別々に働いて暮すと云ふ事は何うしても必要かと思ひます。

互に忙はしければ他方の缺點を見るの隙もありませんから家庭はいかにも平和で行きます。之に反して姑嫁同居して一方が隱居して無爲に安樂に暮して居れば、所謂閑居は不善を爲すと言ふ程でなくとも、他方の爲す事する事が兎角氣になるもので、決して好き結果は得られません。遂には嫁も卑屈けてヒステリーの樣になつて了まひます。

△別居の實行と準備

然し別居するには準備が要ります。學校を出て直ぐに嫁を娶ることは出來ません。と云つてあまり晩婚もいけますまい。幾分か社會の事も解り、獨立して生活が出來る丈けの準備が出來てからが宜しう御座いますかくて新家庭を作つた若夫婦本位の小なる單純なる家庭は、姑に睨められる心配もなく、思ふがまゝに切り盛りが出來ます。私共も經驗があります。斯ういふ時分には主婦たる人は、家の中の事が萬事萬端自由に出來て思ふがまゝに改良も出來、誠に幸福であります。

それから漸々夫の地位も上り、交際も廣くなり、多數の人を使ふやうにもなると、なか／＼處理が困難になります。多數の女中を公平に、有益に指圖をするのでも一通りの苦勞でありません。自分には手は下さずとも、衣服食物住居の事から家庭の事を萬事適宜に指圖をなし、又諸方の義理やら、來客の面接、手紙の往復日々の會計等種々樣々な事があつて、家庭が大きければ大きい程心配が餘計になります。斯ういふ事でも家庭の小さい時から實行して來れば、大きい家庭になつても、漸々慣れて參りますから、ずん／＼處理されるものですが、無經驗の女學生より一躍して、之を遺憾なく遂行せしめようとするのは無理な注文と存じます

△一家に二人の主婦は禁物

その別居に就いても餘裕ある親は勿論助力をするが宜しう御座います。家宅も作つて與つてもよい。前途の相談もしてやる。親は子に對して世界唯一の親友でなければなりません。然しそれから後の日々の暮しは

子自身に爲させねばならぬと存じます。それから姑と嫁も無爲に暮さずして、何か相應の仕事に心を配ることが宜しからうと思ひます。姑にして寡婦の方などは、教員などを爲されても樂しからうと思ひます。其外其人其人の技能に依つて働かねばなりません。樂隱居は宜しくないでせう。姑も忙しく、嫁も忙しければ衝突する隙がありません。斯く別々に働くのは自己の爲め世の爲めであります。別居せずに居て、一家の主婦が、家庭の改良を理想として居ても、姑さんが賛成されぬため、其理想を實行する事が出來ない人は隨分あるやうです。それが五年や十年ならば宜いでせうが、姑の方が嫁よりも生き延びることもありますから、斯ういふ場合には、嫁たる人の理想は遂に空想になつて了ひます。一家に二人の主婦のあることは甚だ厭ふべきことで、姑と嫁との關係は到底教員と生徒との關係の樣には行くものではありません。

△學問よりも徳操が大切

子供は義務を忘れぬ、品行を愼む、人に同情を寄せるといふことを心掛ける樣にせねばなりません。今迄男は學問のみを主眼と致し、徳操といふことを餘り顧みないでも、兩親は心配しないやうでありましたが、是れは大なる誤りであります。また大なる事をするには小なる事を顧みずと申す人がありますが、然し何れが小やら大やら知れぬではありませんか、例へば未成年者が、酒、煙草を用ふる樣な事は、單に嗜好を充すまでの事で、何でもない至つて些細な事の樣に考ふる人もありますが、それがために頭腦を鈍くします。甚だしくなると不具の人となります。是れは決して小なることではありますまい。

△子は母の教育如何に依る

人は少さい時から母親が注意して教育すれば、其母の理想通りに行くもので、また母の嗜好は矢ッ張り子が引き繼ぐ樣になります。私は子供に英雄豪傑になれとは望みません。第一に有用の人物となり、獨立して

聊かたりとも人を害せず、出來得る限り人を益し、人を救ふと云ふ事は最も大切であるといふ觀念を懷く樣に勉めました。又幼少の時より辯護士といふ職は大變に好い職業である。伸ぶべくして伸ぶる事の出來ない權利を伸してやり、又は寃枉に泣く者を救ふてやるものである。米國などの大政治家には辯護士が多い、而して今日大統領を止めて明日より辯護士を始める人など往々あると云ふ樣な事を常々話して聞せました。日本では辯護士と申せば、何か卑しいもの丶樣に思つてゐる人もありますが、是れは間違です。尤も中には不公平な取扱をしたり、人に頼んでも宜い訴訟をさせたり、餘計の金を貪つたり、不德な事をする人もありますが、然し是れは辯護の職其のものが善く無いのではなくて、其職業を惡用するのです。醫師でも同じ事で、醫師は病氣を治療する職掌ですけれども、患者に毒を與へる樣な事をしましたならば何うで御座いませうか……。

物事は何でも善用せねばいけません。敎員の如きも高尚なる性格の人が、能く敎ゆると生徒の人格が高くなり、人を救ひ、世を益する事になります。金錢も之を善用すれば多大の効果を奏するも、惡用すれば人を禽獸に等しからしめます。世には能くも惡しくも餘り變化しない事物も、職業もありますが、時、金、法律敎育といふ如き勢力偉大なるものは、之を善用すると、惡用するとに依つて、大なる變化を見ます、隨て又其れ丈け大切なものと存じます。斯る考を私が常々持つて居りました所が、自然に子供の腦に浸み込みましたものか、私の子供は二人ありまして共に法律を勉强致して居りますが、長男は昨年法科大學を卒業いたしました時、諸方から聘せられたにもかゝはらず、自ら進んで辯護士になりました。之れは私が日本に眞に親切に義俠心ある辯護士の必要を豫々說きました爲めかと存じます。子供等も將來位記、勳等、爵位等に望みを屬せず、忠實に其職に從事して、人間の義務を遂行する考のやうに推せられます。

△理想は子に讓る

淸き家庭、平和なる家庭、是れは吾れも人も望む所であります が、一朝一夕には理想通りには參りません。故に今の婦人方は只今の境遇が好く無くとも、悲觀する、離緣すると云ふ樣な短氣を出さずに忍耐して、自分の時代には實行が出來ずとも、子供の時代を待つの覺悟があつて欲しいのであります。之れは獨り子の爲めのみならず、實に國家の爲で御座います。五十年の月日は長い樣でも、若し國家の目から見るならばほんの一寸の間に過ぎませぬ。

△高尙の趣味を注入する事

而して前に述べました「淸き家庭」と云ふ中には働くといふ分子を含んでゐると思ひます。銘々働いて居れば紛擾を惹き起すの隙もないのですから、家庭の空氣は自然淸くなる譯であります。

それから讀書、音樂、美術、詩歌等に就いての高尙な趣味を家庭に入れるのが必要であります。或人は讀書其他の修養も直に實行が出來なければつまらぬといふ方がありますが、私は決してさう云ふものではないと思ひます。社會は個人の集合せしもの、一人でも趣味が高尙になれば、社會は其れ丈け高尙になる譯であります。從つて文藝も卑猥を避けて高尙になる、高尙なものが多くなれば、賤しいものは頽れます。書物でも下劣なものは賣れぬ事になります。働くと云ふ事の中には此の暇を善用して、趣味を高尙にすると云ふ事をも含むものと思ふて頂きたいものです。斯くして參つたならば、子の時代には遺憾なき圓滿なる家庭、淸らかなる家庭、品位ある家庭を實現する事が出來、社會も自然改良される譯でありませう。（梨花生記）



貴夫人の見たる

貴婦人の面影

毛利公母堂と鍋島侯夫人

某貴夫人談

圓滿な社交家

公爵母堂は元豐浦藩主（長州の支藩）の御孃で、幼少の折毛利敬親公の養女となり、やがて元德公を迎へられたのです。丁度其頃は維新前後の騷ぎですから、夜も沈靜休まれず、床へ就くにも却つて衣服をキリッとして、帶をも締め直してお休みになるといふ樣なわけ、或時は一晩柱に摑まつて明されたこともあり、或時は七夜も眠らないやうな事もあつたさうです。で、其等の經驗は母堂の性格の上に、何等かの印象を留めてゐるだらうとは、誰れしも思ふ所ですが、事實は豫想と反するもので。少しも其麽面影を認めません。『毛利さんに其麽御經歷が……まあ眞實の事でせうか』と諸婦人がお疑ひになる位です。それは最う全く別人の事のやうに思はれます。

何しろ、あの樣なポーッとした方ですもの何うして苦勞などは毛程でも爲さつた方とは思はれません。唯唯圓滿な、溫和で淑しい、い丶方と申すより外はございません。

そのポーッとした、子供のやうな母堂が、交際界にあれだけの衆望を擔つて居られるのが面白いぢやありませんか。いくら地位があつたとて如彼行くものではありません。

衆望の源

鷹揚で、そして親切で思ひやりのあるのが、あの御方の美德で御座いませう。『毛利さん彼方へと言へば彼

方へ、此方へと申せば此方へだ」と、口善惡ない貴婦人達は申されますが、私はそれが彼の方の美しい所だと思ひます。それでゐて内に一ツ堅い決心がおありなさるので、それであの母堂にはすべての御婦人が服して被居しやるのでございます。

そして又實際よく人の言ふ事をお容れになります。他の交際界の自尊的婦人方になると、自分の言條を飽くまでも通さうとし、それが通らなければ最う勃然として了つて、それに就いては最う何にも關係しないなどいふ所謂婦人の狹量とでもいふべき冷淡な擧動があるものですが母堂にはこれが少しもありません。つまり我といふことが更になく、自分の言ふた事が通つても通らなくても、同じやうによく社會の事に御盡力なさいます。



そして餘まり物事に拘はられないとでも申しませうか。一旦約束した以上は何うでも斯うでも遂げねばならぬなどと、其麼無理な事はなさいません。自分の力の及ぶだ

け盡して、それで出來なければ出來ないで仕方がない其の時はそれなりにして行かうと思つて被在しやる樣で、その邊はむしろ淡泊なものです。

ですから何か承諾した事が手違ひになつて、果せなくても、他の御婦人のやうに「約束に背いて面目ない、具合が惡い、まづ少時あの人には逢はない」などといふ狹量なところはありません。平氣でずん／＼お逢ひになつて「貴女には申譯がないが、恁ういふ譯で不可くなつたから、どうぞ惡しからず」とお詫びをなさいます。そして相變らず親切に世話して被在しやいます。ですから誰も不平に思ふ者はありません。あの方に願つてそれが不結果に終つたならば、不結果でも皆その御盡力を喜んで居るのです。

母堂の盡力して被在しやる或會で、常集會などに毎時會塲に不便が多く――と申すはあまり下品な塲所はいけず、相當の塲所は差合が多く、そして土曜日曜の外は使へぬといふ樣な塲處が多くて困る上に、時折來遊する西洋人から、一度日本料理で食事をして見たいからなど〻依賴されても、貴婦人が直ぐに料理屋へ案内する譯にもならず、と言つて一々自宅へ招いて御馳走するのも不便だから、然ういふ塲合の爲にもその會塲を半ば倶樂部組織にしておいて使ふと便利だからといふので、愈〻會館新築といふ計畫になつたのです。その時山脇房子さんや何かゞ先づ母堂に相談なさつた處が、無論御賛成で「私が建築費の半分位――二萬圓だけは出しませう。後の半分を宜しく盡力して」といふ仰せでした。それではと言ふので取懸つて、大體後の半分も出來たので、さあ愈〻となつた時に毛利さんの方が不可といふのです。それは同家の相談役井上侯だの杉子爵（孫七郎）さんだのの方で「どうも困る」といふ上に、毛利五郎さんが何うしても承知しません。母堂が御承諾の事を持出しても、それは隱居の身の上だから、然う言うたにしても困るといふので、それならば仕方がないと、又他から集める事にしましたが、それでも遂々纏まつて今建築中で御座います。

その時なども關係者に向つて、母堂が例のやうに御

挨拶なさつて、何のこだはりも無く相變らず親切になさつて御在しやるものですから、その御樣子を見れば誰も厭な顔をしては居られません。此方も相變らず懐くやうになります。

眞率なる應接振

應接振が又例のボーッとした、子供らしいのであります。西洋婦人の出る會合の席などでは、傍で見てゐて、最う少し氣を利かせて下されぱと思ふ事がありますが。傍から一寸注意されて、初めて挨拶なさるやうな事も無いではありません。けれど其の圓滿な、莞々したお顔付で、飾りのない應對振をなさる處が、却つて良いので御座いませう。目下の婦人や他の會員などに向つても、少しも威張るやうな風はなく、見識ぶらずにお話しなさいます。

何か會の切符を引受けて賣るといふやうな場合にも、熱心に盡力なさいまして、『私が幾枚引受けませう』といふやうな譯。或は幹事の處へ自身で電話口へ出て、『何麼樣子ですか、困るやうなら私がやりませう』といふ樣なわけで然ういふ處は實に感心で、他の貴婦人の御連中が、容易に眞似の出來ない所です。

舊趣味の家庭生活

家庭の生活は最うずつと昔ながらのお大名の奥を見るやうです。厚さ五寸もあらうといふお褥を床の間の前にお敷きになつて、曲祿をお控へになり、お茶の通ひに出る侍女も文金の高島田に、紫矢絣のお召でも着てゐようと言ふのです。そして鳴物や踊がお好きで——これは御家風で、毛利さんの音曲舞踊と言ふは知れ渡つて居るのです——時々夜分などにお催しになつて、大層お樂しみになるさうです。會の慰勞會をお邸で爲さる折などに、それが餘興に出るのです。例の綺麗にした侍女達が、三人は合奏して二人は踊るといふやうな譯で、それは〱美くしくて結構です。

嘗て鎌倉へ御在した時なども、散歩なさると言へば、侍女が付き、お伴が付き、そして日が射すといふので、

後から傘を翳し懸けてお從き申すといふ樣な譯です。まことに奧床しい方の、舊趣味の生活です。

ですから家庭では全く舊生活をして被居しやいますが、それで一方には交際界へ始終出て、社會事業にもよく忠實に御盡力なさいます。言はゞ新舊半々の御婦人です。けれども其の新といふのがやつぱり母堂風の新で、當世ハイカラ風のでない所が特色です。

水際立つた應對

さて鍋島侯爵夫人になりますと、一口に申せば毛利母堂と反對な性格。母堂が圓いお方ならば夫人は鋭いお方です。母堂はボーッとして被居しやるのに夫人は氣の付き過ぎるくらゐ。一方が德の人ならば一方は智の人意志の人、一方が渾然たる名玉ならば、一方は犀利なる正宗の名刀でせう。

應對振なども毛利母堂とは全然趣が違つて、それは水際立つたもので御座います。寸分の隙もないとは彼のこと。目端が利いて機轉が利いて、辯舌、態度爽やかに、いかにも社交界の本場を踏んで來た貴婦人と見受けられます。

たとへば宮中へ上る時の服裝は何う進退は何う。上流貴婦人の間では何う、中流下流では何うと、それは最う明斷を極めたもので、その點に於てだけでも交際界の女王たる資格が十二分にあります。同じ園遊會でも個人の催しと會の催しとでは服裝から違ふので、即ち會の催しならば、それは一會員として或は會長として出席するのですから、質素にして被行しやるのですが、それが個人としての園遊會ですと、此方も個人として招かれてゆくので、格式相當、時の習慣相當――例へば文明と共に生活の程度が進んで、縞の所は小紋に、小紋は紋羽二重にといふ樣になつてゆくので――その一般の程合相應に、そして御家格相應に華麗にして被行しやるのです。又會の時は人力車で被行しやることもありますが、個人としての時は必ずお馬車といふ樣に、また應對振挨拶振なども時に應じてそれぞれにお違へなさるのです。招かれてゆく時お招きに

なる時、亦それ〴〵に千變萬化、それは最う自由自在なものです。

ですから毛利母堂のやうに、上中下誰れに對してゞも一様にといふ大まか主義でなくて、先の身分次第で上中下使ひ分けといふ差別主義を明瞭とおやりなさいます。ですから實に鮮かなものですが、あまり明瞭すぎてそこが又、或る御婦人方には內心喜ばれぬ所となるのです。

凄い程の眼力

けれども右に申すやうな譯で、まづ明鏡で物を照らすとも言ひませうか。判斷力、鑑識力といふものは敬服の外ありません。



まづ何かの會で集會をしますと、第一に夫人に御相談申し上げる。すると常集會ならばそれなりに總會ならばそれなりに、外國婦人が出る會ならばそれなりに、出ない會ならばそれなりに、講師から餘興から役員の人選まで、ずん〳〵と意見をお出しになる。それが又一々に的中して行くのです。そこらの技倆になつては實に偉いものです。

幹事の方から講師をさん〳〵考へて行つて申し上げる。と直ぐに『それよりは彼の方が此頃西洋から歸つて來て、恰ど今

何う恁うして被居しやるから、あの方に頼つたら可からう』と言はれる。行つて見ると果して好結果なさうです。或は幹事連で、『あんまり何々の話――例へば教育談とか衛生談とか東洋談とか――が續きすぎたから、今度は氣を變へてガラリと別方面のものを』などと相談して、あつぱれ名案のつもりで申し上げると、『それよりは此の方が……やつぱり會の主意に適つて宜しからう』と仰在る。結果を見ると、成程その方が佳いので、やつぱり夫人の方が我々より一見識上だと思ふさうです。

餘興にしてもお上品な長唄よりも、却つて外國人には其麼分らないものに比しては、よく分るやうなもの手品なり活動寫眞なり、或はチヨツと道化懸かつたものなり、其れらの方がよいといふお指圖の通りにする。やつぱり旨く行くのが常なので。のみならず役員の人選といふものに至つては、毎時きつと的中で、實によく人を觀て被居しやる。

折々に鞘走る

その代りかゝる聰明な婦人に有りがちの弊で、切味が良すぎる結果、どうも人の缺點が目に着いて仕方がないと見えます。見まいと思つても見えるのですね。そして目に着くから、不覺外に洩れます。『彼女も使つては居りますが、恁ういふ所があつて』などゝ動もするとお洩らしになる。それが甲の人に向つては乙の人を、乙の人に向つては丙の人をといふ樣になり勝ちですから、それで見ると適任の人を適任の處に使つては被居しやりながらも、やはり十が十まで御信任なさる者は幾人も無いやうです。成程然うでもありませう。長所が見える一面にはすぐ其の者の缺點がお見えになるから、全然御信用なさりたくても然うは行かなくなるのです。從つて之を一方から考へると、『それでは又全然そのお方に心服してゐる婦人も幾人もないだらう』と疑はれる譯になります。

夫人の、此の御性格を呑込んで『あれは及先の走り

すぎるので仕方がない」と思つて居れば何でもありませんが、然し不圖自分の事が及先に懸つた事を洩れ聽いて、此方も蔭で不平を言ふといふ樣な御婦人がちら〳〵見えます。

西太后との會見

此度の清國漫遊も隨分思ひ切つてゐるではありませんか。氣候風土の惡い處へ冬季に向つてずん〳〵お出かけにならうといふ——イヤ最うお出かけになつ



たのですもの。たとへ侯爵御同伴とは申しながら……

思へば清國四百餘州を一人で踏まへて被居しやる西太后。さすがの文武百官を一喝の下に震ひ上らせる西太后それと鍋島侯爵夫人との會見は隨分面白う御座いませう。「どうか西太后の御壯健で——まだ御元氣な間に一度お話しをして見たい！」とは、夫人の年來のお望みだつたさうです。

さて其の會見の光景や御漫遊の狀況を偲ぶ

につけて、思はれるのは侯爵夫人の意志の强烈な事です。あんまり目端の利く人は決斷に乏しいものですが、夫人は然うでなく、斷行力に富んで被居しやる事は素張らしいものです。然も又それが累ひにもなるのですが。

何ういふ會の會長さんでもまづは大抵床の上にお飾り申しておくだけのもの。恁う遊ばせと言へば唯、何う遊ばせよ言へば唯と仰在るだけで、總ては幹事が決めてホンの形式だけに御承諾を經るのですが、夫人に至つては然うでありません。殆ど西太后的の御手振で、一々自分の意見通りになさるのです。一旦立てた意見は飽くまでも貫かねば承知されません。「厭だ」と言はれたら最う何とあつても不可。だから何の會の役員でも、まづ互の相談よりも第一に會長さんに伺つて見るのです。

家庭に於ける夫人

「あの方は外では彼の通りの勢力ですが、家庭では一向勢力がないのですよ」などゝ、口善惡なき或る婦人が言ひますが、其麼事は御座いません。けれどお胸一つですん〳〵と、例へば會への出席、會務に關係の諾否など、總て三太夫抜きですん〳〵と確答なさる風ですから、三太夫連からの受けが惡いと云ふのは事實でせう。十中九までの大名華族方の、夫人達は何麼に熱心にお望みなさる事でも、三太夫が一つ頭を振れば涙を呑んでお斷念になるのですが、それを右の樣にすん〳〵おやりになるのです。

夫人が家庭での切味の一例とも見られるのは、伊都子樣を梨本宮さんへお上げになる時で、御婚約が決ると同時に、伊都子樣を重ね褥の上へ据ゑて、上段の間に据ゑたきり、指も觸らせられず、そしてお姉樣——先夫人のお腹の方達ですが——でも誰れでも下手の方からチヤンと坐つて御挨拶を申し上げさせられたといふ事です。何でも三太夫連が眞赤になつて腹を立てたとか申します。

美事とも申して宜しいのは、あの樣に交際界に輝く

御婦人ながら、お孃さん達には造花とか裁縫とかお料理とか、極めて質素な實用的の——と申しても其れは中等以下の家庭に實用的なので、あの樣な上流の婦人には、現在も將た未來、即ち結婚後にも恐らくは不用らしい其麽實際的平民的の事を、よくお稽古させられるので御座います。

平民的と申せばこれが又侯爵夫人の美事の一つで、それは最う何ういふ會へでも、氣安く御出席なさるのです。華族方などは、まづ願ふ手續きが臆劫。御返事を伺ふまでが却々臆劫。どんな人達が出席するかといふ御尋ねで、それ次第で却々にお出かけ遊ばさないといふ、それは〱氣六づかしいものですが、侯爵夫人はずん〱と平民的に、何ういふ會で何ういふ婦人——つまり我々のやうな下流の婦人が出る會へでも、更に關はずにずん〱と御出席なさいます。そして其れ相應に御指導なさるのです。これも誇る處はあの樣な聰明に辣腕とを持つて被居しやればこそ出來るので、畢竟するに平民的に廣く何處へでもお出かけになつて、そして到る處に技倆をお揮ひになるのが大勢力の源で御座いませう。





二十年の夢

萩花

月は靜かに森から離れた。小萩の窓に何とはなし、過去廿二年、夢みる眸して追憶の頁をくれば、扨も走馬燈の形して、浮び出る望の夜々、夢ならず鮮かんでソツト白紙に數へて見る。

△乳母が家

乳母の在所は木曾の河畔、年老つた乳母の兄が川に臨んだ伏屋に只一人、瀟灑して暮して居た。初めて此所へ連れられたのは五歳の秋、丁度望の夕べの鎭守の祭りの晩だつたので、バタ／＼建つた小さい村が、それでも可なり賑かしかつた。

「御孃樣、お月樣出ますよー。」と爺の頓狂聲に、バタバタかけ出して川ばたの窓へ背延びして頸出すと、「あれ、お危ぶない」と乳母が後から赤い帶をグツト握る。赤い大きいお月樣が今、ズツト向ふの森から上らうとする所、左の川上から舟が下つて來るらしい。何か面白さうな欵乃が、漸次近よつて捻鉢卷の船頭が前まで來る。

「茂作さあかい、好い晩だなあ。」

「あいよー。」私のすぐ後で、あいよーといつた爺の聲が吃驚する程耳に響く。

又船が來る、又船が來る、其の毎度茂作の爺に何か聲かけては、ギー／＼と下つてゆく。

其の晩茂作爺の大きい背におわれて、鎭守の森へいつたのはあまり瞭然しない、が歸路に味淋酒粕を貰つてくれたのと、爺の背から緣端へ下された、乳母の家が天井のない藁屋根で、煤けて居たのを覺えて居る。

△七歳の日記

「ダカタ、オパーナマガ、入ラッシャイマシタ、オダンゴヲ三ツタベマシタ、花チヤントアタイト、兄サントデアソビマシタ、竹ヤガ、エンバタデ、キチムリシマシタ。」

月あかりに、手文庫の底から、こんなのが出る。

久しぶりのお祖母様のお入來に、母樣にこにことお月樣の緣先で嬉し相なお話、花チヤンは今年初めて上つた學校の仲よしのお友達である。薄や萩の蟲なく間を馳けつこして、裏のお庭まで追はれて來ると、

『玉ちやん！』

上に聲して振り仰ぐと『アラ兄サン！』

お向ひの二階の兄さんが低い欄に腰かけて、御本か何か持ち乍ら、此方見て居らつしやる。

『玉ちやん、遊びに來ないの。』莞爾、兄樣の粗い飛白がお月あかりで瞭然白い。

『エヽ、行くわ、花ちやんも一緒よ。』



「イヽヱ一緒で、お團子を上げるから。」
「アラ、お團子ならもう家で頂いちまつたの。」
「ぢや、お芋」「そう」おかつぱの頭を一寸かゝげると
「現金だね。」
花ちやんと手を引いて兄樣のお二階をトン〱〱と上る。

十時頃まで唱歌唄つたり、繪を見たり遊び散らしてまた裏のお庭から廻つて歸ると、縁の柱に肥つた竹やが、コクリ〱と居睡りして居た。

△海　の　月

二見から浦輪あさつて、折よくも三五の望の夕暮れに香良須の磯にたどりつく。

茫々と海原を東に受けた松坂屋の二階、見下ろせば渚は雪浪に煙つて居る。先づお湯浴びてのちと暮れてゆく窓に父と二人で海見て居ると年増な女中が夕餉の膳を運んで來る。

「どうも遲くなりまして相澄みません、今日は此邊の船頭祭りでござんして」アクセントが妙にをかしい。

「祭りだと？　ハヽア道理で太鼓の音が何處かにするわい、お社は何處にあるんかね。」
「ヘイ、つひ此の西の松原の中にござんすよ一度お後に行つて御覽じませ、が隨分亂暴な祭りでござんすからお孃樣はお危うござんせう。」

月出ぬ前を父の袂にしつかと縋つて、松原の中、赤い鳥居の傍にたつ。カンテラの油煙ムツト鼻を打たせて、梨や、駄菓子屋、玩具屋の露店に漁師の娘や、船頭の子が、今日こそ晴れと着飾つて往復する。やがて繰り込んだのは扨恐ろしい、眞黒い漁師の爺が指貫袴の裾ふくらせて、鳥毛の帽子勇しい異樣の服裝、肩からかけた大太鼓ドン〱〱〱と勢切つて打ちたゝけば崩れ來る同じ服裝の若い衆、二群三群、采配振つて敲き合ふ。

子供心の恐ろしさ、父に迫つて磯馴松の林の下を馳けて出づれば「まあお月樣が！」水や空なる邊りから今や初めの輝きの第一線を投げた所。チラ〱〱と黄金の浪が渡つて來る、見る間に絶波玲瓏瑠璃ちりば

めた大海原。漁火消えた磯に立つて、罪なく涙なく愁ひ知らずの十五の下げ髪、白いリボンを風に任せて仰ぎ見た其の海の月、永遠に忘られぬ。

△西　の　京

楽しい故山の流水に一年ぶりの鬱を洗つていざや東都に歸らうとした一昨年の初秋、兼ねて少しは悪るかつた母上のお眼、俄かに重つて、一夜の中に腫れ塞さがつた。彼處らの用事驚きに忘れて、先づ良醫尋づねて上つたのは程近い西の京、人を看護の上京の秋はあまりに淋しい。五日を過ぎてまだ快方に向はない其の夕かた、隣の家で石臼きしる音がする。『何でせうねおばさん』階下へ下りた序に一寸主婦に訊いて見ると、



『明晩は貴女さん、十五夜さんだすよつてなん。』

今宵ときいた夕ぐれから俄か雨。無言の母の枕邊に凝と坐ると、悲しい涙がほろ／＼落ちる、燈火ばかりまたたいて、せめてと釣つた窓の蟲迄ないてくれない。

其翌けの日の夕かた同じ級の親しい友から小萩の繪葉書に薄墨流して、

圓の望の夜、何の感か在しまし候、椅子に倚れたる窓の許、今更仰ぎし肩たゝいて、
「不思議はないわ、兎角浮世はこんなもの。」
と例の通人ぶつたとみ子様が。

△寄　宿　舍

今宵一夜は理窟をぬきの觀月會といふので、まだ日のある内に夕御飯早くすまして、食堂に花瓦斯まばしう點火された頃、再び白い食卓をずらりと並ぶ三十幾人、色彩美しう向ふの鏡へ一つに映る。
今日のお炊事當番が心利かした、御手製のカステラ、ドーナツク、絹かつぎや、お團子から一群ぬいて盛られてある。殊勝げに靜かだつたのも暫時の間。眞の母の樣にいつもなつかしい舍監の先生が今日は殊更にこにこと、生徒の作つたお菓子を召し上り乍ら、
「今夜は堅いお話はよす筈でしたね餘興はまだ始りませんか。」
「先生、今夜は皆サンの隱し藝を。」
「先生からどうぞ、お始め下さいませ。」
舍監の母様、今宵だけは四面から楚歌の聲。やがて八重子様のお上手なお琴がはじまる、次は一番下級の小さい人が、「峰の月」といふ表情體操、まあ涙が出る程無邪氣で可愛いゝ。日頃無口な美佐保様の琵琶歌も出る、バイオリン獨唱、謡曲、船唄、追分け迄、終りの手品に皆が思はずお腹を抱へると、「皆様、お月様を忘れてませう。」と先生のお聲。
「まあさうでしたわ。」
漸とこれで會を終つて、消燈までを校庭に出る。月はもう中天に、高い大空は澄み切つた水の樣。
思へば遠し故郷の空、あゝ我が父母……と突如、向ふの舍の玻璃窓から、やがて其の細い聲が消えて了ふと、頭も身體もキユツとしまつて、故郷の空が髣髴と浮ぶ。

△今　宵　の　月

二年を故山に過して今宵また、此の月を見る、年々に變つてゆく我が身の心と境遇、はからずも追想にふけつて切に感じたものは何であつたか。些細の事に胸轟かし、血しほ沸かして驚異した若さに再び歸りたいの只一事。

（完）



新式字はがき

繪葉書に代はる

鎌倉笹目谷　星野天知

實用專務の無風流な郵便はがきも、繪はがきが流行し初めてから、乾燥無味な事務の間にも風流の趣味は匂ひそめて、荒野に一輪の花を見付けたやうで、終日仕事に疲れた腦髓に、どの位慰みを與へるか知れない。殊に遠國に離れて居る親戚や友達の間にはなまじな手紙よりも多くの趣味を與へて居る。然るに爰に厭ふべき事がある。其繪はがきを用ゐるは宜しいが、やたらに文字を其上へ書いて折角の畫を打壊して仕舞ふことである。書體の不相應なものだの、場所を考へずに書くことだの、繪がらを撰ばずに用ゆることだの、いろいろと苦々しいことだらけで、なまじ繪はがきを用ゐる爲めに、其人柄も見えて恥かしい事ではないか、吾が書法會では、書翰の書き方を教へる序手に、必ずはがきに付て種々注意して教へて居るが、其畫と書入れる文字と、相待て美的の調和を整へねば成らぬ。それには又、畫師の不注意も苦々しいまで無頓着なのが多い。文字を書入れるといふ考へを持たぬ畫の意匠が多いから、これから大に注意をして貰ひたい、中には至極結構なのもあるが、多くは畫斗りの舞臺と思ッて居るらしい。斯樣な畫の種類は文字を書入れずに措るが至當であらう。併し心を通じたいといふが人情だから、といふ所から、此度は端書の表面の下へ書いても宜しいといふ規則に成ッた。これも宜しいが、其では畫と文字は全然別物に成ッたので、畫を活し文字を活したのはいかにも宜いが、而かも人情の溫雅を傳へるといふ感受力を弱めるわけで何うも面白くない、美しい文字を畫の側へ書入れて其意を表はしたのと、又畫斗り見たのと、其感ずる心持は如何であるか、此夏或藩

善會のバザアで種々の花を刺繍した團扇が多く出たのを見て、何の氣なしに其二三本へ和歌を書添へて置いた。刺繍の團扇は高價だから賣れなかッたが、其書添へた文字のあるのが、忽ち賣れて仕舞ッた。そこで此度は二十本斗り書いて置いたら又賣れた、之は是非書いてくれと頼みに來たから全數書いたが、結局賣れ切れて仕舞ッたと聽いた。其れは和歌俳諧の分る人でも分らぬ人でも、又文字の讀めない西洋婦人でも、皆此方が宜いと云ッて買ふて往ッたと云ふ。之は墨色の配合で更に其刺繍を美くしくしたからでもあり、又意味が更に深く讀まれるといふ所もあり、或は假名の姿が美的だから其感受力が强いといふ所などもあつたからで、此の感じは繪はがきに於ても同じ道理であらう。●

偖そこで繪はがきも、思ふやうな意匠も得がたく、又畫としての意匠は結構でも文字を書くべき意匠を考へてないのが多いから、いつも〳〵用ゐるに困ッて居る大方心ある人々は同感であらう。別項に例を示す散し書きの「字はがき」なるものは、其書き方を五十種だけ撰んできめた新式なものである。「星野式字はがき」とでも言ふて宜しい。曾て橘の千蔭翁が色紙の書き方に新式な工夫をしたことがある、先づ其等に習ふた斬新なものだから、追々試みて用ゐて戴きたい。尤も其文字の明いて居る所へ點々と畫を插入れば尚ほ面白いと思ふ。よしや畫かなくとも、之れならば意匠も隨意で、又一段普通の繪はがきよりは高尙であらう。

それに就ても、假名文字を奬勵しなければいけぬ。此頃は續けた假名などはてんで讀めぬ人が隨分出て來た。草書文字は讀めない青年が大分殖えて來た。中には蚯蚓の蜿蜒ッたやうな文字は讀めぬなどゝ當世がッて、其野卑な人品を自慢氣に吹聽して恥ぢぬものもあるやうに成ッて來た。實用一遍の科學の中毒と言はうか、何と言はうか、實に無風流極まるわけである。其も習ふ方法がないのならば仕方も無いが、今や吾が書法會のやうなのが有るから、一奮發で譯はない。唯「習ふ」といふ決心一つで出來るのだ。どうか日本固有の此の高尙なる美術を大に興したいものである。



今後の婦人が世に處する方法

高島平三郎

今後婦人の教育に於て、最も注意を要すべきは、まづ第一に、

身體の健康をはかる

といふことである。健全なる身體には、健全なる精神が宿るといふことは、既にいひ古るされた語であるけれど、學問が進めば進むほど、身體と精神との關係の密接なることが明かになつて來る。精神上に缺けた處のあるのは、必然身體の何處かに惡い處があるのである、婦人はおしなべて健康が弱い方であるが、殊に東洋の婦人は柔弱で事に堪えない。これは根本的に直して行かなければならぬと思ふ。

今日の女學校では何れも體育といふことは努めて居るけれど、それはたゞ學校に於ける間の事ばかりである。この學校の運動法では、迚も將來家庭に入つてまでそれを續けて行く譯には行かない。丸髷の奥様が體操をしたり、高島田のお孃様がダンベルを振り廻して運動をするといふことは、ちと出來にくい事があらう。それ故婦人の生涯に亘つて身體を大事にし、

身體を擁護する方法

を講じて、それを實行させることを努めなければならない。ことに高等女學校以上の學校に於ては、最も此處に留意して貰ひたい。それには彼の冷水摩擦の如きは、まことに平凡なありふれたことのやうなれど、如

何なる場合に於てもつとめさへすれば、出來ない事のない運動法である。而かもその効果の多いことは、世間にも充分認められて居るし、自分も亦この二十餘年來經驗して感じて居るのである。だから自分はこの一事を先づあらゆる學校に勸めて居る。それから又、人間の活力といふものは、いつも適當のオゾンを含んで居るといふことにある。多量のオゾンを含んで十分に酸化作用が行はれるやうでなければ、人間の精力といふものは出て來ないのである。それ故人間は常に新しい空氣に接して、多くの酸素を吸入するの必要がある。こんな事はもとよりわかり切つた事であるが、しかし實行することを怠つて居る。自分は多年深呼吸を行つて居るが、まだ人に汚されぬ空氣の中に、日光がはじめて綠葉にあたつて、滿々とオゾンを吐き出す時、それを嗅ぐ貪るといふことは、實に愉快なことで、非常に精力を增すのである。此等の事は平凡で簡單でつまらないと人は思ふかも知れないが、廿年卅年と續けて生涯それを怠らずに行ふならば、各〻確に其の効果を認めて、身體の强くなつた事に自ら驚く時があるだらう。

多くの女學生の體格

自分が東京の町を歩く際、に注意をして見ると、(自分は曾て體操學校の校長などをした事もあるので、自然それらの事にはよく注意をするのである。)大抵背中は帆かけ船のやうに曲つて姿勢が一向整つて居ない。また歩きながらキョロ〳〵道の兩側を見廻しなどして、態度のとれぬものが多い。然るに其中に目立つて正しい姿勢を示し、よい顏色をして、活潑に歩いて居るのがある。それは何處の生徒であるかと氣を付けて見ると、お茶の水の高等女學校の生徒であつた。お茶の水の高等女學校を管理して居る人は自分の友人の篠田利英君である。それ故自分は同氏に向つて、あなたの學校では生徒に何か特別の修練をして居るのであるか、他の學校の生徒と餘程異つて居るが、と尋ねた。處が果して每日運動場に出る度に深呼吸をやらせる。それから道を歩く時には、目的

をもつて歩くのであるから、その目的に向つて一心に進めばよいといふ事を、堅く言ひきかせて實行きせて居ると聽いた。これは實に今日に於て適當な教育の仕方であつて、その訓練された精神が身體の上に現はれて自然氣が付くやうになつて來たのである。これらの事を、多くの人は漫然看過して居るやうであるが、少しく注意をすれば必ずその結果は現はれて來る。



新聞廣告と投機思想

全體今日の新聞紙を見れば、射倖熱の奬勵に屬するものと、色を白くするとか髮を奇麗にするとかいふやうな、裝飾に屬するもの丶廣告が大部分を占めて居るが、これはよく今日の時勢を表して居る。投機熱が盛んで、人間は皆着實の事を嫌ふといふ傾向と、外面を美しくして人によく見られようといふことに賤しい精神とが、今日の社會を支配して居るのである。勿論修飾に屬することは、社交上大事な事故、それを排斥する譯ではないが、併し人間の眞の美といふものは、洗ひ粉や白粉で獲られるものではない。たゞ自然の法則に從つて、身體の健康をうることにあ

る。一體日本では男女の知識がまだ一般に進んで居らぬ故、美の標準といふものも明かでない。たゞ白いとか細いとかいふ一向活力を表してない美を悦んで居る有樣であるが、今後科學が益〻進步して、是等の標準を高く認めるやうになつて來れば、單に今迄のやうな、塗りかくす的の方法で滿足が出來なくなつて來ることは明かである。先年日本の藝者が亞米利加に往つた時、その顏色が半ば病人のやうであるのを以て、誰れもそれを賞讃するものがなく失敗したといふ話であつた。兎も角も今後の日本婦人には自然の美を發揮するといふことを奬勵して、生涯に亙つて實行の出來る運動法を敎へることが必要である。しかしながら身體の健康を得るには單に運動ばかりでは可けない。

活用ある料理法

食物に注意することが必要である。今日の學校に於ける料理法は衞生や體力に關するものは尠くして、たゞ何は如何だ、これは斯うしてと敎へるに止まつて居る。ビフテキは何うして燒くとか、オムレツは何うしてこしらへるとか、いふことを、器械的に敎へるばかりで、身體のためといふことには一向重きを置いて居ない。就中最も大切な腦の成分との關係などには注意して居らぬやうに見える。それに學校の料理法といへば、槪ね中流以上の家庭でなければ出來ないやうな、高い材料と立派な品物とを使ふのであるから、偶にお客でもする時の外迚も日常の生活には實用が出來ぬといふ譯になる。之れは大に改めなければならぬことである。一體料理法といふものは、例へば今日夫は如何なる事をしたか、汗を出すやうな仕事をしたか、寒い處で働いたか、又は精神上の働きをしたか、肉體上の仕事をしたかなどの點をよく考へて、各〻その消耗を補ふに適當なる方法を選ぶべき筈である。それをするには、必ずしも高價のものを買はないでも、普通の安いもので十分營養を取る事が出來ると信ずるのである。

永續せざる習慣

要するに身體の事に限らず、今日の女子教育の弊は、學校で教へることゝ實際生活とが離れ離れになつて居るといふことである。それだから學校を出たものは眞實に學問に趣味をもつことが出來ない、況んや運動などには趣味をもたぬといふ事になつて來る。之は大缺點である。學校で習つた事は、何でも活きた社會に實現されて、初めて其價値が現はれるものといふことを知らしめ、一つの事を習はゞ、直ぐそれを實際にやつて見ようとするやうにさせなければならぬ。それから折角よい事をやり初めても、それを



永續してやらせるといふ事の少いのが不可い。例へば前に言つた冷水浴や深呼吸でも、ただ一日やつた丈けでは効果が現はれない。永年繼續して、初めてそこに効果を認めることが出來るのである。凡ての行は何でも德となつて了はなければならぬ。行が德となるには多年それを繼續しなければならぬ。身體の事は矢張り精神上の德によつて行はれ、それを行ふことはまた精神上の德となるのであるから、よい事は是非永く續けてやらせなければならない。それには、指導者自身がまづ其の德をもつて居らなければな

らぬのであるが、如何にせむそのやうな指導者は少いのである。それ故青年は不眞面目になつて、一遍にうまいことをしようといふやうな事を望み、振つてるとか奇抜だとかいふことばかりを悦ぶのである。それは玉ころがしでもあるならば、時にうまく當ることもあらうけれど、何うしてこの世の中のことは、あれやこれやとやり散らかして、偶然うまいことに當り付くといふやうなことがあるものでない。よしあるとしてもそのやうにして獲たものは、必ず一時的のものなのである。

願はくば今後の婦人を養成するものは、其の生涯の何ういふ境遇に於ても行ふことの出來る體育の方法を心掛けて、婦人をしてその眞の美を發揮せしめることにつとめて貰ひ度い。

活用の利かぬ學問

次には今後の日本婦人の知識に關しての注意である今日學校で教へて居る知識は前にも述べた通り實社會とふれない殆ど死知識が多いのである。この事に關しては、數十年前、スペンサーもやかましく言つた事であるが、實に今日の教育は無用の裝飾ともいふべき有樣であつて、今後發展してゆく國家の一部を擔當する女子に取つては、誠に不完全不適當といはなければならない。もつと社會的な實際的の教育を施すやうにつとめることが必要である。この點に關しては寧ろ不完全な維新前の教育の方がまさりて居る處がある。例へばかの御殿女中の如きはいろ〳〵缺點もあらうが自分の習つた事を實際に行ふといふ點に至つては甚だ發達して居ると思ふ。例へば手紙などを書く時など、忙しい中に巻紙を手にもつて、すら〳〵と認めて了ふのであるが、その手紙は立派な文句をなして用を辨ずるのである。然るに今日の女學校を出た人達の、机に向つて長々と暇をつぶして書く手紙は、無益な事ばかり多くして、まことに實用に適せない。のみならず手紙を遣つて却つて人の感情を損ねるといふやうな事を仕出かす。自分の母などは今年七十一で逝なつたが、

殆ど昔のその不完全な教育をさへ受けた覺えはないのであるが、自分を教育して呉れた事や一家を治めてゆく點などは、遙かに當世の高等教育を受けた婦人にまさることをして居る。一體に昔の婦人は、習ふことは少いのであるけれど、それを活かして實社會の經驗を積んでゆくといふ點は、今日の女子にまさること數等である。これは勿論、境遇とか年齢とか又時勢など、いろ〳〵關係する處があるので、一概に今日の女子は役に立たない、昔の婦人は役に立つたといふが如き暴論を吐くのではない。それはもう今日の女子が進歩して居ることは事實であるが、それと同時に今日の學校が迂濶な教育をして居るといふことも亦事實である。然らば此點は如何にして改良して行くべきであるか、これは今日の教育家の大いに思慮をめぐらさねばならぬ處だと思ふ。



教育ある婦人の立場

全體何事をするにも教育を受けた人は教育を受けないものに比べて、巧みに出來ないのは仕方ないとしても、周到なる注意を以てそれをするやうでなければならぬ。そして學校で習つた知識技能

は何でもそこに現はれて、よし初めは拙くとも敎育の功で忽ち修練をしたといふ風でなければならぬと思ふお掃除一つするにしても無學な下女と敎育を受けた奥樣との間には、十分そこに相違を認めるやうでなければならない。例へば敎育あるものは塵埃は何處から出て來るか、如何にすればそれを最も綺麗にとり退けることが出來るかなどの知識をば、十分に備へて居る譯であるから、掃除の上にも自ら其の知識の應用が現はれて來なければならない筈である。然るに今日の女子の中、一度掃つた處に再び塵埃を戻さないやうに眞に順序ある掃除の仕方をするものは、果して幾人あるであらうか、自分の見る處によれば、これは却つて良家に使はれた下女などの方がまさつて居るやうに思はれる。斯くの如き現象は何のためであるか、畢竟學校敎育と實際生活とが、離れ々々になつて居る處から起る結果といつてよい。

お掃除をいやがる女

尤も高等の敎育を受けた婦人の中には、お掃除の如きは下女のすべき賤しい業であるとして、一種の虚榮心から日常それを顧みないといふやうな人もあるから、その虚榮心といふものも確かに一つの原因ではある。職業に貴賤なしといふことは學校に於て修身の講話で聽いて居る、が、さて其の知識を實際に應用することは六つかしいのである。

偶々敎師がこの事を實行させようとしても、生徒はいや／＼ながら不平に滿されつゝ辛うじてそれをするといふ有樣であるから、それに興味をもたせるなどいふことは、到底思ひも及ばない事である。これは一つは虚榮心のためと一つは學問と實際とが遠く相離れて居るといふ點から來る結果であるが、女子敎育はまづ此點を改めなければ、今後の婦人は敎育を受けて却つてそれが不幸の基となるやうなことになる。要するに學校の敎育で學ぶ處の知識技能を十分に體得して自我に同化して了つて、それが自由自在に用ゐられるといふやうにならなければ駄目である。

學究的と實際的

それにはまづ獨逸風の大學教育、言ひ換へれば學究的の教育は少くとも婦人の教育には之れを避けなければならぬ。そして英國風の常識を重ずる實際的の教育を授くるやうにすることが必要である。今の高等教育を受けた婦人が世間から避けられ、また呪はれて居るといふのは何故であるか、それは外でもない、その學問が學究的で、ただ斷片的に頭の中に貯へられた知識は實際生活と全く無關係のものとなりて居るからである。學問をする多くの婦人は、その青春の、最も人に愛せられ歡ばれて快活に笑ひ樂しむべき時代を、たゞ書物や實驗室の中に埋もれてのみ暮すといふ有樣であるから、迚も活社會の趣味を味ふことが出來ない。それ故世に出ても挨拶の仕方もわからず、手紙も書けぬ、常識のない事をするといふ始末、さては思はぬ事で人の反感などを招き、終には折角學んだその學問も自分自身も、共々世から人から厭ひ斥けられるといふ事に立ち到るのである。自分が地方などへ出掛けると、所謂高等の教育を受けた婦人達が必



ず訪ねて來るが、それらの人達には洋服の疊み方も知らぬのが多い、折角親切に疊んでもらつても、却つて變な折目などがついて困るから自分は遠慮もなく斷るのであるが、さうすると中學校の教師などが來て却つて上手にたゝんで呉れる。それから洋服を着せて呉れるとても恰も日本服を着せる時のやうに、頭から被せるやうにされるのでも屢〻閉口させられる。併しそれらはまだしもよいが、重い外套でも着ようとする時にも一向それに手傳はうとはせず、寧ろその困る樣子を見てやらうといふ風をして、すまして立つて居るといふ實に常識のない無樣がある。

有らゆる教育といふものは人道主義等の立場から言つても、實際に役に立つこと、即ち人間の實際生活にふれて其の價値があらはれて來るといふ事でなければならないが、それに必ずしもかくの如き哲學的形而上學の議論を持ち來たさなくとも、少くも今後の日本の女子教育に於ては、その獲た知識が凡て活社會にふれるやうでなければならない。然らざれば到底社會から女子教育の價値を認めてもらうことが出來ない。從つて又その進歩を望むことは不可能である。世の中の事は決して議論一片で進行するものではない。必ず感情や意志の滿足をはからなければならないのである。然らば女子の教育も、實生活にふれる家庭に於て行はれる手段方法をとるやうにすることが、最も大切であるといはねばならぬ。

パラダイス的の學校生活

この學問は實生活に結びつくやうにしなければならぬといふことは、單に知識に關してばかりではない。德義に關しても亦同一のことがいはれる教育を受けたものは、操行を正しくしなければならぬなどいふことは、千言萬語絶えず學校で教へて居ることで、更めて言ふまでもないことであるが、それを飽く迄承知して居りながら、教育を立派に受けたもので隨分世間の問題になるやうな法律上道德上の罪を犯すものがある。ことに日本の女子の犯罪は教育の進歩と共に著しく增

加して居る。尤も罪といふものは活動の產物であるから、それは自然の結果なのでもあらうが、一面には學問の訓練と實際生活とが一致して居ないといふことが大いなる原因である。一體學校の敎師や校長などいふものは、皆自分の學校ばかりを讃めて、恰もパラダイスでゞもあるかの如く敎へて居る。例へばかの卒業式などに臨んでも、今迄は温い學校の內に親切な敎師のもとに居つたのであるが、これよりは荒浪の無慈悲な世の中に出るのであるといふやうなことを言ふて、社會を極めて殘忍酷薄のものである



かの如く說き聽かせるが、これらは自分の無見識を自ら表白して居るものであつて、笑止の至りである。全體學校が社會から離れて、其處で訓練をして居るやうに思ふて居るのがそも〳〵間違つて居るのである。人間は誰れでも、生きてる以上は社會の影響を全く受けずに居る譯にはゆかぬ。それ故常に社會の狀態を考へて、つとめて社會の事情に適し、その社會の望む處の人物をつくることが必要である。それをば學生をして社會を敵視せしめるといふのは、大いに間違つて居る。決して社會は學校よりも墮落して

居るものとは言へない、勿論社會は學校よりも廣いのであるから、惡いことも澤山あるが、善いことも亦多くあるのである。然らば學校は學生にむかつて社會の事情を明かにし、そして善い事には接近し惡い事には遠ざかるといふ堅い決心なり意志なりを持たしてやるべきである。學校が學生をいたはり保護して、社會から遠ざからせるといふことは、却つて生徒を墮落させる所以である。自分はこの世の中に生れて發達して來たものであるから、何處までもこの世の中に共同一致して行かなければならぬ者であるといふことを、學生に覺悟させることは、先づ何よりも大切な事である。

愛嬌なき婦人の行末

婦人にとつて操は大切であるが、必ずしもそれが唯一のものではない。操を失はばすべての人の信用がおちるから勿論操を愼むことを忘れてはならぬ。が、操さへまもれたら、それでよいかといふに、決して然うではない、少くとも今後の婦人に於ては、其上に大いなる活きのあることを自覺しなければならぬ、それは大きくいへば、社會の平和のうち立て者とならねばならぬことである。社會はいふまでもなく男女兩者の共同でなり立つものであるが、就中將來ます〳〵發展し行くべき社交的の仕事には、實に女子の手に俟たねばならぬものが多い。もし理窟と議論とで、社會の一致平和が保たれるものならば譯はないが、社會共同の要素で最も大切なるものは感情である。然るに婦人の一顰一笑は社會の平和に大關係をもつものであるから、その事を今日の女子に自覺させて、女子自ら其天職に任じてゆくやうに敎育することが必要である。それには高い專門の學問を授けるよりも、男子の如き知識を與ふるよりも、玲瓏玉の如き感情を養ふことが一番である。婦人は美しい感情を養つて、眞心から人に同情し人を慰めるといふことが出來なければならない。そして其心の表れとして、いつも愉快な顏色を以て人に接し、自分も樂しむと共に、人をも歡ばせるといふやうでなければならぬ。

それには單に操の德ばかりではいけない。有らゆる德を養つて善い事を悦ぶ處の品性をつくることが必要である。實にその品性がなければならぬ。然るに今日學問をした女子の態度は何であるか。常に笑つては損をするとか、お辭儀をしては見識が下るとかいふ風で濟して居る。一口にいへば愛嬌といふものが少もない。此處が教育を受けた婦人の人から批難せられる點である。一體今日の學校教育は一齊教育で、學校は生徒の多きをのみ誇りとし、個人の特長を發揮させるとか、實際の經驗によつて導いて行くとかいふことに缺けて居る。何うして學校の號令が愛嬌を產み出すことが出來ようぞ、愛嬌は眞に其人の德の溢れ出たものでなければならぬのである。今日の日本の男子は婦人の愛嬌に飢えて居る。そして公會に於ても家庭に於ても、婦人から高調なる愛嬌を得ることが出來ない、乃で止むを得ず、賣笑婦などいふ賤しいものから、作つた愛嬌を買つて、僅かに慰めて居るといふ有樣である。是を今日の教育家が看過して居るとは實に一大瑕瑾といはねばならぬ。女學校に於ける作法や修身の先生は何を敎へて居るか、



たゞ難かしい顔をして歩き方は何うの、坐り方は斯うのといふ事を器械的に教へて居るばかりで、一向其の天眞爛漫たる愛嬌の尊さを教へることをしない。しかもそれ等の先生達の内には老嬢といふ心のひねくれた、嫉妬深い意地のわるい、人間の感情に缺けた處の多い婦人が居つて、たゞ外形ばかりを修飾して居るのであるから、決して眞の趣味や愛嬌を教へることが出來ないのである。英國の教育家のミスデビスといふ人が、若い婦人の教育に於て、理想としてつとむべき點は、いつも愉快な心を保つて居つて、自分も快活に人にも快感を與へることであるといふて居るが、自分は今後の日本婦人の品性に關しても、切にこの事を望むのである。

見出すべき人生の趣味

さて自分の以上話したことは、この身體の事から知識及び品性の事に渉つて、今日の常套の語を以ていへば、偶然にも知徳體の區別をとつて居るが、併し自分は必ずしもさう區別を立てゝ話した譯ではない。自分の話の中には一貫した旨意がある。それは讀者諸君にも御わかりの事と思ふが、畢竟教育を受ける今後の婦人に望む處は自分の學ぶこと思索することを活社會にふれさするといふことである。何を學んでも、たゞ遠い昔の事である。たゞ遠い國のことである或はたゞ事柄である、今日の我れとは直接の關係のないことであるとせずして、今日の我れ、今後の自分がこの社會今後の社會に立つて活動してゆく上の準備であり、また活動の方法を研究するのであるといふことを忘れずに、教育を受けて往くことである要するに今後の日本婦人は、強健なる身體を以て、いかなる運命のもとにあつても、自分の仕事を卑しいもの、儚ないものとせず、そのつまらない仕事の中にも人生の趣味を認めて、知あれば知ある丈けに、その業を完全に仕上げ、それによつて社會の一人たる本分を全うすること、又如何なる境遇に臨んでも自己の天職は社會の平和を助け、共同一致を進めるといふことである、即ち自分が率先

して嶄新奇抜なる仕事をするといふよりも寧ろ社會の仕事を助けて、それを大成せしむるにあることを、何處までも忘れずに、且つ常に快活な心と願望とを失ふことなく愉快に世に處して往くやうにすることである猶終りに一言附加すべきは、今後婦人が如何に高き教育を受けるにしても、家庭といふことを忘るまじき事である。自分は男子に向つても、如何に高い學問をして、その學問が國家と直接關係はないものなるにせよ、決して一日も國家といふ觀念を忘れてはならぬといふ事を云つて居るが、それと同じく婦人は家庭といふことを忘れずに、家庭をその立脚地として發展して行くべきである。社會の平和は家庭の平和である。家庭の平和をはかられぬものが、何うして複雑な社會の平和をはかることが出來うべきものでないから、婦人は何處までも家庭を立脚地として進むべきことをくれぐれも忘れてはならぬ。(文責記者にあり)





本野大使と共に三越呉服店を訪ふ

藤井瑞枝

其内、大概に此所を切り上げて、それから、漆器の蒔繪類の在る所へゆく、蒔繪には、お金のかゝつたもの、手間のかゝつたものは、澤山在る樣でしたが、さて、これぞといふて、醇雅な品も見當らなかつたのは殘念です。外に一ツ、鎧櫃に象どつた箱が在りまして、木理ある欅(?)を研き上げて金金具を打ち、前面の觀音開きには、絹糸の紐房が附いて居て、一寸まあ、日光物の樣に、艶麗で立派なものでしたが、始めは衣裳箱かとおもつて、よく見ましたら、中が袋戸棚になつて居るんです。

具足櫃を戸棚にしたとは、成る程、珍奇な意匠かも知れませんが、併しどうも、私達日本人の眼には、調和を缺いた所が在る樣におもはれました。

こゝで、私は、本野さんに一寸伺ひ漏らしましたが、此品は、或は巴里の大使館の、武器の間へ備へつけて在る品と、同じ模型ではないかと、今になつてから、おもひ起して居るのです。

蒔繪の區劃に隣接して、ヽヽヽ、チャンと表裝して出來上つた、掛物や、屛風などが澤山在るのです、玉章さんのも、寛畝さんのも、それから故雅邦翁のも、または、京都の景年さんや栖鳳さんをはじめ、種々の先生方の種々の佳作が在るのです。そしてその向ふが陶磁器類！此等は、皆三越から圖案を廻して、京都の錦光山で窯かせるとの事で、花瓶や、其他のものも在りましたが、陶磁器中ではおもに會席風の食器類が多いので、チャンと御膳の上に揃へて並べて在つて、ヽヽヽしぶい樣な、

國民百科辭典

五千萬國民の親朋友!!!

男爵 岩村透
農學博士 稻垣乙丙
文學博士 井上哲次郎
工學博士 井上仁吉
文學士 今井貞臣
理學博士 池田菊苗（閲）
工學士 陰山金四郎
文學士 龜田次郎
文學士 樫尾浩
工學士 横濱魁
早稻田大學講師 吉田東伍
理學士 吉田好九郎
理學士 田畑鶴四郎
醫學士 高橋忠濱
工學士 高橋亨二
法學博士 高田早苗
農學博士 田子勝彌
醫學博士 田代義德
高等師範學校教授 小泉又一
手塚千代吉
理學士 寺尾壽
文學士 有馬祐政
醫學博士 天谷千松

理學博士 大森房吉
理學士 小川琢治
工學士 岡田陽一
大藏技師 岡本金一郎
法學博士 河津暹
文學博士 上田萬年
宮內省樂師 上眞行
音樂學校教授 內田粂太郎
理學士 野田勢次郎
理學士 國枝元治
文學士 箭內亙
工學士 山田博愛
女子高等師範教授 山口西二郎
醫學博士 山口秀高
理學士 山崎直方
工學士 松繩信太
藥學士 慶松勝左衞門
文學博士 藤岡作太郎
文學士 森田鐵三郎
文學博士 瀨川秀雄
關約
文學士 鈴木暢幸
文學士 長谷川福平

文學士 中川忠順
法學博士 中村進午
理學博士 中村清二
醫學博士 中濱東一郎
海軍大尉 村越八郎
理學博士 岸上鎌吉
工學士 三橋四郎
理學博士 三好學
文學士 溝淵進馬
法學博士 志田鉀太郎
文學博士 白鳥庫吉
林學博士 白澤保美
早稻田大學講師 島村抱月
文學博士 幣原坦
海老名彈正
高等工業學校教授 平野耕輔
木山白雲
醫學士 千葉眞一
文學士 長連恒
文學士 大原良馬
理學博士 大幸勇吉
理學士 大日方順三

編纂主幹 文學博士 芳賀矢一

法學士 西鄉陽
農學士 佐藤壽衞
文學士 相島明次郎
ドクトル ロリッフアル 氣賀勘重
醫學士 蛇下功一
醫學士 石川日出鶴丸
理學博士 石川千代松
理學士 石谷傳市郎
文學博士 芳賀矢一
陸軍中尉 芳賀眞五
法學士 花岡敏夫
文學博士 服部宇之吉
文學博士 萩野由之
醫學士 西卷保市
文學士 粥傳平
醫學博士 土肥慶藏
醫學博士 千葉稔次郎
法學博士 副島義一
文學博士 坪井九馬三
理學博士 坪井正五郎
工學士 辻本滿丸
工學士 直木倫太郎

○文學、美術、音樂、地理、歷史、數學、醫學、星學、動植物、鑛物、地質地文、藥學、農學、林學、工藝諸學科及政治、法律、經濟、軍事等ありとあらゆる學問の精粹を拔き、神社、佛閣、年號、人名、地名等、苟くも文明人士の見聞に必要なる、一切の事項を羅集し、これを**四萬**の項目に聚ぎ各科專攻の諸大家**博士**百餘名が本書編纂の意を諒として執筆せられたる最も簡明なる**整頓せる國民的實用百科辭典**にして共體裁は獨のマヤー・パンドレキシコン、佛のプチラルーズに準據し材料の東西を併せ、挿圖の精妙を極めたる等遙にこれ等の先進辭典を凌駕す

發行所 東京神田 合資會社 冨山房 振替貯金口座 五〇一番 電話本局 一〇三六

國民百科辭典

○性質に於て文明を縮包せる書たるのみならず、現代諸大家の新知識を網羅したる點に於て亦我文化の表彰、學術界の射映と稱すべし。四萬の項目は悉く國民を教ふる知識たらざるなく四十餘枚の挿畫、一千五百個の木版は宛として博物館に遊ぶが如し。僻遠の地に在る人も、學校なきを憂ふるヿ勿れ。修學の便を得ざる人も良師なきを歎ずるヿ勿れ。國民として向上心に富む人、文明人士として素養を忽にせざらん人は、必ず國民百科辭典の名を、記憶せよ。

○執筆者は現今の專門大家を網羅し、一々の說明精確細明に、畫家、彫工、印刷所等悉く皆現今第一流の特技を發揮して、巧妙精緻。最廉價にして最大價値あり。最輕便の外形は最豐富の內容を包む。本書を購ふ人は十年螢雪の勞を積むに均しき利益を受け購はざる隣人は十年の進歩に後るゝを覺悟せざる可らず。教育する人、教育せらるゝ人、試驗する人、試驗せらるゝ人、社會の耳目たる人、將來社會に雄飛せんとする人、請ふ本書一部を備へて其知識を增進せよ、其心神を樂ましめよ。而して又其圖書館を飾れ、その家庭を賑はせよ。

◎特に男女學生諸君に告ぐ

學生諸君に向て必携の書を擧ぐれば、國民百科辭典に如くはなし。何となれば、國民百科辭典は即ちあらゆる學問の索引たれば也。一切の教科書の秘鍵たれば也。高等中等、初等の別なく、專門普通を問はず、千百の學科に於ける千百の疑問は本書を繙きて悉く氷解せらるれば也。古今の學者の腦漿は皆本書に結晶したるを以てすべての試驗問題も遂に本書以外に出づる能はざれば也。

○**五十日間實費特賣** 特價金貳圓八拾錢（正價參圓七拾錢）送料：內地拾六錢

○四六倍裝釘極美千六百頁全一冊
十一月中旬ヨリ申込着金順送本

○見本進呈 往復葉書にて御申越次第挿畫入冊子見本送呈：

博文館發行



博文館發行の當用日記懷中日記の正確にして便益なること既に定評あり世間幾多の同種發行中に獨り異彩を放ち其發行部數の如き到底局外の人の測度し難き高に及び今日にては日記と云はゞ博文館を聯想するか如き盛況を呈すること本館の榮とする所なり是を以て四十二年度分は特に紙質を精選し印刷を鮮明にし改良を加へ部數を增加し一點遺憾なき計畫の下に發行し全國賣捌店より發賣せり乞ふ倍舊の愛顧を賜はらんことを。

紙數

懷中日記各三百〇六頁
當用日記各五百四十頁

(附錄內容)

當用日記

- ●金錢出納錄
- ●知己人名簿
- ●雜錄
- ●諸統計表
- ●米價換算早見表
- ●諸税則摘要
- ●郵便電信諸規則
- ●新式萬年曆
- ●徵兵規則

懷中日記

- ●雜錄
- ●統計表
- ●利子早見表
- ●諸税規則摘要
- ●郵便諸規則
- ●徵兵規則大要
- ●年齡早見表

賣捌所は全國各地の書籍雜誌店及紙類文具店等到る所にあり

取次希望の方は御申込次第精々御便利に御相談可仕候

發兌元

東京市日本橋區
振替貯金口座

(その四)

明治四十二年度日記類

●博文館日記の特色

用紙　何れも海外製紙會社へ特に注文漉製せし特別上等紙を用ゆ

印刷　日記印刷の爲新鑄せし活字を以て注意印刷す頗る鮮明なり

製本　弊館が特に英國より輸入せし新機械を以て堅牢美麗に製本す

趣向體裁

（**當用日記**）日々欄には過去同月日の重要歴史、七曜、干支及び詩歌俳句等を上欄に錄し、天氣、寒暖發信、受信及び摘要の記入欄を其傍に新設す尚各月の初めには其月中に行ふべき事項を條記すべき欄を新設し、毎日記入欄には細罫を附し秩序ある記錄たらしむ。附錄としては紙數十二頁の補遺、金錢出納表、收支一覽表、友人住所錄、農家年中行事、某醫學博士の衛生心得及び内外の最新重要統計數十頁を載せ卷末には日常必須の諸規則を網羅せり。

（**懷中日記**）毎月の初に當月の行事、食品月令、遊覽案内等を掲げ日々の上下欄に内外名家の格言を掲げ其他七曜、干支、天氣、寒暖を附記し卷末には當用日記の如く日記補遺錄日常用の事項諸税則及最新重要の統計表等百頁を附す。

本懷中日記卷頭には皇室皇族の御繁榮歴代の天皇大祭祝日日曜表を色刷として掲げ新形は背面に他の二種は腹部に鉛筆挾みを設く

當用日記正價

大形（菊判）**上製**（舶來洋紙總クロース金文字入）
▲正價金五拾錢　郵税拾四錢

中形（四六判）**特製**（舶來洋紙背皮美製金文字入）
▲正價金五拾錢　郵税拾錢

中形（四六判）**上製**（舶來洋紙總クロース金文字入）
▲正價金卅八錢　郵税拾錢

小形（菊判半截）**上製**（舶來洋紙總クロース金文字入）
▲正價金三拾錢　郵税八錢

本當用日記卷頭には皇室皇族の御繁榮歴代の天皇大祭祝日日曜表等を色刷として掲ぐ

懷中日記正價

新形（舶來洋紙[illegible]美本總クロース金文字入細長形鉛筆挿[illegible]）
▲正價金貳拾錢　郵税貳錢

上製（舶來洋紙[illegible]美本總クロース金文字入紙數三百○六頁）
▲正價金拾八錢　郵税貳錢

並製（舶來洋紙總クロース表紙金文字入美本紙數三百六頁）
▲正價金拾貳錢　郵税貳錢

本町三丁目 第二百四十番　博文館

幼年畫報 第三卷第拾五號 増刊

觀兵式

(太郎) やア美しい本だなア、勇ましいぢやなイか、まづ表紙からみる事にしよう、

(次郎) ア、こりや陸軍大將だね、見給へ胸には金鵄勳章の功一級もある、僕アどうしても、陸軍士官になりたいなア、

(太郎) さア次ぎを見やう、オ、軍樂隊の君が代吹奏だ、ソラ彼方から大元帥陛下がお馬車でいらつしやる、綺麗だね、

(次郎) オツト次ぎは歩兵の行進、

(太郎) 夫れから騎兵だ、隨分馬が居るぢやないか、

(次郎) オヤ砲兵が祝砲を打つて居るドドン〳〵ドドン〳〵!!!

洋裝菊判極彩色
石版十六頁
本文活版十六頁
寫眞附錄四頁
正價金十錢
郵稅(本邦內)二錢

十一月十五日發行

嚴谷小波作
尾竹竹坡畫

東京 博文館 本町



女(なの六)


十一月一日より
十五日まで
祝月賣出し
餘興福引
最高百圓、以下數千點
オコーチャン
大丸呉服店
東京日本橋區
通旅籠町
電話浪
八三三
六六三
六〇五

おつな様な、氣取つた様なものが、色々ありました、

「こう、何んだか、宛然、博覧會の工藝館へ這入つた様な氣持が致しますの子。」

と私が云ひますと、御母堂は、

「どうも、これでは高等勸工場ですよ。」

と被仰る、ハット氣がついて見ると、足許には、籠細工の炭取が幾個もころがつて居るのです。其内久子さんが銀細工が見たいと被仰つたので、私と二人で、其方へ行つたのです。」

「銀細工も、そんなに品數は澤山ありませんでしたが、御注文になれば、何んでも拵るとの事でしたが、久子さんが、

「今直に欲しい様なものも在りませんから、少し休みませうか。」

「本野さんは、どうなさつたでせう。」



「お母様と二人で、何所か見て居らつしやるのでせう。」

「……今に、此所へも廻つて見えませうから、まあ掛けませう。」

と、二人は傍に置いてあつた、安樂椅子へ腰をおろしたのです。

序に申しておきますが、此銀細工の所は、別に一區劃凸出して居て、四方を眺められ、大變風通りのよい

所です、向ふの方では、他の韃靼人連が、久子さんの、あざやかな洋裝姿が、眼に立つためか、頻りに此方を凝視たり、指さしたり、して居るのです。されど私は、その方へ背後を向けて、久子さんと相對してかけたのです、かくて、皆さんを待ち合せる間に、二人が話した事は、まあざつとこんな事です。

「私も、今度はあなたが、必つと痩せて御歸朝になるだらうとおもつて居ましたら、先日、お迎ひに出た時、あんまりおふとりで御元氣らしいので、實は喫驚り致しましたよ。」

「何故？。」

「何故つて、露西亞は、大變寒いといふし、それに、長い〳〵西比利亞鐵道で、さぞ〳〵御疲になつたらうとおもひまして子。」

「露西亞は、寒いには、それは〳〵、非常に寒くて、車中は大抵、氷點以下で、チバ河の上は、電車が通ふ程の厚氷が張りつめますけれど、それにはそれで、チアレト防寒の設備が整つて居りますからね、部屋は二重窓になつて居りまして、中には暖爐もありますし、外出には、毛の被服もあれば、完全な帽もあり、ここで想像した程ではありませんよ。」

「橇って、やはり人間が牽くのですか？」

「ナアーニ、馬の橇ですよ、腰から下は風の這入らない樣に、暖かくよく出來て居りますよ。」

「さうですか、……そして、先達一寸伺つた、ドラゴレね、あれはどんな御樣子でした。」

「ドラゴレ？、あゝ汽車の事ですか、あれはドラゴンではない、ワゴンですよ、ドラゴンと申すと龍の事になりますよ。」

「左樣々々、つひ私はうろおぼえでしたものですから、オホヽヽヽヽ、ドラゴンだなんて間違へて。」

「ドラゴンと申せば、面白い話を思ひ出しましたよ。」

「どんなお話し？。」

「いつぞや、巴里で、新着の或る軍人さんをオペラに御案内致しましたらね、其御方が、西洋の音樂にあまり趣味を持つて御出がなかつたので、つひ居眠りをな

すつて仕舞つたのです。」

「まあ。」

「所が、其幕が、丁度夜の場で、舞臺も何も眞暗で、龍が出て來る所でしたが、其軍人さんの鼾聲が、ゴーゴーといつたのを、隣に並んでお出だつた、お連れの夫人が、ドラゴンの鳴く聲かとおもつて御出でだつたとの事で、あとで大笑ひを致しましたが、其後、其軍人さんの事を、ドラゴンさん、ドラゴンさんと、綽名してお呼び申して居りましたのよ。」

「まあ、隨分、圖珍種ですねえ、……そしてその、肝腎のパゴンは?。」

「パゴンは、今度私達が歸るに就て、わざ〳〵露國政府から寄贈されたものですが、客間もあれば、寢室もあり、勿論、風呂場もあれば、料理部屋も附いて居りまして、少しも、旅中の不自由はなかつたのです。」

「まあ、それでは恰度、一軒の家みたいですのね。」

「あちらのは、廣軌鐵道ですから、巾も廣し、まあ、そんな樣なものでしたね。」

「そして沿道の風光は?。」

「バイカル附近へ來るまでは、唯もう、一望荒寥な原野ですけれど、バ湖の近くになつて來ますと、山もあれば、川もあり、なか〳〵好風景でしたよ、それに、氣候も恰度春の樣で……………」

と、こゝまで談話の進んだ時に、先刻見失なつた、御二人の御姿が此所へ顯はれましたので、私達は、遺憾ながら、談話を中止して、立ち上りますと、御母堂が、

「もう、三階は大抵に止して、少し階下へ往つて買物を仕樣ぢやないかね。」

と被仰るので、お後に附いて參りますと、チラと、側らの寫眞室と書いた、金文字に眼がつく。

「アヽ、當店に寫眞室があるのですよ。」

「寫しませうか。」

といふ間もあらせず、側のぬからぬ老番頭さんは、手をとらぬばかりにして、「まあ〳〵どうぞ、此方へ〳〵。」と案内をするのです。

此所は狹けれど、化粧部屋が二ツ並んで居て、鏡や、

櫛や、其他の化粧道具が、一切整然と揃つて居ると共に傍の衣裳戸棚には老若男女、種々様々の衣服が重ねてあるのです。其中には、軍服もあれば佩劍もあるといふ有様で、誰にでも直く寫せる様になつて居るのです。

「當店では、歌舞伎衣裳を請け負ふて居りますから、それはもう、二時間前に御通知を下されば、どんなお好みの御服装でも調へます、……サアどうぞ御仕度を………」

といふて、番頭さんが出て行つたと思ふと、入れ違ひに、衣裳係の女中が出て來て、かれこれ、久子さんの御身のまはりなどをとり直して居ります。

やがて撮影場の方へ行きますと、一寸まあ、奏任待遇とでも云ひ相な、立派な髯のある寫眞課長らしい人を始め、其他、洋装和装の五六人の助手が出て來て、勿論、例の案内の老番頭さんも、衣裳方の女中も、大勢で、がや／＼と撮影の用意をするのです。

そこで、私は、まあ、たつた一組の寫眞を寫すに、こんなに、大勢かゝつて、そしてどうして利益が在るものだらうと心ひそかにおもひました。どうも、大資本家のする事は、到底私達の様なものには合點がゆきかねる所が在るものですね、まづ始めに、本野さんと、御母堂と、久子さんと三人で御寫しになつて、後から再び、久子さんと、私と二人で、都合二組寫さうと云ふ事になつたのですが、始め撮影場に這入ると、直に本野さんが其背景畫に眼をお注めになつて、

「アー、それはなか／＼よく出來て居る様だが、誰の作です?」

とおたづねになると、

「イヤ、これは實は、その、獨逸からわざ／＼取寄せましたので。」

と番頭さんがお答へ申上げて居る。

「日本物で間に合せたらよささうなものだのになあ。」

「それが、どうも日本には、適當な背景畫家が御座りませんですから、その、どうも、少し………」

「背景畫ちなか／＼趣味のあるもので、かつは、相當

に收入にもならうから、誰れかやるとよいのにな。」

「ヘエ、ヘエ、御尤も樣で……。」

さるほどに、もう撮影の準備が調つたので、本野さんが中央にお立ちになつて、二人の御婦人方は兩側へおかけになる。

私はこれを遠くから見て居りますと本野さんが、

「僕は、頭部の禿が見えるといけないから、少し仰むく事に仕樣かな。」



「それよりは、この方が。」

といふて、私は自分の鼻の下を一寸おさへたのです、といふものは、本野さんのお髯も、どう云ふ譯か、恰度お鼻の下丈が、眞白になつて居るのです、私は御目にかゝる始めから、それが氣になつて色々申上げて居たのです。まだそんなお齢でもありませんのにネ。

「ナニこれはかまわん〱。」
といふて笑つて御髯を撫でゝお出になる、其内。
「ハイ、どうぞ暫くお靜かに！」
といふ事で、もう其方はおしまひになり、今度は、私達の順番となる、如何樣な風に寫しませうかと、久子さんと御相談をして居ります傍から、紺絣の着ものに、小倉の角帶を締めた小僧さんが、
「外景がおよろしう御座いませう。」
といふて、チョコ〱と、猿猴の如く背景掛に登つて、園林の遠景あるものを卷きおろす、其所へ自然木の臺を出して、私はそれに腰をかけ、久子さんがお立ちになる事となつたのです。
　立つなれば、洋傘が在つた方がよいとて、とりにやつて、それの來るまで、待つ間に、私が、久子さんに、次の樣な事を話しかけたのです。
「私今日ネ、馬車に乘る拍子に、フット、いつぞや、あなたとやはり馬車で淺草へ御一緒に往つた事をおもひ出したのですよ。」
「私も、一寸おもひ出しましたのよ。」
「エーあなたも！」
「あの時は、淺草で玉乘を見て、そして、おしるこも喰べに連れて往つてもらひましたつけね。」
「さうでしたネ、もう、二十餘年になりますのネ、殆で夢の樣ですわ。」
「今日も、あの時の樣に仲よく寫しませうネ。」
なんどと女同志の事なれば、竹馬にはあらざるも、おしるこの昔、玉乘の昔、少女の昔に立ちかへつて、うつかり話をして居りますと、本野さんが向から、
「モシ〱、たまさんは、たゞさへ顏が大きいのに、そう前へ出ては、尙更、不調和になりますぞッ！」
と被仰るので、二人はハット、今のお婆さんの現實に立ちかへつて居ずまゐを直す。
「今日は、外國の田舍へたまさんが來た樣な風に、もう少し姿勢を正してかゝらねば……。」
　どうも困つた事になつたわいと、モガ〱して居りますと、其時には、もう先刻の奏任髯の寫眞屋さんや

その他の人々も姿をかくして、紺絣の小僧さんと、もう一人居るきりです。

やつと撮影が済んで、

「只今一寸現象してみますから少々御待ちを！」

といふ間に、今、此久子さんが、此店から貸りて御つきになつた洋傘を見ると、水色羽二重の絞りで、なか／＼派手な上品なものです、柄は白い象牙の様なものでそれでたつた五圓餘の札がついて居るのです。

「まあ、安價ひものだ事！。」



と先刻、「テーブル、クロッス」の所で、本野さんを笑つた私が、つひ、こゝでは又同じ様な事をいひ出しますと、今度は本野さんが、

「こんなのは外國へ持つて行くにはよいですが、併しこれは格別安くはないです。」

と被仰る、成る程、私などは、絞りや、透綾の洋傘なんて、見た事がないから、相場が解らないのだなと、一人ひそかに感じ居りました。

これでやつと撮影場を出でゝ、二階へ降りたのです。

（未完）



雜貨店經營の十年間

（故一葉女史令妹）

樋口くに子

さすらへの三年

此處（小石川の警察署前）へ店を初めてから十年……姉の一葉が歿してからは十三年になります。その間の三年は私の漂浪時代でした。

姉の歿くなつた頃は此の下の丸山福山町に居りました。それは明治廿九年で、その時姉が二十五、私が二十三でした。間もなく引拂はうとしましたが、「一葉全集」編纂の事が初まつて――それは齋藤緑雨さんと戸川秋骨さんが擔任して下さることになつて居ましたが戸川さんは直きに山口の高等學校へ赴任なさつたものですから、専ら緑雨さんが盡力して下すつたのです。それで、「全集」でも出來たら又何うかなるだらうから、まづ其儘にしてゐたら宜からうと緑雨さんなぞが言つて下さるので、然う斯うして一年ばかり其處に淋しく居る内に、母が病み付いて遂々その翌年（卅一年）の二月に歿くなりました。そこで愈ゝ一週間ばかりして其の家を引拂つたのです。

愈ゝ孤獨になつてさて何處へ參りませう？　兩親が御承知の通り田舍――甲州――の者ですから、その方の親類でも便つて寧そ田舍へでも行つたならば、却つて安心な月日が送れるかと思ひ、けれど又多時中間が途絶れてゐた親類ですから、其處へ突然に行くのも變なものとも思ひ、其頃直き其處の戸崎町に居た大橋乙羽さんに御相談した處が、「それは田舍へなぞやるのは氣の毒だ。東京で育つた者は却々田舍では辛抱が出來ない。まあ可いから暫時我家に居たらよからう。時

(乙羽さんの夫人)もゐるのだから、一緒に裁縫でもしたり讀書でもして。」と其麼譯でお世話になつて居りました。然うですね、四五ヶ月も居りましたらう。

隱れたる身

その内に緑雨さんなぞの意見で、『貴女がゐては都合が惡いから、少時居處の知れない樣にしておくがいゝ。』と言ふのです。兄にかゝる負債がありました處が、それが姉の頭へかゝつて來て居つたのですから、今度は又遺族たる私へかゝつて來たのです。其の始末を付けるために、暫時身を隱すがいゝと緑雨さんなぞが仰在るのです。



ナニ私が見えなくたつて、その負債が消える理由もありませんが、然う言つて下さるものを『それでも私は顯れて居る』とは申せません。それで方々へお世話になり、また妙な處ですが吉原に緣故の家があつたので、私は吉原に隱れて居つたのです。然う恁うする內年も代つて三十二年。その年に此處へ參りました。

初は石筆ぐらゐ

此處へ參つたとは申せ、極く見すぼらしいものでした。夫はもと田舍の人で、東京へ來て學校通ひをしてゐた身ですか

ら、實に經驗のない商人です。ですから二人とも商人らしくない商人で、未だにその風が拔けません。どうもチト妙な商人でして……。

　この業を初めた理由ですか。別に深い理由もありませんが、此家はもと私共の參るより前八九年間やはり同じ雜貨店――ではありません學校用品の、石筆に鉛筆位少し陳べて居つた小さな家だつたので、それが又私とは親類交際にしてゐる程の懇意な間だつたのですが、その家が賣物に出ましたので、其れならばといふ譯で買つて出たのです。そして子供にでも出來る商賣だから可からうといふ譯だつたのです。ですから初めはホンの子供相手の、石筆位賣つて居りました。

　十年間の發展――などゝ大げさに仰在られるとお耻かしいのです。御覽の通りまだ這麼事で、申し上げるにも足りません。

　ですが時折申す事ですが、「よく今年は何うも不可ません、昨年よりはだめです」と、儲からない〳〵とばかり言ふ人があります。それは商人の口癖ですが、「其麼に不可けりや一年毎に落ちてゆく譯ちやありませんか。よくそれで商賣が續きますね」と言つて笑ふ事です。自分も商人でゐながら商人の事を評したりなどして……。けれどもまあ其麼物で御座いませう。

私の流儀

　一番感じて居ることは、どうも得てお客樣が、商人を餘り詰らない者にしすぎて被居しやる。また實際商人の方でもかぶせる樣な事をするのがありますから、それでお客樣と商人との間柄が何うも旨く行つて居りません。商人と言へば僞を吐くもの瞞着するものとして被居しやる氣味がありますから、眞正にこれがお客樣に適當と思つてお勸め申しても、「旨く言ふねえ」と被仰られて了ふと、ギタリとして了つて二の句が繼げなくなります。商人の方でも親切に品物を見立てゝ上げ、お客樣の方でも信用して買つて行つて下さると可いのだがと、これは私の始終感じて居る事です。

　ですから何でも此の流儀で、此方からは眞正に可か

らうと思ふ物をお勸めして見るより外はないと思つて居ります。また此の流儀から、何でも敏捷く立廻つて賣物をぐ／＼と賣る様な事を致しません。例へばハガキが流行ればハガキを紀念スタンプ流行ならばそれの付いたものをといふ様なこと。それを全然致しません。何でも確かな良い品物の、長く行はれるやうな物を置きます。また仕入方でも機敏な巧みな驅引をして、法外に廉く仕入れるといふ様な事も出來ず、又努めも致しません。唯一厘でも廉く仕入れて廉く賣り捌くやうにして居ります。



所謂お客あしらひ

何でも此方の良いと信ずる物を差上げるといふ一點張りでやつて居ますが、世の中は廣いものですから、お客様によつては寧ろお勸めしない方の物を好む方があります。此方は熱心に適當と思ふ物を勸めて居るのに、ヒヨイと他の物を買つ

て被行しやると、飛んだ拍子拔けをする事がありますて可笑いものですよ。

店によつてはお客樣の目移りのなさる品々を、其れも此れも皆結構皆惡くないにして了ふのがありますがあれはお客樣に不愉快なものだらうと思ひます。お客樣次第で適當不適當がありますから、其處をお尋ねになるのに、それも適當、これも適當、悉皆「恰ど宜しう御座います」では買ふ方が不快でせう。自分が買物をして見て然う思ひますもの。成程賣る方から言つたら、何れも〳〵皆お氣に召す樣に、皆「恰ど宜しい」にして了つた方が都合がよいでせうが……。

媚やかな顏で迎へられるのは誰しも心持のよいものですから、それは何店でも勉めますが、その普通以上に世辭愛想を振まいて大層お客あしらひをする家もありますが、宅では何も然いふ態とらしい事は不得手な方で、所謂お客樣あしらひをあんまりしない方です。

お馴染との情誼

それでもまあお客樣へ對して唯々親切にと思つてるからでも御座いませう。小中學時代から其れ以上の學校へ被行してまでも、相變らず來て下さいますし、他の區へお越しになつても態々廻つて買ひに來て下さいます。大學も御卒業でそれ〳〵職に就いて被在しやる方が尋ねて下さつたり、中には御結婚になつたといふので、令閨を連れて、御披露に被入しやる方もあります。お馴染といふ者は嬉しいものぢやありませんか。又中には地方へ被行した方が、出京したと言つて久し振で御訪問下さる方もあります。

でも稀にはお客樣と喧嘩を初めて了つたりして……「それは貴方が餘り御了解にならないぢや有りませんか」などゝ言ひ出して了つて。どうも不可ませんねまあ午前午後とも學校のある時間は其麼でもありませんが、朝夕は目を廻すのです。店の一方に雜誌をも陳べてあるので、皆樣が充滿押込んで被入しやる。何をくれ彼をくれと頻りに仰在る。それに又共同販賣部を托されて、小石川區一圓の小學校の教科書を宅で一手

に致すので、その時季などが衝突つてゐる時は、御飯を戴く暇がないのです。然ういふ時に面倒な事を長く言つてる方でもあると、不覺『まあ何でもいゝからお持ちなすつて下さい』などと言つて了ふのです。お客樣に向つて其麼事を言ふ法があるものか？と良人にも言はれ、自分からも後で自分を叱るやうな事があります。時々商人らしくない事をして了つて不可ませんね。

それでもよく『今度商業學校へ入るのだから、保證人になつてくれないか』などゝ言つて被入しやる方があります。這麼安つぽい人間の判で宜う御座いますかなどと夫が申しますと『結構だから』と言ふので押して上げます。ですから愈々卒業式の時などには、是非來てくれと仰在る方がよくあります。つひ上つた事もありませんが……。



夫はをかしい人でして、何でも廣くお馴染になつて日本中の各府縣何處へ旅行してもお馴染の方がある、といふ樣にならねば不可と申してをります。又暑中休暇で歸省なさる方々が、おみやげに何を持つて來よう？。と仰在るので、「何うかお國の名物をおみやげに願ひます」と言ふと、歸りにと持つて來て下さるので す。それで諸國の名物をよく戴きます。お馴染は實に嬉しく有難いものですね。まあ斯ういふ事があるので商賣も面白いのです。

學者と坊ちやん

今朝も被入しやいましたが、この先の宅にお住ひの宏文學院の某先生などは、ホントに面白い方でして、途中で雨が降ると宅の足駄を穿いて被行して、翌日天氣だと其れを穿いて來て御自分の駒下駄と穿きかへて被行しやる。稀には『他へ出掛けるのだが財布を忘れて來た。錢を財布共に貸しておくれ』などゝ言つて持つて被行しやるのです。長いお馴染です。その他箕作(住吉博士)さんだの、菊地(大麓)さんだの、田尻さんだの、皆長いお華客樣で、此の先の星野(恒博士)さんなどは、開業以來のお馴染です。安藤坂の三井(三郎助)さんの坊ちやんなぞ、お二方とも被入しやいます。坊ちやん御自身で買物をなさるのは私の處ばかりで、他では絶えて買物をなさる例はないのです。お錢を持つて被入しやる時もあれば、記けておいてと仰在る時もありますが、毎日尤も――二度とも申せませんが――一度被入しやらない日は御座いません。面白いのですよ。それから其處の松平さん――越前樣です。又久堅町の播磨樣なぞへも始終伺ひます。

ですから小僧も二三人ありますが、品物配達と商品を取りに行くとで、朝から晩方まで家にゐる時は少しもありません。

小僧の扱ひ

方々の店の小僧さんも、箱車を挽いて絶えず宅へ參りますが、それらの小僧さんの中でも不好いのがあり

又可愛らしくて買つてやりたいと思ふ樣なのがあるにつけて、小僧の良否は大影響を及ぼすと思ひますが、良いのが滅多に無いには一番困難致しますよ。それも家に置く分には面倒はありません。若干でも出らせないやうに躾けられますが、外へ出すやうになつてから頽されて了ひます。他の悪いのを見習ふので、つまり一般が悪いために家で躾けたのが其の力に負かされて了ふのですね。何でも夜度々厠りへ起きる小僧は最う油斷がなりませんよ。晝間何か悪い事――買食など――をしてゐるために然うなるのです。何でも思つてる事や望みはずんずん言ふがいゝ。隠し事をする樣になつては不可からと始終申して居ります。けれども兎角外へ出るやうになると、世間の悪風に負かされて了ふから困ります。

ですから宅へ來る小僧などには「お前既う用が濟んだらずんずん歸るがよからう。ブラブラして居ちや不可」などゝ申すのです。それに夫は其麼場合には餘まり世辭つ氣なく申して了ふ方ですから……。でも其麼時には一寸傍から「御苦勞樣」位言つて勞はつてやるのです。

御覧の様な姿でも

「斯うして傍見てゐても面白いやうだね」などゝ仰在る方もありますが、まあ其樣に思つて居ればこそ出來るのですね。最う近頃は手が足りないし、まるで是れおや勞働者だと言つてる位で、朝――それも早いのです。學校の行きがけに寄る書生さんが多いのですから――何でも起きてから夜十時に閉めるまで、夫は殆ど立つたきりで坐る隙がありません。私は此頃は病後でもあり、帳場に坐つたまゝですが、其處へ又子供が取付き、そのために奥へ立つて了つたり、それにもともと雑貨で細かい物の商賣ですから、それは隨分手數で面倒なものです。

それに帳簿の整理、商品の整理などもありますし、夫は閉めてから一時間半位は毎時帳簿の整理などに懸つて居ります。私は子供が多勢居りますし、整理の手

傳ひも碌々致しません。子供ですか。學校へ行くのが二人、行かないのが三人あります。

一番下のは乳母に任せておきますが、上の二人は私の廻りに居りがちで、それに今は病後で御覽の通りの櫛卷、姿はと言ふと盲目縞のやうな恁麽物を着て、髪も姿もかまつては居りませんが、それでも雇人任せにして奥で煙管をポン／＼はたいて居つて、お客樣には貴に關はないでゐるよりは、これでも帳場の前に居る方がよいので、又家の者でないとお客樣の方でも滿足なさいません。ですから御覽の通りの姿でも、恁うして始終お客樣に接して居るのです。で、まあ段々お馴染も殖えて、お蔭樣で是れだけにもなりました。けれどまだ言ふにも足りません。これからで御座いますよ。





孃として家事を取りつゝある私の感想

外相令孃　小村文子

些事と見えて必要なる事

私は跡見女學校出でございまして、五年前に卒業致しました。母（小村外相夫人）が病身なもので御座いますから、私が家事を始終見て居りますが、まことに不束でお愧かしう御座います。

　家事を取るやうになつて第一に感じました事は、學校に居つた間の興味が餘り空想に走つてゐた事です。空想と申して可いか否いか存じませんが、つまり實地の事に興味を持たなかつたと申す事です。これは何方も然うで被在しやいませう。どうも學生時代は文學的空想的の事に趨り易くて、實地に興味が向きません。處が家事を取りますには頭腦が實地に役に立ち、實地に興味を感ずるやうで無ければなりません。ですから興味の本位が全く違ひます譯で、さあ其處から種々の困る事や分らない事が出て參るので御座います。

　まづ私の困る事は筆蹟で御座います。父の職業が職業ですから、自然交際上の手紙なども多う御座います。その度に「筆蹟が最つと〳〵美はしくなりたいもの」と始終存じて居ります。筆蹟などは些事のやうですが、それが實際に當つて見ると却々必要が多いものですから、私の樣に拙ないと實に困ります。けれど學校に居る頃は誰方も輕んじがちのもので、跡見女學校などは比較的に重んじて居つた方で御座いますのに、それでも餘り注意なさらない方が多う御座いました。些事と思つて一向氣に留めない事が、實地に當つて見ると大變入用なので困るので御座います。

看護上の智識の修養

而して又私が必要を感じましたのは看護法の心得で御座います。近頃も弟が少し不加減であつたのを看護致しまして、又この事を感じたので御座います。上流の家庭で御座いますと、必要があれば看護婦を雇へば宜しいので、其麼事を自分が一々知つて居らずともと、此の樣に孃時代には思つて居ませうが、然し親となつた時には、子供のために直ぐ必要を感ずると思ひます。たとへ妃殿下の御身の上で御座いましても、子供のためには、御自身で心配遊ばし、御自身手を御下しになるからは、やはり是れは一通り心得て置きたいものと存じます。

今は學校でも是等の事の敎授が餘程よくなりました樣ですが、然し實地の役に立つだけのお稽古は出來て居ない樣に思ひます。そして孃時代には最う一般に家事に關係致しませんので、殊に上流は然うで御座いますから、さて夫人となりましてから分らない事が種々あつて困るので御座います。それ故私なども『これは學校で習はなかつたから分らない』と申しては笑はれます。

殊に上流家庭の孃が然うなりますのは、一つは後々主婦になつても家政を取らすに、家令家扶に打任せて置かれるからでも御座いませうが、それでは餘りに實地に懸離れて不便が多からうと存じます。

上流令孃の思想の變遷

學科の外に音樂や、生花、茶の湯、繪のお稽古などと、いろ／＼のお稽古事は今も以前も左して變りは御座いませんし、衣服、裝飾の事なども格別の變りは御座いませんが、思想の上には大層變つて來た所が御座います。そして外に現はれたものでは、交際といふ事が大層行はれて參りました。これは御兩親の方からお勸め遊ばすやうになつて居ります。ですから上流家庭の孃は、交際の方には早くから慣れるやうになつて居るので御座います。

斯ういふ風で多くの人に接するからでも御座いませうが、兎も角も思想は大層變つて參りました。依頼心が少なくなつて獨立獨行の氣象が餘程出來て參つたのは善い方面で、一面から申しますと自己中心の思想が亦なか〳〵盛んになりました。それは最う華族のお姫様——まだお幼い方々の上に見えて居ります。まして最う女學校も御卒業頃の方々は、兩面ともに猶更進んで居るので御座います。



常識の缺乏

けれども常識の不足なことは矢張私ども同様のやうに思ひます。人様の事よりも私自身の經驗で御座いますが、學校は卒業しましても何うもまだ腹が出來て居りません。頭腦が纏つて居りませんから、何かに就けて事が捌けません。

ですから私のやうに家に引込んでばかり居る者に

は然ういふ實地の常識を付けるやうな讀物を、雜誌にでも著書にでも多く欲しいものと存じます。これは御同感の方が多からうと存じて居ります。一例を申せば看護の心得のやうなこと。其の他總て纏まつた學術以外の、一寸した智識、心得の種々で、常識の養ひになるやうなものを讀まねばと存じて居ります。

そして又學校でも、最つと應用的に敎へて戴いたら可からうと存じます。けれども家庭で親御樣達が、最つと學んだ事を應用させるやうにお仕向け遊ばすのが肝要で、それでなければ到底だめと思ひます。と申しましても又實際を見ますと、學校からお歸りになると今度は藝事のお稽古で、とても家事の練習を遊ばすやうな餘裕は御座いません。又然ういふ事は爲ない事に決めて被在しやるやうで御座います。

けれども常識の養成から申しますと、技藝のお稽古は少しづゝにお氣長に遊ばしても、少しづゝ家事に手慣れて御覽になる方が可いやうに存じます。常識の缺けて居りますのが、私は一番耻かしいやうに思ひます。いつそ學校日々の課業を最少し輕くして戴いても、それを實地に使つて見て、應用の出來るやうになる方が可いかと思ふ位で御座います。ともかく何とかして、私共は最つと常識を得なければならないと感じて居ります。

有りたき物と無き物

交際の漸々行はれて參るに連れて、中には男女交際の道も最つと開かねばならぬといふところから、「華族交際會」と申す樣なお催しを爲さつて、お知合の方々をお招きになり、舞踏會などをお開きになる向も御座います。一般に申せば進歩で御座いませう。けれど唯今の處では、この男女交際會は利もあれば弊も御座います。まあ然う申して居つたら進歩する道はないものかも知れませんが。

お姫樣同士の交際になりますと、ピアノとヴアイオリンの合奏を遊ばすといふ樣な事も御座いますが、まづお話が主で御座います。それにつけて私の有りたい

物と思ひますのは、談話會とか其の他の研究的の會で御座います。どうも研究のための會と申す樣な事が餘り御座いません。私のやうな口不調法なものは、談話の練習の出來るやうな組織でもあれば幸だと望んで居るので御座います。

そして私共に何うも缺乏して居ると感じます事は、物をたまかにすると申す事です。どうも物を粗末にする癖があつていけません。餘程氣を付けましてもまだ屆かない處が多う御座います。私共がお老人の氣に召さないのは無理もない事と存じます。私は姑御と嫁との不和なのは新舊思想の衝突と申す樣な大げさな事よりも、却つて此の小さい處――物をたまかにしないと言ふやうな處から來るのではないかと存じます。大きい事に當つて判斷を下しますのは、それは新婦人の方が正しく出來るで御座いませうが、物をたまかにする事は到底老人に及びようは御座いません。殊にそれが私共に一番缺けてゐる處と平生から感じて居ります。

新らしき趨勢

上流家庭の孃の理想はと申しましたら、やはり賢母良妻といふ事を思はぬ者も御座いますまいが、中には交際界に出て、あつぱれ其の世界の女皇と輝くのがお望みの方も御座いませう。

其のお望み通りになりましたら、實際前に申す樣な家事などは取つて居られぬ事になりませう。然なくとも舊大名華族のお方々などは、家扶家令とそれ〴〵格式が定つて居りますから、夫人が家政を御覽になる樣な事は尠なう御座います。

けれども段々夫人が家政を御覽になつて、大體の指圖は御自分から遊ばすといふ樣になつて參ります。現に最う孃で被在した時代は、ホンのお姫樣で被在したお方が、夫人にお成り遊ばしてから、ガラリと容子のお違ひになる方が御座います。そして然ういふお方に非常に敏腕なお方が御座います。恁ういふのが新しく進んで行くべき傾向かと存じて居ります。

神經衰弱の療法

（腦髓作用を轉換せよ）

女醫　前田園子

頭のつかひ方が下手

女子は勉強をした時に休む方法を知りません。これが身體のために甚だよくないのです。尤も女子は學問をいたすにしても、たゞ其の方の勉強ばかりといふではなく、お仕事をするとか、お料理をするとか、いろいろと仕事が複雜となつて居りますから、つひまぎれて居るのですけれど、これではたゞ頭の作用を轉換するといふ丈けで、一向休息にはなりません。男の方ですと勉強したあとは散歩にでも出てがらりと氣を換へて快く遊ぶのですから、大變違ふのですが、女の方は後から／＼と仕事に追はれる故もありませう、出懸けるといふことを實に臆劫がり、縱令また出られましても其の散歩をして居る間でさへ、身の周圍に氣を配つたりなにかして、何かしら終始頭をつかつて居るといふ風ですから腦の作用の休まる時がないのです。併し腦をつかへばつかふ程休息といふ事が必要なのですから、常に自分の身體のことを觀察して、それに對して補充をするといふことは、是非つとめなければなりません。

それには大勢ならば遊戯をして見るのもよいでせうが、庭の仕事などをするのもよいと思ひます。ことに出來るならば郊外散歩をするのが一番よいのです。天然に接して氣を開くといふ事は非常な藥になるのであります。それも傍から勸められて強ひてするやうではよくありません。一體女子は監督者にでもいひ付かれば嫌な事でも努めてするといふ風ですけれど自分から進んでするといふ事は何うも出來ないやうですが、どんな運動でも自分で好んでやるやうでなければ爲めに

なりません。學問をなさる方達でも此邊にもつと御注意なされば、力のある方はあるなりに十分進んで入らつしやることが出來るのでせうが、何うもさういふものと知つては入らつしやるでせうけれど、自らそれを深く意識しては入らつしやらないやうで御座います。何んでも休みなしに勉強をするといふ風ですから齷齪する割合にこれといふ程の仕事も出來ないやうな譯でせう。

趣味性と衛生

それからもう一つ申上げたいのは趣味性の大切な事であります。趣味のない人は神經衰弱のやうな病氣にも陷りやすいし、それと同時にそのやうな人の神經衰弱にかゝりました時には一番困るのです。このやうな病氣には好きな事をして遊んで居るのが一番よいのですから、私は患者に向つて先づ其趣味は何であるかときくのです。旅行が御好きですかとか、畫が御好きですかとか、釣ですか、園藝ですかとかきゝます。そしてその好きな事をおやんなさいと勸めるのです。尤も碁のやうなものはいけませんし、酒や煙草でも困りますが、好きな事をやらせると必然治ります。處が家庭の婦人には趣味のない人が割合に多いのです。そのやうな人には先づ園藝とか、散歩とかいふやうな事を勸めるのですが、趣味のない婦人に限つて外に出ることを嫌ひ、矢張り家の中で齷齪仕事をしたり、くよ〱考へたりして居ることを好くのであります。それに學校にでも居らつしやる方ですと神經衰弱にでもかゝれば早速困難を感じますから、直ぐ醫者にかゝりますけれど、家庭の婦人ですと、頭痛のするのは普通だ位に思ふて居るのですから、つひ手おくれをして甚くなるのです。畢竟自分と意識するといふ事が足りないのだと申して差支ないでせう。もう女子は頭痛が恥辱であるといふ風にならなければなりません。惡ではないでせうがたしかに恥辱です。衛生に注意する位の奧樣ならば必ず其の家庭の仕事もキチンと出來るのであります。

要するに精神

青年男女の神經衰弱にかゝるのは、單に腦の過勞によるのではないかといふ事は近頃やかましくいはれて居りますが、さあ何ういふものでせうか。もとよりそれはないとは申されませんが、そのやうな原因でなつたのには特徴が見えるのです。しかし私はそれに就いて御話することを好みません。それは其の個人個人へ御注意するのはよい事でせうが、公に御話をすることは醫者としても憚りあるやうに思はれますから……まあ靈を以て肉に勝つことが一番だらうと思はれるのです。もし忌しい情でも起つて來ました時には、あゝまだ靈の修養が足りないのであるなど思ふて精神を高い方に向けることが必要であります。そして常に適當の運動をして、氣を爽快に保つて居りさへすれば、容易に其のやうな情に打勝つことが出來るといふよりも、寧ろそのやうな誘惑に侵されることがなくて濟むのです。





珈琲の飲用法

藥劑師　清水如水

飲料に供する珈琲は、カツフエアアラビカーと曰ふ植物の種子を焙烙つて粉碎いたものである。之を飲料に用ゐた起原に就て面白い話がある。

勿論古い昔の事だ。亞剌比亞の或る寺院に飼養してゐる山羊の毛色が、他の山羊よりも非常に光澤が有つて美しいので、其の食物を調べて見ると、此の山羊は只だ珈琲の果實や葉を喰ふ外に何の異りもない。そこで常に顔色の枯燥せる同寺の僧侶共に、珈琲豆を焙烙つて粉末にして朝夕飲用せしめた所が、數年後に矢張り顔色に光澤を帶びて來たので、其れから廣く用ゐる樣になつたと云ふ事である。

今日ではアビシニア產と蘭領印度產とが最も賞美されてゐるが、一體珈琲と云ふものは焙烙る際其の熱度に注意せぬと甚だしく香味を損するものである。其の適當の溫度は攝氏二百度乃至二百五十度位で、之れが茶褐色になるに丁度好い度合である。眞の香味は此度合で焙烙つて粉碎いた新製の品でなければ味ふ事が能きぬのである。故に歐米の贅澤家は焙烙後僅か二三日を經過したに過ぎないものでも、決して用ゐる事は無い。我國にては普通の販賣品は、殆んど半年乃至一ヶ年も經過してゐる。其の上無花果、穀類、キクヂサ、荳類、槲實、裸麥、胡蘿蔔、蠟揶子など種々樣々なものを交せてある。甚だしいのは粘土、砂礫等を加へて重量を增加する樣な奸手段を施してある。それ故珈琲を愛用しようと思ふ人は、珈琲豆を求めて置いて、用に望んで焙烙粉碎するのが上策である。若し其の都度粉碎するのが面倒ならば、之を一時に粉碎し、それに砂糖を適當に混じて鐵葉鑵に貯藏して置くが可い。焙烙した珈琲が香味を失ふのは、久しく日を經ると焙烙

の爲に生じた多數の氣孔中に脂肪が流れて出て、それが大氣中の酸素の爲に腐敗を來すからであるが之れに砂糖を混せて置くと、其の氣孔を砂糖で塞いで脂肪の流出を防ぐと同時に、酸素の接觸を防げて腐敗を來すことが無い。

近時は珈琲の代りに同屬の植物「カッフェア、リベリカ」、「カッフェア、ツアンキユベリー」、「カッフェア、ミクロカルパ」、「カッフェア、ラウリナ」等の種子が用ゐられてゐるが、之れも却々いゝものである。就中「カッフェア、リベリカ」は香味がいゝので大に愛賞されてゐる。

キヨオニヒ氏に據れば生珈琲の成分は、

纖維	三八、一二
脂肪	一二、二一
糖分	一一、八四
酸類	九、五四
珈琲涅	〇、九三
含窒素物	一一、八四
灰分	五、三三
水分	一〇、一三

で、焙烙したものゝ成分は、

纖維	四四、五七
脂肪	一二、〇三
糖分	一、〇一
酸類	二二、六〇
珈琲涅	〇、九七
含窒素物	一二、二〇
灰分	四、八一
水分	一、八一

である。薬學家は生の珈琲豆より珈琲涅と云ふものを製出する此れは絹糸様の光澤を有する白色の結晶體で、重要な醫藥品である。又焙烙粉碎した珈琲も時として醫藥とすることがある。即ち其三乃至四匁を約一合の水に浸出して急性中毒、扁頭痛等に賞用し、或は利尿となし、興奮藥として使用する。





鬼にならねば渡れぬ 姑と嫁の間柄

紅涙女史

横紙破りの姑

お嫁樣は或る高等官の愛娘、旦那樣は法科大學の秀才でばり〳〵の官吏。お嫁樣の實家の父樣が大層この秀才に惚れ込んで、十七八もお齢違ひの上に、まだやつと十五の花のつぼみのお孃樣をおあげ遊ばしたわけお嫁入りの朝迄も、鬼ごつこして、母樣から『お前はまアどうしたといふのでせう、お嫁さんに行く人が何の事です、サア今日は外へ出るものぢやありませんよッ』

と叱られ給ひし程のネンネー樣を、おつかはしになりましたのですが、實家の母樣が可愛と云ふ中でも、根が確りとした人ですから、女の仕事一通りは嚴しくお仕込み遊した事とて、お齢こそ行かね、一家の主婦となり給ひて後は、まさか鬼事もなされず、何かの譯しものにある雛嫁の樣な失態もなく、神妙に御苦勞遊す可愛さ……持つて生れた御愛嬌と、如才なさに人受けもよく、只旦那樣の御身分の割合に、ちとパッパと遊し過ぎるとの評もあれど、其の爲めか出入りの者や召使ひの者等は、何事があつても、まづ、

『奥樣々々』それ『奥樣』

と大事にする、さうかと申して御自分の身體を金銀づくめで飾り立てるなどゝ云ふ事はなく、お實家からの御氣附けでお送り遊すお反物でも、姑樣や旦那樣のにお役に立ちさうなものだと惜し氣もなくそれを仕立ててお上げ遊したりお嫁入りなされてより浴衣位はどう

御座んせうか此家樣ではまア召物らしいものなどゆめにもこしらへてお上げなさらぬ事とて、一枚々々と年毎に少うなるを別段苦にもなさらず一言、不平仰らうでもなし、只々おやかましい、姑樣や旦那樣に冷々遊しながら、優しくおつかへ遊すのが痛しいとて、はしたないもの達が、

「今に女房罰嫁罰が當らうぞ!」

と云ふ位故まして交際社會(と申すも大層ですが田舍の事ですから)などへはどんなに上官の奥樣方からのお頼みでも、姑樣や旦那樣の不贊成とて辛い思ひしながら皆おことわり、奥樣のお心の中ではお氣晴しに出て見度うもお思ひなさるれど、時折のお義理づとめにお出でなされても、少しお歸りがおそいと直ぐにお小言、それを恐ふとお出でになる氣も出ぬと見えまするそこで外目にはお實家が善いので、それの光で出世もし給ふ旦那樣の事なれば非道になど遊さう筈はなし、姑御とてもその通り、大事な嫁御寮としてさぞ可愛がつてゝわらう、と思ふ人もありませうが、事實は大反對、私は長らくお世話になつて居りましたが、さうお仲の惡い樣子もないのに、冷やかなお夫婦のお言葉なら御樣子、旦那樣は一寸とした事でも仰山にきびしくお小言を仰有れど、奥樣手ン手お相手になさらず、默つて聞いてお出で遊す、情ないお顏を見ると、私まで一緒に涙ぐまれまする、それにお姑御樣は心地好さゝうにお烟草をスパ〳〵、ほんに奥樣の御心持になつたらとお氣の毒で御座います。それに田舍の方とは申せ旦那樣の今のお身分で敬居るのに姑御樣のさりとては餘りなお行儀、……これには奥樣一方ならず御心痛められ、外へ出てゝの立喰ひ丈でもおさせ申さぬ樣にと小さい方の樣に、召上り物は充分におあてがひ遊せどこれが御習慣にや、どうかして外出遊すのに、お小使ひお渡しにならぬがいゝ、と私が申上げた事が御座いましたが、さうも行かず。

「そんなら旦那樣から御注意して頂いたら」

と申上た處。

「ほんにさうですネ」

と申されて短氣もつかず旦那様から姑御様に蔭でヌツと申されました處が、サア大變なお怒り方イヤお憤りになつたのならぬとてそれは大變なさわぎ、ヤレ鼻たらしの女房の湯巻にまかれて、親に耻をかゝしたの、親より女房が大事か、おのれはどうして育つたか、誰れの恩でこうなつたかなどゝ到底中流社會では聞かれぬ惡口、逐々仕舞には大聲上げて、「へエ〳〵もう死んで仕舞ひます、息子と嫁に苛られて死んでしまふ、親苛の親殺し」なんて、氣狂ひの様に仰有るので、近所の



手前、旦那様も奥様も、家内中大弱りで、奥様等は口もきかれぬ位に泣いて泣いておあやまり遊して、ヤツと靜めた事もありました。此の時の姑御の惡口の端で、常々旦那様の口やかましいのも、人前の冷淡なのも、お小言の割合に奥様が氣になさらぬのも、すつかり分りました、こういふ風故、奥様氣にかけて御召のお世話やら、見苦しいと思召せば御自分のものをどし〳〵惜氣もなく縫ひなほし、派手なものは染めかへてまでも、お召させ遊せど、たとへに洩れぬ嫁憎しとや、毛筋程も喜ばれ

す、意地の惡い事計り、一寸した事にでもさうで、
『髪結ひますだ、すぐ呼びにやつて下さい』
との事に何時もの事とて無理云ふて直ぐつれて來ると。
『參りましたサアお結ひ遊せ』
と仰有る、するときつと、
『今一寸仕掛けた事がありますだ、お前さん先きに結ひなさい』
とて振りむきもなさらず、奥様逆らはずに先きへお上げなされて、
『どうもお先きへ濟みませんでした、それではどうぞ』
と申されると、
『面倒だに、今日はよします、明日の朝來ておくんなさい』
と仰有る、遂ぞ心地好く申された事なきが常とて、折角名指しで呼びましたもの故と、たのむ樣に申しても、
『お前さんさへ樂しくなつてりや好いでないか、わしの世話迄しなくとも好いだ』
つて横紙破りの仰有方を、
『さうでも御座んせうが、折角呼びにつかはしたのですから、もし御氣分さへ惡うなければ結してやつて下さいまし』
と髪結とても腹は立てど、奥様あはれと又は日頃の袖の下の効驗とに。
『ネ、御隱居様お上げ遊せな、そして貴女何處へか此の御天氣で御座いますから、お出掛け遊せな、サアまア結はして下さいまし』
と同じ樣に口の酸くなる程すゝめて、やつとお髪上げ……………。

さうかとおもへば又、お客様御出でゝも、御氣に入つた時は御挨拶も遊せど、御話は先方様から何を仰有つても、
『さうです〳〵』
の一點張り、傍から聞いて可笑いやら、氣の毒なやら、もし御機嫌の惡い時だと、女だてらにアグラ掻いて、横むいて、知らん顔、當てつけた樣に煙管をカナ〳〵。

奥様一人で氣をいら〳〵遊して居られまする、私共の見た目はこうなれど、姑様の方ではどの樣な御不平があるかと伺ふて見ましたら。

田舍者は矢張り田舍から貰ふが好いですよ、何ぞと云ふと實家を鼻にかけますだ、此頃ぢやまアちいつとなほつただが、息子がもう彼の嫁にまかれて居るのが、私腹が立つてなりはしない、やれ禮儀だからこうしろの、ア丶しろのつて、堅苦しい事計り云ひますで、面倒臭くて腹ア立ちますだ、皆嫁の入智慧だ、何さうでない事があるものかエ、息子だつて田舍者だに、知らう筈はない、皆嫁がつ丶〳〵でさア、わし等山ん中の田舍者だで、ヤレ暑いの寒いのと、パッタ見た樣に頭ばかり下げるのは嫌ですだ、猫なで聲で、

「母樣姑樣」

なんて呼でくれるが大嫌です、全體イヤに四角張るだから、わしは氣づまりでなりはしない、實家がよく氣がつくと云はつしやるのかあれんばかしな事は當り前ですア、アレでもさうですよ、反物の二三反も送ると自慢さうに見せびらかして縞がどうとかこうとか云つて、當てつけにわし等のものにして仕舞ふだ、だからわしは禮を云ひません、舊正月にや憎まれて計り居ないで、田舍の妹がとこさ行つて、呑氣にやつて來ませ



うよ。

平凡なれどよく出來た嫁

と仰有つた、お嫁樣に伺ふと、ニッコリ遊しながら、
「御覽の通り……私が何時迄も家風に馴れませんから
お機嫌がとれません、どう致してよいのやら、此頃ぢ
やア何も考へがうかびません、つまり生活の程度が丸
きりちがひますから子、……昔はとにかく今の身分で
すから、兎やかくと、人の口の端にかゝらぬ樣にして
下さらばと、それがもう人樣から伺ひます度毎に身を
切る樣に思はれます。……併し何事も萬事私が屆かな
いからで、……決して無理ぢや御座いません、でも貴
女蔭ではつく〴〵と涙にむせぶ事も御座んすのよ」
と淋しうお笑ひなさいました。
で、このお嫁樣には、この姑樣が平素どんなに見え
るか知れませんが、いつか怒られた時の横顔をそつと
見て私はあの鬼といふものはこんなものでもあらうか
と、ぞつと身の毛が立ちました。

學校生活して來た嫁

このお嫁樣が此の家にお嫁になつた頃は、もはや廿
五の盛り過ぎのお齡でしたが、お齡こそ召したれ、そ
れ迄ズーッと學校の寄宿をお出ましになると、直ぐ彼
方此方で先生々々と尊まれて、家などゝ云ふ考へはお
持ちなさるひまもなく、お友達の家や、御親類の家の
部屋住ひで、他の炊いた御飯で、その日〳〵を暮して
來た方、縁とは申せ、急に此家へお片付きなされたが、
昔氣質の評判者、此の人ある中は何度お嫁樣來られて
も、見事辛抱する人はあるまじとまで、云はれた姑樣
に仕へて、此の方十數年、一通りならぬ御苦勞で御座
いましたらう……併しお嫁樣の御話しで、姑御樣の人
格の一端がしのばれまする。
「苦勞したらうッて仰有いますの、オホヽ、それはもう
私があの通りな生活して居ましたのに、急に大變動を
起したのですから、仰有る迄もない、涙もどの位流し
ましたか知れませんよ、ほんに此の子達さへなかつた

なら、逃げ出して歸りましたかも知れませんよ、併し辛かつたと申しますが、よく理性で判斷して見ますると、決して姑樣の仰有る事は一寸も御無理ぢやないのです……。
姑樣の目から見ましたら、よくまア彼樣な女もあつたものだと思召しましたら私でしたらとてもあの樣に細かく面倒は見られませんから子、何せ貴女御飯つて云ふものはどうして炊くのか、……イ、エさお笑ひ遊さずにお聞き遊せよ、本當で御座いますよ、ちつとも知らずに居りましたの、ですから此の一事でも知れませう生徒にこそ何の彼のと勝手な熱も吹けますが、それこ



そ意久地がなかつたのですから子、姑樣の御骨折を思ひますと、どんなでしたらうとぞんじます、只今ではとにかく自慢申すのぢや御座いませんが、日用の事にも缺けませず、味噌の作り方から、漬物まで、又素人に要らぬ清酒の作り方迄も覺えられまして、どうやらこうやら獨りでも出來る樣になりましたのは、皆姑樣のお蔭なので、とても私にや眞似も出來ません、萬事の御注意の一例を上げて見ますと、一寸糠味噌出しますにも、「おしづさん手は洗ふたかな、どうぢやゆるうはなつて居らんかな、出す度に氣をつけなされ

や、一寸油斷をしなさると直ぐ味が變りますぞ」
と毎日の事三度々々に此の通り、他は推してお察し下さいまし、勿論下女などにやりつ放しな事などは致させられません、仰有る通り氣をつけてさへ居れば、好いのでムいます」
「私がこう云ふのが五月蠅などゝ思ふと間違ひぞな、私は決してお前さんが憎うて云ふのぢやない、無理は云ひませんぢやらうがな、皆お前樣の爲を思ふて云ふのぞな」
と仰有います誠に御尤千萬、無理や不條理な事は決し
　仰有いませんでした、つまりやりつ放しの書生々活から、一變して此の樣な嚴格な家庭の人となりましたから、自分には隨分辛い思ひをしたので御座いますよ併しそのお蔭で女らしい仕事も覺えまして、主婦の任務を盡して行ける樣になり、姑樣からも此頃ぢや御小言を頂かなくつても濟む樣になりました」

昔氣質の堅い姑

成程御尤の御話しそれぢやさぞ姑御樣の方では御不足の點があつたでせうと、內密で伺つて見ますると。
「まことに當世の學問した女の樣になく、氣質の優しい好く出來た嫁で御座るは、此の家の爲めには大幸福で御座います、私が御承知の通りぢやから隨分辛抱も致したであらう、……彼の方ではどう思ふて居りますか、私には何不足ない良い嫁と喜んで居りますぞな」
と一言も不平らしい事は申されません、ハテ不思議、世の中の嫁姑の中はそんな筈ではないが、私計り……。もしや奧樣に洩しやするとの恐れから、彼の樣な體の好い事申されしにやと、他の方に仰有つたお言葉を探つて見ましたら、何方にもお嫁樣の惡口などは藥にし度も仰有らぬとか、但し今のお嫁樣計りでなく、以前に御離緣遊せし方々の事でも、姑樣のお口からは少しも惡口の洩れし事はなかりしとか、つく〴〵と感じました、却々普通の人では出來ぬ事、一寸した事でも針小棒大に申度いのが凡人の常、——お嫁樣の身になり

ましたら、考への深い几帳面な此の方が、一々指揮し
て仰有つた事故、若い
人の心では、
「アノ様に仰有らずと
も」
「それ程にしなくと
も」
と人知れぬ涙の袖にか
かつた事も随分御座い
ませう、が、私は申し
ましたの、
「奥様御苦勞遊したで
せうが、貴女は幸福で
す、御辛抱甲斐が御座
います」
と申したら、
「エ、〳〵それはもう
私にも好く分つて居りますのです、眞にしみ〴〵嬉し



う思ふて居りまする」
としんみりと仰有いまし
た。

氣の弱い姑

長いものにはまかれろ
と云ふ諺も御座いますに
これは又短いものにまか
れて被居やるので、
「ほんにどうして私は嫁
と一緒に住む氣になりま
したらう、年老つたとて
心細くても何でも國に居
りましたらば、こんな思
ひもしますまいに、先達
も貴女彼女が産を致しま
した時、私が行き屆かな
かつたとて、大層怒られましたのですよ、そりやもう

ぼんやりした私の事ですから、不行屆で御座いましたのでせうが、決して惡い根性で致したのぢや御座んせん、御承知の通り他に人手はなし、彼の通りの病人の老母を抱へて居りますから、忙しいので御座いますよその爲めに遂ひ產湯が少しぬるかつたのださうで、それを始終申して責めますのですが、此間もこの樣な事を申すので。

　お姑さんは親切氣が無いから、それであんな事をなされたので、私は死んでも忘れやしない、決して忘れませんよ、よく覺えて居ります。いくら憎い嫁だつて生れるのはお姑さんの孫でせう、私の腹から生れると肉身の孫迄死ねがしにお思ひなさるものと見えますねつて、さも貴女私が不親切氣でワザ／＼好んで致しました樣な事を申ますので、私だつて情なくもなりますし、口惜しくも思ひます、私許り惡い樣に申ますが、彼嫁だつて私を親らしく少しでもあつかつてくれますれば好いのですが、お耻かしい話が此方へ一緒になりましてから、お小使ひと申したら一錢も貰ひは致しません、病中の老母からは何が欲しいの、彼を呉れいのとせがまれますし致しますが、どうも仕方が御座いませんから、マア人樣の物でも縫はして頂いて、少しづつ小使ひに致して居ります、私も此の歲になつて內職なんぞして暮すかとぞんじますと、いくら旅の耻はかき捨とは申ながら、お先祖樣へ耻かしい樣な心地が致しまする、併し此の小使でも貴女、孫共が彼嫁に何かねだりでも致しますと私に聞へよがしに。

　お祖母さんにちつと御願しなさい、內職をなされておもうけなされたとかお老人達が何要る事がありますものか、お祖母さんはお金持ちだから好いものを買つてお貰ひよ、いくらお祖母さんだつて時にや買つて下さるだらうよ。

　つてこれで御座います、嫁がこれで御座んすから孫共迄同じ樣に馬鹿にして部屋へ參りましても人樣のお仕事など話されますといけませんし、又急ぐ時には切を引つ張つたり邪魔をいたしますから、

　好い子だから少し外へても行つて遊んで來ておくれ

とでも申さうものなら破れかへる様な聲で泣き出します、さうすると夫婦して、自分の孫ぢやありませんか、そんなに邪見にしなくとも好いぢやありませんか、など丶申すので尚更子供等は私を馬鹿に致します、孫でも少しも飾らずに申しますと、可愛くも何とも思ひません、泣かずとも好い事を一寸してもワーワーつて貴女、さうすりや後は親共が子供が惡からうが、好らうが、私に喰つてかゝります、ですから教育します事などにもいくらも心付きます事が御座いましても一寸だつても申すことは出來ません



ほんにしみぐ\辛う御座います、それこそ話しもうつかり出來ません世間話しても何の氣なしに申した事を直きにひがみますからネ、私がこうして居りますのもたゞ樂みは弟の方が一日も早く世の中に出てくれましたなら彼れの方へ參りませうと只それ計りを樂しみに暮して居ります、弟の方で御座いますか……これにも嫁を貰ひました、まだ年若で御座いますので今少し共稼ぎをやると云つて居ります、此の嫁は氣の優しい方で、珍らしいものでも御座いますと、私にと申して送つてくれますし、又兄や嫂の機嫌が好くば、私への當

りも違ふであらうと申して、これにも子供等にもよく氣をつけて盡つて參ります。尤伜が却々女房の云ふなり次第になる男でも御座いませず、私が廿過ぎまでも手許で育てましたので、情合も深く、大切にしてくれまする、今ではもう一日も早く參り度いのですが、二人とも一生懸命に家を起さうと骨折つて居りますで。

お辛からうがもう二年程待つてくれい。

と申ますので、それを無理にとは、あまり我が子ながら勝手過ぎると扣へて居ります、弟嫁が參りましてからは、年に一度は必ずどんな遠方に居りましても、伜が逢ひに來てくれますので、それをまだしも樂みにして居ります、同じ子でも氣質計はちがふもので御座います」

と何時も／＼仰有るが、蔭ではこんなに辛がつて居られど、お宅ではそれこそ一口でも不平らしい事も仰有らず、ハラ／＼／＼お氣をつかはれる御樣子、御笑止なほどです、私の樣な氣性の者なら、グッとシャクに障れば、破れ鐘の樣な聲して叱りつけて、先方の度胸をぬいてやるべきにと思ひますれど、温しい此の方は、とても口に出す處か、樣子にもお出しなされず一人クョ／＼心配してお出でなさるのです。併し又嫁樣には如何な御不足があらうも知れずと伺つて見ますると、

腹の底を括つて居る嫁

「そりやお姑さんは温しい人ですし、惡い人では御座いますまいさ、ですが良人だつて御自分の子、又直二さん（二男）だとて同じ子だらうぢや御座んせんか、それに貴女一にも直が、二にも直がと、直が／＼で騷ぎなんですよ。それに又嫁さんが私とちがつて、學問のある如才の無いお上手者でせう、ですからホタ／＼ホタ／＼申して、何か盡つて上げたり、手の中に丸め込んでるのですよ、ですから尚更私達にあつかひ難いので御座います、彼の嫁だとて、一緒に居れば矢張り苦情が堪へないでせう、遠くで御機嫌取つて居るのは矢張り彼方が利巧なのですよ、此間も世間話しをして

居れば、お姑さんてはこんな事仰有るのですよ。今は女でも却々えらいものだ、昔の人間の樣にない何でも藝を覺えておかぬと嫁入して後、又どんな身體になるかも知れんから、その時の用意にと、先の先の事迄考へて、一つでも藝をつけ樣々々とするから、學校も又さう云ふ風に、色々な藝を覺える樣な女學校が澤山出來る、國の方でも一雨每に出る筍の樣に、女學校が出來る、今の人はその位でなければ不可まいが、却々考へがちがふ。

と仰有るのです、成程仰有る通りには違ひが無いが何も私の樣な藝なし猿の前であんなに仰有られますと貴女、釘をさゝれる樣な心地が致しますワヨ、直さんの嫁さんが藝が出來て、學問があつて、共稼ぎして居なさると云ふて、あんなに當てつけを仰有らなくても好からうと思ひます。私達二人とも學問も藝もそりや御座いませんさ、ですが私はとにかく良人の無學は、つまる處、姑樣の罪で御座いませう、でも怨みも致しませんさ、今更………ですが、意地惡だつて云れますかも知れませんが、何貴女、直さん夫婦に負けて居りますものか、彼方が立身すりや、私達は金を貯めます、直さんの嫁の樣に何一つ御機嫌取りも致しません、おベツカも申しませんから、何でも蚊でも平氣で申ますから、陰ぢやアさぞ憎んでお居でゞせうが、同じ家の親子でせう、それが何も嫁だと云つて姑の御機嫌計りチヤホヤ伺はなくてもよからうと思ひますの、他人らしいぢや御座いませんか、それよりはおべッカに使ふお金を一錢でも貯めておきました方が、此の家の爲めで御座います。ましてお姑さんはア、やつて、それこそ藝がおあんなさるから、お小使ひに不自由は御座いますまい、時には私は憎う御座いませうが、孫共に浴衣の一枚も買つて下さつてもよろしからうぢや御座んすまいか、私もヨ、何の彼のと申されましても、姑を二人持つて居るのですからヨ、生優しい顏して計り居ては、それこそ生命が縮まつて肺病にでもかゝつて死んでしまふが落ちで御座いませう、ですから心に思ひました事は、御姑さん達の御氣に障らうが、障るまいが、どし〳〵ヤッヽけて仕舞ひますのですよ」

と苦笑ひ遊しました。



女優學校の朝の一時間

たそがれ

さる月曜日のこと、朝はまだ八時を少し過ぎたばかりの頃で御座いました。近頃評判の女優養成所を訪ねて見ようと思つて櫻田本郷町で電車を下りては見ましたものゝ、さて養成所の番地がわかつて居りません。右へ行けばよいのか、左へ進めばよいのか、人はきいて、怎んな女でも女優になる積りか知らなどゝ思はれるのも、可笑なものだなど、つまらない氣遣ひをしながら、其邊を見廻しますと、直ぐ交番が目につきました。そこでお巡査さんに伺ひますと、

『そこの煙草屋の横を左に曲ると、直に西洋館が二軒並んで居ます、その二軒目のが高等理髪舗で、その二階が女優養成所です』

と敎へて呉れました。

私は案外に近かつた事が嬉しくて、いそ〳〵足を運んで參りますと、成程直ぐわかりました。理髪舗と申しても極新しい奇麗な洋館で、二階への入口は別について居ります。案内に應じて出て來たのは、丸髷に結つた、卅ばかりのお内儀さんでした。私が、

『何々さんに御目にかゝりたいのですが、御出でゞ御座いませうか』と申ますと、

『何々さんは毎日お出ましになりますが、御見えになるには、まだ卅分許り間が御座います。何處ぞへ御出でになる處でも御座いますなら、御歸りに御寄り下さいまし、もしまた御待ちにならうと思召すなら御上り遊ばして……』

との事。私は待つことにして、二階に導かれました。五六段を昇りつめた右側で、圓い卓子と椅子五六脚置

いてある處、此處は應接室兼生徒の溜とでも申す處なのでせうか、五六人の生徒が集つて、何か樂しさうに話してゐる。さすがに皆美しい娘ばかりですが、着物は大抵銘仙位で。髪も束髪が多く、別段變つた風もして居りません。そして私が腰を下すと間もなく

『お早う』

と言ひながら上つて來たのがあります。いかにも表情に富んで元氣さうな女。之れを見るや皆は、

『森さん　森さん』



といつて何か話しかける。さては、これがあの有名な森律子孃なのかと私は今更のやうに樣子を見るので御座いました。

やがてお師匠が

『さあ皆さん入らつしやい』

と呼ばれたので皆バタ〳〵と往つて了ふ。私は獨り殘されました。

次の部屋では三味線が始まる。唄の聲がする。時々は足踏みの音も聽える。私は茫然とそれらの音に聞きとれながら、成程恁ういふ事を好きでやつたら嘸面白いだらうなど〵考へて居りますと、先のお内儀さんが

お茶を持つて來て、いろ／＼お愛想を言ふ。私が、
『あの、今森さんと仰しやつた方は、森辯護士のお嬢さんなのですか』
と訊きますと、お內儀さんは、
『はあ、左樣なさうで御座いますよ』
と言ふ。そしてお內儀さんから、
『あなた樣も此所へお入りになるので御座いますか』
と訊かれましたのは、少々をかしう御座いました。入口の戸の開く音がしましたので、お內儀さんは下りて行く。下で暫く物言ふ聲がして、やがて上つて來られたのが私が待つて居る某女史で御座いました。
『まあ、私を訪ねて下すつたのですか、それは恐入りますね』
快活で、ちつとも隔てのない御話ぶり、
『一體私は內證にしてたのですけれど、逐々廣がつてしまひました。新聞などには隨分いろ／＼な事を書いてあるやうで御座いますね』
『なに矢張り一つの氣まぐれなので御座いますよ、實際いくらか道樂つて意味があるので御座います、まあ斯んなことは道樂位に思つて居るうちが、樂みなのでせうね、商賣にするやうになつたら却々苦みで御座いませう』
『此所へ來て居りますと、全く樂みで御座いますよ、何しろ皆がまだ若いので御座いますからね、それにお互の間も親密で、一致して居ります事は、もう姉妹でも及ばないといふ程ですもの……矢張り此所へでも入らつしやらうといふ位の方達ですから何處か違ひますね、さう何といつてよいでせうか、つまり心が開けて居るので御座いますよ、普通の學校お仲間などゝは違つて、隱すとか、飾るとか、隔てをおくとかいふ事が少しもないので御座いますから……それが何より嬉しう御座います。
生徒は十五人なのですけれど、病氣で國へ歸つたりしてる人が御座いますので、只今毎日出て居りますのは十三人で御座いますお稽古ですが、お稽古は毎日あります、日曜日は矢張り御休みですが……規定

は毎日九時から二時半迄としてあるので御座いますけれど、それよりも遲くなる事がありますね」

「只今は踊、長唄、義太夫、下方などばかりで、まだほんとのお稽古はいたしません、お芝居が初まるやうになれば面白いでせうがね、さうですね、本統の舞臺を踏みます迄には、二年位はかゝる豫定なのですが、それでも時々さらへの樣な事をして此所へ關係して居らつしやる方などをお招び申し、



御批評を願つたり、何かいたしますのです」

「所長の考では、他の方は仕方がないとして此所の者は此所の者許りで一座をこしらへ何處までも立派なものに仕上げたいといふ積りで御座いますから、さうしたら隨分面白く參るだらうと存じます」

「此所に就いての所長の抱負は、實に立派なものでまた非常に熱心なので御座いますからね。私なども まあ、出來る丈けは皆さんを監督……と申す事も出來ませんが、

とにかく御注意をして、どうぞ清く立派に過して居らつしやるやうに、おさせ申したいと思ふて居るので御座います」

『私は舞臺では立役——男の役ですね——をいたし度いと思つて居るので御座います。女優と申しても、私などは顏に於てはもう資格がないので御座いますからね。まあ、仇役とか、にくまれ役などが相當で御座いませう。それに他の方は皆温順しい可愛らしい方ばかりですから、一座としても其方がよいだらうと思つて居ります」

『實は脚本を書いて見たいといふ考が御座いますのでそれが私の此所へ入つた、まあ第一の目的とでも申すのでせう」

『えゝ、益田太郎さんなんかゞ入らして、いろ／＼御話して下さいますから、それらを伺つて參ります内には、だん／＼脚本の方の頭も廣くなるだらうと思つて居ります」

『舞臺と脚本と兩方をする積りかと仰しやるのですか……さあ兩方といふ事は難かしいでせうね、それも偉い方ならば出來るでせうが、私のやうな者にはとてもさういふ譯には參りますまいよ」

『私が此所へ入りましたに就いては、隨分お友達からも非難されました。さうですね、皆さんは順序よく學校を踏んで、眞面目に御進みになりましたし、私はこんな方にそれて來たのですから……。小説を書き初めた時でさへ私は墮落したつて風に言はれたのですもの。女優などになつたといへば大の墮落に相違ありません」

『いつの事やら、また出來るか出來ないかはわかりませんけれど、何うぞして立派な脚本でも書いて、お友達の面目を汚した耻でも雪ぎたいものと思つて居ります、ほんとうに」

『えゝ、小説は今でもチョク／＼書いて居ります」

女史のちつとも飾らない、いかにも打解けた態度に、私もつひ長話をして居りましたが、そろ／＼歸らうと立ちかけますと、女史は、

『折角入らしつて下さいましたのに、何うも失禮しました。いづれ宅の方へでも御遊びに入らつしやいな外に誰れか御紹介してもよいのですけれど、皆温順しい人達ばかりですからね……まあ誰れか引張つて來ませう』
と言はれて立つて行かれたが、やがて三人ばかり連れて來て、
『此方は森さん、此方は鈴木とく子さん、此方は村田かく子さん……鈴木さんと村田さんとは一番踊が上手なのですよ』
と紹介せられる。
成程皆温順さうだ。女史がしきりに何とか仰しやい仰しやいと責められても、たゞ默つてニコとばかり。
『森さんの御抱負は新聞紙上で承つて居りました。
と私が言かと、女史は、
『えゝなか〳〵の氣焰で』
と合槌を打つ。
『あら何ういたしまして——』
と森さんは笑ひながら長い袂で顔を掩ふ。これは恐らく御耻しい爲めではなくて、様子をおつくりになつたのかも知れない。
『皆様は此所に御入りになりましてから、大分日數をおかさねになりましたが、初めの御考とお違ひになるやうな事は御座いませんですか』
と亦私が言ふと、森さんが直ぐ、
『いゝえ、ちつとも違ひませんわね』
と他の二人を顧みて、
『ます〳〵面白くなる許りですわ』
とさも得意らしく見受けました。



いから、試みて御覽なさい、是は冷めて後菓子パン代りに小兒の間食用にも適當です。

蒸す時間は前記の材料丈なれば四十分間蒸しますが、其分量の多少によりて加減をします。

又メリケン粉一合の中へ、燒粉茶匙二杯、砂糖茶匙二杯、鹽少量を加へ、よく攪き交ぜ、それを水にて解き、前と同法にて蒸せば、普通の蒸しパンの如くなり、辨當などにはよいものです。

又牛肉或は鳥肉を細かに刻みそれを叩きて、鹽、胡椒で味をつけ、前記の材料の中に包み込み、前と同じ法で燒いても亦好味です。

CUSTARD.

3 eggs.
2 cups milk.
3 heaping tablespoonfuls sugar.
Small pinch salt.

Beat eggs slightly with a fork, add sugar salt and milk; mix well and pour into small cups. Steam them for 20 minutes, cool and then remove from cups on plates or seive in cups.

カスタード

玉子	三個
牛乳	二合
砂糖	大匙山盛三杯
鹽	極少量

先づ玉子を黄味白味共一緒に鉢に割り込み、よく攪き混ぜ、それに砂糖と鹽とを加へて尙ほよくかき混ぜ、後牛乳を加へて又よく攪き混ぜ、之を湯呑の中に八分目位入れ、それを御飯蒸或は。せいろで固る迄廿分間位茶碗蒸の樣にして蒸し、冷えたる後食するのです。湯呑のまゝ膳に供しても宜しく、又形を崩さぬ樣他の皿に移して供してもよいのです。

（注意）せいろより出したる時、レモン一二滴づゝ滴らして置けば香氣が好くなります。

又大きな丼に入れて蒸し、大匙にて小皿に掬ひ出して供してもよいのです。

此菓子は極く淡白な味にて、食後の菓子又は病人の爲めに好いものです。出す時は小さき匙を添へて出します。

製する時牛乳を温めて置いて玉子の中に加へるのも妙です。

SPONGE CAKE.

2 cups flour.
2 teaspoonful baking powder.
4 eggs.
1½ cups sugar.
½ cups water.

Get everything ready before beginning to make the cake, oil the pan, measure the flour, and baking powder, and sift them together; measure the sugar, water, and separate the yolks from the whites of the eggs. Beat the whites of the eggs with half the sugar until they are very light. Then beat the yolks very light, or until they become lemon-colored, add the remaining half of the sugar and beat again, and then a little of the water if it is difficult to turn the egg-beater. When the sugar is well mixed, add the remainder of water, and the flour. Last off all fold in (not beat) the whites of the eggs lightly.

Bake in a moderate oven.

カステーラ

メリケン粉	二杯（一合入の茶碗）
雞子	四個
砂糖	一杯半
水	半杯
燒粉	小匙二杯

菓子を作る前に、凡て入用の器具や材料を用意して置き、第一に燒鍋に油を引き、次にメリケン粉と燒粉とを計つて一緒にして篩ひ、別に砂糖と水とを計り、又玉子の黄味と白味とを分ち、白味の中に前記の計つた砂糖の半分を加へ、極く輕くなるまで、泡立器で泡をたて、次に黄味がレモン色となるまで泡立てゝ殘りの砂糖を加へて又泡立たせます。此時に若し泡立器を廻すことがむづかしければ、水少しを入れます。斯くて砂糖が能く混化たる時、水の殘りを加へ、好く攪き混ぜて、後粉を篩ひこみ、又其中に前記の白味を加へ、輕く攪き混ぜ、そして燒鍋へ入れて餘り強からぬ火で燒くのです。

正　　誤

前號の Cream Filling の（1½ milk）は ½ cup milk の誤なり。

簡易家政術

櫻井ちか子

BAKED BASTON BEANS.

Take three cups of beans, cover with cold water, ands soak over night. In the morning, drain, cover with fresh water, heat slowly, and cook until skin will burst.

Drain and put beans in pot; bury small pices of pork in beans and put the fat part on the top. Mit half a tablespoon salt, four tablespoons brown sugar; pour boiling water to cover beans.

Bake slowly two hours. Cover the pot for the first hour and take off the lid so that the upper part may become brown.

ボストンの蒸し燒豆

隱元豆三合を一夜水に浸し置き、普通の煮豆と同じく澤山の水にて軟くなるまで(豆の形をくづさぬ樣)うでゝ水を絞り、之を深き土鍋或は深きパイ燒皿に入れ、さて鹽豚を細かに切り、赤肉を其內部に入れ、脂肉を其上面に並べ、それに鹽大匙半杯、砂糖大匙四杯位を入れ又其豆を浸す程の煮湯を加へ、之を天火或はストーブに入れて二時間位燒くのです、初めの一時間は蓋を被ひて燒き、後には蓋を取りて上層の少し狐色になるまで燒きます。

(注意) 是れは東部米國人の最も好む料理にて、或人は七八時間乃至十二時間もストーブに入れて蒸し燒きにします、是れは熱き內に食しても冷めて後でもよいもので、赤茄子のソース或は酢をかけて食すれば好味です。

豆を煮る時も燒く時も決して攪き交ぜてはいけません。

STEAMED PUDDING.

2 teaspoonfuls butter.
2 tablespoonfuls sugar.
1 cup flour.
2 teaspoonfuls baking ponder.
1 pinch salt.
1 egg.
½ cup milk

Mix and sift dry ingredients and work in butter with tips of fingers; beat egg, add milk, and combine mixtures; turn into buttered mould, cover, and steam forty minutes; serve with warm Sauce.

蒸し菓子

バタ	小匙二杯
砂糖	大匙二杯
粉	一杯
燒粉	小匙二杯
鹽	少量
玉子	一個
牛乳	五勺

砂糖メリケン粉、燒粉、鹽、の四品を一緒に混ぜて篩ひ、バタを其中に加へて指先にてよく交ぜ、それに泡立てたる玉子と乳とを加へ、又よく混ぜて其混合物をバタを引きたる菓子鍋(モールド)の中に入れ、せいろ又は常の御飯蒸にて四十分間蒸し、其の熱き內にソースをかけて食するのです。

(注意) 粉類の煉り加減は、匙で滴らして見て、ボトゝ滴れる位の軟かさにします。

ソースの製法は、メリケン粉大匙一杯と砂糖大匙三杯とをよく混和し、それにバタ小匙一杯を加へ、熱湯一合をつぎ込み、攪き交ぜながら一旦煮立せて用ゆるのです。(此ソースは主婦の友菓子の部九號にあり)。此菓子は極めて手輕に出來て、出來損ふ氣遣がな

總領娘としての我身の不安

秋雨女



生れて六日間、冷めたい此の世の空氣を吸ふて、七日目にはもう再び暗い地に葬むられたといふ知らぬ兄の亡き後三年を經て、私といふこゝに新たな形が、かつてなかつた影をこの世に剰した。とにかく自己と名のつくもの一とつを授けて母は私しを須川家の長女と生みつけた。

うまれたのは京都東山のふもと、白川といふほとりだ、ほとりでは曖昧だが、當時は彼方此方と放浪な生活が續いたので、今は想像の線を想像の紙に引いて、遂に「ほとり」と云ふだけの結果より得ることが出來なかつた故である。それが九つの末好きな汽車にのせられて一日半をひきづられて、何がなしに異郷の空と子供心にもおもはせられた。明るみへ出てから二十一年其の間、人も許し、戸籍もみとめて、自分は今に須川家の長女であるのだ、他に四人の妹を持つ。

その長女である自分は常からこんな事を思ふて居る「長」といふ字ほど見せかけの、壓制な感じの起るのはあるまい。恰かも兵隊にして伍長の格といつたやうな、死んだ兄さんが今も居たらおそらく同じ感じを持つだらうと、果敢ない味方にたのみをかけてかうおもふ、即ち、人が私の素性をきくときに、必らず自分に對つて『御總領で居らつしやいますね』といふ、この聲をきく時、私は何だか自分の領分を見すかされた樣な、侮辱された樣な氣がしてならぬ、此の苦痛の一瞬を他に悟られまいとして鼻で笑ひを見せる。さすがに『エ、』とは型ばかりこたへるけれど。そして此の『エ

このあとで相手の顏を見るときは總領の價値の最後をわれ自らにしひて告白せしめられる樣な何とも云へぬみじめさが、ひら／＼と狹い胸を充塡めるから、こんな時には如何かして相手の氣を轉へさせ樣として無上に饒舌りまくる。『平生から口拙たな力ちやんが何故今日はあんなに饒舌るだらう』と何時かも母樣が臺所で竹に愚痴いつて居らしつた。襖越しにちやあんと知つて居るけれど、其の場合はそれ所の氣ではないのだ。



ことに從兄の眞さんが、うちへ遊びに來た時など、私が妹でも窘めて居ようものなら、『總領は違ひますね』なんて、きつと冷笑かされる、さうでなくつても口の惡い眞さんはこんな勝手な熱を吐く。

『一體、僕は斷言するね、總領なんてものは母親が健康の運だめしに生れて來た樣なものだ、よく成長つて家督相續、惡く間違ふと、何とか甚六だなんて指をさゝれて居る、と

ても、自由の天地を濶歩することは難かしいよ、才能でいへばオリヂナルなものぢやないね」
かうだ。長女である自分は腹が立つから聞かぬふりをして居ると、なほのこと耳に空氣の波動ははげしい。と、毎時もの經驗から眞さんには口ぢや勝てないと知りつゝも我の虫が偶然とび出して私を躍起に反抗させる。
「まあ—眞さんだつて總領だわ、ぢや、死んだ兄さんは母樣の運だめしの犠牲になつたつて云ふ譯なのね、なんてひどいことを云ふでせう、靴屋の伴さんなんかあなたとおない齡だけどもう立派な職人よ、なんだ、まだ伯父さんの脛を噛つてゐるくせに」
と全然没交渉な問題をかつぎ出してお茶にしてしまふ眞さんは苦笑ひして後を云はぬ。
眞さんは伯父さん——高木といふ——の長男で今年文科の二年だ、年は自分より三つ上だが、氣は私より五つ程わかい、それで居て身丈が五尺七寸といふ図抜けもの、柔道と端艇ぢや屈指の選手、のみでない何をさしても出來る男だ、但しこれは形の上の眞さんであることを斷つておく、その眞さんと喧嘩はするけれどやりこめられはするけれど、妙に氣が合ふて居た。
どうした機か女ばかりを姉妹に持つてしかも長女であつた自分は、軽からぬ責任のあるといふことも朧氣の何處かに影の射さぬでもなかつたが、適切にそれを直覺する樣な境遇には一度も逢はず、物質上の苦しみはあつたにしても、いはゞ苦勞なしに育つて來た。其の所爲か私しはとかく男を依頼にする。何か事件の起る毎に、あゝ兄樣が居てくれたらと。さなくとも異性の力はよわくないもの、よその兄弟の親交なのを見るときは淺ましい樣に一種の嫉妬心が起きて來て、諦らめても、叱つても自分の眼の奥にはある閃めきが底光りして居る。こんな事から、女に欠伸をして居た自分は、何がなしに眞さんを面白い人、冷と熱の性の反對のどこやらに共通な特性を持つて氣のおけない人とおもふた。そして時を經るに從つて、死んだ兄樣は或はこんな男ぢやなかつたかしらと恍然眼を据ゑて、幻を

追ふ様な顔をして失はれたことさへあつた。生きて居る現實の兄さんを知らうとする好奇心は、やがて死んだ知らぬ兄を知らむがための研究心で、その研究心は一層異性を知らうといふ好奇心ではないかと思ふ様になつたのである。

子供の時代には自分の上に兄といふものがあるとは聞いて知つて居たが、興味を持つては居なかつた。即ち兄といふものを知らなかつたのだ。偶ま、兄様の命日に母様が、



「力ちやん佛様に御飯をあげておくれ」

といはれても何といふのに捧げてよいのか分らず。

「ハイ、今日はどなたのでしたッけ」

と冷淡に尋ねると、「兄様をわすれたのかえ」とよく母様にグッと睨まれたものだ。

それが漸々と歳を加へてゆくごとに、知らぬ亡き兄に對するなつかしさが添つて來た。同時に自分が長女であるといふ位置が、何故か不安でく〵堪らなくなつた。

むしろ始めから兄といふものがなければないで氣がすむが、あつて、今ないと知つた時は知り度いとおもふのは當然ではないか。

　しかし、今かりに兄樣がこの世に居るとする、居るとしても長男だ、きらいな「長」の字が頭について居る、その長男があつても、自分は矢張り長女であつたのだけれども長の字はまるで責任を異にしてゐる。然るに今は兄さんがないのだ、そこで眞さんの總領觀が今迄になく身にしみて、矢張り兄さんは母樣の健康の運だめしの犧牲になつたのではないかしらと、つひうたぐつてしまふた。

　よく何かの話しの序でに、

「兄樣が今居らしつたらどなたに似てるでせう、父樣にですか、それとも……」

と聞きたくなる。すると母樣は、京にまだ御座る祖母樣のその當時のお言葉を引いてから仰しやる。

「お祖母樣がね何時もさう云つてね……あの子は大きくなつたら眞個に好え子におなりやつたやろ、眉毛は濃いし、鼻筋は通つてたし、おまけに色もお力と代つたらよかろとおもふた位な白さやつたつてね、何時もそんなに言つて居らしつたよ」

「そして母樣は御存じないの？兄樣の顏を」

「なんし六日だつたもの、それにお乳を上げると何かと醫者がいふので離家に寐さしてあつた相な」

「ぢあ、今も居らしつたら丁度……眞さんにひとつ下ね、そしてもう大學のあれねあゝ何だか……眞さんは兄樣の生れかはりぢやないんでせうか」

　母樣は例の目つきをして凝つと私を見つめて『まあこの子は』と云つた樣な顏をきつとなさるのであつた。

　こんな事からなほ眞さんに對する、なつかしさが勝つて、母樣に言はないことも、眞さんに相談する。冷笑しもするが、また可笑しい程眞面目に相手にもなつて與れる。かうなると感情でもう眞さんその者が兄さんの樣におもはれた。だから眞さんの前にゆくと、何もが無意識になつて、おもふあり丈けをさらけ出して終ふ。長女であることも、長男であることもすべて習

慣の姓名のラインから離れて、安心して若き頭脳を發表して居た。

どうしたのか、一週間ばかり眞さんは顔を見せぬ、大抵三日に一度は必らず訪ねて來たもので、さうでなければ、葉書にペンのなぐりがきだ「今日はもとの學窓の親睦會だ。あすは豐富なる話柄をもたらして推參する、それまでに、力ちやんに解決せしむ可き一の問題がある、曰く(when)の意義?、わからなけりや解るだけで好い」這麼のが机上に舞ひ込むだ半睡の心を呼び覺まされるのであつた。



この習慣からはづれた現象は少なからず失望、否何とも云へぬ寂寞が神にも肉にも擴がつて來た。

すると、自家は自家で近頃にない人出入がある。そしてかのかまはずやな母様が、私の容姿に何のかのと世話をやくので夏蠅くてたまらないそろ〜〜一件問題が持ち上がつて來たのぢやないかと

つひ方面ちがいの處に氣がまはる、となほの事長女といふ大きらひな影法師の樣な觀念があたまの一部分を占領しにかゝるのだ。何時だか父樣が『あの子には家なんかとてもつがせられない』と言つて居られたことを記憶してゐる。して見ると自分の位置は頗る不安である。もし他家に送られるものならその覺悟で居なけりやならない。とおもふと周圍の狀況が一とつ〱意味附けられてをかしくないので。譯もなく字を卷紙に書き散しては引き破いて見たり、眞さんに手紙を書いて見樣にとも思ふた。眞さんの家は神奈川である。

丁度十二日目にヒョックリ眞さんが尋ねて來た。見れば、平時の快活なる調子ではない、母樣に對してもしひて平氣をよそほふて居る樣子がかくしても、どこかの隅から屈托の色に發表はれる。

やがて何時もの樣に二階の私の部屋に登つて來て、突然どかりと腰を下して、

『力ちやん、僕あ、愈々總領がいやになつた、大人ぶつた世間の奴等は、どうかして若いものを最終の住家に投り込まうとしてゐたんだね、力ちやんにはそんなに思はないか、君も總領だらう？』

『エ、總領……總領でも女はね……』

この單純な答へにも眞さんの顏は一層青ざめて來て何氣なしに言つた答へが、今の眞さんに取つて苦痛であつたと云ふ風につい横を向いたそして少し急き込むだ調子で、

『力ちやんは兄樣があつたんだつてね』

『エ、でも六日目に死んぢまつたんですつて』

『ふむ、僕あ羨ましいな、しかし兄さんが居ても力ちやんは娘ぢや、總領だね？』

あたりまへな事を訪ねられたのであるが、今日の私しには異樣に響いた。そして相談したいことも毎時の樣に無邪氣に縋つて尋ねる事がなかつた。

しかしかうした沈着した話しになるにつけ、未だ見たことのない、知らぬ兄さんは、きつと眞さんの樣な人であつたらうとおもひ、そして、どんな事でも、相談にでも、乘つて與れる兄さんの樣な眞さんだと思ふて居る。（をはり）



姑の書いた花嫁の日記

さわらび

三　お留守番

武雄と初子が逗子へ行つた留守に久し振で大澤の菊子が二歳になる芳江を連れて遊びに來た、芳江は大變に可愛くなつた、高い〳〵と、いふ顔と、似ない〳〵ばあが大得意、少さくても名譽心はあるものと見えて、人の顔を見ると直ぐそれだ、ほめられるとニコ〳〵して居る、前歯の二つ出たのが、何とも云はれぬ程可愛らしい。

「何故母樣もいらつしやらなかつたの？」と菊子が云ふ、

「誘つて呉れたけれどね、夏はもう家でのんきにして居た方がいゝから御留守番する事にしたの」

「彼地へいらつしやつたつて矢張のんきにして居られるぢやありませんか」

「けれどね若い人達は矢張若い同士がいゝもんだよ、それに途中が暑くつてね」

菊子は暫く默つて居たが、其肩へつかまつて立つた芳江に注意しながら。

「母樣は本當にわかつてるから、姉さんは幸福だわ、大澤のなど察しはごくよい方だけれど戀しかるらむ戀しかりけりとは思はないで、自分の事許りをうるさかるらむ、うるさかりけりと妙に曲つて考へるものだから始終諷刺の云ひ通し、全くたまらないわ」

と又しても姑の棚卸し、そんな事は云はぬものだと云ふて聞かせたが、此間までは聞いて居た姑の噂を、急に止めるのも妙なもの、且は自分の爲にもなる事とおもひ其儘に聞流して居た。

「どうして母樣姑と云ふものは嫁がさう憎いのでせうね、嫉妬心が起るつて矢張さうなんでせうかね、もし

さうならば無理ですわ、自分だつてお嫁さんの時はあつたのだから」

と芳江の頭を撫でながら云ふ。

「嫉妬と云ふと變に聞えるけれどね、結局冷淡に取あつかはれる樣な氣がして、面白くないのだらうね」

「冷淡につてお嫁さんがですか」と菊子は問ふ。

「いゝえ左樣ぢやないんだよ、まあ自分の息子でも、嫁が來ると、親に對して前よりも情愛が薄くなると云ふ樣な事からなのだらうね」

となるたけ自分には不平のない樣な風に云ふと。

「さうでせうかそれが矢張ひがみぢやないんでせうかね」

と菊子はいふ。

「ひがみぢやないんだね、如何しても又さうなる理窟なんだからね」

と少し感慨でもある樣な口振になつて終ふ。

「さうなんですかね、して見ると女と云ふものは生れてから死ぬまで愛の奴隸なのだわね、其形は變つても」

と何だか切に考へ込む。

「それを又怒つたり悲んだりすると云ふのは結局覺悟がないからなんだよ」

と私が云ふと。

「覺悟つてどんな」

と菊子は一寸目を見張る。

「つまり斷念がつかないからなんですよ、早い話しが餘り望み過ぎるので……と云ひかけると。

「本當にさう」

と菊子はさも我が意を得た樣に膝を進める、私しも少し氣が乘つて來て。

「第一親だ〳〵と親顏する人の氣が知れないのさ、それは生れた計りの兒を馬や車に蹈まれない樣にする迄の苦心といつたらあだやおろかな物ぢやないが、生んだからにはそれたけの事をするのが親の務なのだもの、ひらつたくいへば恩ではないのさ」

と私しが云ふと。

「あら母樣それは恩にちがひありませんよ」

と菊子は驚いた樣な顏をする。

子の方で恩に着るのは構はないけれど、此方から勿體つけて育てゝやつたその恩を着よと云ふ譯には行きませんよ、萬一產み放しをすれば、其子は大變苦しみをするのだ、つまり、大罪惡を犯すのだもの、育てるのは當然の事だ、お金を借りたら返さなければならぬのも同じ義務だから、其義務を果したのを大そう善い事でもし出かした樣に、返禮が貰へる氣になつて早く樂がしたいとか、世話をして貰はうとか、いふ



樣な事が多いから不平や不足が絶えないのですよ、結局世間の親が今少し謙遜して居ればよいのさ」といふ。

「本當に母樣の仰在る通よ、自分の子に對して餘り望みを持ち過ぎるのだらうと私し思ひますのよ、子供は家庭のキユピット、生きて居る人形、神樣より頂戴した者と思つて居ればよいのを、行末の賴みをかけて育てるのですからね、箸の上下ろしに、喜んだり心配したりする樣になるんですわ、如何したつて夫婦は親しくなるですからね、何に親の事ですもの親が構ふなと云つたつて子が捨てゝ置くものですか、私しなど何時でもさう思ひますの決

して子などは當てにするものではないつて、夫だつて道を知つて居る子ならまんざら捨ても置きますまいから、又親が動けなくつても構はない樣な子なら、恩を說いて聞かせたつて無駄ですわ」

斯樣な話しをして居る間に芳江は其母の胸に靠れて眠つて終つた、私しの書齋蒲團を出して風通しのよい中の室へねかした。

四　初だより

昨日は大澤夫婦に誘はれて團子坂の菊見から淺草まで廻つたので、今日は少し腰が痛む、居間に樂寢をして居ると、武雄と初子が入つて來た。

「母樣今日はいゝ日曜ですね何處かへ行つて見ませうか」

「さうですね折角だけれど私しは今日はよしませうよ昨日步き過ぎたのでどうも腰が痛んでね」

武雄が一寸初子の方へ目くばせをすると。

「少しおさすりしませうか」

と初子は蒲團の傍へ來る。

「何いゝのですよ大して痛むのではないから」

と辭退したが。

「でも」

と一寸身をくねらして柔軟かい手で擦つて呉れる。

武雄は例の快活な調子で。

「あはゝゝ今日は何處へ行くのもおことわりか、初もいやださうですが母樣がいらつしやれば行くと云ふのです」

と初子の方を一寸見る。

「お前さんは行けばいゝのに此頃は家に斗り居るのだから」

と私しが云ふと。

「はあ」

と云つたが何だか進まない顏つき、二人は一寸顏見合せたが、暫らく無言でもぢ〳〵して居る、やがて武雄が。

「初は氣持が惡いのださうです」



といふと初子の顔はさつと色めいたので私しは大概それと察した。

「赤坊が出来たのぢやないの」

と訊くと。

「どうで御座いますか」

と幽に云ふ。

「さうらしいの」

と又問ふと、

「よく分りませんけれど」

と益々赤くなる、後で武雄に訊いて見たら四ケ月位だらうと云つた、道理で此間から少し顔色がよくないと思つて居た、これが私等の嫁時代になるとまづ食物の變つたのを姑に見つけられ、羞しながら打明けると夫は何よりお目出度い、重い物は持たぬ樣、轉ばぬ樣と云ひ聞かされるそれから夫に身重になりましたと話して聞かされるといふ樣な順序であつたが、今はそれが轉倒してゐる、それも時勢だ、總じて昔の人は、夫に遠慮深かつた樣に思ふ。何にしても目出度い話し里

噂をすれば影とやら櫻田の母御が見えた、種々話しもあるだらうと思つて初子の部屋へと云ふといゝえあれには別に用は御座いません、餘り御無沙汰したので一寸御門から伺つて直御いとまするとの事、是も心の闇と思へば子を持つた身はつまされる、平素手紙も書き絶えず、少なくも一ケ月に一度は來る櫻田の母御に、比較して見ると自分は全く怠惰て居る、菊子を大澤へやつてから最早五年になるけれど、三度か四度しか行かぬそのくせ昨日も秀さん夫婦と遊び歩いた、其樣な事が先の母御の耳に入ればいゝ氣持のする筈はない、それて矢張菊子の方にかゝつて來る事になる、愼まなければならぬと思た、初子の懷胎した事を母御に話したら、

「まあ左樣で御座いますか」

と二三度も繰返して大喜び、歸りは電車で行くと云はれるので初子をそこまで送らせた、産婆は直ぐ近所の西山と云ふ人を頼む事にした、一切が西洋風だとの事である心もとない樣な氣もしたが、上手だとの事なり且は武雄が昔風の産婆は不完全でいけぬといふので先づ其人に頼む事にした、さういふ自分も妹も昔風の産婆に取上げられて來たくせにとおもつた。

五　産屋ごしらへ

上野の雲、飛鳥山の雪、今は春も最中である、梢の花を顔に散らして投ぶしの足元覺束なく、腰にさげた瓢の、のらりくらりと門前を往來ふ人は夜も絶えぬ。眞白に立つ砂ほこりを見ると、お花見などはいやな事初子の今朝からお腹が痛むと云ふので、十時頃産婆に診てもらうと、此儘で進んだら御産は今夜あたりかも知れぬと云ふ、今更の樣な氣がして嬉しくもあり又心配でもある、産屋は奥の四疊半の圓窓の戸をさして六枚屏風で圍つたらよからうといふと、武雄を突出の八疊の障子を透かせて裾の方だけ小屏風を立てる方がよいと云ふ、明くていけまいと云ふと、その方がよいのだと産婆が云ふ、風が入ると裾かせを引くと云へば、でも空氣の流通のよい方が結構ですからと初子が云ふ

何だか故意と反對される樣な氣もする、五十年といふ月日は無論短い間ではないが、是程までも世の中が變つて來る物だらうか、初子は午後二時頃から痛みが少し强くなつたと云つて、お湯に入り、髪を解き、輕く結びかへて產室に入つた、武雄も心にかゝると見えて行く處へも行かないで居る。「却々直に御產には成りませんよ、御歸りになるまで御受合ひ致します。」と產婆が云はれたので。「では一寸」と出で行つた。菊子の時は二度共生れてから知らせて來たので心配はしなかつたが、今日は何にも手につかぬ、突き出しの廊下まで用もないのに行つたり、來たり、餘り心にかゝるので一寸見舞に行つて見ると、當人の初子は心配のな



い顏つき、痛みの休んでゐる時は產婆と話して面白さうに笑つて居る、横の方には手遊づくしの可愛らしい夜具蒲團に、美しい友仙の人形の着物の樣なのが添へてある、それが今來ようと云ふ小さい珍客を待ち佗びて居る樣に見える、夫につけても無事に生れて呉れればよいが、萬一此品々が遺物になる事でもあつたら其時はどんなだらう、などゝ何だかいやな氣持になる横になつてゝ產をするのはさぞ骨が折れるだらうと思はれるが、上手な產婆が附いてゐるから大丈夫だらう私しは何時までも傍に居たいが初子が氣を兼ねて居る樣だから一先自分の居間にかへる、四時ごろから痛みが又加はつて來たやうである、猫と老人は產室の禁物だと聞いて居るけれど、如何しても心配なので今一度行つて見る、初子は最早先刻より餘程苦しい樣に見えた、あらたかだと云ふ安產の御守を頭の上へ載せてやつた。

「生れましたか」

と何時の間にか歸つて來た武雄が怖々襖を明けてのぞく。

「未だで御座いますよ」

と西山さんが云ふ。

「オヤ〳〵ぢやもう少しゆつくりして來るんだつたん

と襖を閉めて書齋の方へ行く、私しは少し力を得て武雄の後から書齋へ行く。

「難產ぢやないんでせうね」

と訊く。

「そんな事はありませんよ」

「だつて大分長いぢやありませんか」

「初產は如何しても隙の取れる物なんです」

「さうですかなあ」

と何げなくは云つてはゐるものゝ流石に心配だと見えて顏色が惡い。

凡そ二十分も經つたかと思ふ頃、產屋の方で人の立居の急しい氣はい、低いながら何事か云ひ交す聲がただ事ではない、今がその時かと思へばじつとして居られぬ、武雄を置いて廊下に出るや否、夢かと斗り耳に響いたのは待ちに待つた初孫の勇ましい聲であつた。

「武さん」

と思はず叫ぶと、

「生れたのですか」

と急いで出て來た、武雄の顏にはもう笑ひが溢れて居た。

（完）

婦人に關する俚諺



淡水

俚諺の妙は、處世の要を極めて通俗的に言ひ表はしたところにある。それは全く人々の經驗から割り出された教訓であるからであらう。例へば「怒れる拳笑顔に當らず」と云ふ諺に就いて考ふれば、烈火の如き怒氣も邪氣無き笑顔に對しては全く勢ひを挫かれる事は我々の經驗上明かな事で、古人も今人も何等の異つた事は無い。此の確實なる經驗が即ち俚諺の起源であるから、簡單に言ひ表はされた事柄も、能く何人にも會得され得るものである。されば俚諺は或は之を事實の證明した教訓とも言ふ事が能きるのである。

俚諺には我國に始まつたものゝ外に、儒佛兩教の渡來以後、支那印度の經典から引用せられたものなどがあるが、其の出處の如何にかゝはらず、孰れも通俗的に言ひ表はされて居るから、目に一丁字無き者も能く其の意味を會得する事が出來る。左に數多の俚諺の中から、特に女子に關するものゝみを抄出して、諸賢の一粲に供します。

△女はくわしよくに餘れ

くわしよくは恐らくは貨殖の意ならむ。經濟思想に乏しきは、東西婦人のなべての缺點で、特に男子に比して虚榮心が強いといふ事は爭はれない事實でせう。此の虚榮心は軈て婦人をして身分不相應の生活をなさしめ、遂に自ら窮境に陷いる例は珍らしくはない。去れば婦人は吝嗇に陷いらない限り貨殖に餘れと云ふのが此の俚諺の眞意である。

△師走女に目をかけな

師走女とは白粉をしたとか塗り散らした女の事で、

堀川狂歌集の「お白粉をけば〳〵しくも塗り散らす顔は師走の雪女かも」と云へる歌から出たものらしい。之れは要するに化粧が度に過ぎて素顔を全然隱くすやうな女子には、誠が無いから目をかけるなといふのである。

△鏡は女の魂

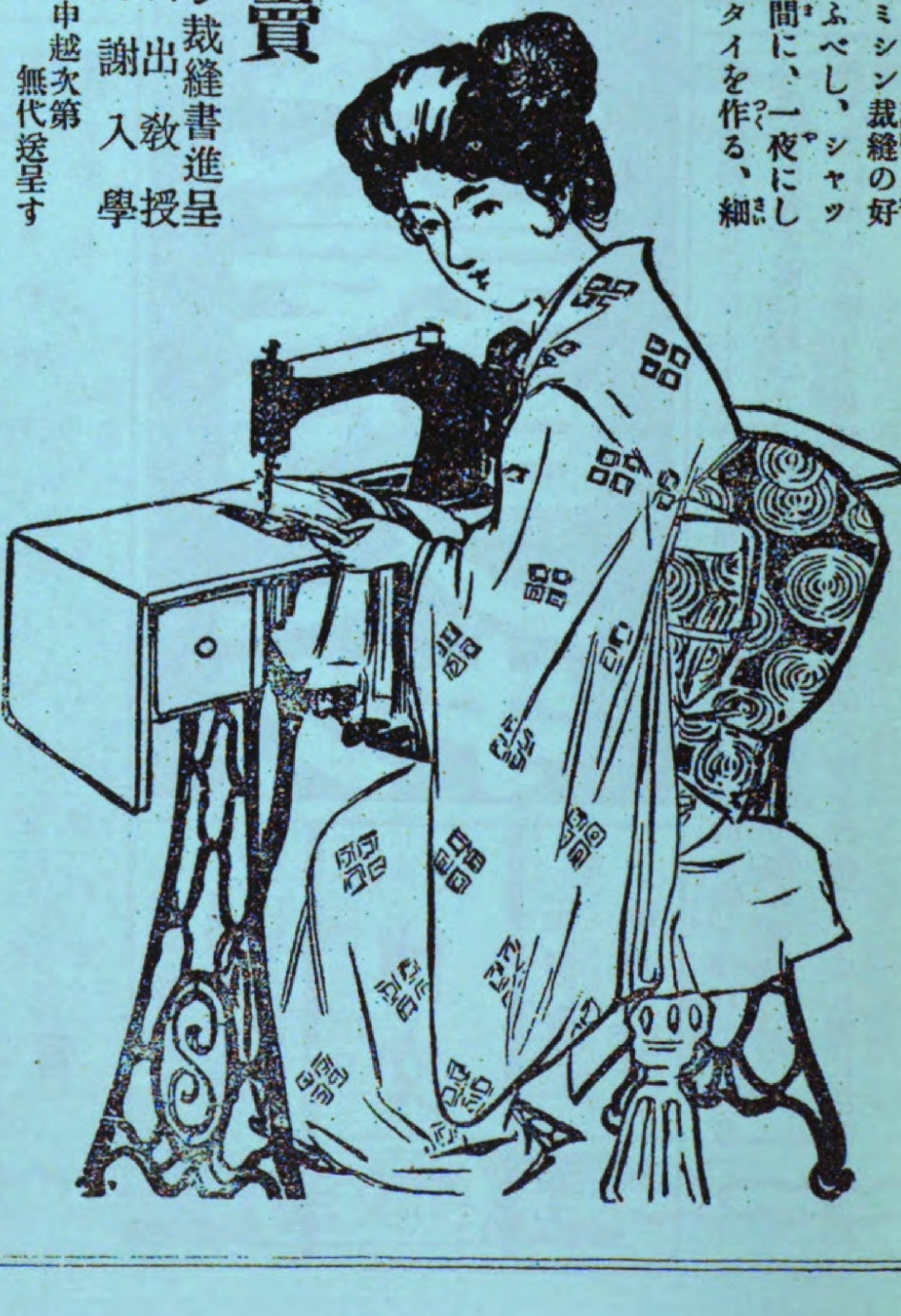
鏡は鑑るなりと云ふ鹿爪らしい講釋はさて置き、鏡に向つて其心を寫せとは古の敎訓、要するに顔は心の表彰哀心不平なれば、自から外に表はれるもので、忍ぶれど色に出にけり我が戀は物や思ふと人の問ふまでとは、箇中の消息を漏らしたものである、啻に戀愛の情に止まらず、誠あれば其心自から外に表はれるは疑ふ可からざるが故に、女子は鏡に對して其の風姿を正すと共に、先づ其心を正さなければならぬといふのである。

△遠くて近きは男女の中

清少納言の枕草紙に遠くて近きもの〻譬に、極樂、船の道、男女の中と云へるより出たもので、男女の間は禮を以て交はらなければならぬ。尙之に類する諺に色は思案の外と言ひ、或は小娘と小袋は油斷がならぬと言へるが如きは、何れも青春の危機を戒めたものである。

青春の危機、之は各人の體質遺傳により、其の月經時に早い遲いがあるので、一口に其の時期を言ひ表はすことは出來ないが、統計に據ると、我國女子の月經時は平均十四年八ケ月で、此の時期は生理的に心理的に變動を起すのである、固より其の變動の度は人により強弱の差はあれど、どうかすると憂鬱症に陷り勝で、其の遺傳的の勢力は又茲に芽を出だして、性情は之が爲に一變し、女子は女子らしくなり、茲に始めて異性の愛を起こして來るから、修養の足らない者や、意志の弱い者はつひ熱情に驅られて誘惑に陷り、終生拭ふ可からざる悲酸な痕跡を留むるに至るのである。

が、此の時期は一面に於ては、亦精神的慾望の盛なる時で、智識、道德、宗敎に對する興味の次第に深くなる時であるから、此れを善方面に活動するやうに仕



女（わの一）

少年世界

第拾四巻第拾五號 臨時增刊

日本英傑傳

洋裝菊判紙數約百四十頁

正價金十錢 郵税本號限四錢

△表紙 國光……山中古洞
△口繪 橿原奠都……尾竹竹坡
△寫眞版 日本史蹟……六頁
△寫眞版 蝶類展覽會……二頁大
◎お伽芝居 忠義雞……嚴谷小波
◎吾好める英傑……少年諸君

十一月十五日發行

東京本町 博文館

品性修養の上から見ても、志想鍛錬の點に就いても、古英雄の傳記書類は、多大の利益がある、而も夫れには秋の夜の如き、心の落ち附く時が最もよいと云ふので、本誌は秋期增刊として、こゝに一篇の少年英傑傳を提供する、例に依つて記事精彩にして趣味津々たるもの、試に左の目次を見て、其發售の日を待たれよ、蓋し諸君が想像以上に、利益と興味とを享け得らるゝであらうと信ずる

本文記事

◎神武天皇
◎藤原鎌足
◎菅原道眞
◎平重盛
◎北條時宗
◎謙信と信玄
◎豐臣秀吉
◎新井白石
◎日本武尊
◎和氣清麿
◎源義家
◎源義經
◎楠正成
◎織田信長
◎德川家康
◎孝明天皇



女(わの六)



女（わの入）

向けて、諸事を打破しなければならぬ、善事と悪事とは相隣すと云つたやうに、右は墮落の門左は成業の門と云ふやうな狀態は、實に我等の人格の高下如何を示す試金石である。

△仲人七嘘

自由結婚は別として從來多くの結婚は皆月下氷人の口によつて纒められてゐるが、此れに當る者は親しき知人たると、或は利の爲にする媒介者たるとを問はず、早く纒めたいとのみあせる爲に、只管兩者の美點のみを吹聽して、其の暗黑面を隱蔽するので、仲人の言を悉く信じて飛んだ災難を招いた例は幾らもある、犬子集にも「そら事もたゞ世の中の習ひにてなかうど人ぞ縁さだむる」と云つてある仲人の七嘘は愚か、嘘八百は今尙昔の如しである。



△提灯に釣鐘

新撰犬筑波集の「釣鐘を提灯貫にことづけて片荷輕くて持ちやかねけん」と云へるより出でたるもので、今は不釣合な縁談は迚も圓滿に治まらぬと云ふ事を諷する言となつてゐる、貧乏世帶に華族のお姫樣、富豪の若君に裏店の娘、さては、翁爺と年若き女等、其の組み合はせは孰れも皆な提灯に釣鐘で、一家の和平

は容易に保つ事は能きぬものである。

△娘一人に七藏明けた

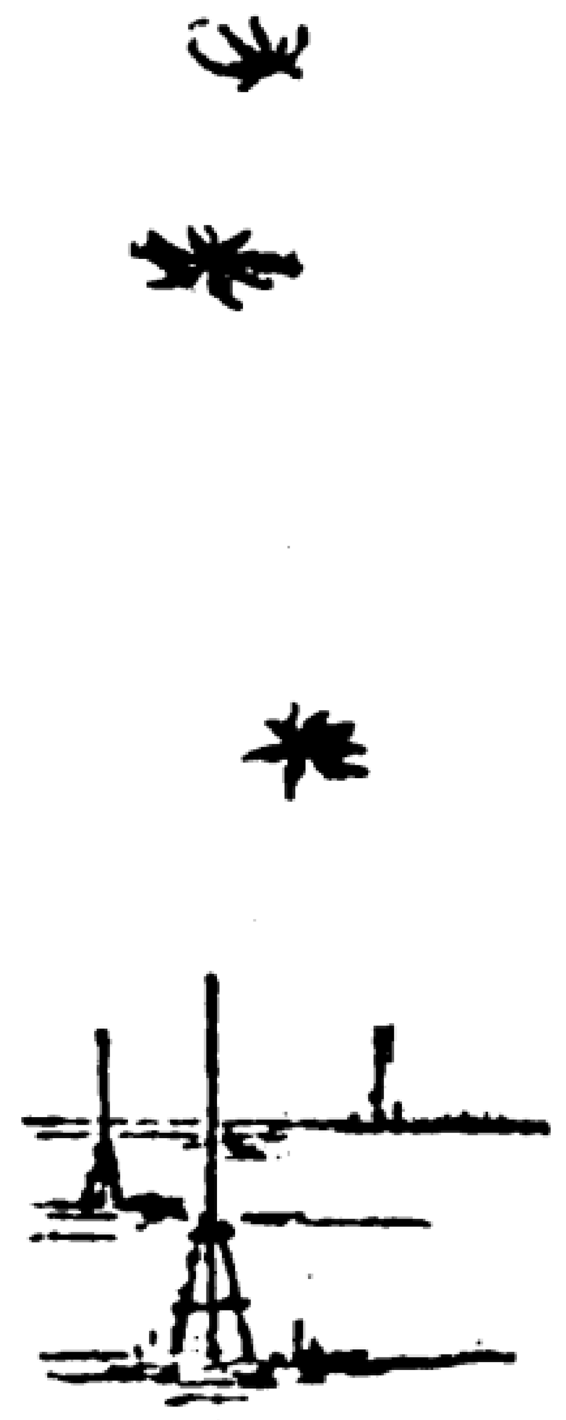
破綻の上で三々九度の盃を挙げた太閤の故事はさて措き、一般の慣習では結婚に要する女子の費用はなかなか容易なもので無い。「娘一人に七藏明けた」とは恐らくは眞實であらう。されば新婦の里親に對する物質上の責任も亦大なりと謂ふ可しだ。氣隨氣儘に離縁されては却々溜まるもので無い。

△女子の三從

三從とは、若き時は親に從ひ、嫁しては夫に從ひ、夫死しては子に從ふてふ三つの敎で、家庭時代に親に從ふ可きは言ふまでも無い、嫁して夫に從ふも亦當然の事で、夫死して子に從はざる可からざるは自然の徑路である。子を敎育して過無からしむるは一は全く自己の爲めなのです、易に男は女を以て室となし、女は男を以て家と爲すの義、夫妻互に休戚を共にして、茲に始めて家庭生活の眞面目が表はれるので、時の古今地の東西を問はず、妻が能く良人の志を解し、其の職業に對する同情を有したればこそ、良人は男子の眞骨頭を表はして、成功の月桂冠を着けたのである、三從の敎は固々東洋流の家族制度から割出された敎訓で、當世の才女には、多少の議論があるが、社會本位の家庭と調和する事も出來る。

△女の智慧は鼻の先

鷹筑波集に「女房の智慧は末摘むはなのさき」と云ふのが轉訛して此の俚諺が出來たのである、若し女子は男子に比して、兎角感情の强いもので、其の感情は動もすれば冷靜の工夫を缺いで、事を處するに周密ならざる弊がある。此の語はつまり其れを言つたものである。





懸賞家庭珍菜晩餐料理

一等　馬鈴薯（八百匁にて三品づゝ五人前）

札幌　伊佐敷清子

○玉子巻

馬鈴薯三百匁をゆでゝ皮をむき、裏漉にかけ、上しん粉三合、白砂糖五十匁に少量の食鹽を加へ、鍋に入れてかきまぜながら煮つめ、おろして平鉢に盛り、冷して置き、玉子三個に少量のメリケン粉と、砂糖を入れ、擂鉢にてすり、薄き玉子燒を作り、俎板の上に取り出し、裏漉にしたる馬鈴薯を二分位の厚さに平にのばし、渦巻にして小口から海苔巻の樣に、三分位の厚さに輪切りにして、皿に二切づゝ盛り、別鍋に並餡を作り、盃一杯位、苺 葡萄のジャミを入れ、よくかきまぜ、鍋をおろして冷して置き、白布を酢にて搾り、茶呑茶碗の中に敷き、裏漉にせし馬鈴薯を入れジャミ餡をつめ、布巾をつまみ取り出して、茶碗の底になりし方を上に向け、中央を少し凹ませ、小楊枝をさし（林檎、梨の皮むきたる物の樣に見する）一個づゝ先きの玉子巻に附合せて出す。

○鹿の子揚

馬鈴薯三百匁皮をむき、短冊に切り、擂鉢にメリケン粉二合と砂糖、醤油を入れ並の天ぷらの衣を作り、それに豚肉三十匁、出刃庖丁にてたゝき、極く小さく切りたるものを入れ、よくすりませ短冊に切りし、馬鈴薯をくるみ、胡麻の油にてあげる青紫蘇の穂を別に溶きたる衣につけてあげ、二三本づゝ附合せ別皿におろし大根と味醂にてわりし醤油を添へて出す。

○吸物

深鍋に鰹節を煮だし、味醂、醬油にて汁を作り、馬鈴薯二百匁を皮むき、先きに短冊に切りし、屑も共によくこわさびおろしにておろし、白玉粉三合位入れ、よくこねる、爼板の上に胡麻を、ばらりとふり、其上へ三分位の厚さに、平らにのばし、又胡麻をばらりと、ふり奴に切り、煮立つ中に入れ浮き上りたる時、三ツ葉を一寸位づゝに切りて入れ、鍋をおろして、直ぐ椀に盛る吸口にはそぎ柚子を用ゆ。

評　抑も本欄に馬鈴薯を撰したる所以は其不味にして人の顧ざるの弊を救はんが爲めなりし。讀者此意を諒せられてか竝に數種の調理法を投稿せられたるは撰者の滿足する所なり。就中木田調理法は三種共其獻立斬新にして取合せも亦可なり。流石馬鈴薯產地に住はるゝ御方の腕前として賞賛するに足る。廣く世の家庭に於て之を知るに至らば衛生經濟の上に利する所蓋し少からざるべし。（秋葉會員選）

一等　蓮根　（七百匁にて五人前）

大垣　金谷しま子

○吸物

玉子	二個
蓮根	百五十匁
淺草苔	三枚

蓮根の皮を去り、湯煮をして是れを極こまかきさいの目に切り、卵子を破りてよく解きまはし、清汁の煮立ちし處へ、右の蓮根と卵子とを能くませて一人前づつ金杓子にて溶し入れ、しばらくして椀に盛り、淺草海苔のあぶりたるをよくもみて其の上に掛けて出すなり。

○フライ

蓮根	三百匁
メリケン粉	二杯半 t.s.
玉子	三個
菊の葉	十五枚
大根	一本

蓮根の皮を去り山葵おろしにておろし、其の中に卵の解きたると、メリケン粉とを入れ能く混ぜ、鹽及び胡椒を適宜に入れて味をつけ、之を小さく圓めてバター を鍋に溶して揚げ、極くあたゝかき中に出す、ウシターソースをかくべし、菊の葉は、うす衣をかけて右の油にて揚げ、大根はおろしにして附合せとするなり。

○酢のもの

蓮　根　　二百五十匁
カーレンズ　　少々

前の如く湯煮をなし之を横にうすくきざみ切になし酢に少々水をまぜたる液の煮立ちし中に、右の蓮根を入れ良く煮えたらば鉢に移し砂糖を入れて甘味を附く

カーレンズはしりを取り綺麗に洗ひて之れを味醂の中に一時間程浸け置き前の蓮根と混せて皿に盛りて出すなり。

評　献立及び其調理法巧妙にして説明も亦懇到なり併しフライの蓮根は一旦柔かに絞りて水を去らざればひよく／＼となるべし。

二等　梨　（中位二十個）

千葉　山口秋子

梨の丸め汁（五個）

皮を剝き、二ッに割りて心を去り、卸金にて卸し、それに米利堅粉と、葛粉と食鹽小匙を加へて搔き交せ、別に味噌汁を昆布のだしにてこさへ、火にかけて煮え上りたる處に、前の品を手早く圓めて入れ、再び蓋をして煮え上るを度として、熱き内に出します。（つまみ菜を汁の中に入れるもよし）

梨のフライ（十個）

皮を去り、心をのぞき、薄く切りて、玉子の溶したる中につけ、それに米利堅粉をまぶし、バタを鍋に溶かして揚げる。藥味には、芥子と葱の刻みたるものをそへて、さめぬ内に食します。

梨の酢あへ（五個）

皮も心も去り、薄く／＼切りて酢につけて置き、別に醬油と小量の砂糖と、柚の酢で味をこさへたる中に

まへの品を酢から引き上げて入れ、外に紅生姜の刻みたるものを少し入れて交せ合せ、小皿に盛りて出します。

評　總て斬新なる食膳にして獻立亦可なり。唯惜むらくは丸め汁の梨を摺卸したるにては其味を失ふ故に、之を二三分の賽目に切りて使用せば梨本來の風味を失する事なくて好からんと思はる

二等　馬鈴薯（八百匁にて五人前）

愛媛　河野仲子

一、玉子卷（三百匁を用ふ）

八百匁の芋の皮を去り、一度に煠でゝ、滴を垂らし置き、其内三百匁を摺鉢にて能く摺り潰し置き、扨て鍋に白砂糖四十匁と極少量の食鹽とを入れ、火に懸けて能く溶かし、其溶けし所へ前に摺り潰したる三百匁の芋を入れ、普通の餅などの餡をねる樣にねりて之を冷やし置き、次に鷄卵五個を割り、白砂糖と食鹽との各少量を入れて能く攪拌し、玉子燒にて二分位の厚さに燒き、其中に前に冷やし置きたる芋を心に入れて卷すしの如く卷き、四分位の厚さに切りて中皿に盛る。

二、吸　物（芋二百匁を用ふ）

初めに煠で置きたる芋二百匁を取り、之を摺り潰し、之に葛粉五匁及び白砂糖、食鹽の各少量を入れて能く摺り、次に糸蒟蒻の一寸位に切りたるものを入れて能く交せ合せ、(糸蒟蒻手に入らぬときは牛蒡を一寸位の長さに細く削りて用ふるも可なり)、之を中位の李の大さに手にて圓め、煮だちし湯の中に入れ、浮き上りたるとき之を取り出して煮だちし味つけの清汁に入れ、吸口として蕪菜及び柚子を入れて椀に盛る。(尚此の上に煠でたる海老を加ふれば更に可なり)。

三、月のしづく（芋三百匁を用ふ）

前に煠で置きたる殘り三百匁の芋を可成的圓く切り置き、扨て寒天一本と水一合とを鍋に入れて溶かし、其溶けたるものを金篩にて一度之を濾過し、之に白砂糖四十匁を入れ、能く煮立て、どろ〳〵になりしとき、極々ぬる火に懸けかへ、その中へ前に圓く切りたる芋を入れ、一個宛取出して之を冷やし、大皿に盛り、其

傍に葉の三杯漬二三片を添ふ。
但し寒天は料理に取りかゝる前二、三時間（半日位浸し置けば更によし）水に浸し置き、其水をしぼらずして其儘水一合と鍋に入れて溶かすなり。
又ぬる火に懸けかゆるは寒天の凝固を防がん爲なり。

評　説明周到にして調理法の巧なるには感賞の外なきも玉子巻と月の雫の如き何れも甘くして献立に變化乏しき嫌あるは不可なり。

二等　牡蠣（一升五合にて五人前）

千葉　こと子

一、茶碗（牡蠣むし）

材料（牡蠣　六合　豆腐　一丁
卵子　二個　葛少々）

先づ牡蠣の袋の處のみを取り、よくたゝき、それに玉子をときて交せ、更に濃きだし五勺と醤油少々を加へ、良く混ぜ置く。

扨て蒸茶碗の中へ、豆腐をサイ形に切りたるものを七ッ位入れ、其上に右の品を入れて蒸籠にて蒸す。火は餘り強からぬがよし。
次に醤油二勺、砂糖小サジ一杯を煮立て、光の出たる時ダシ一合を加へ（甘ければ醤油をさす）、それに葛二勺許り水にて溶き加へてあんを作り、之を前の蒸したるものにかけ、卸し生姜をのせて出す。

一、皿牡蠣

材料（牡蠣　一升　メリケン粉
糸三葉　三束　玉子）

先づ牡蠣を鹽水にて能く洗ひ、良く水を切り置く。
三葉は一寸位に切る。
次にメリケン粉と玉子にて衣を作り、これに前の二品を交せ、適宜の大きさに箸にて取り、これをヘット若くは胡麻油にて揚げ、大根おろし（ユズの皮を細く切り交せる）を付合として熱き内に出す。

一、酢もの

材料（牡蠣　四合
ウド　少々）

牡蠣を前の如く洗ひ、沸騰したる湯をかけ、水氣を切り置く。ウドは線切となし、水につけアクを抜き後酢につけて置く。右の二品を取り、之れに酢と砂糖少しと醬油とにて甘酢を作りかける。

評　牡蠣は滋養に富み、亦一般の嗜好に適す、隨て其投稿數の多かりしにも不拘優秀を見受ざるは撰者の遺憾とする所。本調理品の内、茶碗の仕方面白く、且つ獻立宜敷に叶ひたれば、撰出して置く。

三等　蓮料理（二百五十匁）

宮城　大竹英

○吸物

先づ蓮根をよく洗ひ薄皮を去り、おろし金にておろし、之の汁を少し去り餘る後、大さじ二杯位のメリケン粉をまぜ、むらのなきやうになりたらば、適當の大さに固めて、胡麻油にてあげる、別に煮出しを入れて清汁を作りおき、前に油あげとなしたる蓮團子を、之れに入れ同時に客膏の于を縱四ツ位に切りたるを入れ、沸騰したるを見て、鍋をおろす客膏の于は椀にもる時、團子の上におく、すべて汁の味加減は其人の好み又は家人の好みにまかせてよき位になすべし。

○鍋込煮

蓮根のなるべく太き所をえらみ、皮を去り、四寸位の長さに切り、さつとゆで、之をさましおく、別に南瓜の色よき所をえらみ、砂糖醬油にて煮上る、後鍋よりおろし、よくすり、之に少しメリケン粉をまぜ、尚よくすり、すれたらば前にさましおきたる蓮根の口につめる、後に其儘鍋に入れ、砂糖醬油にてよく煮あげるなり、味加減よくつきたらば取り出して適當の大さに切り皿にもる其切り方は斜に刄物を用ふるをよしとす。

○胡桃あへ

蓮の根をよく洗ひて皮を去り、成るべくうすく小口より切る、別に梅酢を用意し、之に白砂糖をよき加減に入る、後前にきざみたる蓮根を此中に入れ、ざつとゆでる、ゆだりたらば鍋を火よりおろし、其儘さましおく時は一時間許にして蓮根は美しき色となるべし、扨別にむきくるみ三十許をえらみ、薄皮を去り、少々の生豆腐と共によくすり、砂糖を入れて味加減をよくし、然る後前の蓮根を入れてよく合せる。

評　獻立並に調理法も可なり併し製品に名稱を付せざるは獻立法を誤れり故に撰者之を補ひ置く尙方法の說明は懇切にして結構なり。

三等　梨（二十個五人前）

福田　佐藤ちよ

○梨の胡麻かけ（七個半）

梨の皮をむき四つに切り、鋼の目に庖丁を入れ、水に浸しておくなぬき、薄い醬油にて煮る、別に胡麻を煎り、擂鉢にて擂り、醬油砂糖味醂を

加へてドロ〳〵になし、梨にかけて出す。

○梨　焼

十二個中の皮をむき、水につけてあくをぬき、真中の所五分位の厚さに二枚づゝ切りとる、都合二十五枚を串にさして種油をぬりてあぶる。味噌に砂糖を加へて、粒のない様によく擂り、湯をさしてゆるめ、梨にぬりこげつかぬ程に乾かし、器物に並べて酒をふりかけ、細かくきざみたる紫蘇をふりて蓋をなし置きて冷めぬ内に出す。

○梨の唐子酢

梨焼の残りを二寸程づゝ賽の目に切り、三時間程塩につけ置き、よく洗ひたる後、酢に砂糖味醂を少々の塩を加減して加へ、別に唐辛を白紙に包みて堅く搾し、稍熱き湯に暫く浸して水をきり、よくねりて酢に交ぜて前の梨をよく浸しからさを出す。

評　梨料理としては仕方面白し、焼梨は梨田楽の方適当ならん又味噌を玉子にて溶きたらんには味も能く味噌の附着も可なるべし殊に献立の変化を缺けるは惜むべし。

三等　牛蒡（六百匁）

浅草　竹内とみ子

○太鼓揚げ

牛蒡の大きものを五寸程に切りさつとゆで、竹の薄く細き箆を皮と心との間に通して暫時前の湯の中へ浸け置き、後、下より其の心を押せば其のまゝ抜けて管と成るなり、其の管を破さぬやうに下煮をなし置き、ジヤガ芋の皮をむきゆでたるものを、擂りつぶして塩と砂糖にて味つけしものを詰め、衣にて包み胡麻の油にて揚げ小口切りにして出す。

○清　汁

前に打ち抜きし心を細く一寸程に庖丁してさつと下煮をなし、玉子の溶きし中へ掻交ぜ、鰹節にて仕立てし清汁の中に入れよくかき交ぜ、浮き上るを度として椀に盛る。

○胡　麻　酢

太き牛蒡を株と共にゆで、柔く成りし時水洗ひをなし、一寸五分位に庖丁し、尚タテに庖丁を碁盤目の如く入れ、擂木にて亂れぬほどに叩き暫時酢に浸け置き、別に白胡麻を煎り擂鉢にて擂り、味醂、砂糖、酢にて溶き、前の牛蒡を鉢に盛りし上より掛けて出すなり。（但し牛蒡の皮は初め庖丁背にて掻き落し置くなり。）

評　牛蒡料理としては調理法及び献立も佳良なれど太鼓揚の如きは少しく手数を要し家庭料理に適せざるの感あり又清しに臓物を利用したるは周到なれど之を繊切となさず尚吸口に柚子を用ゐざりしは惜むべし。

三等　馬鈴薯料理（八百匁にて五人前）

京都　片岡　操

△吸　物

ジヤガイモの中位の大きなる物五ツ程かはをむき、アサビオロシにておろしこれにメリケンケン粉大匙三ツほど加へ、食塩少量を入れよく

まぜあはせ、よくまざりたらば拇指大にまるめパン粉にころがしごまの油にてあげ、冷水にとりてのち半紙上にあげ、水けあぶらけをさり、別にかつをの煮出し醤油を少しく加へ、うすあぢをつけ煮立たし時、右のあげたるいもを入れ、相手に京菜またはつまみなを一寸五分位にきりて、吸口に柚をそぎて入れ、碗にもりて出す。

△猪口（ジヤガイモの黄金あへ）

のこりの三分の一にて、ジヤガイモのかはをさり三分位の大きさのさいの目形に切り、しき皮に入れてゆでめざるにあげて、水けを去りおく。別に玉子の大きなもの五個をよくゆで、白身と黄身とをわけ、白身はほそぐくせんにうち、これも水けをよくきりおく、黄身の方を五ツ分だけすりばちに入れよくすりつぶし、食鹽砂糖酢にて、あまかげんにあぢをつけ、どろどろになしたる中へ、前のいものゆでたるものとせんにうちし白身とをいれよくまぜあはせ、猪口または皿にもる上におろしゆづを少しくのせて出だすべし。

△ジヤガイモのあんかけ

のこりのいもみなを、かはのまゝゆでゝのちうすかはをむき、てきとうの大きさに切り別にこんぶとかつをの煮出しに、みりん醤油砂糖を加へ少しくあまかげんにし煮立ちし中へ、前のいもを入れ、ほんのり色つきし適度としてこかなさじにてあげ皿にもりわけ、別につゆのみのこしたるものへ、葛粉をときあんをかけて、其汁を皿にあるいもにかけて出す。

評　一寸珍らしき調理法にて獻立もよし併し吸物に用ゆるにパン粉を付着するは妙ならず却て玉子少量を混和して其儘揚ぐる方適當せり。

三等　馬鈴薯（八百匁にて五人前）　栗部清子

△フライ

三百匁の薯を、皮をむきうすく切りてよくゆでこぼし、鍋の耳なりすりながら火にかけて粉を吹かせおろして擂鉢にてすりつぶし、バタ大匙二杯、鹽、胡椒、各少々玉葱をざつと湯煮して刻みしもの大匙三杯、皆先のつぶし薯の中に入れよくまぜ合はせ、ふきんにてしぼり、木の葉又は花の形等いろいろ好みの形として、玉子一つに汁にころがしパン粉をまぶして油で揚げます。ソース又は柚醤油を添へます。

肉添合せにはほうれん草をきざみて、バタにていためしものと柿のよく熟したのを短冊にきりからしにまぶしたものとを、工合よく皿にもり合せます。

△おこと汁

二百匁の薯の皮をむき千六本にきり、すぐ水に入れて、あくを取りて後、熱湯にてうでゝ置く。別に味噌をすり（白みそならば尚よろし）て砂糖を加へ甘く濃く仕立て、しいたけ三つ四つ刻みて入れ、程よくうでし小豆三勺ばかりを加へて火にかけ、そろそろ煮立つ前に、先の薯を入れ、さつと煮立てゝおろします。吸口はしそに致します。

△サラダ

三百匁の蓮の皮を取りて五分位の賽の目に切り、鹽湯にてうでこぼしざるの上にあけて水氣を切り、全く水氣の切れし時深き鉢の中にうつし小きりんご二つを皮をむきしんをとりて、蓮の如く同じく賽の目にきりしをも加へ、ひね生姜極少々をきざみ、さらしねぎ同じく、少量、皆よくよくまぜあはせ、酢、鹽、白砂糖適宜に加味し、うで玉子二つをうすく輪切にせしを上におき、上よりさつと酢をふり掛けて出します。

評　和洋折衷にして味ひも可ならん、又説明叮寧にて家庭の應用に適す。

選外優等

蓮根（七百匁にて五人前）

岡山白菊女

一フライ

蓮根の太き所三百匁を皮を取り、三分位の厚さに斜切りになして乾し粉少しふりかけメリケン粉をまぶし玉子の黄味の中に入れ、パン粉をまぶしフライパンにフエツト（油）を煮立たせたる中に入れて揚げ、熱き中に皿に菊の葉を敷きたる上に盛り、九年母の皮を取り二つ切りにしたるを添へソースをかけて出す。

ソースは醤油一杯酢一杯中の割にて、砂糖胡椒を加へ煮立てたるものなり。

一酢の物

蓮根の中位の太さ二百匁を皮を取り、生のまゝわさび卸しにておろしつくね芋五十匁をも同様になし味醂少しを入れ、よく混ぜ合せ別にかつを出しにて汁を作り、よく煮立ちたる中へ右の蓮根を箸にて適宜に切りて入れ椀に盛り青海草を火にあぶり手にてもみかけて出す。

一和へ物

殘りの蓮根の細き所を白水にてゆで皮を取り、薄く輪切りになし別にごまをいりて摺鉢にてすり、白味噌を入れてよく摺り玉葱の生をわさび卸しにおろして入れ、胡椒砂糖を加へよく混ぜ合せたる中へ前の蓮根を入れて和へるなり。

評　趣味ある蓮根料理の献立と云ふべし、併しフライに菊の葉を敷くの必要なかるべく、酢物にありては説明乏しく又和物に酢を用ゐざるは不可なり。

牛蒡（六百匁にて五人前）

橫濱千秋子

一、牛蒡（三百匁）飯

桶に水を入れ置き、牛蒡三百匁を皮の堅き所だけ取り長きまゝにて桶の中に極めて細く小さく剝ぎ、つきこんにやく二つを一寸位に切り牛蒡と一緒に鍋の中に入れてゆで、柔くなりたれば鰹節を入れ醤油と砂糖にて煮付ける（あまり甘くなきやう）別に飯六合を少し柔か目に炊き前の煮物を飯の上に盛り奈良漬、紅しようがの細かく切りたるとを載せて出すなり。

一、牛蒡（百匁）精汁
味噌汁を立て酒の精をよく擂り味噌汁の中に入れて煮立て、牛蒡を細く輪切りにして實とするなり。
一、牛蒡（二百匁）黄味和へ
牛蒡を細く千六本に切り柔くゆでる。
鷄卵二つをゆで黄味だけ出し擂鉢にてよくすり白砂糖、酢にて味つけどろどろになし、前の牛蒡を其中にて和へる白味は適宜の形に切りて置き黄味和へを皿に盛り其上に載せ淺草海苔を揉りて出す。
評　先づよき方なれど精汁の説明と總陶足らず、殊に全量七百匁を六百匁に減じたる所以了解せず。

蓮根（六百匁にて五人前）

伊勝　深見なみえ

一、清吸物（付合せ春菊口柚）
右製方先づ蓮根の新鮮なるふとき物六百匁をていれいに皮をむき一寸の間水につけアクをぬき「ワサビオロシ」にてすりおろし「スリバチ」にてよくよくすり凡そ三分の一海老の生肉凡五十匁程にめりけん粉少少つなぎに入れ梅の丸位に固めて一すゆがき取上置き昆布とかつをぶしにて程よく汁をこしらへ春菊を色よくゆで一寸五分位にそろへて切り右蓮根の玉四つ位に春菊見合せの分量にて椀にもり煮立し汁を入れる春菊をかたくしぼり置くなり吸口に柚の皮一へぎ。
二、海苔巻（付合せ松茸）
製方右吸物に作りし殘りの三分の二へ酒砂糖鹽にて程能く味を付け酒五勺砂糖匙に二杯鹽少々と共に鍋に入習くれりて淺草海苔をあぶりてひろげ置き其上に二三分位のあつさにのべ小口よりまくなり其を四分位に輪切にし四切づゝ盛り松茸を新鮮なるつぼみの一寸五分位の丈けの物一分五厘位のあつさに切り味醂醬油にて付燒きにして四切位付合せ盛るなり。
評　仕方組合せ共に先づ無難にて結構。
三、赤梅酢漬（付合茗荷の子）
製方殘り百匁の蓮根を二分位の輪切となし其あなのなりに花方に皮をむき一すゆでこぼし赤の色より梅酢にそむまで漬置それに茗荷の子の新鮮な大なる物を竪に二つに切て一緒に浸附品二切位づゝ盛る蓮根をゆでるに米のとぎ汁にてゆでる時は色白し少し鹽を入てゆでる可し

牡蠣（一升五合にて五人前）

京都　伊吹よし子

牡蠣吸物材料

一、牡蠣	二合	一、胡麻油	一合
一、メリケン粉	一合	一、鰹節清し汁	五合
一、羅臼昆布	五匁	一、青海苔	二匁
一、胡椒	少々		

先づ牡蠣の水氣を去り置、青海苔を火どりて粉となし、メリケン粉と合し其中へ牡蠣を入れまぜ置き、胡麻油煮立て牡蠣を一個づゝ箸にてつ

まみ入れ天麩羅となし、大なれば三個小なれば五個に薄雲昆布を一匁程加へ椀に入れ煮立たる鰹節の清し汁をさし胡椒を少々ふりて出す。

磯牡蠣材料

一、牡蠣　八合　　一、鰹節昆布濃き煮だし　一合
一、浅草海苔　五枚　　一、わさび　大一本

先づこほき煮出しを作り置き牡蠣を湯がきざるに上げ湯をたらし鉢に盛り浅草海苔を火どりてもみかけわさびの皮をむきおろしがれにておろしまな板の上にて庖丁にてたゝき鉢の脇に入れ小猪口に煮出しを入れ添て出す。

牡蠣の玉子とじ

一、牡蠣　五合　　一、玉子　五個
一、せり　五匁　　一、味醂　五勺

先づせりを五分位に切り置き、玉子を破り鉢にて解き置き鍋に味醂と醤油を好みに入れ煮立たる頃牡蠣とせりを入煮立ちたる頃玉子を入れて玉子のかたまりたる時小丼に入れて出す。

評　殊に結構なる材料を天ぷらとして吸物の實になすは無益ならん倘其他に多少の缺點あれど獻立と說明は先づ結構。

鯔（八寸位のもの、二十尾）　　浅草　竹内とみ子

一、吸物

鯔を三枚に卸し薄鹽を當て、ざつとゆで置く。別に昆布と鰹節にて煮汁をとり、鹽と醤油にて味をつけ、魚としめじ茸とを入れて椀に盛る

一、網燒

魚を背開きになし、鹽、胡椒サラダ油をかけて十分程置き、燒く時に又少量の鹽を振り掛けバターをぬり、强火にて燒くなり。

一、鯔饅頭

初め岡崎味噌を味醂にてのばし擂鉢にて擂り、生姜を微に切りしものと、木茸を暫時水に浸してゆがきセンに打ちたるものと、丸粒の芋の實とを加へよく攪交ぜ置く。魚は鱗をふき鰓を去り、細き刺身庖丁を腮の上よりさし入れ、身をくづさぬやうに親骨につけ尾の際まで押し切り、兩側を斯くせし後、尾の際と頭の際とにて外より親骨を揉み折り腮より指を入れて引き出し、又腮より庖丁を入れ、腸をも刳り出し、よく水洗ひして後前に作り置きし味噌をつめ、竹の皮の上にのせ蒸し上げて皿に盛るなり。

評　御手際は結構なれ共鯔饅頭の如きは素人の能く調理し得るものにはあらず。

馬鈴薯（八百匁にて五人前）　　麹町　小谷五

一、團子汁

初め馬鈴薯の小粒のみを百匁程撰び置き、殘りの内百匁許の皮をむき能く洗ひて大根卸しにて卸し、メリケン粉を卸した芋の三分の一程入れて能く攪き混ぜる、別に鶏肉を五合位の水に鹽少々入れて煮立てた中

にて煮、肉はすくひ揚げて汁を漉し、味醂と醤油少々にて味をつけ、又煮立て前の芋を大匙にてすくひ入れ、浮き上りたらば鍋を下す、肉は初め椀に四五切づゝ入れ置く、團子は一人に三つ位にてよろし、吸口に芹を一寸五分位に切りたるを摺り山葵少々とを入れて出す。

一、フライ

殘り六百匁の皮をむき薄き輪切りにして茹でゝ裏漉にかけ、其の三分の二許を小判形に平たく圓め、メリケン粉をつけ玉子の黄身のみ溶した中にてよくまぶし、バタを鍋に溶して煎る位に揚げ、後の鍋にて殘りの白身を焦げぬ樣薄く燒き細く切りて、付合せ、熱き肉皿に盛りソースを添へて出す。

一、金とん

殘し置きたる小粒百匁の皮をむき、イチョーに切り(厚さ三分位)で茹でこぼし、鹽少々と白味醂、白砂糖を加へあまり强からぬ火にて崩れぬ樣能く煮つめ、別に底の厚き鍋に味醂 砂糖に水少々加へ飴色をつける迄、クチナシの汁を少々入れ砂糖の能く溶けた時に裏漉にかけた芋を入れ、弱き火にて焦げ付かぬ樣攪き廻しながら煮つめ火より下して、前の煮た芋を入れ、能く混ぜ、さまして皿に盛る。

クチナシは能く洗ひて、二つに割り煮湯をかけて其の黄く出た汁を大匙に一杯程入れる。

評　南瓜汁は稍り居れど應用に變化乏しく且つ團子汁に鳥肉を使用したるは面白からず。

鶏の荒料理　（胸肉は胸肉、もゝはもゝとしておく）

柳本てい子

骨のところは吸物用として胸肉のうち百目は吉野煮の方へ、あと殘りをフイリツピン。

○吸　物

上等の山だし昆布を水一升に付四寸半枚一寸角位に切り火を中火にして二時間につむ煮つまりましたら一旦汁をこし汁二合に大梅干一つの割で入れしばらくにゐ三十分位にて梅干の味が汁へ出たら別に鰹節だしを取おき今の氷へ等分に入れにゐこのだしをとるにはけづりたてのがつをぶしではいけません、削つてから三十分位の處でグラ／＼煮立し時これを入れザツト煮立つたらすぐ揚る。

鳥肉をうすく切り葛粉をまぶし熱湯でザツトあはる。

椀に鳥を盛り青味みつばを昆布だしの煮立つてゐる中へちよいと入れしもの。

また小松竹たてにうすく切りゆで二切許り。

○フイリツピン

胸肉を丸のまゝ切らずに骨も三つ四つに切り共になべにいれ水をかぶるほどいれて文火にかけその水のほとんどなくなる頃までゆでゆだつたらしほ少し加へにゐ、メリケン粉を少し殘りし汁にてときかけ一寸にて皿にもる、メセリー二三莖生のまゝそへる、骨は皿に盛りし時の枕ます。

○よしの煮

鳥肉を薄くひらたくきり葛粉にまぶし庖丁のみねにてたゝき油で揚る、だし汁、みりん、醤油、砂糖など加へよく煮立し時前の鳥を入れる甘煮め樣に、みりん砂糖を醤油沢山加へる、附合せ、牛蒡一人前三個牛蒡を三四寸に切りそれを細く切りゆで後茄ぶ。ねぎを金串の尖にてよく／＼裂き一寸程に切り別々に鳥をにし汁か「みりん、さとうを加へ煮立し時醤油さしたるもの」にでもよし但し牛蒡は別の汁にてよくてりの出るまでにる方よし。

評　調理法は可なるも何れも、麥粉、葛粉の類を用ゐありて重複の嫌あるは妙ならず。

鳥料理（八月目毛鳥二羽）

新宿　野田しげ

一、鳥のさしみ　鳥二羽ともに骨と身を切りはなし、さゝみ三百五十目位を普通の刺身の樣に作り皿に盛り出す、附合、ほじそ、めうがのせん貫菊、わさび、大根おろし、普通のさしみと同じ。

一、鳥の[illegible]煮　鳥肉二百五十目を細くきりバタにてイタメ椎茸中五本細にきり糸こんにやく一枚ゆでむきたる栗三合位と共に醤油味醂砂糖にて汁したむ位に味つけ玉子五個わりかけて鍋を火よりおろし、蓋をかたくしてむらし置き深皿に盛りへきゆずのせて出す、但し玉子一個づゝ皿にもりなるべく黄身のくづれぬ樣注意ありたし。

一、チキンハムシーメイ　前の皮骨を水一升位より五合に煮詰めソップとなし置殘鳥肉とハム四半斤位じやが芋五個玉葱三個位うすくわぎりにきりソップの中に入れ三十分位煮て鹽胡椒極少し砂糖入れ麥粉別にメリケン粉大さじ五杯玉子一個胡椒少し入れ中位のかたさにときよき形に取りて煮込み西洋皿にても椀にても盛りパセリの細かくきざみたるをふりかけて出す、

評　鳥肉刺身は料理的調理に屬し家庭には不釣合なチキンハムシーメイに少量にても砂糖を加ふるは不可なり

牡蠣（小さきもの一升五合）

大阪　丹羽ゑん

初めに皆まはりの黒きヒラ／＼を切り取り貝の片などよくあらため、水にてザット洗ひザルに上げて置く。

一、吸物たまごとじ四合
- 海苔三枚（あぶりてもむ）
- 芹　二把（五分位にきざむ）
- 卵　三つ（よくといておく）
- 鰹のだし

先づ鰹の煮だしをとり、煮上りし所へ醤油にて少しからき位に味をつけ（鰹、芹より水氣出づる故なり）芹の五分位にきざみしものと以前の牡蠣を入れ煮る、煮上りたれば、卵の溶たるものを一面にしきすぐふたをして火より下し暫く玉子のかたまるやう、むらして置く、出す時に玉子のちらぬやう椀に盛り海苔のもみたるをふりかけて出す。（右を茶碗蒸の如く一つづゝ蒸してもよし）

二、蠣のフライ四合（銀杏 二合(燒きて皮をとつて置く) 松葉 五本(水にて洗ひザルに上げて置く) 卵 四個(よくといて置く)）
サラダ又はヘット 鹽胡椒のまじへたるもの
パン粉 ソース

洗ひ上げたる蠣四合を、乾きたる布巾にてよく水氣をとり、玉子のとりたる中へ入れパン粉にまぶし油にて揚げあたゝかき中に出す銀杏のよく炒り皮のむきたるものを松葉に五個づゝさしそへて出す、揚げたる時鹽胡椒の交へたるものを少しふり皿に盛りてソース添へて出す。

三、蠣の卵の花まぶし四合（卵の花 三錢 おのみ 五勺(よく炒つておく) 酢 鹽 味醂 紅せうが(細くこまかくきざんでおく)）

蠣は鰹の煮出しにてサツト味をつけて置く
卵の花を擂鉢にてよく擂り瀬戸物の鍋に入れ鹽、酢、味醂にて少しあまき位に味をつくる出來上りたれば器にとりて、暫くさまし置き、其中へ以前の蠣おのみをまじへる出す時三つ鉢に中高く盛りせうがのきざみしものをふりかけて出す。

四、酢蠣（大根 三本 酢 醤油）

殘りの三合を暫く酢につけて置き、別に鉢へ大根おろしをこしらへ其中へ右のかきを入れ新らしき酢ホンノ少しと醤油を入れまじへて小猪口に盛りて出す。

評 其手腕と用意周到なるは誠に可なれど募集以外の種類を提出せられたる點に於て等外に下したり御氣の毒千萬。

家庭好み 晩餐三品料理 懸賞募集

一、此の料理は別項記載の七種の材料中より各自の好みに依り、隨意に一種を選び、五人前の晩餐に供する料理三品の献立を作る也。
一、献立は日本料理、西洋料理、或は和洋折衷等孰れにてもよし、但し成るべく献立に變化あるべき事。
一、添合せの野菜は十二月の季節物を自由に選び、且つ調味品及び鰹節等適宜に用ゐる事。
一、解答は一品每に製法の順序を簡單に説明する事

來月の新題

▲鰤(ぶり)壹尾 七百匁
▲鴨(かも)壹羽 五百匁
▲鴫(しぎ) 十五羽
▲大根(だいこん) 一貫匁
▲蜜柑(みかん)中粒 二十五個
▲めじ 一尾 七百匁
▲生椎茸(なましひたけ) 四百匁

賞品 圖書切符

一等 金參圓 一名
二等 金貳圓 二名
三等 金壹圓 三名
四等 金五十錢 五名



化粧品使用の心得

石鹸——洗粉——白粉下——使用法

醫科大學　大森柳二

石鹸の使用法

人間の皮膚の表面は常に垢や塵埃や脂肪で汚れて居るが、それは只だ水や湯で洗つたばかりでは落ちるものでない。何うしても石鹸なり、洗粉なりが要る。此の石鹸は元來脂肪酸とアルカリ鹽類と、極く僅な遊離グリセリンとを含有して居るべき筈のものである。此等の成分を有つて居るならば、皮膚の表面に着いて居る不潔物を能く洗ひ落すものである。これに反して、アルカリが別に獨立して存して居ると却て皮膚を荒らし、脂肪酸が獨立して混じて居ると石鹸としての用をしなくなる。然るに世間に賣つてゐるものには悉う云ふ粗品が少くないから、餘程注意をしなければならぬ。成るべく廉い品を退けて上等の品を用ゐるがいゝ。併かし舶來の石鹸だからとて必ずしも善いとは言へぬ。數多い舶來品中には隨分不良な品がある。又日本で出來た品でも香こそ舶來品程善くはないが、その成分に於て甲乙のないものもある。是等は一に多年の信用を有して居る石鹸に就て別に述ぶる鑑別法に依つて見分けるのである。

石鹸が如何に善良な品であつても、其れを溶かす水や湯が惡くては何の効もなくなるものである。石鹸の爲に惡いのは先づ鹽分を含んだ水や湯である。故に海水浴に行つても、石鹸を使用するには、矢張鹽分を含まない水で使用せねばならぬ、こは恐らく誰人でも經驗上知つて居る事と思ふ。然らば眞水の如何なる水が

いゝかと云ふに、前號に說明した通り水には硬水と軟水との二通の區別があつて。硬水は酒を作るには必要であるが、皮膚を洗つたり洗濯するには却て害をなすもので、矢張り軟水を用ゐなくてはならぬ。

井戸の水や河の水は、所によつて硬いのもあり軟いのもあるが、これを見分けるには一度鐵瓶にでも入れて煮て見るがいゝ、硬水ならば鐵瓶の底に沈澱物が殘るものである。或は絹の布片を洗つて見ても分かる。硬水だと絹の光澤を消すが、軟水は其んな事はない。最も善い軟水は水道の水であるが、其の無い所では右に掲げた方法により、軟い水を選んで使用するより外に方法はない。

石鹼を使用するに當り、先づ高溫度の湯で皮膚を洗ひ、それから石鹼を塗る人がある。その人達は熱い湯で皮膚を洗ふと垢がよく落ちると言つてゐる。然し前號に說明した樣に、熱い湯で皮膚を洗ふと早く皺がよる傾向がある。故に石鹼を遣ふには、微溫湯が最もいい。何も熱い思ひをして早く皺よるには及ばない。併し冷水では皮膚が縮まつて表面に附いて居る垢や不潔物を除く事が出來難いから、まづ人間の體溫（攝氏三十七度內外）より一度位高いものが最も適度である。洗湯等で日本人が熱い湯に入るのは今更改める事も不可能であるが、顏や手足を洗ふには可成微溫湯を使用する樣にしたいものである。

次に世間には石鹼を遣つて却て皮膚の荒れる人がある。これは石鹼の成分が惡いか、水が惡いか、或はその人の皮膚に依るか、この三つの內の一が原因となるのであるが、こゝには皮膚の事を少しく述べて置く。元來石鹼は皮膚の表面に附着して居る埃や脂肪を除き去るのであるが、人に依つて脂肪の少い人がある。其う云ふ人が石鹼を用ゐると、皮膚面の脂肪が皆洗ひ落されるから再び脂肪の分泌せられる迄に餘程の時間がかゝるから、其の間に皮膚が乾いて疎くなる。言ひ換へれば皮膚が荒れて來る。故に脂氣の少い人は成るべく石鹼は使はぬがいゝ。尙ほ念のために言つて置くが、瘦せた人は石鹼を使はぬ樣にするがよろしい。之れは

別に調べる事にする。

石鹸の鑑別法

石鹸が或る成分を含有せぬ時は却て皮膚を害するものなる事は前に述べたが、其れを鑑定をするには種々なる方法がある。殊に化學的の試驗を行へば、直に之を知る事が出來るけれども、それには藥品も器械も必要であるから、茲には比較的容易に行はれる方法のみを掲げる。

石鹸は之を甜めて見ると必ず多少は舌の尖を刺戟する性質があるが、粗惡な品であると其の刺戟が強くて舌の尖がヒリ〳〵として少しく痛みを覺える。そして其の洗汁が眼に這入りでもすると痛い程しみるものである。善良な品でも眼に這入ると多少はしみるけれど決して痛くなる樣な事はない。



善良な品は指の先で押して少し堅く感ずるものであるが、この堅さには程度がある。彼の縁日や夜店に賣つて居る一個三錢位の品は御承知の通り二個の石鹸を叩き合はせて拍子木の樣な音をさせ、堅いから久しく使

用する事が出來るなど〻云つて居るが、それは粗惡な證據である。堅い石鹼がいゝとは云ふものゝ、其んなに堅いのもよろしくない。去ればとて指で押して凹む様なものもよろしくない。まづ指で押して僅に堅く感ずる位のものがいゝのである。

僅かに手へ着けた石鹼が能く伸びて細き泡を澤山に出すのは善良な品の證據であるが、粗惡な品は其の伸びが惡くて何程擦つても容易に手に付かぬ。これは色色の混せ物があるからである。又男子ならば頭を洗つて見ると能く分かる。粗惡品は容易に毛に付かない。そして幾度も〳〵擦つて漸く頭を洗つてからも、毛はさら〳〵としないで何んとなく膩つ氣に富んで居る様な感がする。

石鹼を僅に二三度位使用して、一兩日使用せずに置くと、粗惡品は表面に裂目が出來て破れ易くなるが、善良な品は其んな事はない。然し半分以上も使用してから折れるのは、如何なる石鹼でも止むを得ない事である。

藥品を用ゐて鑑定するのは、一番正確であるが、これには器械が無くてはならぬのみならず、化學に關する智識が必要であるから、素人の家庭では一寸行ふ事が出來ない。然したゞ一つ簡單な鑑定法がある。それは石鹼中にアルカリが單獨に遊離して存在する時は皮膚を荒す事は既に述べたが、其の遊離アルカリの存在するや否やを檢査する方法である。それにはフエノフタレインと云ふ水の様に澄んだ液を、理化學用藥品を賣つて居る店、又は大きな藥店に就いて求め、其れに其の液の三倍のアルコールを加へ、其の中へ檢せんとする石鹼の切端を少しく入れて見るのである。若し右のアルカリが有つたら其の液が赤くなり、善良な品は其れが無いから直に見分ける事が出來る。

以上の五種の方法の中で、第三、第四、第五の方法は正確であるが、第一の方法に對しては甜めて見ても鑑定されない様に蜂蜜を混ずる事があるし、第二の堅さに依つて知る方法に對しても亦色々の混合物によつて素人の眼を迷はせようとするから、之れは絶對的の

鑑別法とは言はれない。

右は石鹸を求めて後の鑑別法であるが、それよりも先づ求める時に注意しなければならぬ。それには第一に信用ある石鹸を使用する事、第二香氣や包み紙の良いのに欺れぬ様にする事、第三一度使用して良き品だと知つたら、無闇に他の石鹸を使用せぬ様にする事、第四價の廉なるに迷はされぬ事等が肝腎である。一時水に浮く石鹸に就いて多くの人が迷つた様であつた



が、浮く浮かぬに依つて價値を定むる事は能きぬものである。學理上から云へば石鹸は水に浮かぬが普通であるが、浮く石鹸だとて强ち惡いとも云へぬ。

石鹸と洗ひ粉の利害

洗ひ粉と石鹸と何れが効が多いかと云ふと、甲の人は皮膚の表面には眼に見えぬ小さな皺がある、洗ひ粉を使用すると其の皺の凹だ所へ粉が逼入つて取れなくなるから石鹸が好いと言ひ、乙の人は之れと反對に、

石鹸は往々粗悪な品で皮膚を荒す事があるし、又價も安くないから寧ろ洗ひ粉が好いと言ひ、孰れにも相當の理由があるが、併し前に述べたる如く、石鹸では何うしても皮膚の荒れる樣な人は、矢張り洗ひ粉を用ゐるがよい。特に痩せた人、一日の内に度々顏を洗ふ習慣のある人などは洗ひ粉を用ゐるに限る樣である。これに反して肥つた人、脂氣の多い人、手又は足が常に油や煤で汚れる人、工場で勞働する人等は是非石鹸を使用すべきである。

最も安全なる洗粉

洗粉も亦皮膚を荒さぬものを選ばなければならぬ。それには昔から用ゐてゐる糠が最も安全である。之れは價の廉い石鹸よりも遙に効力のあるものである。洗ひ粉にも色々あつて不良いのになると房州砂や磨き砂を混じたものがある。さう云ふもので洗つては却て肌を傷することになる。善き洗ひ粉は指の先で觸れて見ると、澱粉の樣にすべ〳〵して居るものである。砂の樣な堅い粉の入つたものは必ず惡い品と思つて間違は無い。尚は香ひの有無は石鹸と同樣に洗ひ粉としての價値を左右するものではない。

洗粉の作り方

洗ひ粉は自分で作つても雜作なく出來るのである。米の糠を用ゐる事は之れは誰れも知つてゐる。又麩も糠と同樣に洗ひ粉として効がある。其の他白大角豆か白小豆を粉にして用ゐてもよいものである。而して此等の洗粉の中へ硼酸を粉にしたものを入れて用ゐると更に効力がある。併し之れを用ゐるのは微温湯で洗ふ時に限るので、冷水で使ふ時には硼酸は溶けないから効はない。或は麩一分と米糠二分とを混じて用ゐてもいゝ。併し洗ひ粉として最も善良なのは左の割合で作つたものである。

硼砂　一分
白大角豆粉　二分
レモン油　數滴

之れは化粧品店で賣つて居る洗粉の作り方である。

此のレモン油は、單に香を付けるのみでなく、肌の色を白くする効がある。之れを合せるには、硼砂と白大角豆の粉とを丁寧に混和し、其の上へ數滴のレモン油を加へて、再び其れを混せるがいゝ。此のレモン油が多過ぎては粉が堅まる恐れがあるから丁度よき程を計らなければならぬ。

洗粉の用ゐ方

洗ひ粉を使用するにも、矢張り水より微温湯の方がいゝ、そして往々手の掌へ粉を入れ其の上へ湯を少し滴して用ゐる人があるが、其れよりも矢張り粉を糠袋へ入れて顔を強く擦らぬ様に心掛けて靜に磨くがいゝ。それから洗粉が皮膚に殘らぬ様に微温湯でよく洗ひ落し後ちワゼリンを塗るがいゝ。そして其の上へ鉛の入つて居らぬ白粉を着けると、能く伸びるものである。尤も白粉下のクリームを使用するならばワゼリンは用ゐるには及ばない



白粉下とクリームの製法

白粉の伸びを能くし、且つ皮膚の荒れを治す爲に色々の化粧水が出來てゐるが其成分は略々相似たものである。そして化粧品店では二三十錢出さねば買へないものでも、僅か一錢か二錢位で出來るから、經

濟を重んずる人は左の處方に依て自分で作るがいゝ。

ベルツ水は小さな瓶に一ぱい廿錢位はするが、之を作るには、左の分量の品々を混せるのである。

苛性加里	一グラム
グリスリン	二十グラム
アルコール	二十グラム
ベルガモツト油	五滴
蒸餾水	百六十グラム

これで水藥二日分入りの瓶に一杯位は出來る。又或は左の割合の品々で作つてもよろしい。

硼酸	四グラム
グリスリン	二十グラム
アルコール	十グラム
薔薇水	百グラム
蒸餾水	七十グラム

右の硼酸は熱湯で溶かすがいゝ。冷水には溶けないものである。右の二法で作つたものが最もいゝ樣であるが、或は左の處方に依つて作つてもいゝ。

硼酸	二グラム
アンモニア水	一グラム
食鹽	六グラム
アルコール	十グラム
蒸餾水	六十グラム

之れは樟腦をアルコールで溶いて、其の上へ蒸餾水を靜に入れ、後ちアンモニア水や食鹽を入れるがいゝ。其他化粧水としてへちまの水を取つて使ふといゝと言ふが、左程の効は無いらしい。其れよりもレモン油を用ゐる方がいゝ。之れは肌の色を白くする効がある。之を作る分量は下の如くである。

レモン油	一グラム
硼酸	五グラム
アルコール	二十グラム
石炭水	百グラム
薔薇水	百グラム

クリームの製方

クリームは近年流行を來したもので、之を塗けた上へ白粉をつけると、伸びがよくて、且つ容易に剝げなくなる。從つて今迄の樣に鉛の入つた有毒な白粉を用ゐずともよい事になる。故に白粉を毎日塗ける婦人達には、白粉下として是非之を使用されん事をお勧めす

る。此の製法にも色々あるが、自宅で出來る簡單なのはコールクリームとワゼリンクリームとである。コールクリームは只だ左の二品を合せばよい。

椰子油　百グラム
薔薇油　一グラム

又ワゼリンクリームは左の品々を調合すればよいのである。

ワセリン　二十グラム
硼酸　二グラム
グリスリン　二十グラム
薔薇精　五グラム

クリームの代用をする簡單なものはワゼリンである之れは怪しいクリームよりも遙に効がある。例へ白粉を着けぬにしても、前記の化粧水で洗つて後に之を薄く着けて置くと、色を白くしきめを細にするものである。又之を白粉下に塗れば白粉の伸びがよい、これは藥屋に行けば容易く求める事が出來る。





大阪婦人の側面観

河井歸雁

▲大阪の女は化粧が上手だ。東京の女は化粧が下手だ。大阪の女は化粧が唯一の仕事だが、東京の女は仕事が多い。化粧に半日を費すやうな時間を持つてゐない。

▲大阪の女の顔に彈力なし。覇氣なし。生氣なし。子供は子供、嬢様は嬢様、御寮人は御寮人と同じ類型にはまつた顔をしてゐる。つまり生活が單調なからだ。

▲大阪の御寮人と云はるゝ婦人の身の上こそ氣の毒なものだ。彼の奥まつた、黒く塗つた柱、古い壁、庇が深い爲に光線の射さぬ陰氣な室に年中籠つてゐる。客が來ても成るべく隠れることになつてゐる。世間のことは良人の口から聞くだけで、社交など云ふことはてんで問題にならぬ。下女や丁稚を對手に、食ふことと衣ることの話の外には何等の意義ある話もない。

▲大阪の女の娯樂は芝居と衣類の二つである。衣類は或る場合に、良人よりも大切な財産であつて、所謂春秋二季のおさうぶつなるものを、満足に與へてくれないと言つて、良人に離縁を持込んだ話などは珍しくない。而も是等の衣類を澤山にこしらへて、着て出るかと云ふに決して然うでない。只箪笥へ收つて置くだけだ。東京の女は外へ出る時の體裁の爲め餘儀なく衣類をこしらへると云ふ傾向があるが、大阪の女は一枚でも多く箪笥の抽出へ收ひたいために衣類をつくる。

▲衣類の縞柄、模様などを選ぶのに獨創の見地が無い。模倣に止まる。誰さんが那様のをこしらへたから、私もあゝ云ふ衣類を持ちたいと云ふのだから、自然類似が多くなつて、横縞が行はれると皆横縞、縦縞が行はれると皆縦縞、紫紺の色が行はれると皆紫紺の

色を用ひ、鼠色が多くなると皆鼠色を好くと云ふ工合に、模倣が流行をつくるのだから、此の流行に伴はない衣類などを着て出ることを、甚しく恥辱としてゐる。東京の女は自分が宜しと思ふものなら、流行に頓着なし着て出るだけの勇氣がある。大阪の女にはそれがない。

▲大阪の女が地味な衣類を着、東京の女が派手な風粧をすることは、誰も知つてゐることだが、此は大阪の女が早く世帶染み、東京の女が何時までも氣の若い證據である。

▲大阪の俳優は歴史的に婦人間に勢力を占めて居る。全都婦人の人氣如何は直ちに劇の消長に關する。されば芝居道にたづさはる者は、一意女の意向を迎へることに汲々としてゐる。女も亦三人集れば屹度芝居の噺をする。昔も今も變ることはない。

▲芝居に行く時に限り、女は簞笥の底をひつくりかへして一張羅を出す。有らん限りの晴を見せる。されば大阪の芝居を一見すると、見物に女の多いことゝ、それが又綾羅錦繍、紅ゐや、紫に眼も眩きばかり美しいのに驚く。東京の見物人は決して大阪ほど美しくない。寧ろ近頃東京の音樂會などに行くと、大阪の芝居に行つたやうな美觀がある。

▲大阪の女は美しい、皮膚が細い、色が白いが、要するに人形の美しさで、表情に缺けて居る。京都、大阪邊の女は愛嬌もあり、しなもあるけれど、修養あり教育ある愛くるしさではない。或る意味に於て狎れ易く、近づき易く、欺き易く、弄び易い。之れは根本の精神上の影響であらう。東京ではつまらない女にも見識ぶつたのがある。大阪では立派な家の女でも、全然見識の無いものがある。

▲衣類の着やうなども東西自ら相違してゐる。東京の着方はキリリとしてゐる代り、何處か締りがなく、ふら〱してゐる。大阪の着方はぞべら〱してゐる代り、何處かしなやかな處がある。

▲「浪花の風」と云ふ隨筆に「衣服の着樣など前をば深く合すれども、下前を重ねて深く合せ、半ば外へ折

返し、其上へ上前を淺く重ぬる故、下前の裏模様よく顯れて、下締腰卷等あらはれて、甚だ自墮落なる風態なり」とあるが、此の下褄を重ねて折返すと云ふこと、以前は一般の風俗であつたかも知れぬが、今は藝妓などに限られ、又町の女も餘所行などの時に限るやうで、平素は然うでない。元來衣服の裾を深く重ぬる風俗であるから、折返しせぬ場合は右云ふ腰卷などの見える恐もなく、自墮落なこともない。却つて今では東京の風俗の方が、右云ふ自墮落に適當るので、東京の女の衣服の裾は一般に幅が狹いから、歩く度にパッ〳〵と翻つて、蹴出も見える、脛も見える。一般の女が平素に衣服の裾のあらはな點は東京の方が著しく、勿論餘所行の場合は別である。

▲行儀作法に就いても、一概には論じられないやうだが、東京の方が平素に於ても正しいやうだ。或る儀式とか、晴の場所とかでは、大阪の女も形式的に行儀正しくなるが、平素は必ずしも然うでない。細帶一つの事も何とも思はず、暑い時には肩を脱く、膚を露はす、甚だしきは若い女が料理屋などに行つて、人の見えるやうな處でも、裸體になつてゐる様なこともある。概して皮膚を露出はすと云ふことの謹愼は少いやうだ

▲言語は人も知るアクセントの無い早口で、語尾の不明瞭な含み聲が多い。此一種の含み聲は、京阪の女の聲の特色とも言ふべく、東京の女のハキ〳〵した江戸子辯と對照して、能く其性格を現はしてゐると思ふ。

▲所謂御寮人より、少し年齡を取つて、四十五十恰好の一家で云へば、姑の地位にある女に、一種の地方的性格を帶びた者がある。多年臺所政治の權を握つて來た經驗を活用して一家はいよ〳〵榮えて行く。勿論多くは商人だから物質的の經驗より外何ものもないのだが、其經驗は決して馬鹿に出來ない。家族の監督から、良人への助言から、出入の者に對するお世辭から、若い嫁をチク〳〵いぢめることから、何から何まで切つて廻すと云ふやうな手腕は侮るべからざるもので、此等の女に限つて、男の子よりも女の子、寧ろ其が處女時代になると鍾愛すること普通でない、流行の衣類

一枚でも多く調製ることを初めとして、花見遊山は言ひなり次第、芝居へ連れてゆく、舞踊を教へて、茶や生花を仕込む、而して成丈け資産家へ婚嫁ようと心掛けてゐるのだ。娘を仕込む傍ら自分も、娛樂を共にし、偶には酒の一口も飲み、さはりの一節も彈いてみる。顏色のつや〳〵した、髮に油を絶やさない、着衣の裏には紅いものをつけると云つた風で、大阪の女としては最も活動の地位にあるものだ。呼んでお家樣と云ふ。

▲單に女の風俗に限らず、一見して大阪は淫靡の都會の如くなるも、存外、内部に純潔な分子がある。東京は一見して洒脫淡泊なるが如けれど、其實、淫靡の分子はなか〳〵多い。つまり東京人士の方が外見がうまくて、上手に體裁をつくるからだ。

▲大阪に貴婦人と稱する一階級を缺く。

▲大阪の若い女は、男子に接近する機會が少い、舊習の上から所謂箱入娘が珍重される。東京の若い女は男子に接近する機會が多い。歐洲の文明風が早くから浸潤して、思想の自由を重んずるからだ。何れにも弊害はある。

▲要するに大阪の婦人界は未だ舊式のまゝで、舞臺が廻らない。東京の婦人界はよほど新空氣が入つて居るので、騷動も起れば、問題も多い。大阪の婦人界は平穩無事舊式のまゝ水平を保つてゐるが、今に新しい教育を受け、新しい感化を蒙つた婦人が、大阪の舞臺に活動を初めると、東京と同じやうに問題も多くならうし、風俗氣質の上にも大變化が起るであらう。

▲今の處、大阪の女は只物質的に虛榮心の滿足を欲し、東京の女は精神的に虛榮心の滿足を願ふて居る。前者は罪が淺い。後者は罪が深い。けれども人間の價値は後者に於て高められつゝある。多數の犧牲者を出しても、眞の婦人界の先覺者を出すのは東京であるのは言ふまでもない。





苦勞を知らぬ娘の日記

杉浦翠子

十月一日、晴。

朝起きて、新聞を見て、もう、今日は十月なのに氣が付いた。あゝ、あと二月で私も廿歳になるのだなと思ふと、逝く月日が惜まれる。十五か六になる時と、十九が廿になる時が一番目立つ。前者は蕾が當に開かうとする時期だし、後者は花が漸く實に成らうといふのである。あゝ、實になるのは厭だ、いつまでも花の盛の處女で居たいと思ふ。

洗面食事を濟まして、裁縫の師匠に通ふ事例の通り。今日からは、姉様の嫁入を縫ふ。母様の物は本當に厭だ、いつでも父様の着古しを直して縫ふのだから繼の多いこと／＼、こんな膏薬だらけのものを縫ふのは、お友達の前だつて聊か羞かしいと思ふ。それを思へば中村さんは御自慢されるだけあつていつも新調もので裁方からなさる。其上大概お召縮緬とか、糸織とかだから、絲の滑べりだつてキユ／＼と絹絲の特聲を出す。今日も墨繪混りの光琳模樣の友禪縮緬なんかを擴げて尺を執つて居る。外にも紅裏や淺黄やらが、御膝のあたり、御袖のあたりに波打つて散らばつて、目が醒めるやうである。私の前が古着屋の店なら、中村さんのは三越の賣場のやうである。

『鳥渡、中村さんのあれは誰方のでせう、長襦袢でせうね』

と隣席の山田さんは、針の穴を通した糸をぷつりと口で切りながら、顔を寄せて小さい聲で。

『さうね、中村さんのだつたら、また屹度御自慢よ、でも地味だからお姉様のおやなくつて？』

『けど、先日から紋付のお羽織や丸帶や、御自分の着ばかり縫つて被居るから、屹度お嫁入りの仕度かも知

れないわ、だから割合に地味にして置くのではなく
つて」
と山田さんは、豫想外のところへ想像を結びつける。向側では、中村さんが裁板の上へ、その縮緬を丈長く延した。美しい布は一段高く汚穢た疊の上へ浮き上がる。物差で丈を量つた中村さんは、付ける可き篦を持つたまゝ考へ込んで居たが。
「先生、矢張り丈は四寸にして置きませうか」
と云ふと、先生は。
「いゝでせう、貴女のでせう」
「ハー」と答へるのでおや矢張り中村さんのであつたと思ふ。ハーと云ふとき、御衣裳自慢の中村さんは、得意の色を合んだ一瞥を送る。私は山田さんの袖をそつと引くと、山田さんは眼で合點を示す二人の見合した眼はなんて自慢やさんなんだらうといふ惡口を以心傳心に。



中村さんのお家の、素性はよくもないがお父樣は實業家で今は何萬といふ財産家だから、お金に任せて衣服や指環の流行を追ふことは、此處に集まる門生、三十人許の内でのオーソレチーだから、一同が羨ましがる事夥しい。中村さんは幸福者だと云てる。羨むといふのは慾望に飢えた弱者の聲である、苟にも私はそんな弱音は吹かぬ、何でも母樣は警

杖上りだとか聞く、私が縫てるこの着物は繼こそ當つて居るが、是を着る母様は由緒ある武士の娘である。女學館を落第したりして芝居役者の品評より外に出來ない人が何で幸福だらうと思ふ。お晝の休み時間にも。

「あらまあ、良い縮緬ね、あなたの、い〻わね」

と同輩が、中村さんの傍で眦を下げて、羨望七分賞讃三分の聲で虚榮の血を躍らせて、その縮緬の丈よりも長い涎を垂して居る。情なくも同輩はこの涎の爲に、黒髪の價を下げ、乙女の血を汚し、人格を下げ遂には身をも亡ぼすのだと、私は憫に思ふ。私ばかりは不關焉で獨り隅の方で歌集を讀でる、超然たる態度だと我ながら思ふ。

「まあ、私等と違つて學者は異ふわね」

と中村さんが皮肉を云ふ。

表飾は人に見せ度い爲であるから見て呉なければ癪に障る、今物質で飾つた看板を中村さんが廣告して居ると、一同は我を忘れて囃し立て〻るのに、私のみは横目も賜けぬ、果して廣告主は私が癪に障つたらしい。

「でも私のやうな貧乏人にはお召の批評は出來ませんもの……」と買ひ言葉で突込んで遣る。

何と云ても歌は晶子のに限る、近作のは圓熟して一層良いと思ふが、私は矢張りみだれ髪時代がい〻。青春の血が迸しつた、詠草の花は百合と薫り星と輝きて、感興の盡くるを知らぬ。

あはれ髪ながく、肌清き、女子と生れて、今年十九、狂ふとも笑ふとも醉とも翅は自由に飛ぶ青春の期である。私はその爛熳たる時を空しく過し度くない。この髪に伽羅を薫らせ、この肌に臙脂を彩どつて、胸には暖き蜜を貯へ、有らゆる蝶を呼んで見たいと思ふ。

四時、裁縫が退けて、お琴へ寄つて歸る。

と母様は、もう清とお夕飯のお仕度である。父様は謠の會でお留守である。

「母様、今夜のおかずはなあに」と訊くと、

「まあ、そんな事云はずに、少しお料理のお手傳でもおしよ、もう學校で敎はつた、割烹なんか、忘れておしまひだらう」

「忘れやしませんけど、自宅にやストーブがないし、第一秤がないから分量が判りやしませんもの」

「どうも、今時の人はお料理するのに却々手數が費るのだね、これでは未來に機械でも使つてするやうになるかもしれないね」

と母樣は冷笑なさる、仰に從つて私は牛蒡も切つた、お芋の皮も剝いた。

統監府に行て被居る兄樣から、官妓の寫眞の繪葉書が來た、讀で見ると、官妓の踊は日本の藝妓のやうに器用でないだけ上品だよ、美登利さんの名句拜見した、大變巧くなつ



たね然し歌讀みを女房などに持たぬもの……などゝいふ歌があるから御用心、まあ母樣のお手傳の方が安全だよ、僕も來年は歸る、とそれだけである。

「母樣、兄樣も來年はお歸りになるのね、嬉しいわ」

と云ふと。

「アヽ、それまでにはお前をお嫁に遣つて一雄にもお嫁を貰つてやらなければ……」

と母樣も却々苦勞が盡きない。

夜は千鳥の曲を彈いて見る。纎い煤竹細工の二階造りの蟲やの裡に、秋の樂蟲松蟲は、人の子が彈く琴の音と競ふて、チロリンチロリンと何の曲かを奏で居る。

十時寝る。

二日　曇。

今日は裁縫のお稽古の休み時間に色々な無駄口を叩く此間、梨村さんに逢つたら文學士と醫學士と一緒に結婚を申込まれて、何方にしようとか迷ふて被居しつてよ」と山田さんが云ふ。

「私なら文學士へ嫁くわね」と私は要らざる口を利く。

「でも文學士は貧乏ぢやありませんか」と中村さんが云ふ。

「貧乏だから高尙なんだわ」と私は負けない。

「さうね風流は寒いものつて云ふから」と誰かゞ向ふで頓馬な註釋をする。

「中村さんは何がお好き？」

「あうね、私大きな商賣人が良いわ、小僧や女中を澤山使つて御新様と云はれ度い、味噌漉下げる奥様なんか厭だわ」と粋がる。

「鳥渡、香川さんわね、如何しても海軍がいゝのですつて、さうしてあの不如歸の浪さんが武男に遣る手紙があるでせう、あれをみんな寫し取つて置きなさるのよ」と秋山さんが云ふ。

「寫して置いて如何なさるの」

「あら、未來に旦那様が航海をなさる時に、上げる手紙の參考になさるのぢやありませんか」

「まあ、今つから、お手廻の早いこと、まだ許婚つても居ないのでせう」

「ホ、、、、」と皆が賑やかに笑ふ。

「でも海軍はいゝわね、留守が多いから、いつでも珍らしくつて、それで洋行する度んびに、ブローチやリングを買つて來て呉れますもの」

「さうよ、いゝわね」

と海軍々人に一番贊成者が多かつた。

「今夜は觀音様の縁日だから一緒に行かなくつて」

と山田さんが云ふので、夕刻を約して歸る。

歸る途中に私と顏見合せた人がある。眉の秀でた瞳の凛とした面影が、私の心を魅するやうに感じたのである。その方はお隣の若山さんの御子息である。若山

さんはつひ一月ばかり前に越して來たのだから、まだお馴染は薄い。況して御子息などゝは言葉を交した事もないが、たゞ克己といふ御名だけは下女に訊いて知つて居るのである。逢ふ毎に見る毎に何だか懐しくて話がして見たくて堪らない物思ひつゝ家に歸る。

夕方御湯に浴つて、お化粧をして矢絣の荒い糸織の羽織を着換へて、姿鏡の前に立つて自分を見る。



濃い生え際、房やかな黒髪が湯氣を浴びて滴たるばかりに澤々しい。秋は馬も肥ゆるとか、私の夏痩も全々癒えて、豐なる頰にうら若き匂の嬉しく、誰やらに薔薇の色のやうよ、と云はれし事を思ひ出されて得意にほゝ笑めば、柳髮搖ぎて、朱唇の蕾綻ぶ。抑へ兼ねたる笑は零ぼれて、花の顏媚るゝ折、さと麝香が薫る。

乙女心はこの笑ひの裡に包まれて、暫時は私の想が

俗をはなれる。

山田さんが來る共に家を出る。

「あなた今夜は一對が幾組通るか、勘定しませう」

「一對てなあに」

「あら、御夫婦のことよホヽヽヽ」と云ふ。

電車線路を東西に別ちて、街の兩側は緣日の店がずらりと並んで居る。重く低く夜の空は、露店の裸火の幾百の焔と相觸れて暗夜が仄明るい。見世物の囃子、競賣の掛聲が賑やかである。リボンが通る、赤い帶がゆく、美髯が通るが、矢張り私等の目に觸れ安いのは夫婦連である。

大兵肥滿の奥樣に、蒲柳の夫君など、或は田鶴を舞はせるかと上品なる若松姿の殿御に、虻が吸ふ南瓜の花かと泥臭き嫁御の連れ添ひたるなど、或は半白髮の初老紳士が、赤てから初々しき丸髷を伴ふなど。

兎角は、高き低きと、美と醜とのみにて、雛樣のやうな、櫻と柳のやうな夫婦はないものかな。どれもこれもつり合はぬ一對の是では、床の間に並べ置く事も出來ぬ、などゝ二人は語る。

男郎花、女郎花、そはあまりに酷似して相對するの嫌はあれば、薄の夫萩の妻、露といふ子をお月樣から授かり度いなどゝの空想が湧く。

歸り途に山田さんはこんな事を云つた。

「あなたのお隣に若山さんといふ人があるでせう、あの方は帝大の文科生で、大變の秀才なのよ、よくこの頃雜誌に〇〇といふ名で創作が出て居てよ」と云ふ。

芥子の花は色こそ美しいが嗅ぐと厭な臭がする、毒草だと云ふ。若山さんも男らしい立派な方だと思つたが或は芥子の花のやうに、見かけ倒しかもしれぬ、と懷疑をして居たのに、山田さんの言によつて色も香も氣高き人と知つた、――私の胸は欽慕に躍る。

「嬉しいでせう。詩人崇拜の貴女だから」

「でも、別に交際する譯でもないのですもの」

「然し詩人ですもの、貴女に逢ふときだつて、乾度何か胸に響く事があるかもしれないわ」

「どなたの」

「君山さんの胸に」

詩人なれば、御夢も美しく、夜もすがら天使の翅に抱

「まゐ」

かれ給ふか。

詩人なれば、御感想も美しく、一筋の落髪にも微妙なる、絃の音ききますか。

　我が家君が家の隔の垣に今や盛りの木槿の花も、互の庭に渡る風も、蟲の音も、折々調ぶる我が琴の音も、口吟の聲も、隣住む君が御胸に響かば、句ともなり章ともなる可きか、瓦も珠と歌ひ給へば、土玄く、黄塵の此處をも、君が領土となれば、詞藻の花薫りて、詩の國ともなるべきか。あはれ君は尊し、天降りませる詩の神の如くやんごとなしよと、讃歎の頻に湧く。



　山田さんと途で別れる、自宅の門を開ける前にお隣の塀を覗く、勿論外から見える筈もないが……。歸ると直ぐ茶の間へ行つて、母樣に只今と云て長火鉢の傍に坐る。母樣は足袋繼ぎをして被居る。清は縫物である。床の下で蟋蟀が寒さが來るから〳〵と鳴いて居る。父樣は御部屋で、小鹿鳴くこの山里と詠じけん、と小督を謡て被居る、父樣の

胸にも秋の聲が響くかと思ふ。母様と終日の話から草花の話、草花が好きだつて亡き姉様の話、それから兄様が朝鮮から歸つたらお嫁を貰つて遣つて、この家を新夫婦に讓つて、父様と母様は大森邊に隱居なさるといふ話、それまでには私を片づけて安心しようと、仰有る、話をして十一時頃、私は自分の部屋に引退る。寢ようと思つて窓の戸を締めるとき、お隣の庭を生垣を越して覗く、灯が洩れて見えるが――靜である。

「思ひつゝねればや人の見えつらん、夢と知りせばさめざらましを」の歌を三遍云て胸に手を當てゝ寢る、籠の松蟲が鳴いてる、私の夢を保護るやう……

三日　晴。

昨夜、私があれほど思つて寢たのに、夢中その人とは逢はないで、思ひもかけぬ私の嫌な正雄さんが、夢の浮橋渡り來て、君に獻ぐべき我が魂を、横奪したのである。

仇なる緣を繋ぎ合せて、人の子に憂き目を與へ給ふ、情なさは、出雲の神のみならず。――いと責めて夢にも頼みし、我が夜の魂を、摧しもやらず、徒に戯弄び給ひし夢の神のあまりに、不粹さよ。と私は今朝したゝか恨んだのである。

今日は母様の綿入れも縫ひ上がつたが、私は何でか安心が出來ない、その不安といふのは昨夜の夢の解決に苦しんでるのである。

何故、私は少しも思はぬ、寧ろ嫌つてる人の夢なんか見るのだらう、實に夢といふものは當にならぬ。

――夢てふものをたのみ初めにき――と云た小町は羨しい、否折角戀人と逢ふべき、夢の領土を正雄さんの嫉妬が掻き廻しに來たのかもしれぬ、憎らしい、と私はこんな理窟をつけて、自分が見た夢を人の所爲にして終つたのである。

家へ歸ると井上の伯母様が來て居る、私が御挨拶すると、「まあ、それでも感心にお仕事に被入るの」と仰有ると。

「無理に遣つてるのですよ、もつと勉強し度いと云てるのですが、もう高等女學校卒業すれば、澤山です、

からね」と母樣が私の代りを引き受ける。

「さうですとも」と伯母樣は同意しながら、私の姿を熟々と御覽になつたが、その視線が肩のあたりで礑と止まると。

「おや、未だ肩上げして居るの？」

「ヱー」

「もう、おとんなさい、ゆきが短くて見つともないぢやありませんか」

「さうとも、取れ〳〵と云ふのだがね……」

「でも、伯母樣のところの雪さんだつて、未だでせう」

「あれは、あなたと違つて小造りですもの」

「でも、私と同い歳なのですから、もしや雪さんが取れば私も一緒にとるわ」

と私は自分ばかりが、大人になるのは損のやうな氣がする。

「今日はみいさんに嬉しがらせる事をお話に上がつたのよ」と伯母樣が被仰る。

「どんな事？」

「當てゝ御覽なさい、今に屹度みいさんは伯母さんに手を合して拜むやうになるから……」

何だらう、所詮伯母樣の事だから芝居に連れて行こう位だらうが、厭に思はせ振りするだけ不安である。

「なあに？母樣被仰て、惡かないでせう」

「ホヽ、御目出度いことですよ」

「お目出度いこと？」

と私は疑問詞を挿んで、この漠とした伯母樣の言葉の裡に石か木かを探ぐる積で、伯母樣の顏を讀んで居ると、妙に眼が熱くなつて來た。何故といへばお目出度いことゝは、若しや縁談の話ではなからうか、と思つたからである。然し當が違つたら、そんな事に推量したゞけ恥かしいと思ふ。

「まあ、今に分りますあね」

と母樣が有耶無耶の中に葬つて終ふ。

と郵便！と玄關で云ふから、私は席を立つて出てゆく。

郵便は懷しい神田さんからである。私はもう親友の消息を聞くのに、氣が奪られて、今の話の結果を聞か

ずに、その手紙を持つたまゝ自分の部屋へゆく。披いて見ると、處女時代の理想は結婚してからは、決して行はれるものでない事や、何といつても娘時代が良いとの述懐やら、結婚すると緣家よりも實家が戀しいことなどの愚痴が長く〲書いてあつて、何だか悲運らしいことが書いてあるかと、思ふと、終の方に、良人は極めて優しく情を解したる人に御座候、なんて惚氣が書いてある。ちつとも要領を得ない、然しどうせ、人間の頭だ、機械ぢやないもの要領を得ないのに不思議はない。もう十月に這入たのに今日なんか、厭に暖くて、彼岸前のやうな陽氣だし、今時分に庭の山吹の花がこんなに咲くなど――狂咲きと云ふのだらうか――自然の神樣も何やら不得要領の事ばかりして居るなど〻思ふ。夕方伯母樣は歸る。

『それでは父ともよく相談をして置きますから……』

と母樣が被仰つた、何のことかしら。

夜は神田さんに返事を書かうかと思つたが、あまり月が良いので二階へ上がつて、一人でお月見をする。

仰げば隅なき空には一輪の月魄が輝いて居る。俯向けば、露置く野には喞々と蟲が鳴いて居る。欄干に寄る私の二つの袖にあまる、秋風はさわ〲と、袖垣の萩を音づれ、千筋の綠髮かと思はるゝ糸薄の細き、葉を滑る、その一陣の風に聲を聞くならば、太鼓にあらず、皷に非ず、小さき銀鈴の音にこそ鳴らんと私は思つたのである。淸凉の氣が滿ちて居る月下であるから…………。





米國舞姬 舞踏術の稽古

玉置牧瀾

西洋にて舞踏を舞臺の上にて演ずることは數百年此の方、行はるゝのであるが、初めて訓練せる女の身體の美しきを認め之れを推奬したのはミラノの公子ギアン、ガレアッツオである彼がトルトナにて興行せしめたのは今より五世紀も前の事で其の地の美しき娘を集めて舞臺に登せ一齊に清歌妙舞せしめた、衆人賞讃の聲望を動かし、遂には舞姬を養成する學校さへ開かるゝに至ッた、此の時以來歐洲諸國では舞臺舞踏を最高藝術の一つとして許して居る然し十九世紀の初め頃から其の品位が甚しく墮落して來た、伊太利、佛蘭西、獨逸の如く政府が演藝を公衆の享樂を增進する具として認め、且つ之れを保護する國に於てはさすがに今尙は一種の趣味を保存し改善の機運も見える。

米國にても可成盛んに行はれて居るが、此の國にて一等舞姬と呼ばるゝ者は大抵パリのオペラに附屬せる舞踏學校又はミラノのラ、スカラに附屬せる學校の卒業生である、米國には無論かくの如き半官的の舞踏學校はないけれどニユーヨルクには私立の學校があッて舞踏を職業としようと思ふ娘を訓練して居る、多くは學校の管理者と教師とは同一人で嘗ては舞臺の上にて喝采され噪めく觀客に再演を所望されて嬉れしかりし記憶の未だ消えやらぬ連中である。

ニユーヨルクの第二十三街に一つの舞踏學校がある、校主は昔し巴里のジャルダン、マビーユにて女王と謠はれし佛蘭西の婦人なるが流石に寄る年波には打ち勝ち難たく退場して米國に來たりお得意の旋回の法を敎へて居る教場は横に長き建物にて內は一面に床を張り蠟を塗り、兩側の壁の前に木の腰掛けが列らべて

ある授業が始まると十數人の少女が裾は漸く膝に達する薄すき緩るき衣を着け黒き靴下にスリッパーと云ふ扮裝にて這入ッて來る教師の佛蘭西婦人は佛語交りの英語にてサーお始めなさいといふと教師は室の中央の或る一定の位置に着き生徒は各〻脚先きを勇ましく蹴り出して行きつ戻りつする、餘所の見る目には却々巧妙に見えるが教師には氣に入らない。

　皆さん脚先きをもッと、しッかり高くお昂げなさい、そんな事では迚も本職にはなれません。

と云ひながら一人の少女の脚を持ッて痛き程迄で高く上げる。

　先づ、此の位、サー、おやりなさい、一二！一二！

　それでよろしい。

と云ッて自分もやッて見せる然し先生の方が却つて巧くない樣であるこれは下級の生徒の學課で、之れを少時やると筋肉引きつりて甚しく痛む故、後で油を塗り按摩をする法を教へる。

脚を高く、蹴り上げる技術は却々容易なとちやない、舞姬が修業中には常に餘り無理をする故筋肉の痛みに苦しむ、人間の脚の常態にては迚も教師の望む所に添ふことでない、之れを仕遂ぐる迄には引張ッたり、湯に入れたり、油を塗ッたり夫れは〳〵大變である。

　次で教室に上級の生徒が入り來れば婦人は、

　皆さん昨日習ッた所をやッて御覽なさい。

少女等は各〻位置に着き活潑に蹴り出す婦人は非常に滿足して、

　それでよろしい今度は脚を下ろしてから五つ拍子を取る間同じ處に止まりなさい、よろしいか一イ二ウ三イー

處が婦人の氣に入らない。

　おや〳〵情けない踊り方！位置を動いてはいけないと云ッたぢやありませんか、こんな風にするのです。

と云ひながらシャルメン、マピーユの老女王は衣の裾を摘まみ信號か何かする樣に脚を蹴り出し昔し嘸ぞかしパリ人士の心を蕩ろかしたでもあらうと思はるゝ程

優美に輕快に室を彼方此方と滑べり動く。

サア、分かりましたか、私の通りにやッて御覽なさい、先づ品よく裾をかき上げて。

衣服の裾を品よく摘み上げるとは又、未熟者には却々六ケ敷いのである、一寸考へると何んでもない樣であるが先生がそれで良いと許すまでには其れ許り一ケ月も勉強しなければならない。舞姬の成功は往々舞臺に登ッた時最初の身振りが觀客の心を引くことより起る故これは頗る大切な事である。

斯くの如き豫備的練習を積むと意味のある踊り即バレットを學ぶそれには「立琴」「手振り」「風車」等と種々な名が付いて居る「立琴」は右の脚を頭の高さまで蹴り上げ左の手にて爪先きを支へ立琴の形ちを爲し同時に右の手にて糸を彈く眞似をする此の舞踏にて最も六ケ敷いのは一本の脚に身體の平均を据ゑる事である。



長い歴史を持てる舞臺舞踏には漸々色色な技巧を生じ一々之れを巧みに、やッてのけるには並み大抵の事ではない、今日では觀客の目は却々高くなッて其の技巧をよく知ッて居るから舞姬は此等の人々より賞讃を得んには長い間苦辛と練習

とを重ねなければ成功はおぼつかない。

舞姫の給料は其の技術の如何によるのであるが一等舞姫（ダンシユーズ）は高名なる女優と同じ位である然し普通の者は甚だ少しゝか取れない興行して居る間、一週六弗位、旅行中には十二弗位、給せられる。

興行の管理人は多くの舞姫の候補者中より出來るだけ美しい娘を撰び猶ほ開場前の幾日かの練習中には撰びし上に又よりすぐり篩ひ落された顔は色々の口實を設けてお拂ひ箱にして其の跡へ別の美しき少女を入れる。

斯く給料は少なく競爭は烈しく舞踏の興行數及び觀客の範圍は割合に廣くはないのに、おぼつかなき成功を夢みつゝ採用を願ひ出づる少女の數は常に非常の超過である屢ゝ斯樣な困難を犯し常に當撰し漸く一人前の舞姫となッても出世は却々六ケ敷く大抵はつまらなく終つてしまう、舞姫の生活は比較的に可憐である。

△頼朝　幸田露伴著

其の性質殘忍酷薄にして一門兄弟に恩少く、終に三代にして亡びたりとて後世歷史家の間に兎角の批難ある、大英雄鎌倉の右大將は、果して如何なる性格を有せる人なりや、この疑問題に向つて快刀一揮其の人格の根底に向つて解釋を下したるものはこの書なり。頼朝は生れながらにして、涙なき酷薄人物なりしが、而かも其の酷薄なる性質は何によりて繇りしか、この途の消息は人物を觀察するに頗る趣味ある事柄なりとす歷史家未だ言はず、小說家未だ描かず、こゝに著者の筆、否著者の眼識によつて千古の疑問は解釋されたり、吾人はこれを文壇の珍事としてこゝに此の書を紹介す。定價一圓十錢、東亞堂發行

△浮草　二葉亭著

二葉亭四迷氏の飜譯は文界の珍品として滿目の許すところなり、この篇ツルゲーネフ作中最も評判高く光彩ある佳作にして、人物事件の躍かに描かれたる、讀者は知らず／＼作中の物に同化されて身はさながら其境にあるが如く、恍惚として神遊くの思ひあり。定價一圓二十錢、文淵堂發行

△戀山賤　故紅葉山人遺著

故紅葉山人佳作の内にして紅葉全集に洩れたる戀山賤外數篇は今回中興館江虚より發行されたり、戀山賤は山人の作中男性的趣味を以て聞えたる關東五郎と並べ稱へられたる短篇中の美玉にして其筆致の洗練、意匠の奇拔なる今更努々を要せず、校訂は故人の遺友思案外史にして卷末に露伴氏の批評を添へたり。定價五十錢



小間使の手控帳

あけぼの

十一月五日

冬が近づいたらしい、お庭を掃いてゝも今朝はゾッとする程寒かつた。

車夫の粂どんが廊下に雑巾かけてる音を聞き乍ら、私は部屋で昨日國から送つて來た縫い立ての綿入れを出して着て見る。粗大い縦縞の色糸だけがいやに光つた手織木綿。例の紅入友禪の帯をクッとしめたが、何だか身體に添はない様な氣がする。綿入れの小包の中へ一緒に入れて來た湯出栗を、竹どんや、菊ヤや、粂どんに分けてやらうと思つて、紙袋の一方を破つて風呂敷にあけて置く、大きい撰りぬきの栗ばかりだ。もう十七になつてる私を子供の様に思つてる母さんは、初めての私の御奉公を乾度心配してこんな栗迄入れてくれたのだらう。ア丶もう別れてから二月になる、何だか涙がにじんで出相になる、私は瞻然としてると、

「お春さん、お孃様のお呼びだよ。」と仲働のお竹どんが呼ぶ。周章て栗の包みを押入れの行李の上へ投げ入れて、昨日結つて貰つた島田髷の前髪を、さしてた小櫛でとき上げ乍ら廊下へ出る。まだ五時半だのに、何して今朝はこんなにお早いのだらうと不思議に思ひ乍ら、敷居の外にしやがんで。

「お呼び遊ばしましたか？」

「アー、もう先刻の事よ。」

胸がギクリとした。お孃様の御機嫌取るのが私には一番の苦勞だ。

靜かに障子をあけると、もうお洗面もおすみになつたらしい、まだお寢まき着のまゝで、白つぽいネルの

荒い格子に、赤いおしごきが配合が好い。

『まあ、お早うお眼覺めでございましたね。』

『ゆふべ寢てからね、今日は小夜子様とお尋ねしようと思ひ付いたのよ。』

思つたより御機嫌が好いのでホッとする。

『左様で被居しやいましたか、今日はお天氣も結構でございますよ、嘸ぞお喜びになりませう。』

小夜様といふのは、矢張り旦那様と御一所の會社へ御出勤になる櫻井様のお孃様で、私は三度程御見受け申したが、うちのお孃様よりズッとお美しい方だ。

蒲團をたゝんで急いで押入れへ上げてる間にお孃様はお召しがへ遊ばして、

『お母様に申上げて來るわ。』と奥へ被入つしやる。もう皆様御眼覺めになつたらしい、お話聲が聞えだす。

お居間のお掃除に取りかゝると、向ふの廊下で今年七歳の一番お下の直様が竹どんに何かむづかつて被居しやる。竹どんも屹度お上の御用があるだらうと氣を利かせて急いで掃き出して行つて見ると、

『春や、菊のお庭へおんぶして連れてつてくれないかい。竹はちつとも負つてくれないもの。』とお可愛い、眼をしばたゝいて被居る。

私は三人の御兄弟の内で一番此の坊つ様が好きだ。故鄕の私の弟も丁度今年七歳で尋常一年生だ。

『竹やはお上の御用がありますから。』と直ぐ其處の緣側からお負び申して裏の菊畑へ出る。

『これから何時でも坊ちやまは春やがお負び申ますよ。』私は如何して斯んなに此の坊様がお可愛いゝのだらう。

二十分も菊の花壇を廻つて歩いて歸る、それからお上へお膳をさし上げて、後で私共もお臺所で頂いてると、髪結のお文さんが弟子連れて遣つて來た。相變ず元氣が好い。

今日は奥様のお定りの日だけど、お孃様の御外出のために俄かにお孃様もお髪結遊ばす事になつた。

旦那様が御出勤前、お二人程私の知らないお客様があつたので、お茶やら、お菓子やら何時の様に御用を

個つてる間に、お嬢様のお髪は出來る。それからが御金入りのお化粧だお手傳申して、今日のお召物は、此の間三越でお出來になつた何とかお召のお綿入に、〔私はよく承つて崩れて了ふ〕厚板のお美しいおみ帶。

「お島田がよくおうつり遊ばします。」つてお竹どんがいふから、仕方なし私もおほめ申して置いたけど、眞實は毎時のお廂の方が好いと思つたの。やつと十一時頃榮どんの車でお出かけになる。

「行つて被入しやいませ。」と竹やと二人お見送り申して玄關に居ると、お上の若様が學校からお歸りになる



大分見馴れたけど、まだ私は房の下つた四角な帽子がお可笑い氣がしてならない。

「咲子は何處へいつたい？」

「お會ひ遊ばしましたで御座いませう。櫻井樣へお出かけになりました。」

「ふゝ、櫻井の武夫君、學校の歸りに寄るはずだのに。」

編み上げ靴をじれつた相にお解きになつてほり出してお上りになる。何てお手荒いのだらう。それにしても、お孃樣は小夜子樣へお遊びに被居しやつたのだに、若樣はよく人をお弄り遊ばす。

それから直ぐ竹どんと二人で、お膳をお上へ運ぶと今日はお珍らしいお隱居樣が奥樣のお居間で、何やらお會話の最中だ。

『武さんが、も少し成績が好いと好いがね。』

『けど如才のない人でござんすからお父さんのお跡位つげませう。』

『小夜子さんは如何だらうね。』

聞かぬ振りして、ソッと耳を立てると斯んな斷片の言葉が耳に殘る。

奥樣のお膳をお引き申してると玄關のベルがなる、臺所もお晝飯だと見えて書生の朝田さんが出て來れない、仕方なし私が飛んで出る。櫻井樣の若樣が被入しやつたのだ。ハッとした。

『被入しやいませ。若樣がお待ち兼でございますよ。』と丁寧に云つて、お出しになつた例のお可笑い房糸の四角い帽子と洋杖をお受取り申すと、凝然と御覽になつて、

『今日はいやに澄してるね。高髷が好く似合ふせ、ハハヽ。』と被仰る。何やら冷笑された樣な氣がしてムッとするのを强いて抑へて、

『御戯談ばつかり。』といつて走つて來た。

うちの若樣に何處か似て被居しやる。何して學校へまだ通學しやる生徒さんの癖に、あゝだらうと不思議でならない。第一房糸の帽子からお可笑いや、それは仕方がないとして何時も髮を奇麗に分けて油で光らせて、緣のない眼鏡が鼻の先にとまつてる樣だ。私は何時やら故郷の秋まつりに一度見た若い役者の樣な氣がする。

仕方なしお膳やお銚子は運んだが、お給仕はお竹どんに賴んでして貰つた。

お晝すぎ例の栗を竹どんと菊やと三人で食べてると勝手口で『御免下さいませ。』と誰れか來た樣だ。二人がむしや〳〵やつて居るので私が出て見る。會社の下役の杉本さんの女中だ。

『これは眞實にお粗末でございますが、何卒お上へお納め下さいませ。』と言つて差し出したのは、紅白の水

引き立派な大きい奉書の包み物だ。白縮緬らしい。
「何か存じませんが、只今奥樣は御不在でございますから頂戴致して置きます。」と言つて貰つて置いた、毎時も何か貰ふ時は「奥樣は御不在。」とか『御來客が只今ございますから。』と言つて受取つて置く。何だか僞言いつて氣がとがめるけど、お上のお命令だから仕方がない。何してお邸は斯んなに他處から貰ひ物があるのか、私は羨しくつてならない。そして、誰れでも皆、勝手の入口から持つて來る、そして一度だつて奥樣が出て御禮被仰しやつた事もなしに追ひ返すのは不思議だ。故郷の家なんぞ稀に何處かから何か貰ふと家中大騒ぎしてチヤホヤ言ふんだのに。
　三時頃お孃樣お歸邸になる。
「まあ、今日はお早かつたね。」と榮どんに言つたら、
「當然さ、今日は向ふのお孃樣お一人きりだもの。」と汗を拭き乍ら言つた。
　夕方の御飯に一騒ぎして、夜、菊やと二人坂下の大和屋迄、奥樣の此の間御注文遊ばした鼈甲の櫛を催促にいつた、今日電話を二度掛けたのに持つて來てくれないので。
　歸つたのは十時過ぎ。櫻井樣の若樣もお歸り遊ばしたと見えて、奥はお靜かになつて居た。其處いら後締りして床についたのは十一時頃だつた。身體が斯う、たるたるとする樣に疲れて仕舞のは毎日の樣だけど今日は尚、苦しい樣だ、睡眠時間が私には一番うれしい。菊やはもう足に火が付いても知り相にない程氣持好さ相に寢てゐる。



十日の菊

紅居

如何なる方面にも婦人が必要となつて、軍人、警官、裁判官などの外は、殆ど婦人を拒否せぬと申した様な今日の世の中に、女ならでは夜の明けぬと申す日の本の國でありながら、最も婦人に相應しい俳優と申す職業を多くの婦人方が等閑視して居られるのは、心外千萬で御座います。

それで九女八や貞奴と云ふやうな人々が陳勝呉廣の役割を自分で遣つて居るのですが、未だ一般婦人中に自ら俳優とならうと云ふ勇氣ある方を發見しませんでした。藝妓上りでゝもなけりや、彼樣な事は出來ないと云ふ氣がして居るからで御座いませう。

所が其人は紳商中の紳商とも申すべき某々男爵等の後援を得て、女優養成所と云ふを設立し、志願者を募集したところ、百餘名の應募者ありて、其中から十五名だけ採擇したさうで御座います。是れ某々男爵等の信用にも因りませうが、一般婦女が將來の生活難を豫想して、迚も女事務員や電話交換手では人並の生活は出來ない、女優であらうが、何であらうが。品行さへ方正であれば社會から輕蔑される譯はないと信じて募集に應じた結果だらうと存じますが、其人は矢張り藝妓上りに相違御座いません。藝妓上りの其人が所長でありながら、藝妓上りの志願者を拒絶すると申すことは、論理に合はぬ次第であつて見ますれば、信州松本から來た藝妓上りの某女が採擇されたのは尤も千萬で御座います。去りながら品行さへ方正であれば女優に爲つても社會から輕蔑されまいと信じて志願した妙齡婦人中には所長が藝妓上りであり、朋輩にも藝妓上りが居るのみならず、從來の藝妓の如く、宴會の注文に應じてお酌をもさせると申すので、今更奇異の感に打たれた人もありませう。

女優養成所の必要なることは申す迄も御座いませんが、其魁を致す人が品格ある貴婦人などから出ないとは、今日の我國では分り切つた事で御座いますから、

其人が女優養成所設立は機會が熟し過ぎて寧ろ晩い方で御座います。去りながら、下田歌子女史の名を知らぬ者はあつても其人の名を知らぬ者はない、其人の名は伊藤公爵や東郷大將の名と共に歐米に鳴り響いて居るなど〻部下に吹聽せしめて、名聲に狂し易い妙齡婦人を誘ふのは感心されない事である。政友會前代議士某氏の令嬢も志願者である、某小說家の門下なりし某某女史も志願者であるなど〻誇つて、純潔無垢の處女の好奇心に投ずるのは餘り褒められない事である。敎師の中には、姪を藝妓屋へ賣り飛した老婦も御座いますから、志願者の父兄は深く〳〵注意せられねばなりません。

併し如何なる事業でも、最初から立派な人ばかりが致すと申すやうな事は稀で御座いますから、中にも俳優の如き者を立派な純潔な人ばかりで固めようと云ふ如きは、空想に過ぎない事で御座いませう。私は十五名の志願者が卒業して女優と成つてから意思堅固に品行方正な者が一人や二人は出來るだらうと存じます。事に一人でも二人でも、意思堅固に品行方正な女優が出來たならば、必ず其中に混じて居るのを耻ぢて、別に一旗幟を立てる事と存じます。この革新派は、最早藝妓上りを所長と戴かぬとは申す迄も御座いません、藝妓上りの志願者を許容せぬとも又申す迄も御座いせません。のみならず今回の如く我所長の名は歐米に響いて居る。下田歌子女史の名を知らぬ者はあらうが。我所長の名を知らぬ者は一人もない抔と部下に吹聽せしめる必要のない事も分り切つて居ります。隨分待遠な話で御座いますが、今日の女優養成所に失望致した私共は、將來革新派の旗幟を立つる者の出で來るを待つの外は御座いません。

で今回の十五人は行々或る勢力の下に犧牲となつて仕舞ふだらうと杞憂されます。どうか個人の宴會に招かれて酌をするやうな醜態を演ずる事丈は愼んで貰らはねばなりませぬ。蓋し藝妓なるものが今日の日本に現存してゐる以上日本の女優なるもの〻地位は西洋に比べて餘程誤解に陥り易いきわどい立場に居るものでありますから。



見え透いたる女の謎

宮城野女

其の背、エジプトの海岸に女面獅身のスフィンクスといふ怪物が表はれた。通る旅人に奇妙な謎を掛けては困らせ、其の謎を解き得ぬ者は怒濤逆まくアドリヤの海へ投げ込まれたと云ふ恐ろしい話。有難や文明の世の開化の光りは津々浦々、片山里に迄輝き渡つて、未だ山の芋が鰻に化けて樵夫の爐の緣先へ這ひ込んだ話も聞かず、漁師の娘が蛸入道に謎かけられた噂もないに、扨も不思議な、謎の女が至る處に頗る多い。お隣のおばさん然り、前の八百屋の主婦さん然り、學校のお友達、先生の奥樣、我家のお三に於て殊更に然るを見る。

○

眼にも心にもまだ見はてぬ夢を浮べて雨戸を繰ると、サツと秋の冷たい風、緣先から手早く帶結んで忘られぬ菜園へ走つて出ると、昨日の朝とはまあ玉蜀黍の大きうなつた事、一昨日の朝一本取つて嬉しさに思はず母樣の所へ駈けて行つたのを『まあ、お前とした事が、赤ん坊ぢやあるまいし、鬼の首でも取つた樣な騷ぎ方。』と、被仰つたのを、不圖、思ひ出して莞爾する。

『お早う御座ります、まあ能くお手入れを遊ばしますね、ホヽヽヽ。』

吃驚、振り返るとつひ左の生垣の隙から、お隣のおばさんの凹んだ眼が光つて居る。

『あら、おばさんでしたのね、吃驚しましたわ。』

『ホヽヽヽ、玉蜀黍がまあ大きうなりました事、御手入れがお上手で違いますね、宅のなんざあ、貴女もう……。まだお取りにはなりませんか？』

『エヽ、取りましたのよ一昨日ね、今年のは北海道から來た種なんですから毎年のよりは大きうございませ

う？」

「まあね、宅の病人（主人の事）が之れを好みましてね、昨日も前の八百屋さんで訊いて見ましたが、とても貴女、取り置き物で、ホヽヽヽ、今年は宅の赤茄子が滅法能く出来ましたよ。誰彼かお好きな方はございませんか、ホヽヽヽ、なんなら持つて上りますよ。」

「エヽ有がたう、おぢさんがお好きですからおばさん一本折りませうか。」

又かと嫌に思ひ乍ら斯ふ云う成行になつて了ふ。

「否、お骨折りの何ですもの、ホヽヽ。済みませんね。」おばさんは不得要領な會話で言葉をきる。そこで二三本、ぽき〱折つて垣の隙から向ふへ出す。

「ホヽヽ」と「まあ」はおばさんの謎である。

◎

「健ちやん、もう御飯ですよ、早く家へお這入り。」

頓狂な奥様の聲が不圖、耳朶を打つ。

「先生、まあ長居致しました、お話の面白いので何にも忘れて終ひました。」と、今迄私と一心に聴いて居た芳子さんが膝を動かす。

「まだ早い、未だよろしい、それからですね。」と、面白い文學談の續きを成さらうとする時、白茶襖がスート開いて、縞お召、たをやかな奥様が出て被居しやつた。

「お饗應も致しませんで失禮ばかり致しました、さあ、お茶でも一つ換へて參りませう、ね貴郎。」

何と優しいお聲だらうと、奥様のお顔を凝然と見る。

氣の早い芳子さん、少し周章てゝ、

「いゝえ、もう。飛んだお邪魔を致しまして、暮れない前にもうお暇いたします。」

「まだ〱、お早う御座いますもの、ね貴郎。」

「今少し話して居らつしやい、飯でも食つて歸るが好い。」

「さう、遊ばしませ、今に御飯に致しますから。」

話下手の私、何時も辯士は芳子さんに譲つてはあるが、斯うなつては私も默つて泰然として居られない。

「それでは御暇いたします、先生の面白いお話はまた

此の次迄樂しみに致しませう、奥様有りがたう御座りました。」

芳子さんに續いて立ち上る。御部屋を廊下へ滑り出ると。

『お遠慮ばかり遊ばして、ね貴郎。』

『ぢあ、此處で失禮いたしますよ。』と先生のお聲を聽いて廊下から玄關へ出る迄を、奥様が無暗に止めて下すつた。

『此の次には、御ゆつくりお出下さいませ。』

『有りがたう御座います。』も、やうく、いらだつ心を、やつと表で觀管て、芳子さんも私もホット一息。

太陽はまだ並んだ屋根の二尺上に輝いて居る。



美しい唇からもれて出る『ね、貴郎。』は此の奥様の美しい布で包んだ謎である。

◎

おさんに於て殊に甚しい。

『お孃様、玉か……』と、慌しう馳けて來た。

『エッ、玉がどうかしたの？』

玉は私の愛する猫何かしたのかとギックリした。

『眞に申譯が御座いません、一寸放心して居ります間に、先刻伊勢屋が持つて參りましたあの半衿を、つひね。』

『まあ、先刻來たばかしのを。お前が見たいと云つたから預けて置いたのだに。』

「一寸、貴女、裏までいつて歸つて見ますと、まあ玉がじやれついて嚙むでるぢやあござい ませんか……。」

「後の事はどうにも仕方がないわ、何なになつたの。」

「滅茶々々になつて了いました。」心から詫びて謝らぬ態度が憎い、然しまだ新參者だからと癪を押へる。

「ぢあ、持つて來て御らん。」

「とても、御孃樣のにはだめて御座いますよ。」やつとの事で立ち上る。過失の罪を玉に讓つて、而も都合よくば半衿迄も頂戴しようと思つて居る。

「玉が玉が」はおさんの謎である。

兎角女は、遺傳や、周圍の壓迫や、習慣等からして快活灑骨をさけ、艶曲皮肉を云ふ人が多い、無敎育者はまだ多少無邪氣な所に恕すべき點もあらうが、分別あるべき大人や、敎育ある婦人の見えすく謎は、惡感を催し、人格を落して見せる者はあるまい。先に擧げたのは餘り極端な例かも知れないが其の謎が思ひ通り向ふの人に解かれた時、果して心地好い滿足が得られようか?





和歌

三宅花圃女史選

(天) 垣草花　岩代 岸野常子

野べちかみ垣の内外もわかぬまで
　さきつゝきたる八千ぐさの花

評、ゆかしき垣根わたりにこそ

(天) 後の月　名古屋 高橋かき

袖におくつゆにはし居の夜もたけて
　さやけさまさる後のよの月

評、後の夜のさまおのづからみる如し

(地) 玉　相模 山田武子

委より言の葉よりもうるはしき
　實は人のまことなりけり

評、まことにとはの實なるべし

(地) 初紅葉　靜岡 河合象子

色淺きひとしほ染の初紅葉
　おりいだしたる錦はたの山

評、いつもながら手練によみなし給へり

(地) 稲妻　四日市 水谷靜子

鈴鹿山むらたつくもにいなつまの
　きらめくあたり晝ひとつみゆ

評、かいなでの口つきならず

(人) 天長節祝　遠江 疋田伸子

かど毎に御旗さゝげて大君の
　みいづあまねくあふぐけふかな

評、あなめでたきけふの日や

(人) 里擣衣　滋賀 井口ため子

たかゝりしきぬたの音のたゆみけり
　月になりたる山本の里

評、賤も月のあはれは解すべくこそ

(人) 折にふれて　信濃 松尾節子

せめてもと戀しき君の歌書きて
　心なくさむ秋の夜半かな

評、さることもありなむかし

(人) 庭菊　東京 西村直子

ませのころは黄金白金咲きそひて
　富榮たる秋のきくその

評、たれもうらやむべき園のさまかな

（人）失題　備中　橘　胡枝子

母ありし世を思ふかな秋たけし
千草が蔭の蟲をきゝつゝ

評、あはれなり

佳調

霜　四日市　水谷靜子

朝まだきあさりし鳥のわざならむ庭の落葉の霜にあとあり

海邊月　東京　矢澤民子

夕汐もいつしかみちていせの海のなみにたゞよふ月のかげかな

初霜　岩代　木口よし子

秋祭り終へし社の大杉のしりくめ縄に霜ぞおきぬる

秋夕　宮城　山形さち子

むしろ帆に夕日薄れて山本の入江に寒く秋の風吹く

ゝ　失題　三重　杉田銀舟子

大車ひき来し馬を解きもせで馬子入る小家に見は飢えて泣く

失題　近江　淺野重子

こほろぎの聲もしめりて更くる夜の軒端淋しき雨の音かな

亡き姉の寫眞を見て　丹後　小西直子

姉上の今はいまさでうつしゑの面影のみを見るぞかなしき

失題　横濱　吉川香郷子

ほろほろと山茶花ちりて今日もまた百舌鳥なく背戸に秋雨のふる

蟲聲　靜田　西村きよ子

蟲うりは秋のつかひかあはれさを都の人にしらせてぞゆく

失題　赤坂　平井靜子

すみのぼる月さへくものかゝる世にうきはつれなる人の身なれば

夕月　名古屋　星野ふさ子

昨日けふまれき初めたるを藤の袖なつかしき夕つきのかげ

秋山　神戸　足立あさ子

立出し今朝にたがひて歸るさは夕日さびしき秋の深山邊

失題　美濃　淵香女

板橋を渡ればをさの音やみてたすきはづしつ乳母は笑むなり

失題　甲斐　靜江子

慰むるすべしなければ母君のみ足さすらんみかたさすらん

避暑の折親しき友のとひきて　鹿兒島　永田八重子

うき世なば忘れはてけりよろ波のおとたきゝつゝ歎かたりして

月前蟲　前橋　宮内りき子

白露の玉なす萩の下かげにむしの音さゆる秋の夜の月

草間蟲　大分　糸永いき子

荻の葉のすれあふ音におもしろく合せてなくか鈴虫のこゑ

秋夜　東京　清子

打ならすつゞみのしらべ音もさえていよゝすみゆく十六夜の月

失題　熊本　尾方露子

秋風にいとゞあはれをおぼえけり蟲の音さへもしめりがちにて

砧　兵庫　野田時子

たえだえに音さびしくもきこゆなり老がれさめの砧なるらむ

遠砧　大阪　吉岡小夜子

行き暮れて獨り月讀む信濃路に聞けば身に沁む遠砧かな

琴　　兵庫　國　子

小夜ふけて琴の音とほく聞えけり松吹風にしらべ合して

失題　　飛驒　萬　つゆ子

萬葉の歌などかたり思ふどち摘つられゆく秋草の路

雨中紅葉　　大阪　近藤ます

夕しぐれかきくらしゆく山の端に殘る日影や楓なるらん

秋田風　　相摸　岡部あい子

小束稻にみのる門田に秋風のふきてこがれの波そよぐなり

露　　豐前　賀來文子

朝まだき野路の萩原分けゆけば袖しぼるまで露にぬれけり

秋晩望　　同　同

見渡せば白く流るゝ鬼川のつゝみの櫨は紅葉しにけり

貴人　　伊豫　長野逸子

み車を月毛の駒にひかせつゝ雲井の庭に昇る貴人

獨對月　　伊豫　菅野文代

ものゝ音も塵世のちりもしづまりて限なき月を獨見るかな

八月十五夜に　　周防　小瀬龜代子

手折りこし萩も花とにほひ合ひて野山の月もよそならぬかな

病父したひ信濃のいで湯にゆきたまひしに　　横濱　鈴木まつ子

みすゞかるしなのゝくにはいかばかりふく秋風のさむけかるらむ

庭堂秋風　　下野　吉村嶺子

社堂やこまひあらはの壁にはふ枯葛さわぐ秋のゆふ風

失題　　芝　長井こま子

木枕に肘うら寒き朝あけや木曾の一夜は夢にしらみぬ

失題　　栃木　鈴木ます子

老松に夕日淋しき我庭のかきねのほとり萩の花散る

失題　　安藝　かるかや

あさまだきおき出で見れば山の端にゆめより淡き殘月のかげ

蟲　　美濃　節子

ひとり我文よむまどの燈火に蟲もよりきて親みにけり

秋の歌の中にて　　栃木　今中ますゑ

萩すゝきつみてかざして行く兒等に秋のあはれを尋ねても見む

弔亡友　　千葉　根本房枝

風寒う時雨そぼふる夕まぐれまたとりだしぬ君がうつしゑ

失題　　愛媛　たつ子

只一人思ひに沈む秋の日にちぎれ雲とぶ夕暮の空

月前遠情　　岩代　樋口雪子

入るを惜しむこの夜の月を筑波山かのもの人はいかに見るらむ

失題　　兵庫　木村白子

江の北はむさき堤上のゐるところ白帆すぎて夕がすみしぬ

霧　　東京　矢澤昌子

おきわたす遠ぢか原のあさつゆはれになくむしのなみだなるらむ

秋[illegible]　　千葉　五木田節子

萩の露硯にうけて思ふどち秋のあはれを書きてみんかな

失題　　岩代　横山翠子

秋風にやぶれし百合の花の上にねぶる小蝶よ何ゆめむらん

失題　　同　同人

夢になく蟲をとらへて實すひまぐつれなきらさもなりはひにして

懐舊 新潟 秋元霜江
もゝちゝの露ほづゝれどふりはての問ふ人もなき山のむしの音

山茶花 岡崎 清水婦美
亡き妹の植ゑし庭の山茶花のほころびそめし時ぞ戀しき

失題 大阪 青山なか子
文まなぶ妹にすゞ風おくるなりわが身は汗に衣ぬらして

折にふれて 長崎 牧野鹿子
稀に來て訪ふ兄君のおくつきに誰か手向けん秋草の花

秋の夕 周防 眞佐子
枯尾花ふみ分けて行く旅僧の影ものさびし秋の夕暮

六月祓 大阪 松川すて子
御そぎ川神もすゞしくおぼすらん秋をよせくる波のしらゆふ

失題 伊勢 久松よし子
さかりなり明日にもこよとともとちの心こめたる草籠の文

追懐 山梨 鈴木幸子
こぞの末世を早やうせし幼子を夢にのみゝる秋の夜中かな

秋行旅 佐世保 ふるかは
山寺の紅葉夕日にてりそひて奥の細道旅僧の行く

友 埼玉 宮倉歌子
津の國のなにはの事によしあしも皆ろぞ友の誠なりける

蟲 豊前 賀來作子
慕ひ行けばすゝきのもとにかくれけり蟲は今夜をこゝに鳴くらむ

秋夕 千葉 小林よれ子
夕されば森の上風むしの聲とりあつめてものぞかなしき

露底蟲 千葉 小林きく子
おきあまる露のそこにやかくれせし鳴さむきこほろぎの聲

犬 静岡 小澤さだ枝
犬はりこ貰ひて興ふる身となりて今はた戀し姨ざかりの

秋山 静岡 赤堀ひさ
たきゞこる賤のをのこも錦かざりて歸る秋のやまみち

小督 河内 櫻井貞子
おもひきやひとり調ぶる箏琴に雲井の雁の聲あはすとは

古戰場蟲 信濃 [illegible]子 國
たゞ秋のあはれのみかは蟲の音に心みだるゝ粟津野の原

月夜蟲 埼玉 松風春子
十五夜の月をめでゝ姉上と文かきをれば鈴蟲のなく

題知らず 下野 中田ふで子
世の中は實に美しうなりにけり花のしとねに蟲の聲々

秋の野蟲 岩代 諏訪澱子
松蟲の聲にひかれて小車もれのひせし野にめぐりきにけり

蟲 青森 三浦愛子
ふた親のまさきくまさば鳴く蟲もつゆ哀れとは思はぬものを

秋田 四谷 松田梅溪
千町田にあれしもなくして此秋は稻の穗ふみのゆたかなりける

月見 大和 白谷美加子
大池のひしのうきはのたえまよりうかがひて清き水底の月

折にふれて 大阪 玉子
暮ぬ間も夫待つ野道たそがれて尾花が末におぼろ月見ゆ

月の夜に 清國 杉野清子
友もなくとつ國にすむ身にはたゞつきの光りぞうれしかりける

擣衣　土佐　ちどり子
おもひわびれぬ夜あまたのよな〳〵をまくらにちかく衣うつなり

山里秋　下總　陸山靜波
大方の秋のあはれも知られけり一村すゝき穂にいでしより

月照古橋　明石　井上梅月子
月こそは澄みわたりけれ苔むしてあやぶまれける野路の板橋

修學旅行のをり和歌の浦にて　和歌山　岩橋たき子
あびきする聲のみもれて和歌の浦濱邊あたりをこむる朝霧

暑き日の若葉かげ　加賀　山田ちくの
すや〳〵と流るゝ水のきよくして若葉の陰にすゞむ樂しさ

墓前の月　長崎　天野春子
露ふかきみ墓のもとに身をなげて月の夕べを泣き明かしける

折にふれて　美作　青本公子
暮れちかき門邊にわれは一人たちてつれなき人を偲思ふかな

病の床にて　栃木　増淵君子
さらぬだにわびしき秋の小夜更けて病の床にむしの音をきく

名所の月　神田　紀藤榮子
鐘が音は堅田に落ちて黄昏れぬ石山寺の秋の夜の月

初秋月　相模　山本たけ子
ちりそめし一葉に秋のおもかげをほのかにみする三日月の影

紅葉の散るをみて　岩代　遠藤愛子
ふきたえしあらしのあとのこずゑよりちからなげにも散るもみぢかな

吾背のかへりを待ちて　美濃　伊島小枝子
ゆふまぐれあらしなふきそ吾背子はまだ山路をたどりますらむ

失題　大阪　森村重花
安らかにねむれる吾子のほゝ笑むはひるのあそびをゆめにみるらん

失題　熊本　加藤白薔薇子
秋晴れの芭蕉の葉越し大いなる鷹飛ぶ見えて夕日つめたき

失題　水戸　成井節子
もみぢ葉のこきふたもとをせなにしてゆめみ顔なる銅のみほとけ

初冬　遠江　疋田仲子
霜白きせどの柿の實二つ三つ秋の名ごりをとめにけるかな

失題　神奈川　關原りん
夢うすき身をばなげきてよもすがら夢もむすばで物おもふかな

失題　大阪　加代子
露霜に枯れ行く野邊の草かくれあはれをそふる蟲の聲かな

紅葉　尾張　櫻井久美子
椎の實を拾ふうなひの行く袖に紅葉みだれてかぜにちるなり

失題　浪花　桂枝
夕月夜ほのかにみれば薄原ゆらめく影は君かあらぬか

いでゆの里に暑さをさけて　大阪　なか子
水清く山美くしき城崎に今年は夏も知らですごしぬ

失題　須磨　有村榮子
山里の秋とへかしと紅葉にうたかき添へし友の音信

淋しき夕に　豐後　菅原芳子
何となく思ひ亂るゝたそがれを木の葉ちる戸に一人泣くかな

仲秋待月甲斐なくて時雨降りける夜　熊本　古内みよき

信濃路や旅につかれて月もなく時雨降るよの更科の宿

砧を聞いて　越中　島　とち

母なくて秋の長夜の悲しさを思はじとすれば砧きこゆる

夕時雨　京都　三浦しげ子

しぐれの雨はれし夕日に照りはえて一むら赤し産土の森

案山子　紀伊　佐田柳子

刈り跡に田守りし案山子かたむきて破れ小笠に秋風ぞ吹く

白菊を見て　同　同人

おく霜にたゆまで咲ける白菊の清きをおのが心ともがな

秋の月　長崎　天野春子

八千草の露をいのちに鳴く蟲の聲もすみゆく秋の夜の片

旅宿秋雨　伊豫　渡邊梅子

旅に病みてひとりつく〴〵眺めけり萩ちる庭の夕暮れの雨

七々の祝　神戸　山尾きみゑ

喜びの年籠れんと赤襦袢着て笑はれる我子うまごに

暮秋　大阪　秋田雲

うらがるゝ末野の蟲の聲ほそりくれゆく秋の夕さびしき

夏朝　土佐　かよ子

朝露にすがたかくれて馬子うたに鈴の音もそふ山かげの道

女郎花のもとに菊あり水のほとりにかげうつりたり　横濱　大口まつ子

をみなべしうつらふ花のはやき瀬に菊のかけたる千代のしがらみ

失題　廣島　平岡吟子

みのりにし稲は案山子に守らせて豊かに見ゆる小山田の里

鳥　京橋　伊東幸子

わが胸に思ひくらべて蟋蟀の聲悲しげに夜もすがらなく

庭菊　大阪　入重子

植ゑおきし菊も千草の花も皆ひとつにゝほふ庭のあき風

失題　横濱　哲子

睦まじくつばさつられて行く雁にふるさと偲ぶ秋の夜半かな

谷間の白百合　福島　渡部花子

いと清く谷まにさける白百合はにごれる里のちりにそまらで

菊　京都　小手まり

霜枯の榕さひしき庭の面にひとりかをれる菊の花かな

ふる里の母より御ふみたまはりて　高崎　池野たま子

夜な夜なに砧うつ御手いたむとてかくは御ふでのみだれさせけむ

失題　牛込　平塚いと子

花ならばうつらふものを紅葉ばの色をそへたる村時雨かな

原城の舊蹟を尋れし折　長崎　宮崎孝子

日暮の城の面影今いづこ磯打つ波に濱千鳥鳴く

庭草花　埼玉　萩野くに子

亡き父が植ゑし千草のさきいでゝ手向の花となるぞ悲しき

旅中月　三河　村上逸子

去年は須磨ことしは田毎來ん年はいつこに今日の月を見てまし

失題　仙臺　北郷照子

黄昏や小萩の露をこぼさじと氣づかひて行く宮城野小みち

浦時雨　岩代　遠藤ひさ子

うら船のとまふきはらふ夕かぜにしぐれてさむき波の音かな

萩　新潟縣　季子

何時の間に秋は來にけん我宿の萩のつぼみの笑初むる迄

結婚の時に　新舞鶴　雪子

かぞふれば早ちとせの秋なれや昨日の夢とさめやらずして

紅葉　岩代　遠藤久子

父君よいままゐらせんかきよせしもみぢに酒もあたゝまりぬる

魚釣　神戸　足立ゑい子

今日もまた釣や垂れなむ綾瀬川あや織る波に心ひかれて

月夜蟲　岐阜　芳翠敏子

窓にさす月かげきよし蟲かごをまはぎがくれに置きてきかばや

豐年の秋　和歌山　沼田菊子

月夜よし野よし年よし新しぼりしぼり／＼て秋をうたはむ

萩　岩代　岸野常子

昔しわが友とあそびし里川のつゝみの小萩いまかさくらむ

萩　大阪　富永かほる

けさの雨に野邊の秋萩咲きにけりいざわが友にみせて誇らん

失題　對馬　畑島郁子

いたづらに思ひせまりて歌はならずかくして秋の長夜も更けぬ

折にふれて　紀伊　佐田柳子

ま萩咲く月の廣野の小流は蟲の音のせて月を浮かべて

須磨の浦を訪れて　神戸　今西操子

郷人があつさを避くる影たえて浦なつかしう秋風ぞ吹く

海邊遠情　大和　片山好子

故郷の母をしのびてたゞひとりなれぬ濱邊にたつ夕かな

失題　名古屋　松久あき

うら庭の草木もいまはうらかれてなく蟲の音もあはれなりけり

月前蟲　兵庫　山本いさな

月きよみねられぬ人の心までくみてや蟲のなき明すらん

卒業後方針に迷ひて　千葉　秋山艷子

夢にあけゆめに日を經るうつそみと思へどなほしまどひぬるかな

折にふれて　北海道　なでし子

わくらはのちる夕ぐれを歌そへて胡蝶のかばねのべおくりしぬ

こぼれ萩　越後　五十嵐須賀

ほと／＼と庵の戸叩く振り袖に萩のこぼるゝ夕まぐれかな

秋月　姬路　娘子

吹き渡る松の嵐の音さびて梢をもるゝ秋の夜の月

失題　鹿兒島　貴島あき子

歌おもひ月見ながらにきぬた打つ人もあるらむ京の山里

源交菊　伊勢　佐々木らく子

うつろひし尾花が袖のほころびをつゞりかほなる野路の糸菊

失題　奈良　佐伯かふゑ

幼な兒のほゝえむ面に我ほゝをあてゝいだきて君思ふかな

秋　三河　光子

栗ひろふ子等はかへりて入相のかねに暮れ行く山寺の庭

夢　橫須賀　環子

はるかなるふるさとまでも行くものは旅ねの空の心なりけり

逸題　伊豫　渡邊梅子

二葉三葉風にみだるゝ病葉を時雨うつなり秋の暮かた

菊　同　同人

このあした菊うゑてまし紅葉のちりにし後も人の來む爲め

失題　大阪　南たけ

丈夫の心もさむくなりぬべし巖にくだくる大瀧の音

月前擣衣　京都　森　小糸

夕方の月にむかひてから衣うつ音高くすみ渡るかな

さみしきやど　赤坂　平井　静子

おとづるゝ人こそなけれわがやどはふしおもしろき蟲の聲々

寒月　牛込　植松　春枝

みてはこそかくるためしと人はいへことわりしるきけふの寒月

初紅葉　茨城　大田　季子

鈴蟲のなく音かれにし昨日今日庭の紅葉は色づきにけり

汽車の中にてよめる　鳥取　志水　せい

父母にまみえん事のいそがれて車もおそく思ふまかれ路

晩夏　伊勢　宮本　武子

すゞみにと夜毎つどひし橋の上の人かげたえて秋はきにけり

秋の日郊外に遊びて　清國　安藤　操子

一枝は折りても見つれ八千草の錦をいかに家土産にせん

秋　遠江　仲　子

稲の花今盛りなり實るまはこゝろして吹け小田の秋風

海邊月　大阪　入　重子

更けゆけばあまつみそらにのぼりけり浪よりいでし秋の夜の月

山時雨　武藏　臼倉　雄峰

すみをやく煙は空にみえながら山をめぐる村時雨哉

夢　下野　きぬ子

雲にのりて月の宮居に亡き母と語りあかせし秋の夜の夢

海邊月　大阪　嘉津子

藻鹽やく海士をとめ子も眠る月にうかれて歌ふこゑのさやけさ

霜知らず　北海道　岩崎　あい子

紅葉ちる石のきざはし切かみのうしろてさびし山寺の秋

旅のそらにて　飛驒　川上　志春子

宿かりてひけば聖なる兄上の笛のねこひし月清き夜半

瀧秋風　青森　小枝　てふ子

夏だにも夏を忘れし三吉野の秋つの瀧に秋風ぞふく

秋の月　大阪　石田　やす子

裏山に登りて見れば我が庵に萩の間より洩るゝ月影

草間蟲　京都　井上　豊野

秋の夜のふけ行くまゝに此處彼處蟲鳴しきる野邊の草むら

木葉の折　相模　岡部　あい子

ふるさとにかざる錦もちゝはゝのおはさぬけふはたれにか見せん

里秋興　名古屋　高取　ふさ

咲く花となく蟲の音の品定め秋は野邊こそたのしかりけれ

秋夜　四谷　松田　春子

亡き母のわすれがたみの稚子抱きて思ひに沈む秋の夜半かな

紅葉　埼玉　安藤　龍子

花にこし道を尋ねてわけ行けば紅葉の色も深き山かげ

失題　甲府　藤原　久米子

母君の背もかゞみつゝ衣縫ふに何とは知らず涙するかな

失題　大分　志賀　利子

墓とぬかづく母の奥津城に照りかへしつゝ夕紅葉散る

失題　大分　後藤　よし子

木の實はむ栗鼠の聲して秋深き岡邊の林音しづかなり

そひねせしうばの目のあしく成ける時四歳になる子

の日々酔に向ひていのるときゝて　神奈川　小川躑子

そひねせしうば目をやみぬいえかしと酔に向ひていのるをさな子

秋夜　岩代　樋口ゆき子

風渡る里の草川末見えて田中の森に月傾きぬ

豊年の餘榮　岐阜　櫻井富子

散り布ける黄金が原の秋日和力ありげに雛もうたひぬ

溪間の白百合　札幌　妙子

霧迷ふ溪間の朝のさながれになにさゝやくや白百合の花

初秋　陸前　守屋よし子

ましば垣咲く朝顔の數減りてむしのねしげくなりにけるかな

八月十五夜　東京　月枝

端居して照りゆく月のかけ見れはかくて踊りし母そ戀しき

江寒草　神奈川　藤本しげ子

千鳥なく入江のあしに霜さえてをはなの波も冬かれにけり

失題　岐阜　愛甫

なげゝとて咲きし花にはなけれども手植の主の亡きぞかなしき

琴　千葉　内山もと子

秋の夜の松ふく風にさそはれてこゝにも聞ゆつまごとのこゑ

田家秋　埼玉　長野貴美子

つゆ深き田中のさとの賤が家の破れ垣根にはぎの花さく

砧　常陸　秋子

たゞならぬ身とくれ／＼もさとされて母に譲りし小柄砧かな

家　攝津　谷東愛子

我家にひとときは風情そへにけり光りさやけき七日月影

秋水舟浮　東京　ふさ子

更行は月の影さへすむ水に心ゆくなれ秋の河舟

時雨　武藏　白島昌子

ひとしきり窓うつ音は木葉にて風のかへしに降る時雨かな

失題　姫路　鈴木ふじ子

おもしろき箏の調々洩れてきぬ木犀かほる薄月の家

失題　伊豫　秋野綾子

病みませる母をみとりて夜もすがらもの思ふ窓にこほろぎのなく

寒菊　京都　葉流子

寒菊の花の上白く霜おきて枯葉寂しく冬の風ふく

聞蟲　豊後　加納豊子

白露のおき居て聞けはなくむしの聲もちくさの秋の夜な／＼

失題　芝　磯部すゞ

八千ぐさの枯れて淋しき秋の野にゆかしくさきぬ白菊の花

失題　岐阜　長濱朗子

はした女もまだねぶるらし暁のかまどのほとりこほろぎのなく

江の嵐　大阪　木村花子

たゝずめる旅僧吹きて裳裾でゝ夕日を亂す江の嵐かな

折にふれて　京都　四辻清子

母ませし昔はなにをかこちけんひとりながむる秋の夜の月

折にふれて　くちなし

から衣縫ふにひまなき秋のよをふみよみてのみ過さましかは

小春日　筑後　都天子

小春日の春日の宮に貴群の鹿は遊へり見物もまじりて


誇り



短文

甲賞

母の看護

大阪　木村花子

母樣は寐返りをされた、枕元の豆ランプがヂーと聲しくなく、柱時計のチクタクが鋭く秋の夜の寂寥を貫いで、破れた胸を齎も／＼と搔拶る、そつと起き上り肩の隙間へ毛布を挿し込み、輕く夜具の裾を叩く、夜具藥の臭か鼻に汗がにじんで骨と筋の高いお手が時々疊の上に出る、夜具の裡へお入れ申す度に、痩せ細つた手頸を自分の其れに比べては慄とする、お顔を覗き込むと、痩せ削けた額から頰にかけて、憂世の波の云ひ知れぬいまはしい影が漂ふてるかの樣に思はれて、吾知らず母の寢息を耳の底に澄ましてはほつと息をつく、矢張り風が吹いて居る、雨が降つて居る、庭の梧桐がバッサリあたる、と雨戸がガタ／＼と震へる。

甲賞

小春日和

松江　安達久子

日あたりのよい堤防の下に、今日も朝から釣り好きの太郎作翁が日なたぼつこしながら釣りを垂れて居る、無い樣でも風はあるのかして、翁やが輪にして吹いた煙草の煙りがそのまゝ空にのぼらむとして途中で折れて少し水面にたなびいて消えてしまふ、翁やはそんな風が何所を吹いて居るやらと云ふ顏付きで浮標をジッと見つめて居る、「釣れますか……」と堤防の上から聲かけられて、ふりむくかと思つた翁やの顏は依然湖面にそゝがれたまゝで、「いけません」と太儀さうに答ふ、フト浮標を勢よく引き込む、翁やの白い長い眉が動いたかと思ふと、竿は上げられた、小魚は潑剌として水面にあらはれて後の波紋に浮草が力なげに動いて居る、翁やはニコ／＼してゐる、そして堤防の人はまだ立つて眺めて居る。

乙賞

松島双葉樣へ

伊勢　登美子

紀伊路の秋はいかに、花薄咲きみちたる野路に立ちて、雫も滴らむ夕榮雲にあこがるゝみ姿、眼の前にちらつき候。

五十鈴川の水いよ／＼澄み渡り候、夕日に映ゆる鳩口に紅葉のうつろは趣ふかく、殊に月の神路山こそ、知らぬ人の想像もえ及ばざるところに候、古木を洩るゝ影冷たう、落葉の音身に泌みて、永く止まるを得ず候、廟前に額づけば、靈氣肌に迫りて、全身の血管凍るかと思はれ候。御義兄樣も健かにて候、お暇の時は御文給へかし。

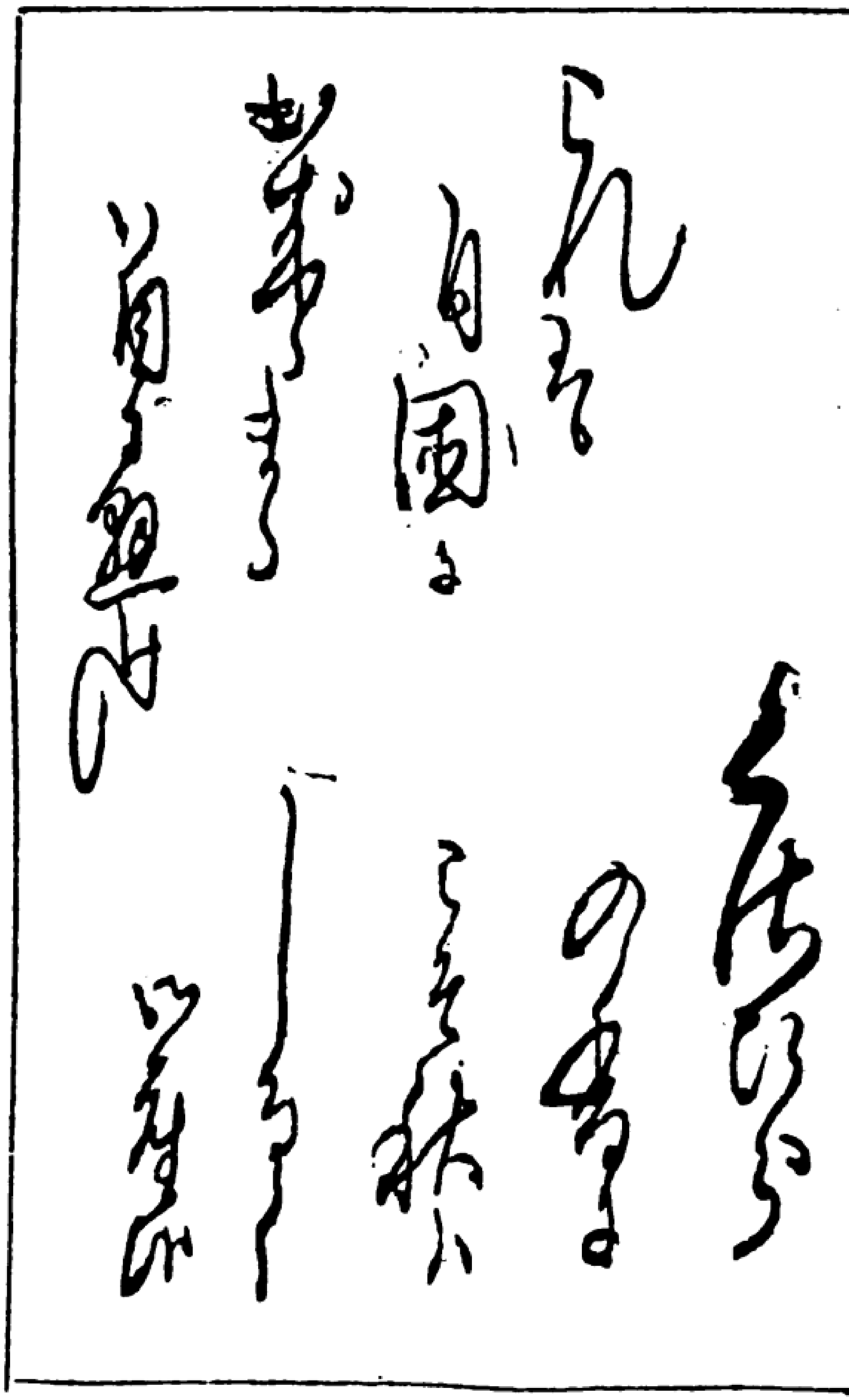
乙賞

夜

芝區　扇知美與

ふと眼が覚めた、茶の間の燈は今にも消えさう、何時だらう、「セコンド」を刻む時計の音が喋繰り聞える、縁の下では蟋蟀が「肩させすそさせ」となないて居る、臺所で鼠が何かかじつて居る、其の外には何の音もない、私の外に目の覚めて居るのはあの鼠と蟋蟀ばかりだらう、何だか淋びしくなつて来た、眠らうと思つて目を閉じてもなか〳〵ねられない、早く夜が明ければいゝと思ふ、時計が「カチリ」と五分前を報じた、幾つ鳴るだらう、今か今かと耳を立てゝゐるがなか〳〵鳴らない、夜の五分は、なかなか長い、晝ならば直ぐに鳴るのにと思ひながら横向きになつた、……ああ、彼の時、時計は何時を打つただらう、私は五分間の内に夢の人となつたのだ、そして今又眼が覚めた、太陽は昇つて夜は全く明けた、朝の風は窓から まど にぬけて居る。

新式字はがき（一）



乙賞

紀行の一節

[illegible]中　沼田靜江

遠足に馴れない一行はやつとの事で崎山村に来た、暮れ近くもあれば一息に家迄と思ふても、さうも出来ず、一寸小奇麗な家を見附けて中休みをした、門を潜つてズツと往けば、右手の井戸端に柿の木が一本ヌツと立つて、其梢か枝に珊瑚珠の様な實が危なさうについて居る、サア〳〵お掛けなさいと、飾りの無い言葉に眞情の見える婆さんが敷いて呉れた花茣蓙の縁側に、六八の海老茶式部は疲れた腰を卸した、續てお茶が出る、火鉢が出る、觸れば潰れさうな――木にあるのよりも色の好い――大柿を、朱塗りの盃に堆く出された時は皆の鼻がムタ〳〵動いた、見るともなしに奥を覗がうと、色の黒い働き姿の巨漢が不恰好に跪いて燈明の爛く佛壇を拝んで居る。

丙賞

淋しい女

日本橋　三井陽子

私がお琴のお稽古から歸つて來ると、格子戸の中に見馴れぬ日和下駄が二足並んでゐる、ヘテ誰だらうと思ひ乍ら家の中へ這入ると、奥の茶の間で、いつも來る髪結の聲がする、私はソツと茶の間の唐紙の隙間から覗いて見た、お母樣は長火鉢の向ふへ坐つて、其横には髪結と十七八の田舎女が坐つてゐる「國は何處だつて」とお母樣が訊かれる「房州の者でございますよ」と髪結が言ふ、私は其の女を見た、——額の廣い、髪の毛のちゞれた、眼の細い、——淋しい女だと思つた、私も姉さんも無口なので、平常家の中は淋しいのに、又一人淋しい女が殖えるのだと思つた。

同賞

つれ〴〵

伊勢　山川りやう子

「今日は青空よい天氣」と聲を張り上げて、可愛い子供が歌て行く、ほんどうに、好い御天氣だ、此の樣な日に茸狩にでもいつたらさぞ樂しい事であらう、あゝ、さう〳〵すみ子さんや雪子さんが、茸狩に行かうれ、と相談してゐらしつたが、もう御出掛なすつたかしら、私も行きたいものだ、御父さんに御願ひ申して見ようかしら、御祭り前だのにつて、しかられるだらうか、いや茸狩どころじやない、今日はお客樣の御出なさる日だ、ほんにのん氣なことを考がへてゐた、さうだ御座敷でも掃除して置きませう、立ち上がるとがら〳〵と車の音がする何處へ止まるかしらと耳をそば立てゝ居ると、ぴたりとうちの前で止まつた。

同賞

秋の夜

栃木　五月女きぬ子

芭蕉の葉に雨がそゝぐ、らんぷの火をかき立てゝ袷の襟をくけ初めるとパサリと、桐の葉が落ちた、と思ひ出したやうに一しきり蟋蟀が鳴く、何んとなく身の内がシーンとする、何かに襲はれるやうだ、ヒヨイと振りむくと、大きい影が後ろの唐紙にうつる。

頭の上でカチ〳〵と嫁くセコンドの音が、其の一刻毎に我が十八の秋は徒らに更けて行く、胸せまるやうな思ひがする、あたりは思ひきつてしづかな夜である。

同賞

須磨の浦にて

神戸　黒澤倍枝

秋風けぶるゆふべ、一の谷は寂しううすれて、下につゞいた須磨の浦は、濱音靜かに暮れて行くを眺めつゝ友の雪江さんへ—、雪江さん、また今日の日曜を雨にされてれ……、妾達々今晩こゝで泊ります、姉さんと今朝から舞子の山に松茸狩りをしたのです、どつさりと取れましたよ、よい香りのするのが、雨に濡れたのやら、枯れた松葉が付いたのやらですがわざと其のまゝ送ります。

松のよき舞子や、濱のよいこゝに、少しでも長く遊んで見たいのですが、明日早速歸ります、出立するは、朝霧がまだ淡路島をとぢ罩めてゐる頃

ときめました皆さんによろしく。

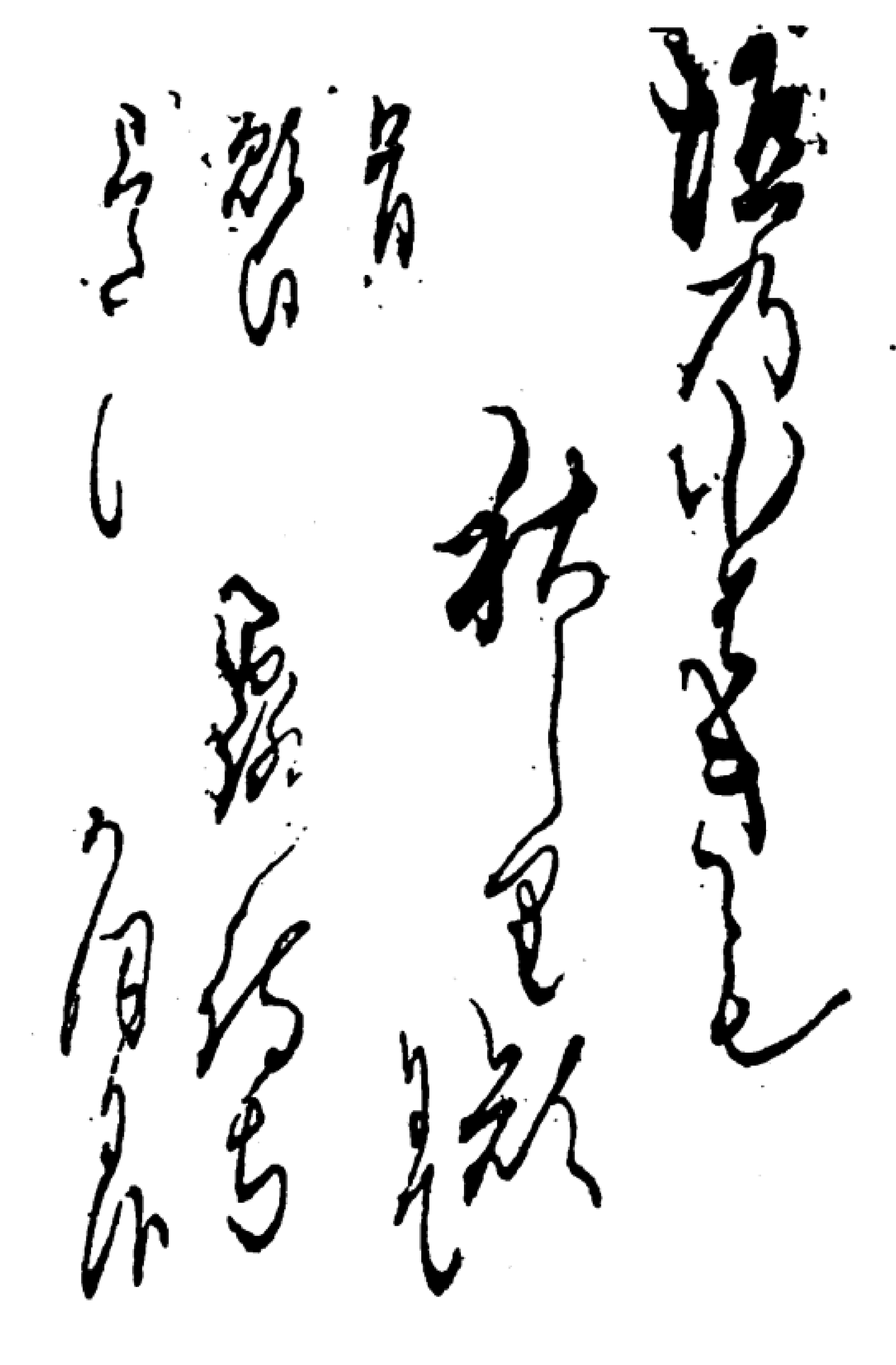
円窗

雨の夜

大阪 しづえ

雨がふつて淋しい晩、獨、書齋でアルバムなんか見て居たら、親しい友が訪れて來た「此のふるのによくれ……」と飛び立つ樣に迎へて、合羽をぬがせて上げるやら、お好きなマシマローを出すやらして、雜談の末、久し振で琴を合せる事になつた、此んな晩には小督が好いでせうと調子を合せる、「牡鹿なく、此山里と詠じけむ、嵯峨のあたりの秋の頃……」、細い淋しい友の聲私は、何だか茫として了つて、無意識に、手を動かして居る、十三絃の涼しい音色と、涼しい聲とは、絶えては續き、續いて絶え、やゝ暫くして漸と止んだ、ふと我にかへると、外にはまだ雨がシト〳〵ふつてゐる。

新式字はがき(二)



海に向つて

京橋 久保たけ

青白い月が、碧瑠璃の空に懸つて、冷かに大地を照らしてゐる、黒ずんだ海が、月に照らされて、薄い光をさゞめかす。水と空との間に灰色の雲が低く幕を垂れて、所々に白い帆と淡い漁り火が見える、あの雲の向ふにも月は同じ樣に照して居るだらうに、あゝ今頃は御兩親は如何して居らつしやるであらう、所々にはもう初霜も降つたとか、年老ひた御兩親は嘸々御淋しい事であらう、それに私はこうやつて、まだ御心配を掛けて居る、いつこの御恩返しが出來ようかと思ふて、水の色と月の光を交る〳〵眺めては深き物思に故郷をしのんだ。石を削く飛んだ月島の堤防に突き當る波が、かブり〳〵と音を立てゝ、白い泡が浮んでは消える、後の叢ではもう力の無い蟲の鳴く音がジジーと身にしむやうに響く。

添乳

山形 阿部英子

ふつくりとした蒲團の上に、小さな枕を置いて、衆ちやんを睡かす、黑い房々とした髮を撫でゝやりながら添乳して居ると、つひ、うと〳〵と妾は眠つて仕舞ふ、――キナツ〳〵と茶の間で衆ちやんの笑聲するに、驚いて覺めてみると、いつの間にはひ出したのか、お姑樣のお膝の上で、

小さな手を上げて跳れて居る。

田舍生活

豐後　加納豐子

さつと吹く風にパラ／＼と散つた銀杏の葉を、餌と間違へて足許に鷄がよつて來る。

五坪ばかり長方形に仕切られた鷄舍の中央に置いてある餌取りの箱に腰を下して私は書を繙いた、耳許で朝顔の枯れた葉がかさ／＼と鳴る、友は皆都に行つて了つた、そして私は病の爲に此の自然より外に友のない片田舍に只一人殘された。

目を上ぐれば今し赤い日は向ふの山に落ちんとして居る。

異國なる良人へ

伊勢　富美子

異境の秋風いかに肌寒くおはすらん、寢覺の床、蟲の音の細きに、そゞろ濡ぐむ折も有之候、銀一は益々すこやかにて、日に増し御顏に似てゆくが何よりも嬉しく候、近頃片言交りに物言ひはじめ候、昨夜はあまり月影よきに、銀一を抱きて濱に佇み候、海上茫として夢のやう、遙かなる御地の空には星一つ輝きをり候、御地の海につゞくなるよと語へば銀しきに堪へず、銀一にあすこに父上はゐますぞ、父上と呼びて見よといへば、おやしき言ひ方して、胸に顏おしあてゝ、あどけなく笑ひ候、一日も早く御歸國ありて抱いて下され度候。

秋晴

牛込　平塚いと子

天王寺の五重の塔がさやかに見えて空には流れる雲もない、背戸の與作は例のドーマごゑで昇うたうたひながら、稻田のあぜを鳥を追つてゆつたりとくる、と今までおそ穗はんでゐた雀は、一度にドッとたつて雜木林の方へとんだが、それもすぐに稻田の中へまぎれてしまつて、穗づれの音が豐年をさゝやいてゐるやうである。

療養先より

日本橋　伊藤柳子

懷しき御玉章嬉しく幾度か繰返し拜見致し候、菊子樣にはいつも御健やかにて何よりも結構の事と、陰ながら喜び申上候。扨私事一方ならぬ御心配頂き候處、當地に參り候てよりは大分心地好く相成候まゝ、何卒御休心被下度候、仰せの如く珍らしき景色は明暮眺め居り候へども、語り一人語らふ友もこれなく、其淋しさ御推し下され度候。如何樣に聞え候ても全快致されば歸京難はぬ事とは知りつゝも、たゞ／＼都戀しく、翼あらばと空行く鳥さへも羨しく、甲斐なき事のみ思ひ居り候、けふ明日とも定めかれ候へども御めもじの嬉しき日も、何れ近き中と樂しみに致し居候。

寫眞に添へて

牛込　しらゆり

大變御無沙汰致しましたわね、其後は御變りもなくて？、あの、久子樣、此間御願ひ致しましたでせう、御寫眞の事なれ、是非々々一枚頂かして頂戴よ、いゝでせう。私ですもの、そのかはり私のも差上てよ、それはく／＼おかしいのですけれど、ほんとに御笑遊してはいやよ、私の膝に手をかけてゐるのがありませう、之があなたがいつか見たいとおつしやつた、美代ちやんなのよ。

冷雨

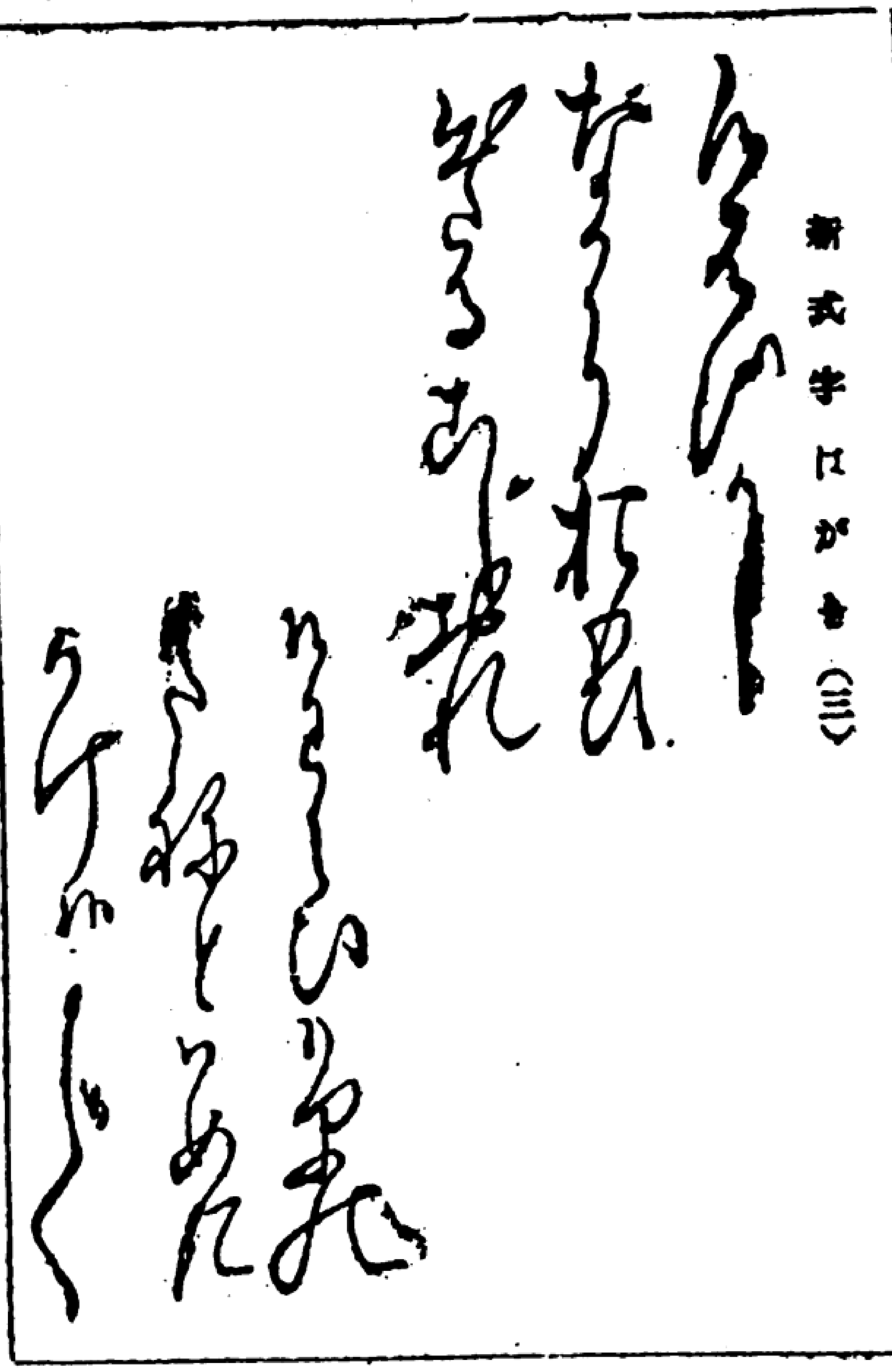
陸前　白　すみれ子

日は暮りなずむ雨がしよぼ〳〵降つて居る、心の中まで、しみ入るやうな冷い風は、頬をなでゝ、其の餘波が、花園に行つて、半ば灰色になつた葉や咲きさつて色あせた花をうごかしてゐる、そしてハツ〳〵と落葉る葉が、白く見える、私には、それが、淋しくて、仕様がない、胸の中をむしり度いやうな、イラ〳〵した心になつて、譯もなく涙がこぼれる。

或る晩

靜岡　井出　美子

ふと眼が覺めた、ヂツと聞いて居ると、庭の筧の水がチヨロチヨロと小鈴の様な音をさせて落ちて居る、それが妙に面白い、堪らなくなつて、起きて雨戸を少しそ――つと繰つて開く、寒い風がスツツと首筋を掠める、仰ぐと細い月が土藏の屋根と立樹の間から覗いて居る、暫く月を見つめて居ると、何處かで鈴虫が鳴いて居る、其の他には何も耳には入らない、黒い山影がぼんやりと向ふに浮いて見える、僅かに小枝がざわ〳〵と戦いで、細い雨戸の隙から紫苑の立姿をスーと風が掠める、寒い、閉めて床へ這入つた、うす暗いランプの火が天井に輪を寫して居る、チンチロリンとチロロ〳〵とは矢張り面白さうに聞えて居る。



新式字はがき（三）

母の愛

伊勢　細野ふみ子

お母さんと私と夜業をして居ると次の間に寢て居る、妹が、蒲團を二つ除けさまにした、お母アさんはつと立ち上つて「また脱ぎ出てゐるのかしら、風邪をひくに」と、獨言して次の間に行かれ、妹に今一枚蒲團を着せてまた仕事に掛られた、私の幼い時も斯うして育てゝ貰つたのであらう。

空

東京　みどり

ヘメ〳〵と白いカーテンがなる、須原様(看護婦)にカーテンを引いて下さいなと御頼みすると、すんだ懐しい秋の夕空がみえる、筋向の御倉の屋根から椋の木の方へかけて灰色の雲が浮いてゐる、冷たい風が病んで居る、頬をなでる、みるとお倉の傍の木も動てる、静かな空をツーと鳥が一羽よぎつた、雀共でもあらうか、さび聲で胸をそゝる

やうな哀歌を歌ひ出した。

弟の謎

本郷 廣瀬ゆき子

病院から歸つて見ると、弟から手紙が來て居る、何を云つて寄越したのか知らと微笑みながら拔いて見ると、田舍の秋景色や、學校から歸つて毎日裏山に散歩すると澤山の小鳥が美しく囀つて居る事など順序もなくかき並べ、扨て項を改めて此頃僕は重病に罹つてなるとある、吃驚して後を讀み續けると、重病は即ち銃病で、空氣銃が一挺欲しくてならぬ、姉上は女醫者だから是非僕の病氣を癒して下さいとある、思はず噴飯した、幸チャンも此頃は却々旨い事を云ふと良人もお笑ひなさる、妾は其日すぐ小爲替を三圓送つたけれど、其から十日にもなる今日、まだ何とも便りが無い、只母上の制し給ふをも肯かずに小鳥を追ひ廻る弟の姿のみが目にチラ附く、弟は今年腕白盛りの十三である。

子無き人

福島 木下はる子

「つまらないわ……」ときびしい顔をして居らつしやる、何がつまらないのかしら……、秀雄様はあんなやさしい方だし、財産はあるし、小姑はなし、御姑さんもあの通りのやさしい方……、あの家に御嫁入なすつたのを私等は何んなに羨ましく思つて居たかしれないのに、何がつまないのかしら……、イヤさうだ!、さうだもう三年になるけれどもまだ御子さんが御ありなさらない。

嫁ぐ姉

千葉 山口秋子

姉様とは何時までも同じ道をたどる者とばかり思ふた事の愚さよ、泣くも笑ふも今宵かぎりと知られて得知らぬ寂びしさを感じる。お障子をスーと開けて座敷に入ると、今お仕度の終つた處、水や垂るゝと疑ふばかりお島田の美くしう、黒地に山水をはつきりと染めぬいたお召を長う引いて、お背中一杯に結ばれたお丸帯の爛にかゞやいた お姿を、前に立ち後に廻り乍ら飽かず眺めたが、歸へり來まさぬ方と氣付いては。とめ度なく涙がこぼれる。

都の友に

京都 松井衣子

澄子様、あなたがまだ聞いた事がないと仰つしやつた河鹿が毎晩鳴きますよ。

夕飯終つて日記出す頃、銀鈴をふる鈴蟲より尙强い、高い、そして哀しい聲で鳴き出します、然かしそれが書齋の圓窓越にきくのではなく、屋後の松に風の音がして時計の音も耳につく靜かな宵ですよ、あなたは細儀が出來まして?、田舍を御好きなあなたに、一夜でもこんな宵を過させて上げたいと始終思ひますの。

この栗は今日下女と裏の山に取りに行つたのです、秋の長夜を栗燒きながら雜談に御更かしなさるも興多い事だらうと思つて 少し許り御送り致します。

宿題

松江 よし子

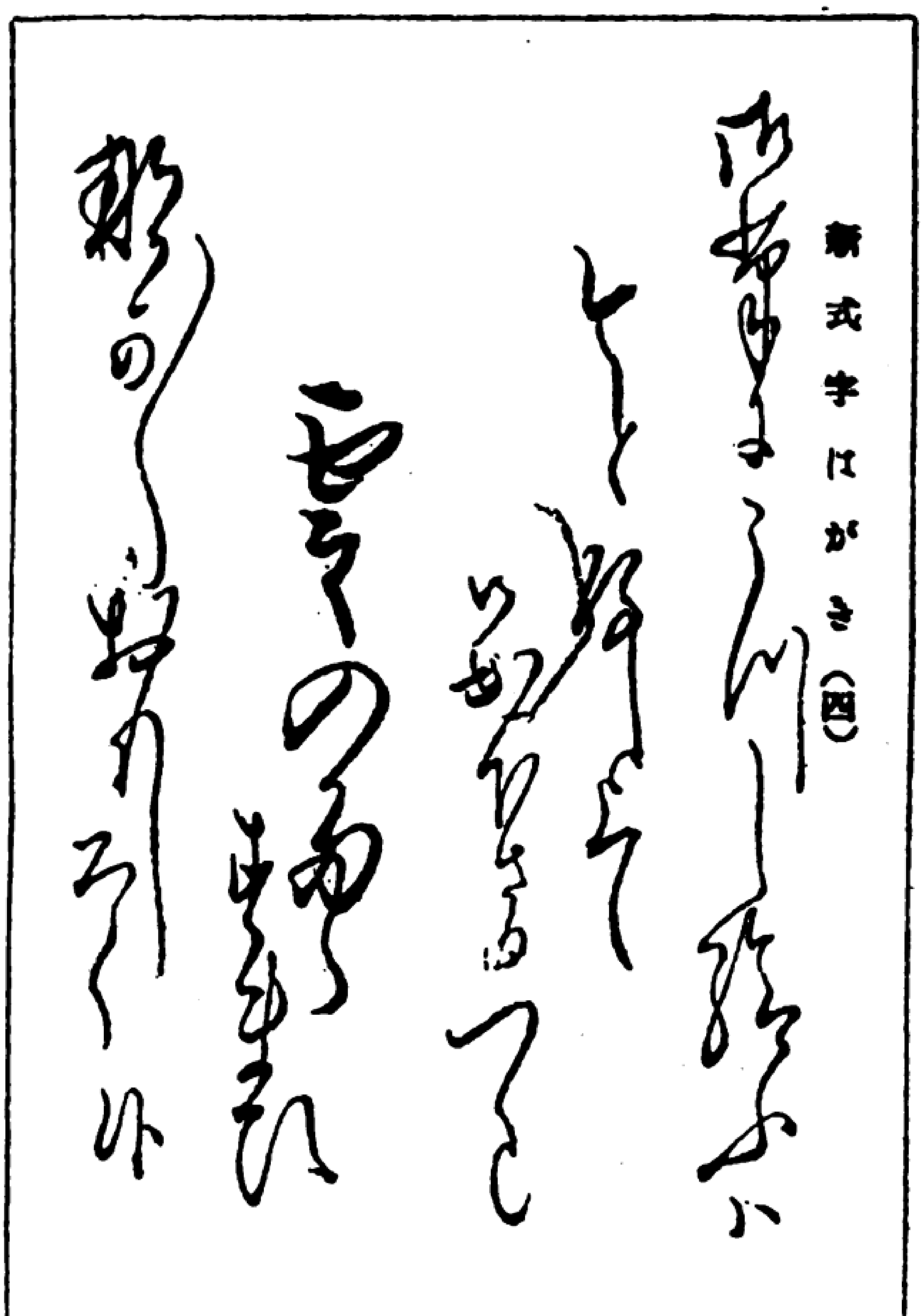
何ぜ此の問題ができないのだらう……と深く考へ込む、無心に刻み行く時計の音がフト耳につく、折角出かゝつた考へが消えてしまふ、えゝつ

騒々しいと時計を部屋の隅の方へ置きかへて、又考へ込む、一度耳に響つた音はまた聞えて來る、これではならぬと氣を取りなほし書籍をもう一度くりかへして讀む、解らない、又考へ込む、漸くにしてこれが一時ではあるまいかと思ふたその刹那、一寸忘れて居た時計がけたゝましう十時を報じた、その音が耳から心の底迄ひゞき渡つたので、思はず筆を時計の方へ投げつけた。

嫁ぐ姉

尾張 櫻井久美子

姐さんと一緒に居るのも今日限りねえ、いつまでも姉様をわすれないで下さいよ、姉様も姐さんの事はわすれやしないからと姉様は淋しさうに私の手を握つて、あゝ芳雄様も、どんなにかうらんで居らつしやるだらう、世間に義理と云ふものがなかつたら……、ときれ〴〵に仰しやつてソツト涙をぬぐはれた、此二三日めつきり御やつれなすつた其おすがたをながめて、私は何となしにほろりとした。



新式字はがき（四）

古里の友に

東京 新村基子

暑い〳〵と打ちわび候も東の國にて、はや朝夕は秋吹く風の身に泌む頃と相成候皆々様御變りもおはしまさず候や、伺ひ上げ候、今日此頃の秋冷に御地の山は、定めし好き眺めにこそと只管羨望に堪えず候、夕べは月きよき船形浦の御逍遙、あしたは常磐木茂る那古松原の御散策、さては、水清き美奈戸川に、錦織りなす式部山に、例の詩腸を養ひ給ふらんげに〳〵御羨ましきは、あなた様現在の御境界にこそ、情け深き園子さまよなにとぞ御近況を一筆もらし給ひてよ。

紀念日

神戸 良子

あゝ今夜こそはえにしの糸の結ぼれてよりの三度目の紀念日になん、あるじの君は遠く船出し給ひて時々の御歸着なれば三年とはいへ未だ一年とは共に暮すまじ、つきぬ涙に袖別ちては逢ひ、逢ひては別るゝ本意なさ、一年一度の紀念日すら共に祝ひし事はなく、雲井はるけき雁がれに、なつかしのおもひを通はすのみ、せめてもの心やりにと、新婚のうつし繪飾りて、かげ膳供へ、一生の幸福を祈り、いかなる不幸に逢ふとも、一度捧げしこの操、偕老のちぎりを全ふせでやはと、孤燈のもとに讀みかけしいにしへの貞女のかゞみ、妾とてもと固く心にちかひぬ、あゝこの清き秋日、アツキの上にいかなる感想もてながめてやおわすらん。

眠る夜

神奈川　内藤千代子

病苦の疲れに、母君はよく睡入り給ひぬ。そと、御寢顏、うかゞひて、我にもあらず太息つけば、湯と溢す玉の、ホロホロと膝にこぼるゝ、あゝ父君失ひし身には、天にも地にも只ひとり頼の母君を、三月越のこの御病氣、姿は疊の上に得たへぬまで、あやしき胸さわぎを、おぼゆるなりき、あゝ世の中にかゝる別れのなくもがな、肆の聲、身にしみつゝ、思はず袷かき合せて、二分心の心かき立つれば、ばつと壁にうつる我が影の、影も何の形かわかぬまでに、亂れたる、あはれ、小櫛取る間もなく、香爐の間々に人の衣縫ふに、蟲は小やみなくつづれさせぞと、うながすなる。

月の夜

大阪　けん子

今宵の月をながめずや、とせきたつる蟲の音に、可惜文机に疲れし身を街するも、いかゞと、思ひ、幼子ともなひて、そこはかとなく歩みを、月にまかせつ、野面における白露は、中空に照れる月を、ながめるやさしの身がまへ翌日を待たで、消ゆとも覺えぬ氣高さ、思へば我身の耻づかしや。

此度は

東京　高松ひでよ

雑誌しながら今朝方配達してきた女學世界をひらく、そしてもしやと懸文欄をみるとまあ恥かしい、私のが當に入つて居る、親が風邪になる側に居た弟が「どうなさいましたの」と不思議さうにみて居る、私はホヽヽと笑ひ乍ら、此度は何をかいて投書しよう……かと、松やの何やらいつてることとも鼓膜も遠く、一生懸命、何かとかんがへる。

秋の朝

山梨　齋藤花枝

ピーとけたゝましい音に驚かされて目がさめた、工場の汽笛の聲は例もより高い樣である、隙間もれ來る風がしみて身體がゾツトする。カランコロンと駒下駄の音がして二三の女工が何やら囁きしながら行き過ぎた、起きて見ると未だ月が殘つて居て、星が五ツ六ツキラ〳〵と光つて居る。

母を想ふ

岡山　佐藤眉子

此處へ嫁てから、最う一年にも成るが、良人は相變らず私を大切にして下さるし、又お母樣は優しく彼是と、御用を仰有つて下さるから餘程都合が有る、末の弟は今が腕白盛りでは有るが、私の言ふ事は、立く聞くし、皆樣で、可愛がるので、一家穩に暮してゐるが、其れにしても、十八里も距れて居る、里の年老いた母は、相變らず、南向のお緣側の閑靜な所で、矢張り、舊式の眼鏡を掛けて何什事を成すつて、居なさる事で有らうか、此の樂しい、圓滿な家庭を見せて、親母樣の喜ぶお顏を見たら何樣に自分は嬉しいか知れないが、悲い事には、此の道の遠い片田舍では僅りさへも思ふ樣に出來ないので、朝夕東の空を仰いでは、只お親母樣の健全を祈る許りで有る。

秋の朝

總社　松永しげ子

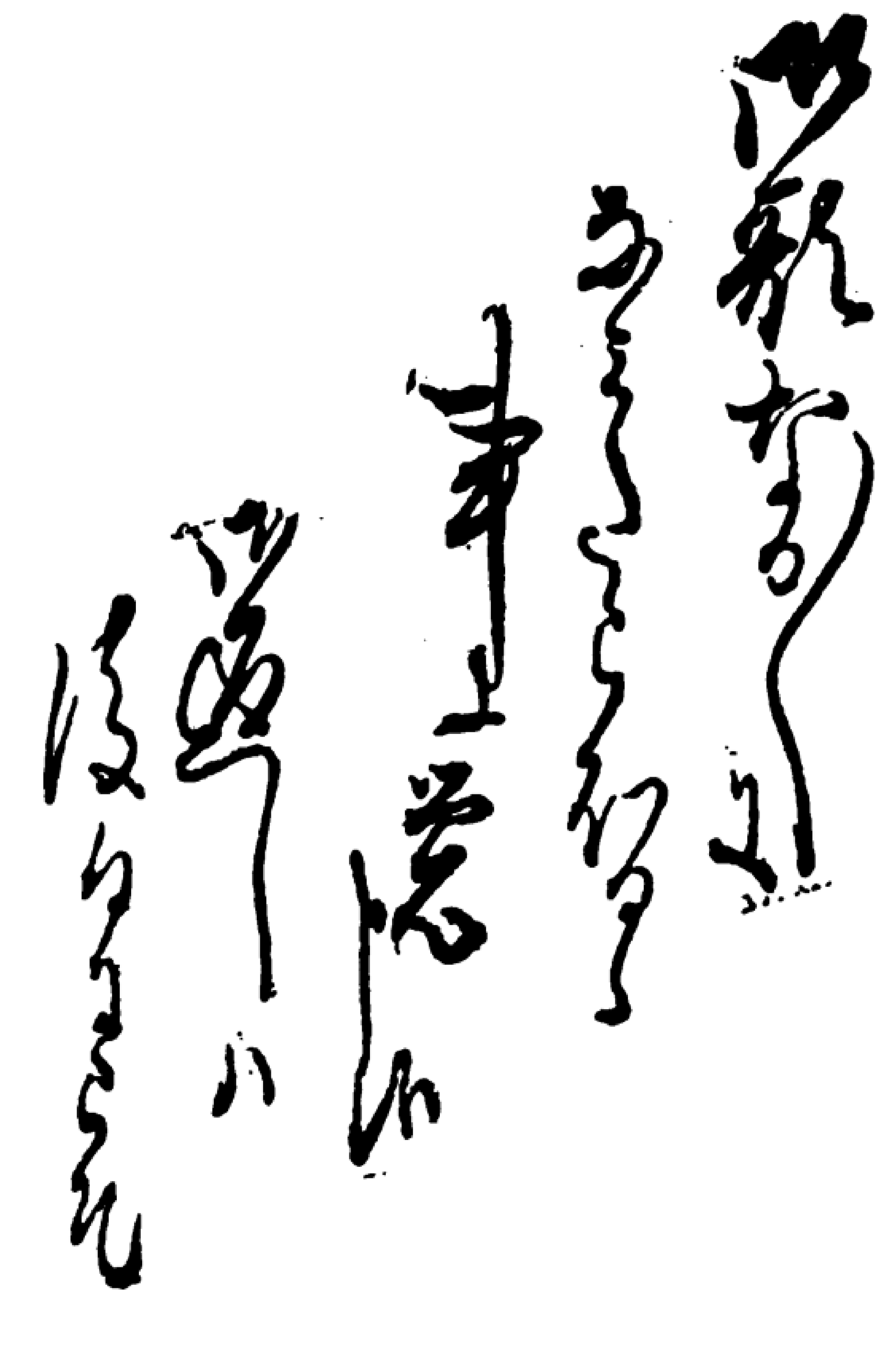
[illegible]川の具景いとなつかしく、今刈れまきのまゝ露をふみわけて登り行く、見ゆる花は稀、野菊、淋しき秋風に芋の露はらくくこぼる、船引く人の歌聲高く、倒れむ許りに引くはいとつらかるべし、百姓男は嘶く馬に乗つてはしるは異し、眠りより覚めたる巷の町からは餉を炊ぐ煙がゆつたりと立登る、蟋蟀は夜の明けたるを口惜しげに鳴く。

小春日

神奈川　鈴木良子

小春日和の暖かな日、海に面した南向の座敷で織るしの袷せを出して針を運んで居ると、裏の山で、チイチ……と百舌が鳴く、かと思ふと空には鳶がヒーヒョローと面白さうに鳴き作ら高く低く大きく小さく輪を畫いて居る、濱のカイヅ釣は又一人ふへた、其中の十歳位の子が急に釣竿をヒンと後へ返へすと、糸の先にパチくくくと魚が、はねて居る、予は嬉しさうに、かごの中へ入れて又釣をたれた、海面は丁度金糸入の水色チリメンを敷きつめた様キラくとかゞやく、時々ボチヤリくと岸を打つ音がれむさうである。

新式字はがき（五）



人をまつ記

尾道　TK女

四時にステーションに御つきになるとは知りながら、車のひゞきのする毎に、もしやと胸がドキくする、お座敷の掃除もさつきに出來、花も入れかへて今はする事もないのに、氣が落ちつかないでそはくしてゐる御ひろすましてから、何度時計を見上げるやら、實に一刻千秋の思がする。

秋情

甲府　藤原久米子

私は又、いつものやうに知らず知らず、いつもの野原に來た、美しかつた萩の色もあせてしまひ、枯れすゝきは眞白にほゝけて、白髪の媼さんが、首を振るやうに秋風に嬲ぶられてゐる、私は悲しい時、寂しい時には何時もこの野原へ來る、すみれ、たんぽゝの時もあつた、苺が紅く熟した時もあつたが、今はもう枯れ果てた秋草と、日々に細り行く蟲の聲のみである、あゝ是からは何を友としよう。

秋の眺め

駿河　天野ふじ子

何んといふ静かな日和であらう、澄んだ空を百舌の聲が朗らかにきこえる、稲はもう眞黄色に稔つて、己が重みに能く仆れようとしてゐる、思ひ出したやうに遠か向ふに鳴子がカラン〳〵となつた、と雀の群がパッと繪のやうに舞ひあがる、垣根の山茶花がヒラ〳〵と散つて落ちる。

亡き友を思ふ

札幌　伊佐敷清子

あゝ此年も秋になつた、春よりも秋の方が好きであつた、自分も、三年前恰ど紅葉も錦織りなして、春の花見よりも、嬉しく一日山遊びして歸つた、夕暮、一枚のはがきひら〳〵と木の葉の様に舞ひ込で来た、見れば國に居た時一番仲よく、友達にも羨れる位親しく〳〵した、花子様が亡くなつた知らせであつた、それからは秋になると、又秋が来たかと懐しくなり、紅葉の錦見るにつけ、あゝ花子様は師範學校を卒業して錦をきて國に歸つたばかりで、間もなく行かれて終つた、あゝあの山の木の葉も錦となれば、あとは谷川にちり行くものを、世はすべて斯くの如きものかと、亡き友を思ひて時ならぬ涙に袖をぬらした。

秋の夜半

浅草　平塚夏葉

こはい恐しい〳〵夢におそはれて目がさめた、枕元の目覺時計はまだやつと十二時を指して居る、室の隅には二分じんのランプが、丁子がたまつたと見えて、またゝき〳〵淋しい光を放つて居る、ぐるり寝返りを打つて室内を一まはり見廻した、母上も弟もスヤ〳〵と心持ち好ささうに眠て居る、オゝ其右に床の間を後にして何時も父上は寝られたのである父、もう御姿はない、もはや此世には居られぬのだ、あゝ、けれど未だほんとゝは思はれない、よそからでも歸つて入らつしやる様な氣が始終して居る母上の窶顔を見ると思ひなしか此頃は二三年も年を増した様に見える、過ぎし昔しを考へると次から次へといろ〳〵思ひ出されてどうしてもねられない、淋しい心細い感じが胸に満ちて思はずし枕紙しとどにぬらした、父上が在世の時分はこんな思ひはなかつたが……

菊咲きて候

京都　木俣津矢子

菊咲きて候、少女が白き頬の色して、今日明日が見頃にて候へ、盛見るもさることながら、成べくは今宵柴の戸お叩き下され度、釣り燈籠に灯を入れて闇に浮く白きを眺むるも面白からむと存じ候、妹の琴もお耳に入るべく、呉々も今宵御いで待ち入り候。

人違ひ

口なし

こゝに引越して三日目新たに来初めた八百屋が用聞に来た昨日私と秋さんと二人出ていろ〳〵注文した時二人の顔を更る〴〵見くらべ何か不安心の様子であつたが今日は秋さん一人出て行く其後から坊がついて行つたのを見て奥様には此坊ちやま御一人きりですかと尋ねると秋さんは茶の間で裁縫して居る私の方を見て情ない顔して笑つて居ると母上が横から出て来て此坊はこゝの旦那様の兄様の子供で此奥様の子供ではない此坊のお父様は東京に居るなどゝ説明成さる皆で大笑して居ると坊がまじめで坊はひろはお祖母ちやまの子て夜はお母ちやまの子だ。

秋日和

備中 平田富子

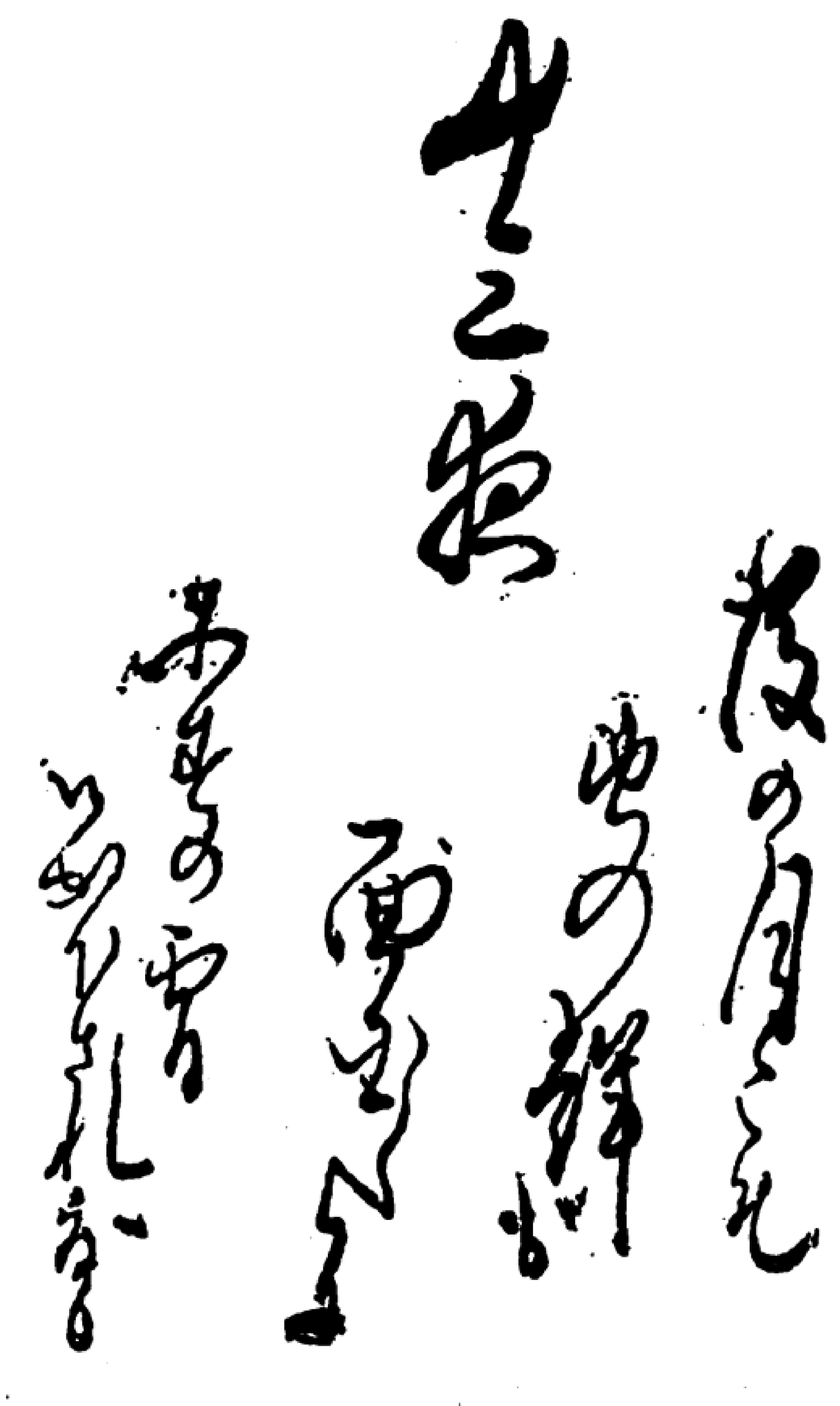
朝日はパツと障子を半ばそめ出した美しいお庭のはけいとうのまはりをひら〳〵と黄なるてふ只一つわひ〳〵げにまふてゐる、昨日しましのばらのかんざしをおえんまじかくもち出すと、妹の三代ちやんも玉(小ねこ)もそろ〳〵やつてくる葉をくみ合せたり、花びらをよせたり、するのを三代ちやんはたのしさうに見てゐる、大陽が全くおえんをはなれる頃やつと出來上つた大りんのばらのかんざしをそつと可愛いお下髪にさしてやるとさもうれしさうににつこりしたそのかほが又私しはうれしかつた。

雀さし

愛知 鈴木ふじ子

花ちやんを抱いて外に出る。空は磨き上げた様な紺碧に澄んで、ホーツと息を出すと白い氣が昇る。日は今黄く實つた稲田の方から、此「通り」に華かな光をなげてゐる。私と花ちやんの影は長く〳〵地に伸びてゐる。花ちやんの額の所へ、私の顔をもつて行くと、影の方では兩方から顔が出來て、此方ではくつつかないのにくつついて笑ふ。花ちやんはニコニコ笑つてゐる。

誰か私の前を通る。破れた高帽子に、ぱつちを穿いて長い竿をもつてゐる。骨の様な桑の枝に圓い雀が三羽とまつてゐる。雀さしは壁にスツと體を寄せて、眼を凝め上を見つめ乍ら進む。恰度猫が物を取る時のやうなかたち。トツと走つたと思ふと、チウ〳〵〳〵と消魂しい聲がして、高く打下げた竿には雀がさゝれてゐる。ツル〳〵と竿を手元に滑らして、片手に雀をとりて、握り締め乍ら、もうゐないかと變な目付で彼方此方を見渡した。



新式字はがき（六）

月の一夜

府下 八木富美子

月を見ながらお米をとぐ傍の樹樹も姿の影も黒く長く地にうつる今宵世の人の視線は皆この月にそゝがれるであらう。シヤラシヤラとお米を混てさつと捨た白水が布を掛た様に小溝へ流れる蟲の音がはたと止だ間に小さな黒い影坊主が三つ四つ影ふみあひつつかけてゆくお月様幾つと背の子がうれしげに母様と一緒になつて云ふあゝ其十三七つを唱ればあの子も背に子負て又繰り返すのであらうとほゝえむさら〳〵と稲の葉ずれがして冷い風がすつとくる裏度かとぎ流した水はすんで來てお米の中に月がキラ〳〵と輝く。

女學世界定期増刊

こゝろの日記

現代の思想と生活を有の儘に描きたる女の日記

第八卷、第十五號　十一月十五日發行

こゝろの日記は現代婦人の内心を描寫したるものなり、平常愼み深き婦人がこの好機會を得て、十年の沈默を破り、金玉の文字を惜氣もなく寄せられたるは、編者の深く謝する處なり。内容は目次によりて其一班を了知せらるべし。蓋し變化極りなき現時代に處し、境遇の幾變轉ありし這個婦人の心中の機微はこの日記によりて描き盡されたり。要するに是れ、現代生活の影、思想の響にして翫味し來れば又以て婦人處世の方便たるべし。

目次



結婚の前夜私に與へし母の訓言

眞島女史

私の口から斯んな事を申すのも何でございますが、私の母といふ人は、それは〳〵几帳面な人でして、何事に限らず其の場に臨んで、ソレ〳〵と他のやうにあはてゝ事をすることが大嫌な性分でしたから、萬事投遣主義の私共と違ひ、常に時間を重んじて、何時か一度は是非ともしなければ成らぬ程の事は、萬事手廻し好く前以て、ちやんと用意して居りましたので、ソレ何事があると云つても、母は見苦しくあはてるやうな事はありませんでした。世には男女共に、用意の人と不用意の人が在ると申しますが、その邊の區別から申して見ましたならば、私の母などは、先づ用意の人とでも申して好かつたのでございませうか。

兎に角平生の遣口が、先づ左樣云つたやうな性質の人でしたから、姉三人の嫁きました時も、それも續いて私の當家へ參りました時も、家は誠に靜な事でございました。而もその靜な中に萬事の準備はちやんと整つて居たのでございますが、さて明晩がいよ〳〵婚禮の當夜だといふ前の晩になりますと、お夜食の濟んだ後に、母は私を離屋の一室に呼びました。

その夜の景色からして、私は未だに善く身に泌みて覺えて居りますが、頃しも丁度前栽の秋萩の花が、紅白二色に今を盛と、枝もたわゝに咲き溢れて居る時分でありましたが、涼しい風と明かな月の光が充滿ちて居る庭の飛石を渡つて離屋の茶座敷に參りますと、これからお茶でも立てようと云ふのか、母は久方振で風爐に炭を入れて居りました。其處に私が參りますと、「今夜は實に好いお月夜ですね、既う別に御用も無い

から、お茶でも一服頂かうかと思つてね」

　不斷は誠に忙しい人

でございましたが、不斷時間を大切にして、何時も仕事を前に〳〵と取越して、手順好く一々埒をあける方のたちでしたから、人のソレ〳〵と尻に火の附いたやうに騒いで、あはてゝ事をするやうな場合には、母は何時でもこれ位な餘裕はもつて居りました。

　不斷善く可愛がつてくれます代りに、また或る場合には、實に嚴格な人でしたから、『今夜これから何か叱られるのではあるまいか』と思つて、私は恐々前に坐つて居りますと、別に左様いふ景色もなく、今夜の月の明かな事、風の涼しい事、萩の花の柔順しい事、さては蟲の音の美い事などを褒めて樂しんで居りましたが、お湯の立つ間にしみ〳〵と、母は今夜も、

　嫁入した後の心得

に就きまして、いろ〳〵諭してくれましてございます。――

『さてお前もいよ〳〵明晩お嫁に行くことに成りましたが、凡そ一家の主婦たるべきものゝ心得に就き、今夜改めて言ふべき程の事は、不斷殘らず幾度となく繰返して言つて置きましたから、その邊の事に就いては、今夜に成つては最う何んにも言ふべき事はありません。

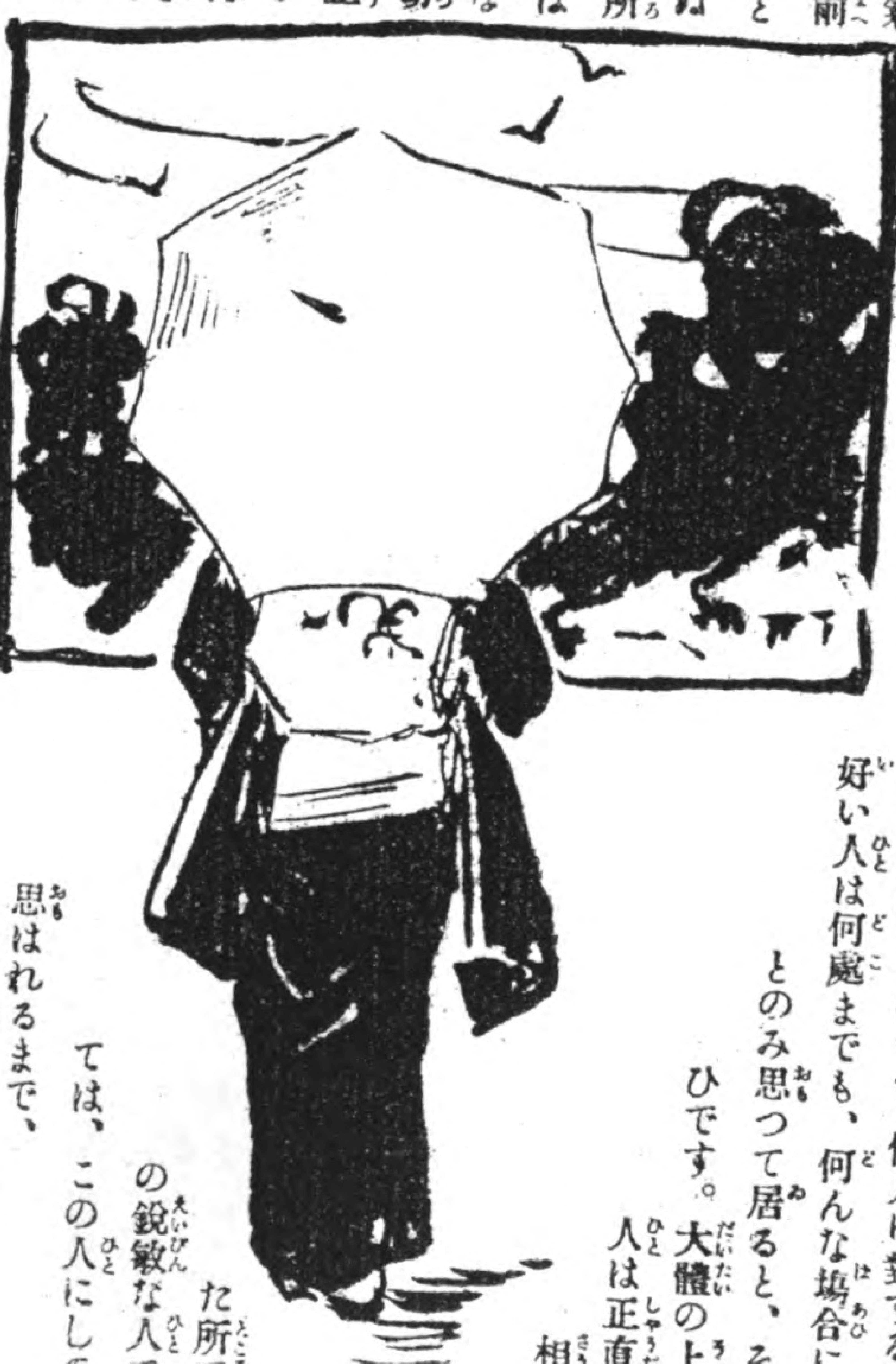
　たゞその後先方の各位――お前の夫たるべき人を始め、御兩親さまにも、御兄弟衆にも一度づゝゆツくりお目にかゝる機會がありましたから、違ふか知らんが先方の各位の氣風に就き、それこそホントに、

　温い血と肉の税金

を支拂つて、五十幾回の大晦日を越して來た私の心の眼に映つた儘を、今夜お前に一々話して置きたいと思ひます。

　第一お前の夫たるべき人は、今歲二十八歳で、容貌も彼ならば、私は十人並以上だと思ふ。男子は實力が生命である以上は、容貌などの穿鑿は何うでも可いとして、今度お前の夫たるべき人は、法學士といふ立派な肩書を有つて居られるからには、今日我が國に於け

る最高なる教育を受けられた仁である。その邊は誠に以て仕合だと云はねば成らぬが、こゝに聊か考慮すべきは彼の人の氣風である。お前の眼には何んと映じたか知らぬが、私の見た所を有儘に言へば彼の人は正直な人である、親切な人である。正直で親切な人であれば、何も外に氣の置ける事はないとお前は思ふかも知らぬが、それは太した誤解であります。それは唯大體の上から云つたので、人は仮令何のやうな偉い人でも、否、



偉い人であればある丈、一方には何か必ず癖のあるに極つて居るものです。何人に對するにも此處を思はず、好い人は何處までも、何んな場合に於いても、好い人とのみ思つて居ると、それは飛んだ了簡違ひです。大體の上から云へば、彼の人は正直な人、親切な人に相違はありませんが、それと同時に他の一面から云へば、違うか知らぬが私の見た所では、非常に神經の鋭敏な人で、その爲時としては、この人にしてこの事あるかと思はれるまで、猛烈な人に豹變する場合が恐らくあるだらうと思ひます。惜いかな、これが彼の人の缺點で、この短所のある

が爲に、時としては意外な敵をつくるやうな場合もある代りには、その短所が又直ちに彼の人の長所に成つて、普通の人では屈するやうな場合にでも、彼の氣象ならば恐らく遣つてのけるでせう。女子と異つて男子には肝癪は附物で、肝癪のないやうな男には、斷じて仕事は出來ませぬ。さればと云つて、彼の人の妻としてのお前に取つては、少しも怖れるには足りません。要は唯彼の人の氣心を平素善く呑込んで居て、設令、何んな事があつても一時の處は克く忍んで、萬事彼の人の心に服從し、謂はゞ溫和に此方から宥めるやうにして、優美を以て、

品性の生命

とする女子の特性で向ふの荒びた氣を和らげ、若し云ふべき事があつたならば、夫の心の日和の好い時を見定めて、女は女らしく物和らかに云ふやうにしたならば、おそらく夫婦の間は常に圓滿に行くでありませう。

第二はお前の舅たるべき御仁の御氣風。最早六十幾歳にお成りださうだが、彼の御隱居さまは最う實に難も癖もおありなさらぬ。假令、何んな目に餘る事があつても、お小言一ツおッしやらぬであらうが、

お父さまは善い仁だ！

からと云つて、ゆめ〳〵粗略にするやうな事があつては、誰の爲より第一お前の身の爲に成りませぬ。善ければ善い方丈に、成るべく大切にしてお進げ申したならば、彼の無口なお仁ですら、『家の嫁は善い嫁だ！』とお喜びに成るでせう。承はる所に依れば、別にこれと取立てゝ云ふ程のお樂みも無いさうですが、ただ非常にお酒がお好きで、それもたんとは召食らないさうですが、毎日これを唯一の樂みに成すつて、少量の晩酌は必ずお取りに成るさうです。さもしい事を申すやうですが、老いては人は他に樂みは至つて少いものですから、お前彼家で上つたなら、一日も早くお父さまの、

食物の加減

を覺えて、些少の手數と費用を厭はず、『これはおい

しいな！これは珍らしいな！』と心からお喜びに成る程の物を、切て晩餐のお膳の上には、一品や二品位は、毎日必ずお目にかけるやうになさい。さすればお父さまは、必ず御滿足に思し召すでありませう。

第三はお前の姑たるべきお仁の御氣質。これも今年は五十八歳にお成りだとの事。お連合さまが、お若い時から餘り世事に御頓着なさらない御氣風で居らした所から、自然左樣云ふ御氣風にお成り成すつたものか。ひどく物事をおあせりになる御樣子が見える。彼の御樣子で居らッしやれば、お母さまのこれとおッ



しやつた事は、何は置いても急いでおぼしめし通りにせぬと、彼のお仁のお氣に入る事は出來ませぬ。またお若い時から、大分お身體を烈しくお使ひに成つた仁だと見えて、この節では何うやら御身體の御容體が、大分お勝れに成らぬやうにお見受け申す。お前彼方へ上つたら、善く氣を注けて忠實に御介抱申しあげ、折節は撫でなと擦りなとして、お進げ申すが好い。また大分苦勞を成すつた方だと見えて、善く物事に精細にお氣が附かれます。何事も投遣主義ではいけませんぞ。ちやんと仕事に順序を立てゝ明日する

事は今日成なさい。さうして其處に生み出した一日の暇を以て、お母さまの手を煩はす事を自身でするやうになさい。左樣いふやうにしたならば、いくらかお氣に召すであらうが、手順惡く仕事をして、爲すべき事を貯めるといふと、お母さまは不快でお休み成すつて居ても、見兼て直樣襷をおかけに成るたちの仁です。彼のお仁のお氣に召さうといふには、お前も却々骨ですが、其處を辛抱しきれなければ、到底、

未來の幸福

は得られませぬ。石の上にも三年といふ頑とした氣象のあるものでなかつたならば、男は猶更女でも、到底間に合う人間には成れません。

第四はお前の小姑になる人ですが、お前よりは二ツ妹で今年十七、まだ學校に入つて居られるやうですが、彼の娘はおッ母さんに似て却々の勝氣もの！彼のテキパキとした氣性では、定めて仕事なども好く出來ることでせう。

彼の娘を擒にする方法

と云つては種でないが、つまり彼の娘とお前の間柄は圓く行かぬといふと、その爲一家の事情が圓滿に行くまい。其處を巧く料理して行かうといふには、彼の娘と交情睦くする事が肝腎です。それには不斷何うすれば好いかと云ふと、娘の威光を以て、お前が彼の娘を壓へようとすると、向ふは勝氣な質ですから、それこそ風波は絕えませぬ。ですから常に何事にもお前の方から一歩讓つて、

負けて勝を取る工夫

をするのが何よりです。これに反して、お前が何時も勝たうとすると、火元は每時でも此處に起つて、一家の內に色々と六かしい事情が起つて來るでせう。

さて斯樣に私が云つたからとて、何も不正な策略を以て、お前の一身を安くするやうに敎へるのではありません。一家の家族に對するに、裏表のあるやうな水臭い事では、到底もその家は圓滿には治まりません。萬事共に虛僞の言行なく、一家內何人に對するにも、

誠心誠意の念

を以て、平素我がよろづの行の生命としなければ、到底圓滿なる家庭の主婦と成る事は出來ません」

以上の敎訓を染々と聽き終つて、私はじつと差俯向いて居りますと、母は靜に茶筌を把り、障子の外の萩原では、何んとも云へぬ美い音色の虫が切々と鳴出しました。(完)



厭夫病と厭妻病

S、I

▲この病の定義

これは醫學上の名では無けれど、心理學上及び醫學上に於て確かに斯の病の有ることを先輩も説いて居らるゝし、余も亦之を認めてゐる。然るに世人の多くは本病の智識に暗く、爲めに其の初めは互に末變らじものと契つて夫婦になるけれど、日を經るに從ひ、男の方では其の愛變らぬにも拘らず、女の方では次第に其の夫が氣に入らぬやうになつたり、或は又其の反對に、妻は益ゝ其の情を盡すけれど、夫の心は既に秋の空、或は又兩方互に厭きつ厭かれつするもある。或は又心は互に離別して居れど、可愛子供が鎹になつて、已むを得ず鬱々の中に、一生を送るもある。乃で、是等は皆悉く本病に罹つた爲とは斷言出來ぬけれど、十中の七八は心身の疾病から來てゐるに相違無い、個人の爲め國家の爲め實に慨かはしいことだ。されば其の病狀から原因療法に至るまで余の知れる限りを逐一述べて見よう。

▲厭夫病の病狀

夫が惡い――從來は慕しい戀しいと思つた夫なれど本病に罹れば、何と無く氣に入らぬやうになり、果は夫が優しく遇せば男の癖に女見たやうな擧動をする人だと思はれ、と言つて嚴格に待へば、尚更腹が立つ、即ち男が親切を盡くせば盡す程、活地無し、或は凜々しからずと厭になり、去りとて、凜々しく容易に口も

利かぬ的にして居れば、他所の夫は親切なれど、我夫は斯くも薄情な人かなと怨まれる、一言に盡せば夫の爲る事、爲す事一々氣に入らぬやうになるのである。

不規律になる——元は極めて規律正しい婦人であつたにも拘らず、段々不性になつて何を爲すにも面倒臭く、簞笥に着物を仕舞ふことも、宅を掃除することも慵くて堪らず、甚しきは湯にも入らず、髮も結ばず、結句寢轉んでゐた方が增しだといふやうになる。若しも夫が『餘り懦弱では無いか』と叱れば『何うせ私は懦弱者で御座んす』と尙更不規律になるものである。

我儘になる——婦人は柔順謙讓の德が有つてこそ男子に可愛がられるものなれど、本病に罹ると、何でも我を通し、夫の財政豐ならぬのも知りながら『金時計を買つて下さい』とか、或は『湯治に遣つて貰はねばなりませぬ』などゝ請求する。乃で『諾可』と承知すればそれまでだが『今は都合が惡い、少し待ちなさい』と言はうものなら、それこそ大變、怨む、拗る、泣く、始末に了へぬ。病氣とは言ひながら面憎い女である。

嫉妬深くなる——元來嫉妬なるものは、相手が己れに注いでる愛を、他に移す所から、ムラ／＼と腹の立つ心的狀態で、人情上無理からぬ事なれど、本病者はこれと異なり、この心的狀態が常識を逸れ、其の夫が品行方正で、何等の點打つ所無きにも拘らず、唯想像だけで嫉妬するのである。然るに、偶々其の夫に、或る女が何か用が有つて逢ひに來たやうな場合に出逢ふと、心炎忽ちに燃え上り、如何に理由を辯明しても聽き入れぬ。一度斯うなれば、夫が下女に物言ふことも我が母や我が姉妹に優しくする事まで嫉妬の種になり遂に一家の平和は悉く破れるに至る。

他の夫を羨む——夫婦の情は互に其の短所を忘れ、其の長所を戀ひ慕うてこそ、偕老同穴の交りも全うし縱ひ赤貧洗ふが如き中にも、言ふに言はれぬ樂しみがあるなれ、然るに本病に罹ると、我が夫の短所は悉く眼に映れども、長所は更に思ひ出す餘裕無く、これに反し、他の男子を眺めると、すべて我夫よりも優つ

てるやうに思はれ、「嗚呼我夫も彼の人の様であつたら嘸可からう」と羨むに至る。

欺され易くなる

——從來は、却々怜悧で、人に欺されるなどの迂濶は無つた婦人なれど一朝本病に襲はれん歟、其の意志は薄弱になり、少しく言葉を巧みにして言ふと、忽ち其事を信じ、果は不德者の言をも信ずるやうになる。嗚呼病氣は僅に萌せる時に療治す可きものである。

右にてざつと精神的の病態を述べたが肉體的に於ても多少の變調がある。即ち最初の中は精神的病狀のみであるが、厭な夫だ、今にも離縁を貰はうかと思へど親や兄に戒められ、進まぬながらも、鬱々日を送る間に、段々肉體にまで影響を及ぼすのである。



頭痛がする——

其の頭痛も堪へられぬといふ程では無いが、何と無く頭が重くて、整然と坐つてることが苦い、續いて欠伸が出る、何かに倚り掛つてるとか、横になるとかして暫時休んでると、何時の間にか治つて了ふ。斯くて病愈ゝ進めば進む程

數多くなり、又苦しむ時間も長くなる。

動悸が高ぶる――僅かの刺戟即ち少し走るとか、驚くとかすると、心臓の鼓動は忽ち劇しくなつて、胸の内は苦しくて堪らぬやうになる。

眩暈がする――厭な夫なれど、其家にゐる以上は口利かぬ譯にも行かず、時には已むを得ず對坐してゐると、其の揚句に目が暗くなつて來て、身體がよろける甚しきは其儘卒倒することもある。

逆上する――一寸した事に血は頭へ上り易く、少し腹が立つても眞赤になる。左程で無いことを耻ぢても眞赤になる。而して暫時經つと反對に眞青になるものだ。

月經が不順になる――月經にも故障が出來て、其の來潮期が早まつたり、或は遲くなつたり、或は月經時が長くなつたり、短かくなつたり、或は其の量が餘計になつたり、少くなつたり、或は更に無いこともあつて姙娠か知らと思ふやうなこともある。

便秘する――通常ならば一晝夜に大凡一回、便通の有る可きが生理的なるにも拘らず、本病が段々募ると二日乃至三日に一度甚しきは一週間も便通の無いことがある。縱し又便通が有つても、思ふ通りに澤山無いそれが爲め何とも言へぬ不愉快になる。

睡眠不良になる――晝間の中とか、或は人と話してる時などには、薄ら眠いやうな事もあれど、いざ眠らうと枕をすれば、眼は凛々と冴えて、色々な思想が胸に浮ぶ。浮ぶから眠られぬ、眠られぬから浮ぶ。斯くて夜の十二時乃至は一時二時といふ時に、漸と眠れば悲しき夢、恐ろしき夢、或は取留の無い夢を見、朝になつて眼が覺めても、精神は不愉快で、仕事をすることが懶いやうになる。

消化不良になる――右の如く鬱々日を送るために食欲は次第に缺乏し、茶漬飯で掻き込むか、或は酸いか辛いかの刺戟物で、漸と嚥み下すけれど、斯る事を續けてる中に、段々胃を傷め、甚しきは惡心を催し、或は嘔吐し、一方ならざる胃病に陷ることがある。

顏色が惡くなる――顏色は一般に蒼白くなつて、何

となく淋しい色を帶び、生來の美人でも、又如何に化粧しても、この色だけは隱すことが出來ぬものである。

衰弱する——以上の如く病狀が積り重るけれど事情の爲に互に別れもせず、又療治も爲ずに放棄つておくと、身體は次第に衰弱し、其の極端は死の轉歸を取るに至る、古來貴顯紳縉の夫人方には、隨分この例が有つたものであらう。

▲厭妻病の病狀

男女の位置が變るだけで、其の病狀は殆んど同一で管々しく繰り返して言ふ必要は無い、されど、我國では男尊女卑的の風になつてるから、妻が夫を厭ふよりも、夫が妻を厭ふ方は言葉にも擧動にも包み隱さず、ドシ〳〵其の不服を述ぶることが出來易いのみならず、己れ厭妻病になつてゐながら、己れは勿論病者なることも知らず、何の罪も無い妻に三行半を實行して了ふ。故に鬱々日を送る間が少いから、肉體的の病狀に至つては左程に重らずして濟むものだが。併しそれが實行し難い場合になると、男子は女子よりも一層重い病狀になることがあるものだ。これに就き實例を一つ擧げて說明しよう。



余の知れる某二十七歳が、大學を卒業するを待ち、其の親達は何うか善い嫁を娶つて遣りたいものだと、方々探した結果これならば容貌と言ひ、氣質と言ひ、伜の妻として耻かしからぬと思ひ、媒妁人を以て雙方にも見合をさせ、娘の方では彼の人ならばと承知し、男の方でも彼の娘ならばと諾ひ、茲に結婚の式を擧げたが、擧げると同時に男の方では何と無く其女を厭ふ心が起り、日を經月を累ぬるに從ひ、其心益ゝ高まり離縁せんと思へども高等敎育を受けてる程の人なれば何の罪も無き妻を、斯る殘酷なことも出來ず、欝々日を送る中に疾病となり、遂に入院治療を受けたれど、藥石其效を奏せず、空しく黄泉の客となつたのがある。これは餘り急速に發したる重症の厭妻病であるが普通の厭妻病は娶つてより五年乃至十年も經つてから起るもので、起ると大抵の凡人は、妾を畜へるなどの品行不正に陷り、一家は風波の絕ゆること無く、其の災は延いて子々孫々にまで及ぶものである。噫。

▲厭夫の原因

失望――娘の時代には胸中に理想の良人を畫き、嗚呼將來に其の良人と樂しい一家庭を作り、或る時は南窓の下に音曲の合奏をなし、君が尺八を吹き給へば妾は琴、或る時は共に文學の樂しみ、君は文を作り給へば、妾は歌、評しつ評されつ。或る時は盛裝して夜會に出る、君はフロックコートで妾は白襟に紋附。或る時は共に山水の巷を尋ね、少し嶮しい坂などは手を携へてなど思ふものであるが、偖愈ゝ結婚して見ると、行路の難は山に非ず水に非ず唯人の此の世に處する間に在るものなれば、想像してゐた事は悉く鶍の嘴とくひ違ひ、其の結果は本病に罹るのである。

不平結婚――或は父母の犧牲となつて心に進まぬ結婚をしたり、或は己れに意中の人ありたれど、之を言ひ出すこともならで遂に氣に入らぬ人を夫にするなど、兎に角心に不平を抱きつゝ嫁ぐと、遂に本病になるは人の能く知る所であらう。之に就いて面白い例が

ある。甲女が乙男と某家で逢ひ、甲女謂へらく將來有望の男子で有らうと、其後半年程の間其人を忘れられぬ折も折、偶々人ありて其の乙男の妻にと求め來る、父母は之を甲女に話す、甲女の喜び譬ふるに物無く、



早々結婚の式を擧げたが、偖愈々盃といふことになり。恥かしながら乙男の顏を見れば、こはそも如何に慕ひし乙男の顏に似もやらず、全く別物である。されど此の場合盃せぬ譯にも行かず、何うか斯うか濟し、

別席へ父母を呼んで其の由告れば豈圖んや甲女の慕ひし乙男は當家の書生だ。『お前書生よりも主人の若旦那が宜いぢや無いか』。と兩親に叱られつゝ、遂々當外れの人と結婚したが、一月經たぬ中から本病に罹り、遂に鬱憂狂に變じ、癲狂院裏の人となつた。是等は失望と、不平とを兼ねた結果である。

年齡の相違――夫は妻よりも五六歲位長したのが最も適當なるに、故有つて十五六も二十も年長の人即ち二十歲位の婦人が四十歲位の男子に嫁ぐと、始めの中は左程でも無けれど年を經るに從ひ思想悉く衝突し、遂に本病に襲はれ易くなるものである。

歇私的里病――歇私的里病に罹ると、病の輕重に拘らず、十中八九は厭夫病を兼ぬるに至るものである。然るに我國の婦人は此の歇私的里に罹る者が多い。宜なり、我國は何れの國に比べても離緣の數の多きことは。

體質の懸隔――妻の體質が非常に弱くて夫の體質が大いに健强であるとか、或は其の反對に妻は拔群の强者なれど、夫はヒヨボ〳〵の體であるとかすると、互に厭きつ厭かれつするものである。

相性の合はぬこと――余の言ふ相性は火性に水性といふが如き易者的の相性では無くて、唯意氣の互に相合はぬ者は厭きつ厭かれつするものだと申すのである。然らば如何なる者が意氣相投合するかと云ふに、氣質の相反對するが却つて投合するの源である。夫は意氣天をも衝かんずる豪邁ならば妻は春風徐ろに吹くといふ有樣なるか、然らずんば寧ろ妻は男勝りの政岡で、夫は何うでも宜敷賴むぞやといふ如き風が宜い。然るに癇癪に癇癪、優柔に優柔では遂に兩方共に本病に罹ること、數多の例に照して明かである。

▲厭妻病の原因

これも前者と同じき原因なれど、唯異なるは男子歇私的里は殆んど無き代りに、神經衰弱に襲はるゝことの多いだけが異なつてゐる。神經衰弱に罹ると、矢張厭妻病をも兼ね易きものなることを知つて居らねば

ならぬ。尙其外に過房、生殖器病等が厭妻病、厭夫病の原因になることを說きたいけれど、專門雜誌ならぬ本誌には殘念ながら書くことが出來ぬ。序に一言す可きは、厭く原因は即て厭がるゝ原因になつたり、厭かるゝ原因は即て厭く原因になることのある一事である。

▲豫防法と療法

第一に原因を避けるやう前以て心掛くること、これ最も肝要なる豫防法である。例へば歇私的里病又は神經衰弱症に罹りたるならば眞先に其の病を治療するやうな道理である。歇私的里に罹れる某婦人が、何と無く其の夫の行住座臥悉く氣に入らず、斯る所に居ては到底病の治らう筈は無いと、兎に角一旦故家に歸つて靜養し、即て病氣も全快して見ると、以前毛蟲の如くに厭つたる夫が非常に戀しくなり、滿腔の熱誠を捧げて仕へたれば良人も大いに喜び、今や琴瑟和合、他の見る目も羨ましい程だ。これ偶然に原因療法を施した例證である。次に中以下の家庭よりも、中以上の家庭に厭妻病厭夫病の多い譯は如何と云ふに、其は原因幾つも有るが、一つには身が閑で運動が不足するからである、中流以上の人、殊に華族社會に至ると、何の爲す事も無く、悠々閑々日を送つてる輩が多いから、小人閑居シテ爲ス二不善一ヲの古語に洩れず、遂に不正義の心起り、其の結果、正義の意志は次第に薄弱になり、身は皇室の藩屏なることも打ち忘れ、最愛の正妻が次第に厭になり、爲に蓄妾したり、或は賤業婦を弄んだりするやうになる、而してこれが夫人も、人目の爲に身を愼しんで居るとは言ふものゝ、夫を愛する念慮は固より有らう筈も無く、あはれ厭夫病となつて、一生を味氣無く送るのである。然るに是等の人にして悠々閑閑暮すこと無く、精神に身體に、終日活動して居れば、不善を思ふ暇も無く、從がつて夫婦の間も終生睦じく暮さるゝのである。されば何人も懦弱に身を處すること無く分に應じて其職を務むると同時に、大氣日光に觸れて運動することを怠つてはならぬ。これに就き英

雄徳川家康公の言を紹介せん。公曰く『鷹狩は筋骨を勞働し、手足を輕少ならしめ、風寒炎暑をも厭はず奔走するに依り、自ら病など起ることなく、其上宿食を消化して、心よく覺え、夜中となれば終日の疲倦によりて快寢するゆゑ、閨房にも遠ざかるなり、是れぞ第一の攝生にて持藥を用ゐんよりは遙かに勝れり』と實に此の一章は衞生の極意を說いてゐる。されば鷹狩で無くても鷹狩に代る可き運動法を講せられたいものだ。次に男子は寡言、婦人は婉柔の二事を實行して頂きたい。斯の如き事を申すは醫師の領分外かも知らねど、我曾て縣知事より貞女の故を以て賞狀を貰つた人の家に一ヶ月程逗留したことがあつて、其の夫婦の間柄を觀察したるに、夫は如何にも寡言沈默、其情冷冷淡々たるが如く、妻は何事も婉曲で微笑を放さぬ女であつた。其後色々の人の家庭を注意するに、夫婦喧嘩の斷えぬやうな家は、其夫が喋々喃々干涉に過ぎる的で、妻は柔順婉曲ならざるに起因せぬは殆んど無い。されば寡言婉柔は本病の豫防法亦以て療法となるのである。次に美想を養はねばならぬ。美想は野卑の心を撲滅し、夫婦を和合せしむる所の妙藥である。山に水に詩に歌に、其の心を優美にしてる者は淫猥の心自ら去り、綢繆纏綿の情に富むものである。最後に愈ゝ本病に罹り、何うしても治らぬ場合には一時別居の方法を取るも一策である。人情は妙なもので。朝夕離れずにゐると、如何に親しい中でも、不服の起り易いものなれど、互に別れて日を經れば、相手の短所は次第に忘れ、長所のみを思ひ出すに引換へ、己の短所を段々悟るが普通である、即ち男の方では『彼樣な纖弱い者に、己も隨分癇癪を起した、可愛さうなことをした、彼女が時々我儘な事を言つたのも、言はゞ子供の甘へるやうなものだ、嗚呼可愛さうなことをした』と思ふし、女の方でも『無理は男の常だ、それだのに妾とした事は隨分抵抗もした、全く妾の惡いのである妾が從うてさへ居れば治るのだ』と良心に立ち返り、互に心の中に我を折つて、自然に逢ひたくなるは人情の常である。されば本病の餘り重くならぬ中に、この

別居の療法を實行す可しだ、餘り重くなつてからであると別居は眞の離別になることがある。術內服藥としては、

(1) 還元鐵 〇・二 鹽酸規尼涅 〇・一 甘草末適宜

右爲二九九一(ト)一日三回食後三丸宛

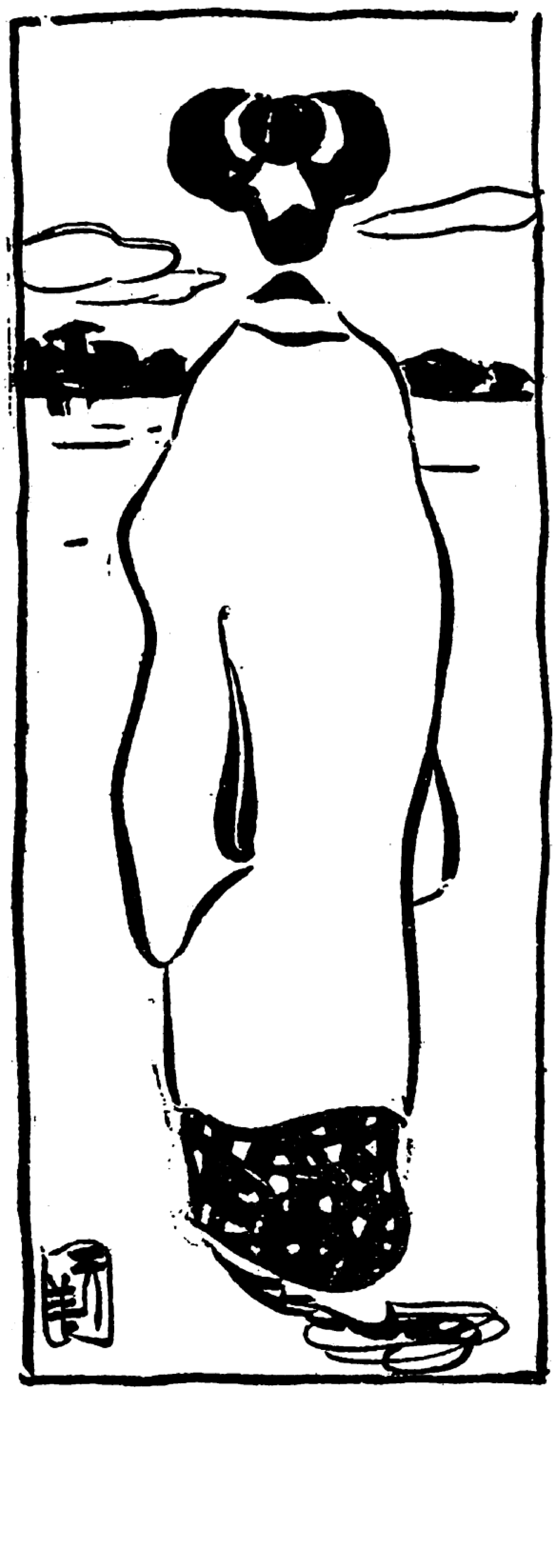
(2) 忽布腺 〇・五 樟腦 〇・〇五 白糖 一・〇

右爲二一包一(ト)臨臥に頓服

(3) 纈草浸(二・〇)一〇〇・〇 括弧內の分量を括弧外の分量なる湯湯で煎するのである

臭素加僧謨 四・〇 單舍 八・〇 右一日三回分服

說明――是等の藥を服んだからとて直接に夫婦の情交濃かになる譯では無いが、間接に效能あるのである即ち(1)は强壯藥で心身を爽快ならしむる效あるのみならず、嘗て濫行を犯し身體を衰へしめたる症などには最も宜いのである。(2)は不正の心起りたる折服む可しだ。(3)は歇私的里又は神經衰弱より來る厭夫病乃至は厭妻病に用ゐて多少の効を奏するであらう。



讀者文藝　投書歡迎（締切十一月十五日）

▲和歌（一人一首）

▲短文（三百字以内）

▲小說（二十枚以内）

▲日記文（十枚以内）

◎和歌、短文は必ず端書を用ゆる事◎字體は楷書にて鮮明なるべき事但し鉛筆にて認めたるものは採用せず◎住所姓名は必らず原稿に記しおく事◎投稿は博文館女學世界宛の事……

◎賞品

▲一等一圓▲二等五拾錢
▲三等參拾錢（圖書切符）
▲小說と日記文は詮考の上相當の謝禮を呈す

毎月一日發行

定價表

一冊（紙數二百八頁）	金二十錢
四冊（三ヶ月分）	前金七十五錢
八冊（半ヶ年分）	前金一圓四十五錢
十六冊（一ヶ年分）	前金二圓八十錢

内（定刊數……十二册／增刊四回……一、五、九、十一月價格同一）

郵稅　一冊　二錢

廣告料

二十四字詰	特等	一等	二等	三等
一行	……	……	五十五錢	四十七錢
半頁（卅二行）	二十三圓	十九圓五十錢	十六圓五十錢	十三圓五十錢
一頁（六十四行）	四十五圓	三十八圓	三十二圓	二十六圓

▲等級の位置〳〵切日等御照會次第御報可致候

註文略規

●本館發行の圖書は都て前金の外送本せず
●御拂込の前金相切れ候節は送本を停止す
●郵券代用は一割增にて五厘一錢の切手に限る
●總目錄御入用の方は二錢券相添申込あれ

不許複製

明治四十一年十一月一日發行（第八卷第拾四號）

編輯兼發行人　松原岩五郎

印刷人　山田英二

印刷所　博文館印刷所　東京市小石川區久堅町百八番地

發行所　東京日本橋區本町三丁目　博文館

電話　三百三番　千十八番
本局　二千六百二十番　三千二百二十九番



香油
白粉
千代田
千代田白粉と香油とは廿世紀式の新原料を配合して調製したるものなれば夙に淑女令孃に愛用せられ高評嘖々たり
白粉（大瓶卅五錢 小瓶二十錢） 水製 廿五錢
香油（大瓶卅五錢 小瓶廿五錢）
東京馬喰町
山岸三之助
電話浪花三七九三

（後付の一）

モリス、ブロック著
前田越嶺譯

偉人の母

再版

全一冊 洋裝菊判美本 紙數百八十頁
正價金參拾八錢 郵稅六錢

●1 羅馬の偉人グラツキの母●2 宗教界の偉人オグスチヌス（オーガスチン）の母●3 佛國の詩人アンドレセニエ兄弟の母●4 獨逸の文豪シルレルの母●5 獨逸の天才ゲーテの母●6 ナポレオン一世の母●7 佛國の文豪シアトブリアンの母●8 佛國詩人ラマルチンの母●9 佛國の博學者リットレの母●10 佛國の歷史家ミシユレの母●11 佛國武士の典型バイヤールの母●12 佛國の將軍チユレンの母●13 佛國博物學者リンネの母●14 普王フレデリック大王の母●15 ワシントンの母●16 瑞西の教育家ペスタロッチの母●17 蘇國小說家ウオータースコットの母●18 獨逸の音樂家メルデルツソンの母●19 獨逸の詩人ハイネの母

加藤文學博士
辻 教育會長 序

高崎正風男監修

學習院教授 秦政次郎君謹修

教育勅語奉釋

全一冊洋裝菊判金模樣刷
美本紙數百十二頁
正價廿四錢 郵稅六錢

教育に關する勅語は單に學校のみならず家庭社會を通じ一般の國民に賜はりたる聖諭にして人道上の大憲法なれば必ず其謄本を奉戴して各人拳々服膺せざるべからず而れども聖旨の宏大深遠なる之が註解を試みたる者少なからず何れも特色ありと雖も各階級に通ずる能はず是に於てか一德會長高崎男爵閣下は秦先生に諳り特に先生に囑して歷朝の御遺訓と祖先の遺風とを御勅御製並に正史正傳より謹擇し皇室に接して卑近簡明なる通俗の口調に奉釋し勅語を全國の同胞一千萬戸の家庭に普及すると共に聖旨の在る所を知らしめんとせらる歐米にすら大に此の勅語に感激して或は教科書中に入れたりと聞く我が國民たる者は一人にても知らずして可ならんや本書は老幼とも既に假名字を讀む目あるか之を聞くの耳あらば聖旨の深祕なるを知らしむべく特に青年の心性修養は此の第一義勅語の外に覓むべからず發行の榮を荷へり全國の各位每家に一本を備へて拳々聖諭を奉戴せられん事を望む。

天下第一の壯快雜誌

每月一回五日發行

冒險世界

大判（四六二倍大）紙數百廿八頁

拾壹月五日發行 **第壹卷第拾壹號**

正價一冊十五錢 郵稅一冊二錢

◉金銀銅牌懸賞問題 全世界英雄番附投票募集――本月二十日の締切を忘るゝ勿れ

●樹上の俠士美人と獅子の裸體 押川春浪 ●冒險小說 怪人鐵塔 押川春浪 ●探檢奇談 南亞深林の怪 虎髯大尉 ●戰慄すべき人間獵 濠西亞探檢家 ●印度奇談 陷穽中で猛虎と一夜 霞紫紘子 ●一本足の大冒險家 秋劍居士 ●狒々の大亂暴 魔劍道人 ●惡狼奇談 荒木嘯羽 ●怪汽車發明珍談 阿武天風 ●奇々怪々なる男色事件 中野武營氏談 ●大地震で大儲けせる話 高島嘉右衛門翁談 ●波瀾萬丈の一生 栗生武右衛門氏談 ●冒險新聞 ●大英雄と大刺客 河岡潮風 ●現代書生界名物男 鐵血書生 ●將校斥候のお土產 尾上新兵衛 ●バルガン半島跋涉記 坪谷水哉 ●武勇講談 岩見重太郎 一龍齋貞講演 ●男女高等師範評判記 ●競走場裡の大魔王談 ●米國艦隊撰手と早慶撰手の野球戰評判記その他快談珍話

珍奇口繪

油繪三色版 猛火中に人を投込む ◉魔物の如き汽車 ◉深林中の薔薇館 ◉惡獸の煙草攻め ◉物凄き大活劇

例によって山の如し!!!

◉空前の大好評!!! 賣切れぬ内に購讀あれ!!!

（付の四）

發兌元 東京日本橋區本町三丁目 振替貯金口座第二百四十番 博文館

實業に志す明治少年の大好評繪入雜誌

●毎月一回一日發行
●四六二倍大判紙數七十二頁上等紙刷



正價一冊金十錢
郵稅一冊金壹錢

第二卷第五號 十一月一日發行

常識世界

▲馬鹿者の氣附かざる地平線下の別世界

▲日本一の地下金庫▲水道鐵管觀察▲瓦斯管傳▲深井上總堀▲學界に忠義の深井▲穴藏▲石油井別世界▲養蠶氷穴▲世界一の地下大下水を舟にて見物▲鑛山奇談

▲最も整頓せる歐米の旅館 ▲大足の名士と小足の名士 ▲東京一の女財產家

口繪（最珍）

▲米國艦隊大歡迎の盛況 ▲菓子界の大革命ビスケット製造實況 ▲授業生上りの植村常務取締 ▲京都實業家跡取（集合寫し）

修養世界

▲植村氏奮闘（實歷）

▲貧兒立身の實談 新泉

▲成功したる桐畜少年 建勝

當世實業家のむすこづくし

▲當世實業家のむすこづくし（實子養子の色々本誌の親）

▲讀者身の上の相談（切なる回答數十件）

▲煉瓦家屋の大切の點 三橋學士

▲輕くて丈夫な箱 秋保校長

▲實地商業簿記 森教授

▲誤り易い電報文字 宇田課長

▲英語會話 ▲習字手本

懸賞世界

▲誰にもできる電報の大懸賞 ▲考物 ▲俳句 ▲川柳……皆懸賞

▲其他海外新報海內新報

●讀者の氣焰欄頗る活氣あり

郵便振替貯金口座貳四○番

東京本町 博文館

賣捌 全國各地書店にあり

女（後付の五）

文（後付の右）

◀博文館女學世界編輯局編纂▶

家庭日常の寶典

家事整理の墨繩

明治四十二年

家庭日記

總クロース金字入頗美本紙數五百餘頁　正價參拾八錢　郵稅拾錢

家庭日記は最も進歩したる。且つ最も文明的なる日記にして新家庭の要求に應じたるもの也、苟も我家の規模を知り我家の地位と品格と勢力とを知らんとする人の机上に缺くべからざる重寶日記なり其の目次左の如し。

▲收入明細表
▲支出日計表
▲出納計算及殘高表
▲出納分類表
▲家計分類出納表
▲貸附契約一覽
▲保險契約一覽
▲諸關係掛金一覽
▲租稅一覽
▲年中行事豫記
▲家庭重要記錄
▲我家の家族
▲家庭紀念事項
▲戸籍表
▲崇廟祭祀日錄
▲通學要錄
▲兒童生育要錄
▲健康要錄
▲衣類目錄
▲財產目錄
▲貸借關係錄
▲音物贈答日誌
▲通俗日誌
▲親族名簿
▲備人名簿
▲知人名簿
▲備忘錄

附錄

●家計安全法（月收百三十圓、七十五圓、五十圓、四十圓、三十圓にて見積りたる生活費の内譯）
●交際の心得
●音物贈答の栞
●見舞の心得
●物品の整理
●火の要愼心得草
●日用心得草
●庭厨百事顧問
●臺所の整理
●料理節用
●四季魚菜の眞味
●お彼岸の配りもの
●臺所道具の取扱
●飲用水の注意
●一週間の仕事配り
●子供の衛生
●婿ゑらびの標準
●嫁ゑらびの標準
●妻の本領
●美顔法二十五則
新案歌占ひ

▲本書内容の一斑▲

本書は始めに一年三百六十五日の日々欄を置き、七曜干支を順記し、天氣、寒暖の各欄を設け、以て日々の事項を記入するに適せしめ更に月の始には其月の行事、季節、食品、花暦の各項を抄記して月令の栞となし、次に此の日記の特色ともいふべきは他の日記簿に類例なき約二百頁に渉る家庭重要記事を始め、交際、通信、音問、祭祀以下日常諸般の事項を分類し兼ねて財產、衣類等の品目を掲記して以て複雜なる家事を整理して一目瞭然たらしむ。殊に前掲附錄十數次は家事當局者の心得にして朝夕必要なる家政智識にして并にこれに必要なる諸規則をも網羅せり。



家庭日記は日常の家事を整理する金針にして又家運振興の指南車なり、其内容は從來有觸れたる日記簿とは全然面目を異にし統一あり秩序あり、敎訓あり、趣味ある日記にして、眞に一家の重寶たる資質を具備せり。

發賣元　東京日本橋區本町　博文館

●ハガキ文學臨時增刊 十月十五日發行

青年之華

△限本號定價一冊金二十錢郵税四錢

概目

●日本唯一青年雜誌

第五卷十二號十一月一日發行

ハガキ文學

△本誌は青年文藝家の寵兒を以て任ず

每月懸賞募集

○短篇小説……田山花袋選
○普通文……沼波瓊音選
○新體詩……兒玉花外選
○はがき文……橋本春郊選
○語詩……三木露風選
○記文……編輯局選
○和歌……太田みづほのや選
○新川柳……窪田而笑子選
○新俗謠……桑田春風選
○俳句……内藤鳴雪選
○繪畫……太田三郎選

投稿は何人に不拘大歡迎

定價 一冊郵送料共 金拾壹錢 七冊前金 金七拾五錢

△郵便切手代用の節は必ず一割増のこと
△振替貯金番號『一八三八』へ御拂込被下べく候
△凡て前金に非ざれば送本仕らず候

發行所 東京市小石川區久堅町 日本葉書會

●●●賣捌日本全國各書林●●●

女（後付の八）


世界一のかぜつね藥
蛇印アンチピリン丸
はやりかぜ・りうまちす・ねつ一切に特効あり
藥價 五戔 十五戔 廿五戔
本舗 大阪 東京
丹平商會藥房
賣捌は全國の各藥店
タンセキ改良劑
登録商標
かぜの「たんせき」
大人の「たんせき」
小兒の「百日せき」
喘息の「たんせき」
肺病の「たんせき」
老人の「たんせき」
呼吸器丸
こゑかれ又こゑいでず
咽喉はれ痛み「たんせき」の
きれがたき人
呼吸器散
「むね」の息苦しく
又むねいたむ人
せきいで夜分ねられぬ人
たんに血の混るせき
咳嗽をとゞめ痰を祛り
恐るべき肺病を豫防す
藥價表
二日半拾錢
半週分拾五錢
一週分三十錢
二週分五十五錢
四週分金壹円
全國無送料
發賣本舗
丹平商會本店 大阪市心斎橋筋二丁目
丹平商會分店 大阪平野町堺筋北
丹平商會支店 東京市日本橋通油屋町
賣捌は日本全國各藥店
及海外諸島に取次せり

女學世界
明治四十一年十一月一日發行（毎月一回發行）第八卷第拾四號（明治卅三年十二月廿五日第三種郵便物認可）

黃金は積んで山をなし

身には錦を纏ふとも、病持つ身の苦しさは、花見遊山や芝居見や人の喜び樂も樂みとては更になく況て兒女なき病婦の悲しさ限りなからん

●中將湯は是れ等不幸なる病婦を救濟して子寶多き圓滿の家庭を作るべく發賣す

左の容體にて苦しむ婦人は

早く中將湯を服して無病の幸福を得給へ

定價	
四日分	廿五錢
一週間分	六十錢
二週間分	一圓十錢
三週間分	一圓六十錢
五週間分	二圓五十錢



中將湯

●子宮病子宮內膜炎にて白帶多く前たゞれ又下腹腰足の引つり痛む人
●婦人神經（ヒステリー）血の道にて氣鬱ぎ癇高ぶり物を苦し夜眠ざる人
●月經不順月經滯り等にて吹出物多く又何となく身體惡き人
●逆上頭痛眩暈し肩こり腰足冷え●息切れ動氣强く手足痺れ水腫
●十七八歲になりて月經なく血ぶとり又月經の前後に下腹の痛む人
●白血赤血滯下多く顏色蒼白き人●冷症にて難產流產の癖ある人
●產前何となく常ならざる人、嘔吐、產後古血の滯り或は日立惡く
●此外子宮血の道月經不順に起因する諸症にてぶら〳〵と惡き人

（定價金貳拾錢●郵稅貳錢）

監修
小山静子　KOYAMA Shizuko
京都大学大学院教授

女学世界（じょがくせかい） 明治期復刻版63
明治41年10月（第8巻第13号）、11月（第8巻第14号）

2009年7月10日　第1刷発行　　定価（本体20,000円+税）

監　修　小山静子
発行者　富澤凡子
発行所　柏書房株式会社
東京都文京区本駒込1-13-14（〒113-0021）
電話　03-3947-8251［営業］03-3947-8254［編集］
協　力　株式会社博文館新社
印　刷　株式会社友美社
製　本　有限会社青木製本

ISBN978-4-7601-3621-6　C3321